
無限想歌

blue birds

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限想歌

【Nコード】

N2180S

【作者名】

blue birds

【あらすじ】

修学旅行先で俺は、「妹」を名乗る幽霊に取り付かれた???つてところから、物語は始まる。そして、なんかまあ、色々複雑な事情があつて、その自称妹が、俺の幼なじみで初恋相手の由香をぶつ殺そうとするわけなんだけど……

オチはハッピーエンドです。殺伐としてそうですが、なんとかそこは、やりくりします(天の声)

幻想歌

無限想歌

プロローグ：幻想歌

命とはいうモノは通常、循環し得ない。

このことは、我々の価値観において尊いと見なされる命の本質が、所詮は単なるエネルギーでしかないことに由来する。

しかし、例外もある???そう、姉妹世界だ。

彼の世界群においては、「輪廻」と呼ばれる秩序が、世界の皮膜を超えて存在している。

この輪廻が適応される両世界においては、命の循環が起こるとされている。

その循環の基本的な仕組みとしては、 α でエネルギーに記述された命（物語）が世界の皮膜を通過し、 β に転移。そして、転移先の β で漂白・初期化後、 α に戻るというものである。

……世界にもよるが、基本的なエネルギーの定義からは、それが特定のカタチを維持し続けるとうことはあり得ないとされる。

しかし、姉妹世界間を渡るエネルギーには、明らかにその概念を否定する現象が確認されている。そう、 α から β に転移する際のエネルギー（定義上）に、明らかに色が確認されるのだ。

このことから、特定の色が維持されている時点でそもそもエネルギーではないという考えのもと、「精神物質」という概念が生まれたのであるか???

中略

ときに、輪廻の環からはずれるモノたちも存在し、それはαにおいては「霊」と呼ばれている。このような輪廻の環から外れてしまったモノに対する救済については諸説あり、その中でも、特に多くの者に指示されている論法が、「環への帰還」だ。

???この考え方の根幹にはいわゆる秩序信仰が流れているのであるが、しかしそれはそもそもが「霊」を生み出す秩序を否定する考えであるともされ、これについては???

Tips 1:ある魔法使いの結論

???ようするに、例外もまた、理のうちってことよ

「幻想華：輪廻と再会」

考えてみると俺は、どうしようもないくらいに男子高校生であり、それ故に、女子が好きだった。

おそらくそのことは、鳥が翼で大空を飛行したり、魚が水の中で呼吸できるくらいに自然なことで、だからこそ、男子高校生である俺が修学旅行先で見知らぬ女にマウントポジションを取られるとい

う夢を見たとしても、決して攻められることはないはずだ。

そこは、旅館の一室。辺りは暗く、唯一の光源は障子から差し込む月明かりのみ。一日ばかり騒ぎした相部屋の友人たちは、死んでいるかのように静かな寝息を立て、部屋のあちこちに散在している。

もちろん、その光景は夢の中のものだ。現実問題として、女子が俺のところに夜這いしてくるなんてこと、あるはずもない。

だからこそ、夢。そう、何度も言うが、男子高校生の俺がそんな夢を見たところで、それはもう若気の至りであり、なんの問題も??

「兄さま……」

……ただ一つ問題があるとすれば、それは俺の夢に出てきた幼女が、明らかに「幼女」としか表現できないような存在であり、しかも、「兄さま」設定。

その娘はまるで、心の底から愛おしそうに俺に手を伸ばし、そのひんやりと冷たい両の手で、俺の頬を包み込んだ。そして一言、「会いたかった……」とつぶやき、その目に涙を浮かべる。そんな幼女の向こう側には、天井が透けて見えている。

はつきりと、天井に敷かれた板の木目が幼女を無視して、俺を睨みつけていた。こんなとき、両目視力2・0の潜在能力を恨めしく思える。

「もうどこにも行かないで下さい、兄さま。もう、二度と……」

さてさて、ここでもう一度、俺の夢の問題点について考えてみると、

やはり一番の問題は、マウントポジションを取りにきた（夜這いに来た）のが幼女であるということくらいだろう。見た目は、そこそこ可愛い。まあ、かわいい。

けれど、だからといって、幼女はない。そのありえなさ、幼女が透けていることとか、およそ重みを感じることの出来ない彼女の体重とか、後はなんで普段着が着物なのか、そんなことがどうでも良くなるレベルのありえなさだ。

「……五人。全員善し。」

見回りにきたと思われる現国の辰田が、何でも無い気軽さで部屋の戸をあけ、これまた何気なく俺たち六人（幼女含む）を五人と数え、これまた何事もなく「善し」の評価を俺たちの部屋につけ、出て行った……「善し」じゃねえよ、辰田。全然よくねえじゃん！

『つく！』

全然動かない体と、絞り出しても出ない声。

『んだよ、くそ！こんなの、ありえないだろうが！！！』

幼女を前に俺は、指一本動かせず、瞬きと一つ、出来ずにいた。それは月光を背負い美しく輝く幼女に見とれていたからではなく、ただ単に、金縛りにあっていたというだけの話なのだけ。

「幻想花：目覚めと再会」

深い深い深淵を漂っていた『それ』は、ある日突然『わたし』と

いうカタチを得た。

『……？』

『それ』として存在していたモノは、なぜ『それ』が『わたし』というモノになり得るのかもわからぬままに？？『わたし』はすでに、『わたし』としてのカタチを本来のモノとしていた。そして『わたし』となった『それ』は、『それ』であつた頃の記憶というものをほとんど全て失っており、ともすれば、『わたし』にとつては『それ』というモノは、一時の夢のような存在へと成り果てていたのだ。

『そうだ、兄さまだ。兄さまが、迎えにきてくれたんだ！』

眠い目をこすりながら、わたしは必死に手を伸ばした。何故かは分からないけれど、わたしには分かつたんだ。「兄さまが迎えにきてくれた」ってことが、どうしようもないくらいに感じられ、涙が出るくらいにうれしかった。

『兄さま！ 兄さま！ 小羽はここです！ 弥生兄さま！』

わたしは、必死に手を伸ばした。だって、わたしは『ずっと』待っていたのだから。わたしは、兄さまがわたしのことを迎えにきてくれるって、ずっと信じて『待っていたのだから！』

「だれか、おれ呼んだ？」

まぶしいお日様の中、兄さまはきよろきよろと周りを見渡してい

る……もう、いじわるなんだから。こんなにわたしは待っていたのに、こんなにじらすなんて。本当なら、ぎゅっと抱きしめてくれたって、罰は当たらないはずなんだから！

『兄さま、わたしはここです！ 弥生兄さま！ 意地悪しないで！』

わたしはもつれる足を必死に動かしながら、兄さまの後を追う。兄さまはあくまでもわたしに「気づいていないふり」をするつもりらしく、すたすたと取り巻きの供を連れてどこかに行こうとしている。

「まって、兄さま！ おいてかないで！ もう小羽を一人にしないで！」

必死に弥生兄さまの名を呼びながら、わたしは追いかける。もう、ぜったいに、わたしは弥生兄さまの傍を離れないと誓いながら。そう、もう二度と、兄さまを『あんなところ』に行かせないために！

「弥生兄さま！」

わたしは、ひたすらに兄さまのあとを追いつけた。その途中で、弥生兄さまが「あずま」とか「としや」とか、そんな変な名で呼ばれていたような気がしたけれど、それでも、わたしはひたすらに「弥生兄さま」の後を追いつけたのだ。

人の生き様は、その魂に刻み込まれる。

しかし、その傷魂は命の炎が消えると同時に無価値なモノへと成り果て、世界へと溶けゆく……もし。

もし、命が繰り返せるのなら。

もし、命が不完全な形であれ、円環の理を体現出来るのなら、その刻み込まれた傷魂はどこへ向かうのか。

ある魔術師の手記より抜粋

姉妹世界を循環する精神物質についての追加報告

姉妹世界を巡る精神物質には、特定の色が観測される。これらのことは、従来の研究でも証明されていたことである。今回我々は、それら精神物質が保有するこれらの色が、輪廻を繰り返す毎に濃くなっていくことを新たに発見した。

輪廻においては、 α で命に記述された物語が、 β において『完全』に漂白された上で、再び α に戻ると考えられていた。しかし、この認識は間違いである可能性が高い。

おそらく、 β における魂の漂白は『不完全』なものである。仮にこの仮説が正しいとすると、輪廻において観察される精神物質の色は、それら精神物質固有の物ではなく、傷魂の消し残り???すなわち、魂に深く刻み込まれた何かであるという可能性が出てくる。

もしそうであるならば、我々はこれら精神物質色の濃縮方向と、

現在の α と β の存在物の世界情勢を同時に観察することで、短期的、あるいは中長期的な世界の未来予測を可能とできるかもしれない。

「幻想歌：想いが結ぶ幻」

「幻想歌：夢の続きを渡る」

悪夢という夜を乗り越えて俺は、健全たる朝を迎えていた。

冷たい外気を遮断する窓からは、冬の到来を感じさせる細い零れ
日が部屋の中を照らしている。

「……」

俺は無言で布団に座っていた。その目は、胡乱。

俺の友人大半は、本日のメインイベント自由行動に備え、あれや
これやと身支度を整えている。その中であって俺は、布団に「ぼけ
くつと座っている」振りをしていた。

「おい、東何やってんだよ。ぼけつとしてないで、さっさと準備し
る。今日は峰岸たちの班と廻るんだろっが」

友人が、さっさと支度しろと俺を促す。というか、女子陣をまた
せて機嫌を損ねるようなことをするなど、暗におれに警告している
だけなんだろうけど。

「ああ、スマン。なんか、昨日変な夢見てさ。寝起きが悪いのなん
のって……」

急かす友人に苦笑まじりに返し、俺はやおら布団をたたみ始める。
もちろん、布団の横にちょこんと行儀よく座っている「座敷童」に
は目もくれない。

「夢？　なんだそれ。ゆめとか、俺最近全然見てねえわ。どんなゆめだったん？」

髪をセツトしながら、右よし左よしと呟く友人の背に、俺は生暖かい視線を送る。はたして、「兄さま設定の幼女が夜這い来た」という欲求不満全開の話をするか、「着物姿の半透け幼女にビビらされて失神した」という情けない話をするか、いったいどちらの話し方が、友人の中での俺の地位を下げずに済むかと考えてみるのだが……もう、幼女が夢に出てきたというだけで、色々ダメだということに、今更ながら気づかされる。

「いや、なんかよく覚えてない。夢って、そんなもんじゃねえ？」

夢の話は脇に置いて、今日のプランニングについて話そうぜと、友人の横に起つ。俺たちの前には、一枚の鏡。それは、特別な呪いが込められているとは露程も考えられない程に、量産型の臭いをもし出していた。そんな鏡を前に、俺は歯磨きをゴシゴシとこなす。もちろんこのとき、鏡越しにじつと俺を見つめる「座敷童」と目を合わせるようなヘマは、しない。

「さて、飯にするか。たしか、朝食ってバイキングだったよな？隣一階の白鷗の間だっけ？　何時から？」

さてさて、急いで食事をとらなければと、友人を誘っていそいそと部屋を出る。このとき、頼むから座敷童は部屋から出れない設定であってくれと願った俺の心の叫びが天に届いたのかどうなのか、昨晚の幼女は俺を追ってくることなく、俺は部屋の戸をパタリを閉じ、しかるべき朝食の間へと向かったのだった。

なんていうか、わたしは日の当たる世界では、兄さまには見えな
い存在らしい??と分かったのは、兄さまが目覚ましてから部屋
を出て行くまでの様子を観察していたからだ。

兄さまは、目を覚ましてからぼくとしていた。その目は、わた
しとは全然関係ないところを見ていて、悲しくなった。そして、結
局最後までわたしに気づくことなく、部屋の戸を閉めて、供と一緒に
朝食へと行ってしまった。

「昨日もそうだったし、やっぱりわたしは……幽霊なのかな？」

昨日も、日の当たる世界で兄さまはわたしに気づいてくれなかつ
た。鳴こうが叫ぼうが、兄さまはわたしに振り向いてくれなかった。
結局、兄さまがわたしに気づいてくれたのは、わたしが騒ぎ疲れた
明晩……兄さまが、たまたま「トイレ」に行こうと目を覚ましたと
きだった。

でも、やっと兄さまが気づいてくれたと思った矢先に、兄さま、
白目向いて気絶しちゃった……

「……トイレ？ あれ、トイレって、何？」

なんだか、頭の中がぐるぐるする。なんだか、わたしの物じやな
い物が、わたしの中に在る感じ。だって、「トイレ」なんて、わた
し知らない。けれど、知っている。

「……」

視線をずらすと、そこには「テレビ」があつた。あれは、「ニコース」とか、「バラエティ」とかが観れる箱だ。この「リモコン」の「電源」を押すと「スイッチ」が入り、「情報」を受け取れる。

「……」

よくよく考えると、今のこの世界は「未知」だらけだった。それは「テレビ」だってそうだし、「水道」だって、そう。昨日は「コンクリートジャングル」なんてものまで観たはずなのに、けれど、なぜか少しも真新しさを感じない。

「……わたしは、小羽。わたしは、寿小羽」

なんだか急に不安になり、わたしは自分の名前を声に出してみた。お父様とお母様から戴いた大切な名であり、兄さまと姉さまが？

「……」

??? 兄さまが、可愛いと言って下さった、わたしの大切な名を、口に出してみる……けれど、いっこうに不安は消えない。それどころか、なにか、黒いモノがわたし中に根を張るように広がる感じがして、わたしはいてもたってもいられず、部屋を抜け出し、兄さまを追った。

「兄さま……兄さま！」

なんだか、怖い。半透明な自分という存在や、この世界に外さまであるという孤独感??それよりなにより、わたしは、『わたし』というモノが恐ろしくてたまらない。

「うう、えゝん。にいさまゝ！ 弥生兄さまゝ！」

わたしは、わんわん泣きじゃくり、兄さまを探し求めた。その声が届くことはないと言われた気がしたけれど、それでもわたしは兄さまを求めずにはいらなかったんだ。

「幻想歌：その名を呼ぶ」

「幻想歌：その名を呼ぶ」

旅館の朝飯つてのは、なんとなく物足りない。実際のところ、品数事態は家で食べるよりはよっぽど多いのだろうが、無駄に豪華な膳にのっているのが、それら全てを台無しにしている気がする。

「おい、キヨ。今日つて、どこ行くんだったけ？ 寺？ 街？」

みそ汁に口をつける前に、そう言えばと悪友の清水に話を振る。なんとなく、あんまり寺は廻りたくはない気分なんだ。なんか、変なのに取り憑かれそうな気がするし……

「さあな。峰岸達はなんか行きたい場所があるとかで、そこに行けたら後はどこでも良いって言うってたぞ」

もぐもぐと漬け物をそしゃくしながら、「うゝん、微妙」と独り心地に返すキヨ。こいつ、女子と一緒に廻れるつてのがメインになつてて、種学旅行及び京都の名所つてのが完全にサブになつてやがる。

「いや、おまえ、それつてつまりは、俺たちに廻る場所まかせるつてことなんじゃねえの？」

俺は、箸をつけものに伸ばし、ご飯の上に載せる。あとは、パリパリとその食感を味わうだけ？？だったんだが。

「え、俺たち？ 俺たちつて、俺たち？ いや、なんも考えてねえ

よ？」

情けなさ過ぎる友人の顔を見て、何となく箸が止まる。

そして、若干引きつった顔のキヨを横目に俺は、ため息一つ。たしかに、別に俺たち男がプランたてなきゃならんってことはないんだろうけど、たぶん、峰岸のグループだったら、『当然男がエスコート』と考えているのは……間違いはないはず。

「なら、それでいいじゃん。まずは峰岸達が行きたい場所に行つて、あとのことはその時に考えれば良いし」

箸を、動かす。ポリポリと齒ごたえの良い漬け物を口の中で砕き、その食感を楽しむ???なんてこと、今までなかった。ああ、普段しないことをするってことは、今の俺が普通じゃないってことなんだろうな。

「ごちそうさま。集合つて、八時半からだったよな?場所は、玄関前だろ?俺、ちょっとやることあるから、しばらくドロンするわ。待ち合わせには間に合うようにするし、プランニング、時間があるんだつたら少しねつといてくれ」

言うだけ言つて、席を立つ。背後から、「どんだけお前らラブラブなんだよ」とかなんとか言われたけれど、それには手を振って答えとする。

たしかに、ドロンする理由が彼女との逢い引き???なら、俺もどんだけだと思つよ。

けどな。

「さっきから兄さま兄さま兄さま、兄さまってなんなんだあいつは

！　つくつそ、こんなの、反則だろうが……」

けれど、さつきから泣きべそまじりに俺を呼ぶ声が廊下を行ったり来たり。なんとなく、「あいつ」が俺を捜してまわってるのが分かる。そして、それに答える必要がないことも、あるいは、答えない方が良いつてことも、なんとなく、分かる。しかも、声が呼んでるのは弥生とかいうやつで、俺じゃない。……そもそも俺は弥生とかいう名前じゃない。なのに、どうしたって、この声が俺を呼んでるとしか思えないのだ。

「ああ、もう。これも、ぜったいあいつのせいだ。あいつとつき合いだしてから、なんかこういうのに弱くなってるし」

ぶつくさと良いながら、俺は「声」をたよりに「座敷童」を探す。そして、もう一度、遠い彼の地で授業を受けているはずの彼女に心の中で文句を言つと、急ぎ足で

急ぎ足で

俺は、自分でも気づかないくらい必死に、声のする方へと歩を進めていた。

T・P・S　真名

真名はマナとも表記される、命の源泉である。

多くの場合、真名は不定形であることが多い。これは、その「呼び方」が一定でないという意味であり、つまるところ、「真名」とは、真の意味での、「存在の識別記号」なのである。

マナを用いて世界に干渉する魔法及び魔術は、その施行が詠唱呪文と独立して成立する。裏を返せば、詠唱呪文を唱えたところで、それが「真名」でなければ、何ら意味はないのである。

一般的な魔法や魔術は、真の理解がなくとも「真名」へと至ることが出来る。しかし、真の意味の奇跡たる「魔の法」を行使するには、真名へと。つまりは、その存在の根幹へと至らなければならぬ。

……昨今の魔法使いには、言葉自体がまるで魔法そのものであるかのように唱える者が多い。本当に、嘆かわしいことではないか？

「幻想歌：とびげり」

その声は届かないよ。

けれど、声に込めた想いは届くはずだから――諦めないで。「あの人達」が、あなたをもうすぐ迎えに行くから。

だから、ぜったいに――

「幻想歌：とびげり」

私が生きていた頃は、わたしが着物の裾をたくし上げて城を走りまわろうものなら、すぐに女中の婆につかまり叱られた。しかも、そのあとすぐにお父様とお母様からおしかりを受けて、そして、でも、結局最後には――

「……」

けれど、今は私を叱ってくれる人なんて、一人も居ない。それど

ころか、私が存在していることを認めてくれる人だって、兄さまを除けば、一人も居ないかもしれない??? だから、廊下を爆走したところで、何の問題もないのだ。

道行く人（廊下を歩いている人）は、全部私をすり抜けてしまし、無駄に折れ曲がる道だって、壁を突き通れば簡単に短縮できる。足音だって響かないし、誰にも迷惑はかけない。

「……兄さま！」

わき上がってくるのは、兄さまへの怒り。けっきょく、兄さまは昨日から私をからかっていただけだったんだ。

「逃げられるとお思いですか!? とまってください、にいさま！」

私は、自分が死者であることが分かる。自分がこの世界の外座にいるということが、どうしようもなくはつきりと感じ取ることができる――それがただけ孤独で不安なことなのか、この世界で今も生きている兄さまには分からないんだ！

……分からないだけなら、まだいい。けれど、兄さまは私を無視した！

結局、お日様が昇ってようがお月様が昇ってようが関係なく、兄さまは私が見えてたんだ。それなのに、兄さまは『昨日』と『今朝』に渡って、私を辛かって遊んでいた！

「ゆるしません、にいさま！ ぜったいに、捕まえてみせます！」

廊下は基本的に走ってはいけないのだろうが、髪を振り乱した半透少女に追い回されているときくらいは、そんなくだらないルールは破っても良いと思う。

『いやいやいやいや、無理無理無理！』

心の中で絶叫しつつ、俺は西館のカーブをドリフト気味に曲がる。そして、減速時に詰められた霊間距離をなんとか引き離そうと、再び筋肉をしばきにかかる。

額には、わずかに汗。息はすでに若干とはいえないくらいに揚がり、筋肉は乳酸が溜まっている旨をシンシンと告げ居ていた。

「ガチで無理！ もう、無理、てかあいつ、むちゃくちゃだ！」

少女の足は、そんなに速くない。ここがただっ広い公園かどこかなら、やつを確実にぶっちぎれる自信がある。ただ悲しいかな、ここは旅館だ。はつきりいつて、通行人が邪魔すぎる上に、直線がありにも少ない。くねくねと曲がりくねった道だけで、百歩譲ってそれだけならまだ良いが、無駄に贅沢なカーペットが俺の自慢の足を引っ張っていた。

対して、少女は基本的に通行人を無視する……たしかに、やつ自身の足は、大して速くない。

速くはないのだが、やつは「避ける」という動作が必要ないため、そんなに足が速くないせに、なぜか結果的に俺とドッコイくらい

で廊下を移動していた。しかも、足音がしない。

そして、ときたまやつは壁をすり抜けてくる。衝撃の、ショートカットだ。まじで、心臓に悪い……

「ああもう、なんでこんなことに！？ あれ！？ てかなんで、俺はあいつにおいかけてるんだっけ！？」

酸素が足りないと言句を言う脳に鞭をうち、答えを出せと責め立てるが……答えは、出ない。

とにかく今わかることは、俺が途中で地雷を踏んだということだ。

なんか知らんが、最初は上手くいっていた。どっからだ！？

たしか、あいつを探し当てて、そんでもってわんわん泣きついてくるあいつを前にしてどうしていいか分からなくて、「今朝はあんなに静かだったのに、なんて声で泣いてんだ」ってあやそうとしたあたりから……『！！！』

小野清は喜寿を迎える爺様で、そのお祝いにと娘夫婦につれられ、京都の老舗旅館に二泊三日の旅行に訪れていた。

「……」

清は、生粋の熊本県民であり、それこそ戦争以外では熊本の外と
いうものを知らなかった。

そして、彼の半生を語ればいろいろとそれだけで一本の小説にな
るのだが……まあ、なんにせよ、とにかく重要なのは、今日とい
う日が、清の喜寿記念良好の初日であり、そして今まさに清爺様は、
朝早くから旅館入りというのもなんだが、これから二泊する旅館に
チェックインしようとしている所であるということを頭に止めてい
ただいていれば、差し障りはないだろう。

「……」

清爺様は、娘夫婦がチェックインを済ませる間、自信の半生を振
り返りながら、ある意味ではその到達点である家族旅行を過ごす旅
館を感慨深げにながめていた。そんなとき、視界に行儀を知らない
一人の青年が、下半身だけの『何か』を引き連れて現れたのだ。

彼は、『追いかけてテルんだっけ！？』と叫んだあとに、下半
身だけの『何か』からドロップキックをその背後に受け、転倒。さ
らにはそのままゴロゴロと転がって、うまいこと開いた玄関の自動
ドアから転がり出て、そのまま外へとフェードアウトして行った。

「……」

そして、それをゆつくりと追いつめるように、下半身だけの『何か』は締まった自動ドアをすり抜け、こちらもまた清の視界からフェードアウトしていった。

「……」

結局、清は年甲斐もなく「この旅館にだけは泊まりたくない」とカウンターで手続きを進める娘夫婦に訴え、別の旅館を取り直すことになるのだが……それはまた、別の話である。

「幻想歌：とびげり」（後書き）

今回はものすごくのんびりと話を進めます。

今回は、誤解解除〜自由行動開始直前くらいまでを書けたらと。

幻想歌：兄弟喧嘩 1

あり得ないくらいの勢いで旅館の外に蹴りだされた俺は、無様にも地球にほお擦りすることになった。

まあ、イタイ。痛い上に、イタイ。

俺が今いる場所は、人の往来の激しい旅館の玄関先だった。だからだろうか、イタイ視線がおれに容赦なく降り注ぐ。

「……」

わき上がる羞恥を押さえ、今まで必死に押さえていた理性を押しつけてわき上がってくる感情を胸に、俺はゆっくりと立ち上る。そして、再び逃走。

周りの人たちには何の弁解もせず、ただただ、人がいない場所を目指してひた走る。すると、「いい加減に諦めてください！」という罵声が後ろから飛んできた。もちろん俺はそんな声を無視し、人気のなさそうな場所を探しながら、旅館の敷地を走る。

兄さまに秘技をお見舞いして数分後、私は完全に追いかけて詰んでいた。

「にいさま、これまでです。おとなしく観念して、謝って下さい！」

兄さまの前には、壁。それも、とびきりノッポなやつで、飛び越えるのは絶対ムリ。わたしなら行けるけど（すり抜けられるけど）、生者である兄さまには絶対ムリ。

そして、背後には私。どう足掻いたって、兄さまに逃げ場なんか無い。逃げ場なんか無いはずなのに、兄さまの背中からは……

「もう、逃げねえよ。ああ、もう逃げるのは止めだ」

ゆっくりと振り向く兄さまの顔は、般若のそれ。引き延ばされた口からは「さんざんコケにしゃがって……」と、どう考えたって妹に向かって言っちゃいけない言葉が漏れ出ている。

……兄さまが、無言で近づいてくる。手をワキワキさせながら、
かなり若干危ない人の目で、一步一步私に近づいてくる

「簡単なことだったんだよな。そう、簡単なこと……」

私の目の前まで来た兄さまは、ゆっくりとその大きな手を私のほかに伸ばし、そして、優しく――

「みいさま、やめへくははい！」

目の前でフガフガ言っている座敷童の前に、俺はしたり顔。

おそらく、こいつは「兄さま止めて下さい！」と言いたいんだろうが、俺がほつぺを両脇に思いつき引き延ばしているため、フガフガ言うのが精一杯。

「冷静に考えたらよ？ お前が俺に触れるんなら、俺もお前に触れるってことだよな？」

背後からの容赦ない一撃を受けてぶっ飛ばされた瞬間、俺は閃いた。

そう、こいつが俺に触れるってことは、俺だってこいつに触られる……なら、こんなガキンチよに負けるわけが無い……と。

「なんへ、いひはふすふの（なんで、いじわるするの）！」

こいつにマウントポジションとられた最初は、こいつってば半透けだし、他人には見えないし、服は何か知らんが着物だし、見てくれば生きた日本人形みたいだし、etc...まあなんにせよ、怖かった。ああ、怖かった。けど、

「なんだあの軽い蹴りは！ あんだけ追い回しといて、最後があれか！？ 恥かいたただけじゃねえか！」

男には、メンツってモノがある。普通に考えて、人前で転ぶってのはできればご遠慮願いたい失態だ。にもかかわらず、あのとき俺は「一人で」ぶっ飛んで、「一人で」大転倒を噛ましたあげく、ま

さかのうつ伏せで地面に静止――はつきり言って、幽霊に蹴られたことよりも、起き上がって周りの反応見る方が怖かった。

んで、そのありえない羞恥を俺にもたらした「幽霊の蹴り」ってのが、これまた全然痛くも痒くもないやつで、普通に立ってたら、「は？」っ鼻で笑えるレベルのしょぼい蹴りだった。まあ、感覚的には後ろから膝がつくんやられた時のイラっと感じてる。

「はなしへ！ にひはま！ はなしへ！（はなして！ にいさま！ はなして！）」

さて、どうしてくれようか、このくそガキ霊……パツと見、こいつは半透けで体重軽くてちっちゃくて他人には見えないだけで、あとはその辺の子供と全然変わらないみたいだ。

「うつ、にいはま！ うつうつ！」

コケにされているのが悔しいのか、半透け少女の目がだんだんと険しさを増している。しかし、なんてことは無い。所詮は、子供だ。それは、「蹴られた時」によくつく分かった。

だから、こんなガキンチよとケンカして負けるほど、おれはおちこぼれておまえ、それは――！！！！！！！！

男には、絶対的な急所というものが存在する。

そう例えば、股間だ。ここは、男にとっては生まれた時から息子であり、何にもも代え難い、「相棒」である。

男同士のケンカでは、暗黙の了解として、この不可侵領域への攻撃は避けるのが礼儀である。

そのため、やんちゃをしている男連中も、ここをやられるという経験はほぼ無い——しかし、例外もある。そう、子供だ。

子供達は、事の重大さというものをあまり考えず動く年頃だ。そのため、目の前にあるモノにとりあえず手を伸ばそうとする。

それは例えば、気に食わない大人なんかに玉砕覚悟で向かって行く時などもそうで、そうなった場合、互いの身長差によっては、子供は目の前に在る、男の大人にとっては急所とも言うべきところを——

つづく

Tips 人における「名」

Tips 人における「名」

「名」とは、存在を識別するための記号である。そのため、二つ以上の独立した「個」が存在しない限り、それは意味を成さない。それはつまるところ、「名」とは根本的に「関係性」を内包する存在であり、このことを特に意識して「名」とする場合、「名」のことを「真名」と呼ぶ。

「ごちゃごちゃしたことを取っ払って簡単に言うと、人と人との間における「真名」とは、言葉に依存するのではなく、あくまでも関係性に依存すること。」

それはつまり、「にいさま」と言ったような「名」であっても――それを発した者とそれを受け取った者との間に然るべき縁があれば、「真名」となる。

故に、「個」を指す「真名」の数は、その「個」が有する「関係性の数」だけ存在し、また、その「関係性の強度」に依存して、「真名」は互いの「個」に強い影響を及ぼす。

幻想歌：兄弟喧嘩 2

それは悪友仲間と夜通し騒いだ明くる朝のこと。

本来は、昼過ぎまで爆睡していてもいいような、そんなアホみたいな眠気の中で、東はバカ友に起こされた。

??? 不機嫌な、東。

しかし、そんな空気もモノともせず、友人は己の下腹部を指し？
??

「クララが立ったよー！」

おじいさん、みてみて！クララが、ひとりで——！」

「世界名作劇場「アルプスのなんたら」と男の生理現象」より抜粋

「クララ——！！！！！！！！！！」

奇声をあげてのた打ち回る兄さまを見て、私は一歩後ずさった。

目の前にいる人は、確かに私のにいさま。

けれど、今だけは他人であってほしいと思ってしまうのは、なぜだろう？

「に、にいさまがわるいんだもん！ わたし、わるくないもん！」

そんなに強くたたいてないのに、にいさまは大げさすぎる。

たしかに、なんかグニョってしたけど、なんかコリってもしたけど、でも、私は悪くない！

「おまえ、俺に何の恨みがあつてこんなことを！？

よくも、おまえ、ううああああ！！」

瞳に涙を浮かべながら、にいさまはよろよろと立ち上がった。そして、一步私に近づく。その様はまるで、魑魅魍魎類いだ。

「兄さまが意地悪するからじゃない！」「昨日」から必死にわたしが呼んでるのに無視して！」

わたしは、兄さまが近づいた分だけ、さらに一步下がる。

すると、兄さまも兄さまでさらに一步私に近づいて来て、気がつけば歩幅の差で距離を詰められた。

兄さまは、ものすごい力で私の方をつかむと、相変わらず涙を浮

かべたまま、こう、まくしたて始める。

「昨日から、お前を無視してた？ あ？ いつのことだよ！？ 初対面から、ばつちり、目あってただろう！？ まあ、今朝は無視したけど……違う！ 俺は、悪くない！ てか、おまえは何だ！？ そういう何か！？ ん！？ 見ず知らずの人間に因縁吹っかけて、いたずらしてまわる妖怪かなんかか？」

「……言い終わると、兄さまは肩で息をしながら、すんと腰を落として座り込んでしまった。」

幻想歌：兄弟喧嘩2（後書き）

「クララー！！！」のくだりは、現実にあつたことです。

ある朝、あまりの騒がしさに目を覚ますと、友人二人がメンチを切り合い、他の数人がなんとか二人をなだめすかしているという、ひどい光景を目にしました。

そのときの会話が、

バカ1（起こされた方）：「おまえのクララ、二度と立てなくして（たてなくして）やろうか、こら！」

バカ2（起こした方）：「あん！？ 何キレてんだよ！？ 朝の生理現象だろうが！？」

バカ1：「てめえの生理現象をなんでわざわざ叩き起こされてまでみなきやならねえんだよ、おい！……」

まだ続きますが、会えてここで筆を置きます。ちなみに、目を覚まして最初に光景を見た時は、全く意味不明でした……

少しだけ、先の未来1

少しだけ、先の未来：gold turning point

淡く世界を照らす月夜の下、旅館側の河原に俺を喚びだした栞は、おもむろに航空券を差し出した。そして、言う。

「今すぐに、ここを発ちなさい」

有無を言わせぬ、宣告――と同時に、俺の意志など考慮には入れないという、彼女の明確な意志でもあった。

……それは、いつもの物静かな彼女からすれば、考えられないこと。

俺は、たまらず問いただした――どうということなのかと。

なぜ、「明日」皆と一緒に帰ってはいけないのかと。「明日」には、帰るのだ。

修学旅行は、今日で終わった。だから、明日には、ここを発つ――みんな、発つんだ。

なのに、なぜ俺だけが、「今晚中」にここを発たなければならないのか？

「あの娘は今、結界の中に居るわ。今なら、彼女を「置いて」……
あなたは帰ることが出来る」

……あの娘？置いていく？

それって、まさか、お前……どういうことだ？おまえ、あいつに
何を？

いや、それよりも、お前はいつたい？

「もちろん、「あの娘」っていうのは、あなたの妹を名乗るモノの
ことよ。同級生の誰かではなく、ましてや、生者ですらない、あの、
モノは――」

「ちょっとまってよ！ おまえ、それって……」

一瞬の、沈黙。

水のせせらぎと月明かりだけが世界を照らす中、同級生は、告げ
る。

「あの占い師のたまり場で、わたしはあなたに「本物」を割り当てた……そこで、あらかたのことは知ったはず……だから、帰りなさい。」

五百年という月日に膨れ上がったモノは、ただの個人……いえ、私ですら、もうどうにもならない」

意味が、分らない。たしかに、俺はあのインチキ占い師の元で、世界の仕組みとか、あのバカガキのこととか、たしかに、ほんの少しだけでも、知ることが出来た。

でも、なぜ栞が「バカガキ」のことを知っているのか。

なぜ、あの「バカガキ」から逃げるようにこの土地をさらなければならぬのか???なんてことは、露程も理解しちやいない。

なのに。

栞は、全て話し終えたとしても言うように、無表情で俺の脇を通り過ぎ、旅館へ戻ろうとする。

もちろん俺はそんな友人を押しとどめようとした。したのだけれど……

「彼女が……由香先輩が、大切なんでしょう？」

だったら、過去はここにおいて行きなさい。それが、私に出来る最後の助言。あとは、あなたが決めることよ」

幻想歌：ともに在るといふ、幻想

幻想歌：ともに在るといふ、幻想

いつたいぜんたい、どこでどんな選択を誤った結果、こんなやつに因縁吹っかけられているのか、まるで分からない。しかも、幽霊のクセに、まさかの禁的攻撃。

情け容赦もなく繰り出されるその拳を前に、俺は腰を引くことしか出来なかった……まあ、くらったけど。

思いつきり喰らったけど、それはそれ。

「もうさ、ここで、手を打とう。昨日のことがどうか、今朝のことがどうか、それはもうすげえ反省してるから、勘弁してくれ」

未だ若干むくれ気味の幽霊（幼女）を前に、おれは跪いて許しを請いでいた。

……たしかに、みつともないと思う。みつともなくて情けない自分に腹さえ立つてくる。けれど、それよりも何よりも、哀愁漂うような妙な切なさ胸に込み上げてきていて、色んな感情を脇に押しつけて泣けてくるんだよ……

「おまえ、なんか、困ってんのか？助けてほしいのか？それとも、俺が困るの見て楽しんでるだけ？」

顔を上げて、幼女と目を合わせる。やつは、「私は……困っても

いないし、兄さまが困るもの嫌……」とかなんとか、意味不明な返答を返してくる。

……なら、なんで俺に憑きまとってるんだという疑問が当然湧いてくるわけで。

でも、だからと言って、おなじ質問をしても、同じように要領の得ない答えが返ってくるのも目に見えているわけで……

「じゃあ、質問を変えようか。お前は、俺にどうしてほしいわけ？」

単純な、質問だ。

簡単な、質問だ。これで答えられないようなら、俺はこいつに「必要ない」ってことになる。

――成された問いから返答までは、一瞬。

時が砂塵のように流れ去るのを肌で感じながら、俺は、幽霊の明確な意志を受け取る。

やつは、何の迷いも無く、何の気負いも無く、ただただ自然と、それを口にしていた。そう、すなわち――

「にいさまと、一緒にいたい」――と。

――
夢想歌：幻想と夢想

叶わぬ想いを幻想と呼ぶのなら、私はそれらをあえて、夢と呼ぶ。
う。

――夢は、力だ。
幻と同じように在りもしないモノでありながら、それは人に力を
与える。

それは、一步を踏み出す力。
それは、一步を踏みとどまる力。

それは、俯かぬ、力。
それは、俯いても――再び、顔を上げる力。

それは、すなわち、生きるという、力。

――夢を、私は想う。
夢を想い、幻想を抱く。

そうすれば。

幻はいつの日かきっと、私に追いつくだろう。

幻想歌：ともに在るといふ、幻想（後書き）

幻想は、夢へと変わります。

次の章は、そのための、第一歩。幻を幻で終わらせないための、大切な章。

すなわち――楽しい修学旅行、自由行動篇！登場人物がやたらと増えます。主人公達がモ部ちゃんにならないようにしないと……

夢想歌：占いの館へ1

夢想歌：占いの館へ1

きよとんとした兄さまの目の前で、わたしは顔を真っ赤にしていた。

「にいさまと一緒にいて下さったら、小羽は、十分です」

一緒に居たい――それ以外に望むものなんて無かった。

たしかに、わたしはもう「姫」としての自覚を持つ年だ。一国の「姫」たるもの、いつまでも誰かに甘えるなんてことは許されない。

それに、兄さまにはすでに「城主」として、「許嫁である」姉様を――

――下らないノイズが、意識に引っかかる。

ねえ様も何も、それらは全て既に、過去の話……「あの女」のこ
とを考える必要など、無い。

「おい、おまえ大丈夫か？」

ふと見上げると、兄さまが、心配そうに私を覗き込んでいた。

……こうしてよくよく見てみると、今の兄さまは、かつての弥生兄さまとは違う顔つきをしていた。前の兄さまは清楚というか、気高いというか、なんていうか、ほんとうに透き通った空色の人だった。――でも、今の兄さまは違う。なんていくか、もっと荒々しくなっている……

強いて言うなら、百姓だろうか？

あんなに白くて綺麗だった肌は日にお日様色に焼けてしまっているし、美しかった四肢も筋肉隆々で熊みたいだ。背丈も、昔より幾分――高くなっている気がする。

「うっん……いえ、なんでもありません、兄さま」

静かに私は頭を振り、兄さまを再び見上げる。

逆光のため、兄さまの表情はよく見えない。

でも。

「あのな、俺はお前のアニキじゃ……まあ、いいや。何でもないなら、いい。

で、一緒に居たいだけ？ なんでお前がそんなに俺と一緒に居たいのか知らんけど、それもいい。

けど、俺は今からやらなきゃならんことがあるから――その間おとなしくしてくれるなら、俺は別にいい」

ふわりと私の神をなでくれるその仕草は、今も昔も変わらない。
わたしは、兄さまの暖かさや優しさに目を細めながら、静かに「
はい」と答えた。

「兄さまがお忙しいのは、重々承知しております。けっして、兄さ
まにご迷惑はおかけしません」

兄さまに迷惑をおかけするなで、とんでもない話だ。
だから私は、「ぜったいにおとなしくしています」と誓い、兄さ
まに同行する許可をもらった。

時間がなかったというのが、正直なところだ。
キヨたちとの待ち合わせは9：00丁度の、玄関前。

やたら走り回って此処がどこかよく分からん状況では、時間まで
に戻るか分かりはしない上に、変なのに取り憑かれた。

……なんとなく、こいつ自身は俺に害意がないのは分かる。

だからといって、なんでこいつが俺を兄さまと呼ぶのかは分からんが、まあ、それもいい。

「おとなしくしてくれるなら、俺は別にいい」――それが、妥協案だった。

幽霊は幽霊で大事だが、峰岸達を待たせることの方が、現実問題として、実害がでかすぎる――気がする。

さすがに、「いや」幽霊に取り憑かれてさ？ とりあえずドロップキックとか禁的とか止めてくれって言うのに手間取っちゃってさ」――とは言えないだろうよ。

「ぜったいにおとなしくしています」――と、キラキラした瞳で言う幽霊の前に、俺はため息一つ。

なんか、さっきやたら不穏な空気を出し始めたから、「正直やっぱ、ヤバイやつ？」って思ったのは、勘違いだったらしい。

「ああ、あと、人前で話しかけるなよ……？」
話しかけないでほしいんだけど、大丈夫か？ てか、お前が嫌いとかじゃなくてな、ほら、こっちに色々あるからさ？」

峰岸達の前で「一人会話」をするってのは、さすがにハードルが高すぎる上、適当に携帯で空電話でごまかしても、携帯をまっ二つ

に折られて速攻で怒られるのが目に見えている。

……だからといって、幽霊に「話しかけるな」って言うのも、だ
いぶ勇氣がいる。

俺はハードルの高い二つの苦行を天秤にかけて、「聞き分けが良
さそうな方」に掛けてみた。

すると、案外すんなり「はい」と一言。
そう答え、俺の横に立つ。

「……………なら、いい。いくぞ」

おれは、幽霊が憑いて来れるくらいの速度で走り出す。

目的地は、旅館の玄関前。タイムリミットは、あと5分。

急がなければ、「瀬戸の鬼姫」にしばかれることになる……それ
だけは勘弁だな。

夢想歌：占いの館へ2：仲間（前書き）

自己紹介です！

夢想歌：占いの館へ2：仲間

かつて母様は、「女性たるもの、静かなる力でありなさい」とおっしゃっていた。女性の役割は、男を影から支え、引いては、影より国を支えることだと。

国を造り、民の命を守るのは、太陽の化身たる男のつとめ。
国を紡ぎ、民の心を守るのは、月の化身たる女のつとめ。

それぞれが、それぞれの役割を果たしてこそ、安寧は保たれる。もし、国が傾くということは、どちらか——あるいは、双方が本来の役割を果たしていない時なのだ。

そう、母様は優しく、わたしに諭すように教えて下さっていたはずなのに……

「っそい！　っさい！　今何時だと思ってるの！？　あんた、おかしくない！？

たかだか数日彼女と離れてるくらいでどんだけよ！？」

開口一番の「っ」には、魂がこもりすぎていて、何を言ってるのかさっぱりだった。たぶん、「おっそい、□っっさい！↑□は分からない」って言いたいんだと思う。たしか、私に合わせて走ったせいで、兄さまは待ち合わせの時間に5分くらい遅れていたから。

今、兄さま（と私）の前には、『がおー』とばかりに吠える女性
が一人。彼女は、その豊かな黄金の髪を怒りで浮き上がらせながら、
兄さまに怒鳴り散らしていた。

そして、その女性の前で兄さまは、小さくなってしまっている。
ときどき、「スマン」とか、「べつに惚気てたわけじゃ」とか言い
ながら、なんとか弁解使用としているのだけれど、『瀬戸の鬼姫』に
は通じないみたいだ。

鬼姫様は、その綺麗な瞳をつり上げて怒っていた。たとえ屈強な
武士でも、あんな気迫をぶつけられたら震え上がる違いはない。

私は、『瀬戸の鬼姫様』こと、『峰岸燈火』を静かに観察した。
背丈は、兄さまの胸くらい。兄さまの身長が『178』くらいだ
から、もともとは小さくないのだろう。兄さまの傍にいるから、小
さく見えるだけ。顔の造形は、母様のような女性と比べて、なんと
なく親近感が湧く感じ（童顔？）。

でも、その小さな（相対的に）体からは、にいさまを震え上がら
せる程のオーラがみなぎっていた。

それこそ、太陽のごとく。

それこそ、全てを燃やし、命という命の輝きを蹂躪できる程の力
が、燈火からは放たれていた――視線を、少し横にずらす。

そこには、二人の女性。一人が「朝影里奈」という名でもう一人
が「瀬戸神流」。

里奈は、眠たげなまなざしで「速く行くよ」と促していた。
わたしはお叱りを受けているらしい兄さまを残し、彼女の元へ。
少し前髪が長いせいで遠目には分からなかったけれど、とても綺麗な人だ。

顔立ちは端正で、母様みたい。けれど髪は短く肩でそろえられ、
長髪だった母様とは、少しそこが違う。

里奈は、自身の目を冷たくさせるような細いワイヤレストाइプの
眼鏡をクイツと持ち上げながら、兄さまと燈火をやりとりをため息
まじりに見つめていた。

……そして、その横では、「ケラケラ、学習しないね、あいつも」
と笑う珍獣が一匹。里奈の横にいるせいだろうか、この神流という
女性がバカにしか見えない。

見た目は、ちょい悪系のギャルって所だろうか？

……一通り女性陣を見終わった後、私は今更ながら、あることを疑
問に感じる。

（わたし、この人たちを知ってる……？）

今日初めてあった人たち……の名を、なぜ私は知っているのだ
ろう？

くるりと視線を回転させ、兄さまの方を振り向く。すると、丁度自動ドアが開き、そこから現れた兄さまの友人――「伊藤金森」と「坂石紀一」が、なにごとか叫びながら、兄さまに飛び蹴りをお見舞いするところだった。

二人に遅れるカタチで、「兄さまの中では最も信頼のおける友人」である、菅原清が姿を現す。そして、「まじで勘弁してくれよ、東！ おまえ、どこにいたん！？」と、反泣きですがりついていた――なにか、泣かなければならないようなことが、あの方にはあったのだろうか？

「？ あれ、一人足りない？」

私は、あることに気づく。

ここには、兄さまを初めとして、燈火、里奈、神流、金森、坂石、清様の、「久遠栞」を除いた全員が集結していた。

「？ んゝ栞って、だれ？」

霞が掛かったように、栞というモノが一切が分からない……でも、いるはず。

燈火がいるのに、栞がないのはおかしいんだ。

私は、ぐるつと玄関先を見渡す。でも、どこにも栞に該当する人物は見当たらない。

視界に入るのは兄さまを怒鳴り散らす燈火と、彼女をなんとかなだめすかそうとする兄さま達男性陣だけ……

…… たったひとりの女性に男4人がかりで掛かっているというのに、なぜ女一人懷柔できないのか。栞がないのは気になるけれど、それよりもなんとなく、兄さまの情けなさが目について、嫌な気分になる。だって、「前の兄さま」は、もっと、聡明で――

「だから、スマンっていんじゃない！栞の方からも、なんか言ってくれよ！ほら、時間の無駄だしさ！」

兄さまはもっと、聡明で――？

…… 栞の方からも？

変なノイズが、わたしの視界を覆った。電波を受信できないテレビの砂嵐を目の中で見せられているみたい。

一瞬、その不快さに、思わず目をつぶってしまつ。すると、どうしたことが。

たったそれだけのことで、嫌な間隔は消失し、もとの世界が私のもとに戻ってくる。

（もう、なんだつたの……今の？）

私は、目をぐりぐりしながら、再び顔を上げた。そして、「あつ」と驚かされた。だって、先ほどまで誰もいなかったその空間には――おそらく、さっきまでわたしが立っていた目の前の位置に、「まるで最初から」そこにいたかのような自然さで、「久遠栞」が笑って立っていたのだから。

夢想歌：占いの館へ2：仲間（後書き）

アホな話

鳩にエサをあげないで下さいというのは、マジです。

鳩は、結構凶暴。エサを少しやって、集まりすぎたハトから逃げようとしたら、襲われた。

ハトって、ホバリングしてエサをとりにくるんです。あと、喧嘩するとき翼でもものすごい相手を打つ。

関係ないけど、次回はみんなで電車に乗ります。

夢想歌：占いの館へ3：眼球をつぶす女（前書き）

電車に乗れなかった……

夢想歌：占いの館へ3：眼球をつぶす女

情けない顔で親友に助けを求める男を前に、わたしはいら立ちと幸福感を隠せないでいた???イライラするのに、幸せ。

そんなの、『峰岸』である私にはふさわしくない感情だ。

「うーん、そうよね……」

東に縋り付かれた栞は、真面目な顔で、しばし沈黙。そして、口元を緩めた次の瞬間には、私にしか分らないくらい小さな微笑を。

私が怒気に向けなければ、クスリと笑ってしまっていたらうその微笑みを私に向け、口にも出さず、こう、問いかけてくる。

『もう、十分じゃない?』???と。

私は。

私は栞から反射的に目をそらし、そっぽを向く……別に。

別に私は、どうだってよかった。東という人間が私たちのような人間と一閃を隔した場所にいるのは知っているし、二重の意味での免罪符が彼にはある。それでも、そうはいっても、私はただただ単に人として、人を待たせた東が気に食わないだけであって、それ以上でも、それ以下でもない——?と、自分に言い聞かせていた矢先に。

「やきもち」

栞は、一言「――私にか聞こえないような小さな声で、呟いた。わたしは直感で、ヤバイと想った。栞の一言は、私の脳髓に妙な信号を入れたらしく、ほぼ間違いなく、私の顔は熟れたリンゴのようになっ……？」

「あああああxつqわっふいおjff!!!!!!」

気がつくのと、なぜか東の目を無意識につぶしていた。彼は魂の咆哮をあげながら、人目の多い旅館前で、のたうち回っている。

「うわ、今第一関節は、いつてたぞ……」

若干引き気味につぶやく坂石を眼光で黙らせ、ふたたび東を見下ろす。

涙を流し、「やっぱ、疫病神かなんだよ、あいつ」とよく分からないことを呟く東を見て、ちよつとした罪悪感が芽生えなかったかと言われると、そうでもない。

……たしかに、第「2」関節まで眼球に埋め込むことはなかったけれど、この顔の火照りをどうにかする手段としては、私は最適な手段を選んだと思っている。だから、彼の目を潰したことはこの場合正しい判断だったし、要は、程度の問題だ……帰結としては、私はそんなには悪くない。

「ポンポカポン！ ポンポカポン！」

私の携帯が、間抜けな音を立てる。職業柄というか家柄、私はすぐに携帯を取り出すと、先の名を確認した――？？タッチパネルには、「瀬戸神流」と表示されている。

視線を少し上げ、瀬戸の位置を確認する……彼女は、朝影の横でいつものように？？？というか、それはつまり私から数メートルしか離れていない場所から、別に携帯など経由しなくても絶対話が出るような距離から、わざわざ携帯に電話をかけてきていた。

わたしは、若干腑に落ちないモヤモヤ感を胸に、応答ボタンを押し、「はい、峰岸燈火です」と、一応名乗る。

本来なら、受話器の向こうからも然るべくして名乗りがあるはずなのに、聞こえてきたのは、時報だった。しかも、小声で。

「ぽん、9時25分をお知らせします」

夢想歌：占いの館へ3：眼球をつぶす女（後書き）

問1： 消毒薬のオキシドールを必要以上に傷口に掛けると、どうなるか。

問2： 一週間くらい変な液が止めどなく溢れてくる（組織液？）。

次も、電車に乗れなさそう……

T i p s 登場人物確認1（前書き）

一旦、登場人物確認しといたが良いかなど。

Tips 登場人物確認1

東利也（故：寿 弥生）

本編の主人公の一人。

修学旅行先で、数世代前の妹（正確には妹だったモノ）に取り付かれた。

彼自身に霊視の力は無く、所謂超常的な力は持ち合わせてはいない。

また、名家の出身が集まる瀬戸高校に通っているが、彼自身のバツグランドは一般人のそれ。つまり、一般入試で入学した（基本、通らない。定員200人に対し、入試枠は最大で5人：事実上0人）。

一部の者からは、「平民」と呼ばれている。

――

暫定：寿小羽（故：寿小羽）

2010年現在から遡ること500年前は、寿小羽として存在していたモノ。

とある理由から輪廻の理を拒絶し、「環より外れた者」となった。

兄の輪廻体である東に接触するまでの500年間は、『念』として存在していた。

現在は、東との相互さようにより、かつての「寿 小羽」のカタチを基礎としている。

――
伊吹 由香

東の恋人であり、歳は東よりも一つ上。現在は、大学入試に向けて奮闘中。

ガッツポーズがやたらと似合う女子高生と、町内では評判。

――
東が通っている高校と同じ瀬戸高校に通っている。東同様の、「平民」仕様であるが、その圧倒的なカリスマ性のため、彼女に面と向かって「平民」と呼ぶ者は少ない。

――
姉妹世界

魂の行方を探るために創られた、世界規模の巨大な実験施設。

輪廻という秩序を優先させるため、精神と物質の繋がりが極端に低下しており、そのためか、異なる言語での意思伝達が不可能となっている。東達がいるのは物質世界の姉妹世界 α で、対岸の精神世界は β と呼ばれる。

――

瀬戸高校

とある成功者が娯楽で始めた教育機関の一部。日本国では瀬戸高

校と名がついているが、これと同様の目的で作られた機構は世界各国に存在する。学校の冠を冠る機関の建前は「国のリーダー」を育てること。しかし、理事長の娯楽としての本来の目的は、「名の収集。要は、ポケモンよろしく名家の紳士淑女を手元に集めてみたいという、子供じみた思想が根幹としてある機関である。

――

峰岸燈火

世界の最先端を走る各分野の名家と強い繋がりを持つ『峰岸』の家に次女として生まれ、育てられた。現在は名家のサラダボウル「瀬戸高校」の生徒会長として、日々学業とコネクション作りに精を出している。親が決めた許嫁が存在するため、彼女には自由な恋愛は許されない。

――

久遠 栞

峰岸燈火の親友にして、『峰岸』の盟友でもある『久遠』の末っ子。久遠の一族には霊視能力（モノの背景を見る力）があり、それに目をつけた『峰岸』が参謀として、一族に招き入れた。人格的にも能力的にも優れた人物であるが、百合（両刀）……親友が大好きで、翻って在る人物が嫌い。

――
朝影里奈

液晶の世界シェアの半分を占める「朝影」の長女。 家の総意により、瀬戸高校に入学した。 自身よりも「名」が上の峰岸燈火を嫉妬半分、人間的に合わない半分で嫌っているが、『峰岸』とのコネクションを得るため、友好関係を築こうとしている。

――

瀬戸神流

瀬戸高校の瀬戸は『瀬戸』に由来している。 土地持ちで、瀬戸高校の周りの土地は全て『瀬戸』のもの。 すくなくとも、成功者が存命の間は『瀬戸』が潰れることはないと言われている。 神流自身は家のことに興味はなく、高校を卒業したらふらりと失踪するつもりでいる。

――

シロ

師が起こしたゴタゴタに巻き込まれ、今はαに身を寄せている魔術師。

戦闘魔法はほぼ使えないが、先攻である移動魔法や世界の成り立ちには詳しい。

現在は占い師として地道に生活費をまかなっている。

――

村上 徹

シロと同居している超能力者。彼らが同居するようになった経緯は、またの機会に。彼の能力は world shift と呼ばれるもので、彼を中心とした特定の範囲内の秩序を、別世界の秩序と入れ替えることが出来る。このときの能力圏では交換先の秩序が優勢となるため、本来の世界の秩序に乗っ取って動く事象は無効化されるか、カオスな現象に書き換えられる。

T i p s
登場人物確認1（後書き）

夢想歌：占いの館へ4：500年前は殿様だった。

目を、潰された。

待ち合わせに5分そこら遅れただけなのに、20分強に渡る説教の末に、目を潰された……

俺がいったい何をした？

なんで、目を潰されなきゃならない？目には目を、歯には歯をの理屈か？

……いや、いくら何でもそれはないだろう。

「やっぱ、疫病神かなんかだよ、あいつ」

止めどなく溢れる涙を拭いながら、意味のないぼやきをしてしま
う。

でも、それでも、そんな意味のないぼやきがこぼれるくらいに、
昨日から散々な目に俺は会っている。

ことの始まりは、昨晚の「金縛りから始まる心霊体験」だった。普通なら、それで十分参るようなことだと思っけれど、そんな不幸の連鎖は終わることなく、今朝も早朝から「幽霊を無視するノリアクションゲーム」に強制参加させられた上……さらには、よく分からない理由で幽霊に旅館を追い回せされたあげくに、禁的攻撃。そして、それら全ての苦行を乗り越えた俺を待っていましたとばかりに、鬼姫の説教から繋がる目潰しが襲った……

(……あれ？ また、涙があふれてくるよ？)

目の痛みが引いても溢れる涙に際限はない。
そして、際限がないのは、何も俺の涙だけでなく――

『兄さまに、よくも、この、無礼者――!!!!!!』

俺にしか聞こえない声でわめき散らすのは、俺をここまで追い込んだ張本人であるはずの、幼女の霊。こいつは、峰岸の俺に対する行為に大変ご立腹らしく、ものすごい形相でわめき散らしながら、目の前の峰岸に食って掛かっていた。

しかし、峰岸は気づかない。

なにやら、しかめっ面で携帯の画面を見つめながら『はい、峰岸燈火です』と名乗り、受話器の向こうの誰かと話し始めた――放置プレイかよ、このドSが……と思ったことは、もちろん、口には出さない。

放置された俺は、こんなことは峰岸相手ならいつものことなので、耐性がある。けれど、幼女はそうではないらしい。

座った目で、「口で言っても分からないようなら――」と、その可愛らしい顔にお似合いな、これまた可愛らしいグーを作って、峰岸の足やら腰やらを叩こうとしている――のだが、如何せんすり抜ける。

まあ、そうだろう。旅館であれだけ通行人を通り抜けたやつが、

今さら『他人様』に触れられはすもない。

そんな、なんとなく予想できた展開に、俺は思わず笑ってしまう。

すると。

『兄さま、何を泣きながら笑ってらっしゃるのですか！！！』

寿家の、ひいては桂藩城主としての責務がその肩にはあるというのに！！！！『……』

……幼女の霊がまた、訳の分からないことを言いだした。

もう、勘弁してください。ほんとに、勘弁してください。俺は、城主とか何とか言う者じゃありません。普通の、男子高校生です。女が好きで、友人とバカやって騒ぐのが大好きな、一階の男子高校生なのです……という旨の念を、幼女にアイコンタクトで伝える。

『にいさま……この女にハッキリと言ってやってください！この方が瀬戸の鬼姫だろうがなんだろうが、兄さまは十六万國を治める桂藩の城主なのです！！！何も、この女に遠慮することなどありません！！！！』

アイコンタクトでは、何も伝わってないって言うことが、幼女の叫びから伝わって来た。

これは、どうしよう。なんかこのままだと、『にいさま、なんとかいってください、にいさま』とか訳の分からんことをまくしたてながら、肩をつかんでガツクンガツクン揺さぶられそうなんだが。

それは、ぜつたいに回避しなければならない。いくらなんでも、一人でガツクンガツクンしたら、明日の修学旅行が潰れるだけでなく、俺のメンツは地のそこまで落ちてしまう。

……俺はぼそりと、『城主違う、俺高校生』ーと、つぶやいた。言葉足らずだが、どうにかこれで伝わってほしい。というか、伝わってくれないと困る。

「うん？ 東、なんか言ったか？ おまえ、大丈夫か？」

俺のつぶやきは、友人達にとっては全く持って意味不明だったのだろう。

みんな（男性陣のみ）、若干引き気味に俺の肩を叩きつつ、「大丈夫、大丈夫、もう大丈夫だから、多分……」と、優しい声をかけてくれる。

まあ、いい。もう、いい。

これで、十分だろう？ もう、俺は十分苦しんだ。 さあ、あとはお前が納得してくれるだけだ。

納得して、当初の約束通り大人しくしてくれれば、何の問題もないんだ。 さあ、幼女。

どうか、俺の気持ちを汲み取ってくレーーーーと。

そう、止まらない涙を流しながら、やつの目を覗き込んだ。すると、やつは「ふっ」と本当に優しそうな目を細め、俺に近づいてくる。

そして、着物を綺麗に折りかがみ込んで、這いつくばる俺と同じ目線まで「分かっています、おにいさま……」と、返してくれた。

俺は、思った。これで、大丈夫だと。

ああ、これで大丈夫だと、心底思った。

すくなくとも、この場はこれで収集がつくと、本気で思ったのに。

目の前のくそガキは、慈愛のこもった瞳で、「全てを理解し私は共感しています」というような眼差しを向け、こう、全てを台無しにする一言を付け加えた。

それは。

「お兄様。

もう覚えておいでないかもしれませんが、にいさまは、500年前は――、桂藩の城主様だったのです。今は一階の男子高校生であつても、500年前は、一国の主であらせられたのです。

ですから、胸を張ってください、にいさま。さあ、そして、あの女に――」

俺は。

俺は、「俺は500年前は殿様だったんだ!!! 全員、俺を敬

い尊敬しろ！　そして、峰岸、お前はこれまでの数々の無礼を地に伏せて謝り倒すと良い！」と。

そんな、男として最も言いたくない「あの頃の俺は」のセリフに電波をねじ込んだ虚言を吐かせられるくないなら。

いつそのこと、たたり殺してくれて構わないと、今度こそ、心から本気の涙を流して、笑った。

夢想歌・占いの館へ4：500年前は殿様だった。（後書き）

次は、電車によって移動します。だぶん。

夢想歌・占いの館へ5：霊視の巫女（前書き）

電車にかろつじて乗った。

夢想歌：占いの館へ5：霊視の巫女

Tips 霊視

一般的に、アカシックレコード（世界の情報投影蓄積基盤）の閲覧を可能とする魔術は存在しないと言われている。

もちろん、神祖の「帳簿改竄」の法などの例外は存在するが、それらが一般化される見込みは、現時点では皆無である。

ときに、魔術ではないが超能力の一種として、霊視・千里眼と呼ばれる異能が世界には存在する。個体差はあるが、基本的にこれらの力はアカシックレコードを過去方向に読み取るものであり、これらの力は戦術能力とはまた一線を画す脅威を秘めている。

また、姉妹世界 α と β のアカシックレコードは両世界で一つであるため、霊視能力者は魂の記述漂白を超えて、対象の過去を読み取ることが出来る。

夢想歌：占いの館へ5：霊視の巫女

「ほら燈火も、もういいでしょう？ はやく電車に乗って移動しないと、予約の時間に間に合わなくなるんじゃない？」

はてさてどうしたものか―――と思考する内心をひた隠し、私、

久遠栞は親友であり同時に主でもある、級友の峰岸燈火に笑いかけた。

「……栞が、そう言うのなら、もういい。よくないけど、もういい」

そう言う燈火ははまだブストしていて、ふてくされている子供みたいだ。こんな燈火を峰岸の人間が目撃しようものなら、明日にでも家族会議ならぬ一族会議が開かれることになるだろう。

「――東の背景を知らない燈火にこういうのもなんなのだけれど、今回は本当に東に同情せざるを得ない。東は、悪くない。文字通り意味で彼に責はないのだけれど。」

（でも、まあ、燈火が腹を立てる気持ちも分からないじゃないんだけどね……）

わたしに「まあまあ」となだめられた燈火はブストしたまま、一人きびすを返し、駅を目指し始めた。なんだかんだで、40分くらいは時間を無駄にしている私たちである。そしてその原因はもちろん東少年ではなく、私の親友にあるのだけだ。

ある意味では、自分勝手な理由でみんなをこの場にとどめていたくせに、一人歩き出すとは何事か、なんて横暴なやつなんだと、少しだけれど、私も思わなくもない。

……思わなくもないけれど、身内びいきな性分なのか、これっぽちも腹は立たない。少なくとも、私は。

「主の躰は側近の勤めじゃないの、久遠？」

すれ違い様に、朝影が冷たい一言を放り投げて行く。

その際に、きちんと私と目を合わせていくあたりが、朝影らしい。朝影のこういうところは評価に値すると、私も燈火も、一目置いている。

といつても、家同士の問題を友人間にまで持ち込むのはどうかと、私は思う。

だって、私はわたしで、燈火は燈火だ。燈火は確かに峰岸であるけれど、それと等しく燈火であり、私は久遠であると同時に、栞でもあるのだから。

（朝霧が峰岸と久遠にどんな印象を抱いているかなんて、この際はどうでも良いんだけどね。

さて、そっちは正常運転として、問題はこっち……）

駅を目指す友人達の最後尾を歩く私の視野には、全員の姿が収められている。

そんな私の目の前には、いつもの仲間達と、一つの『怨念』。念は、本来のカタチを忘れているらしく、可愛らしい少女の姿をまとうっており、友人の東にべつとりと憑きそい、彼の隣を歩いていた。

（没後500年は経過しているみたいね。けれど、存在圧がそれほど感じられない……となると、今の彼女は生まれたばかりというところか）

うれしそうにニコニコと笑いかけるモノを観て、私は溜息を漏らす。本当に、この世界はどうしてこれほどまでに、救いがないのかと。

一般的に、生者が住むこちら世界を私たちは「此の岸」と呼び、死者が赴く世界の方を「彼岸」と呼んでいる。

もちろん、この呼び名というのは絶対ではなく、別次元から飛来した者たちは、こちらを姉妹世界 α 、あちらを姉妹世界 β と呼んでいるようだった。

まあ、どんな呼び名にせよ、私たちの世界は対となる二つの世界から成り立っている。そして、そんな二つの世界にあって、私たちの尊厳とも言うべき魂は、両世界間をくると環を描くように、廻り続けている。

その円間の理に意味があるかどうかは、定かではない。それでもこの円環は有史以前から繰り返されていることであり、そう言った意味からは、意味なんてほとんどないのだろうと、私は思う。

――さて、そんな意味の無い魂の循環にも、当然ながら例外とも言える事象が発生する場合がある。それが、目の前の少女のカタチをとった「念」である。

これら「念」の原型は魂であり、それはこの世界に在るモノが等しく有する「生」という権利」でもある。

通常、魂は此の岸における旅路の途中で様々な傷を得て、癒しの世界である彼岸へと旅立つ。傷は、癒されなければならない。それは、どれだけ大切な傷であろうと、どれほど無価値な傷であろうと、それらの間に一切の差異は無く、漂白され、失われるべきなのである。

……そうしなければ、魂が保たないのだ。

人は、肉体的な記憶や傷に関しては、独力で優先順位の取捨選択を行い、それらを整理整頓することができる。ようは、忘却が可能なのである――物質的には。

けれど、どういうわけか、魂の忘却を独力で行うことは不可能なようだ。もし、魂に刻まれた傷が永遠に引き継がれることがあれば、いつしかそれは魂そのものを食い破り、いずれ「自身という尊厳」を地へとたたき落とすことになる……そのような事態を回避するため、死したモノは魂を清めるために、彼岸へと向かう――というのが、久遠の家の考え方であり、私はそう教わり、育てられた。

また、魂が輪廻転生により新たな肉体を得た場合、転生前の魂の傷が肉体引き継がれてしまえば、それはそれだけで決定的な障害となる。

体と、心の剥離――それが、個としての決定的な破綻を意味するのは、創造するのも容易い。

（そう、癒されなければ。魂の傷はいつまでも抱きかかえていて良いものではないし、それに、それなのに――）

魂の傷を癒せず、世界を漂い続けるモノが、目の前の少女の原型である「念」。これは本来、人の姿を取ること無く、一種の力場として存在しているのが常である。にもかかわらず、その「念」は明らかに、人としてのカタチを取り戻していた。

……正確には、目の前に少女の前型は、「念」だったということが観えるだけなのだけれど、それは裏返せば、その「念」の原型である魂の復元が、目の前の少女という現象であるということを暗示している。

（アレと東の間に、いったいどんな縁が？

いったい何が、500年の間に膿んだ傷を癒した？ それとも、

一時的に東が「念」を押さえ込んでいるだけ？）

頭をぐるぐる回る思考に、ゴールは無い。もし、白黒付けたければ、もっとアレの背景を観なければならぬのだけれど。

（これ以上の干渉は、まだ控えた方が良いわね。今は良くて、いつ「念」に戻るか分からない今、深入りはリスクが高すぎる）

色々考えた結果、私はなるべくにしなければならないという結論に、至った。

目の前の少女がなんにせよ、東がどうなるにせよ、燈火だけは守る。

それさえできれば、私は満足なんだしーと。
そう考えてー

『プルルルルルー、任海方面行きの列車がです。お乗りの際は……』

気がつけば、わたしは切符を買って電車に乗り込んでいた。
時間にすれば私が思考に浸っていた時間は十数分そこらなのだろ

うけれど、ずいぶんと考え込んでいたような気もする。

ゆつくりと、私は燈火を探した。すると当たり前と言っては当たり前だけれど、燈火はすぐに見つかり、さきほどのブスくれ顔が目に飛び込んでくる。

（まあ、燈火は大丈夫かな？ たとえ年代物の念でも、太陽を前にすれば焼き尽くされるのが関の山だし……）

私は頼もしい相方をクスリと笑い、目の前の東とモノに視線を移す。

さて、私はどうするべきかーなんて、さつき区切りがついたはずの問いを再び自身に問いかけながら、わたしは当初の目的である「占い荘」へと、着実にその身を揺らしながら、近づいて行った。

夢想歌：インターバル：遠き彼の地において、少女は想う（前書き）

高校にお留守番している由香さんのおはなし。

夢想歌：インターバル：遠き彼の地において、少女は想う

『お前は、誰だ？』

私は突然、見知らぬ少女に問いかけられた。

何の脈略も無い、その問い。

けれど、私はその意味不明な問いに対し、何の戸惑いも無く？――
―答えた。

「伊吹 由香です」

私は、答える。見知らぬ少女に、分けもかも分からないまま。

しかも、敬語で。目の前の少女は明らかに私よりも幼い容姿であるにもかかわらず、それでも自然と、わたしは彼女に敬意を払っていた。

『模範的な回答だな、伊吹 由香。確かにこの場合、貴様は伊吹由香以外の何者でもないのだろうな』

虚空に浮かぶ少女はニヤリと人の悪い笑みを浮かべ、私を見据え

る。

「では、もう一つ問う。
東利也とは、何者だ？」

？——東利也とは、何者か。
そんなこと、これまで一度も考えたことなんて無かった。なのに。

「利也は、私の大切な人です」

ただの直感でしかないその答えに、少女は笑みを濃くする。
少女の笑みに呼応するかのように、世界はその闇を濃密にし、同
時に彼女の鮮やかな銀髪が輝きを放ち始める。

「然り、だ。ならば最後にもう一つ——寿 小羽とは、何者だ？」

表情を消して問いかける少女を前に、私は答えることが？——出
来ない。

寿 小羽とは、何者か。

私は、寿小羽なんて人物は知らない。そんな名を私は全然聞いた
覚えがない。

だから、当然ながら、私の答えはただ一つ。

「分かりません

…… 分かりません

…… 分かるはずがないのに、でも……」

でも、たぶんきっと、私にとってその人は、大切な人なんだろうと思う。

この、胸を締め付けるような、この感覚が本物なら、私にとって「その娘」はかけがえのない、大切な人のはず。

「分かるはずが無くとも、分かることがある。翻つて、逆も然りだ。…… 覚えておけ、伊吹由香。近々、貴様のいい人が「災厄」を抱えて帰還する。やつが持ち帰るのは、間違いなく、「伊吹由香」にとっては災厄でしかない。

ただ、貴様と貴様の恋人の胆力次第では、「災厄」と定義されたそれは自ら「災厄」以外の選択肢を選びとるはずだ…… せいぜい、あがけ。あがき、つかみ取れ？——それが」

ポコン！

私の後頭部を襲う突然の衝撃と、違和感。

それらは突然私の目の前の幻想を霧散させ、一気に深淵にあった私の意識を上層へと引き上げていく。

「はい！？」

気がつけば、そこは見慣れた3・3の教室だった。先ほどまで私が居た漆黒の空間も、銀髪の少女も、当然ながらどこにもいない。

現在の時刻は、午前10時15分で、授業の真っ最中。

ちなみに科目は歴史で、教官は亜田部総一郎氏。

穏やかな気質と熊みたいな強面が妙にあいまって、女学生の間では結構な評判だったりするその総一郎教官が、私の前に立っていた。

そして、「おまえが居眠りとは目ずらしな、どうした？」と、心配そうに覗き込んでいる。

彼の右手には、丸められた結構な厚さの教科書が握られており、さきほどの後頭部を襲った衝撃の正体はアレだろう。

「しかも、なにか寝言で「コハネ」がどうのこうのと呟いていたが、何か夢でも観ていたのか？」

……コハネ？

ああ、小羽のことか。夢にでて来た、unknownな「女の娘」の名……？

女の娘？ あれ、娘？ 娘を、利也が連れて帰ってくる？

……寝起きなせいか、思考がまとまらない。

なんだか、「娘」という文字と利也の顔がぐるぐると頭を廻っており、気がつくと、私は自分の腹部に自らの手を押し当てていた。

そして。

「先生、わたし妊娠してるかもしれないので保健室に行ってもいいですよ?」

?——と。

なぜ、自分でもそんな結論に達したのか分からなかったけれど、気がつくと、そんなアホみたいな台詞を教官に向けて発していた。

一拍の静寂が、教室を満たす。

しかし、それも長くは続かなかった。

遠くからひびく雀のチュンチュンと言う可愛らしい声が、後の大騒音のトリガーだったように思う。

バサリと、教科書を取り落とす教官。

『いやーん!うそー!!!』と、黄色い歓声を上げる同

性の同級生。

『ぬうああああ！東、絶対殺す！！！！』——と叫ぶ異性の同級生。

なんだか、地に足がついていない感じだ。それでも確かめるためには、とりあえずは保健室へ？——言ったところで、妊娠検査薬があるわけは無いか……

私は、そんなフワフワした思考を奏でる頭を抱えながら立ち上がると、これまたフラフラと保健室に向かって歩き始めた。

後ろから、「先生、私たち伊吹さんを保健室まで連れて行くので、授業抜けます！」という声が響き、友人である清香と刹那の二人が教室を飛び出してきた。

そして、わたしは両サイドの腕を二人にガッチリとロックされたまま、保健室へ。

—————

これが、後に「想像妊娠娘ドナドナ」と銘打たれるこの事件のあらましである。

実際のところ、妊娠検査薬を「たまたま」もっていたらしい保険医の荒島教官にすぐさま調べてもらった結果、普通に陰性。

それでも、念には念をと然るべき科の病院まで連れて行ってもらい検査するも、やはり陰性——と。

結局、妊娠なんかしてませんと分かるまで、一日と掛からなかったけれど。

それでも、今回のちょっとしたドナドナ事件は多いに瀬戸高の学生を湧かせ、さらには修学旅行で京都へと旅立っている、私の恋人の利也達にまで——

夢想歌：インターバル：遠き彼の地において、少女は想う（後書き）

次回はキヨ視点でお送りします。

夢想歌：占いの館へ6：広がる波紋（前書き）

皆さん（読んでくれる人）、幽霊のこと覚えてます？

見ると、全員の携帯が震えている。どうやら、このブブブという音は俺たちの携帯の振動がハモッて奏でられているらしい。

（いったい、なんだ？ てか、これ全部メールじゃん）

音を止めるために開いた携帯が示すのは、「メール着信」の旨。こうして携帯を開いている間も、次々とメールが届き続けている。着信と見間違うくらいに届き続ける、メールの波。

それらの差出人は、多種多様だった。先輩後輩男子女子、そこには一切の関連性はなく、また、中に教官の名すらあった。もちろん、彼らもボーダレスなのか、旅行引率者だけでなく、学園で教鞭をとっているはずの者の名前すら見受けられる。

（いったい、なんなんだよ……）

正直、この場で返信するのは気が引ける。これが一人のときならどれだけ携帯をいじくろうと苦はないのだが、今仲間との行動中の上、目の前に峰岸様が不機嫌まっしぐらな様子で鎮座されているものだから、よりいっそう無理という話だ……と思ったら、皆力チ力チやりだした。

というわけで、俺もそれに乗っかりメールを開く。すると――

八城先輩からのメール

件名：もう清水は過ぎたか？

お前の友人、東利也が我々の女神「伊吹 由香」を孕ませた。
もし清水観光がまだなら、出来る限りやつをお立ち台から突き落
としてほしい。

あそこは飛び降りても致死率20%以下の、自殺の難所だ。殺せ
ずとも、十二分に元はとれるはず。

田島先輩からのメール

件名：東に太陽が沈んだ。

「伊吹 由香」が「東」に沈んだ。これは真理から外れた事象であ
り、正されなければならない。

よって、そこに居る平民上がりの逆上せ上がりをシバキ倒せ。必要なら、家名を上げて援護する。

小森先輩からのメール

件名：オメデただー（ハハハ）フフ

なんと、由香ちゃんが妊娠してました！たぶんだけど、Y遺伝子提供者は、東くんだと思われ！

なんか、こっちはもうどんちゃん騒ぎだよ！日頃はみんな家のことあるから羽目はずさないけど、これはもう駄目だね！！！！

男子の中には。◦（、□、◦）◦◦。してるバカも居るし、極端なのだと、早退したアホも居るよ（、へ、；）

いやゝもう、これは祭りだよ、祭り！三ヶ月先の瀬戸祭なんか、どうでもよくなるくらいの祭りさね！！！！

というわけで、旦那に直で話し聞いてみて（*^・^*）

今の心境とか、どっちがせまったのとか、もう、いやーーーーー
|!!!!!!!!!!!!|

（うん？）

思わず、メールの意味が分からず、思考がフリーズする。いや、
思考がフリーズしたから、意味が分からんのか？

ん？ これって、ニワトリが先か卵が先かってはなしか？

おそろおそろ、周りを見渡す。

当然ながら、峰岸と東は何が何やらさっぱりという顔でお互い顔を
合わせ手首をひねっているが、他のメンツは顔が引きつっている
者から嫌らしエミを浮かべているもの、爆笑しているもの、頭を抱

えているものなど、様々なリアクションを撮りながら携帯を見つめていた。

俺ももう一度、メール一覧に目を落とす。

飛び込んでくる件名は大概「殺せ」とか、「ご懐妊!」とか、なんとか、まあ、とりあえず似たようなものばかりで要するに。

男子：東を殺せ（できるだけ悲惨に）

女子：東くんに話聞いて！（できるだけ吐かせろ）

の、2択の内容しかない―――気がする。

「ちょっと、今携帯なった人、私と一緒に来てくれる？携帯もない人は駄目だからね、燈火」

まだ頭がくらくらする中、いち早く動いたのはやはり久遠だった。彼女は、あらかじめ峰岸に釘を刺すと、全員にその聖母のような表情を振りまきながら、「ちょっと顔かせや、コラ。一言でもしゃべったら殺す」というニュアンスの視線をぶつけるという、荒技をやつてのけていた。

……もちろん、全員がそれに従う。

ここで対応を間違うと、今日の自由行動がオジャンになるだけでなく、もう一人の太陽を爆発させることになりかねないのだから。

（東、おまえ、なにやってんだよ……まあ、付き合ってるんだから別に良いけどさ？

いや、よくないけど。てかあとから絶対殺すけど。でも、それでも、なんで……今日？）

すでに、アハハウフフな女子禁制の男子の夢フラグはへし折られており、死亡フラグが一本。

一本だけ、天に向かってまっすぐ伸びており、要は、それが誰の死亡フラグかということだ。

（死ぬのが東だけなら良いが、絶対俺らもやばいからな……たのむぜ、久遠。

すべては、お前の采配にかかっている！！！！）

ガシャンと、立て付けの悪い音を響かせながら、列車を接続していたドアを久遠が開く。

さながら、俺にはどうしてもそのドアが、天国への扉には見えず、これぞまさに背水の陣なんだろうなとか考えつつ、接続されたとなりの列車に乗り込んだのだった。

夢想歌：占いの館へ6：広がる波紋（後書き）

次回は、視点が小羽に戻ります。

さて、彼女はこの状況で何をするのでしょうかね。

夢想歌：32番目の物語り：Tips 大切なモノ（前書き）

占いの館に入る前にやっとなかないとなど。

夢想歌：32番目の物語り：Tips 大切なモノ

夢想歌：32番目の物語り：Tips 大切なモノ

世界録：伝承：在りもしないモノを「見る」

大切なものは目には見えないと、キツネは王子に語った——けれど。

そんなのは当たり前の話だと、私は思う。

なぜなら大切なものなんて、この世界には一つも——在りはしないのだから。

世界録：反証：見えないモノが「在る」意味を知る。

大切なものは、目には見えない——というのは、一つの言い回しに過ぎない。

……重要なのは、見えないものが「在る」と「知る」ことだ。

人の視野の限界は、その者の観世界の果てと同義。当然その最果ての先を見ることなど出来ないし、感じることも不可能だ……けれども。

だからと言って、人が自身の内側をすべて見通せるかと言えば、そうでもない。

むしろ、自身の内の方にこそ、問題が在るのだろう。

—— 見えないということとは、「存在しない」とイコールではない。同時に、見えているものが「そのままのカタチで存在している」という考えも、ある意味では間違いなのだろう。

だからこそ我々は知り、探さねばならない。

我々の視野の外あるかもしれないを。おそらく、それは「大切なモノ」と呼ぶにふさわしい価値を秘めているはずなのだから。

言語1：固有世界

知性が観測する世界のこと。又は、個人の意識と言い換えることが出来る。

さて、これを決定づける因子がいくつかある。

1．知性が有する（観測者の有する）情報のレセプターの種類と数。
（観世界）

2・知性が存在する内包世界の秩序。（個人を捨て去った内包世界からの影響）

3・根源。（アザソトホースにより無から観測された有という概念：これが、世界同士の境界敷を形成する大前提となっている）

言語2：内包世界

固有世界は”個有の意識”が非常に高密度で存在している。そのため、多世界からの影響を受けにくく、また、他の世界に対しても同様に干渉しにくい。

内包世界は”個人の意識”を無限拡散させ、多世界からの反発を最小としたもの。

このため、内包世界は他の世界と接続することも出来るし（門による接続）、固有世界という扱いにくい世界も内蔵することが出来る。

夢想歌：32番目の物語り：Tips 大切なモノ（後書き）

次こそ、小羽です。

夢想歌：占いの館へ7：不可侵

夢想歌：占いの館へ7 - 1：不可侵：寿 小羽

「いったい何なのよ、栞まで」？——と、ぼやいていたのは燈火で、「なんか、寒気がするんだけど」？——と肩を竦ませていたのは、兄さま。

二人とも、栞達が自分たちを残して行ってしまった意味がよく分からないらしい。さきほどからちらちらと電車の扉を気にしつつも、二人とも動こうとはしない。

というのも。

「あの栞は、怒らせたらダメ」？——ということ。

仲間はずれにされた最初こそ、燈火はブツブツと文句を垂れつつ、兄さまにちよつと盗み聞きしてくるように促していた。けれど、兄さまは動こうとしない。

そんな兄さまに痺れを切らせた燈火が途中で席を立とうとしたのだけれど、それを兄さまが静止した。その一言が、これ。

「顔が笑ってるのに、目が笑ってなかった」？——と。

私も、ほぼ真正面から栞を見ていたので、あの異質さは理解できる。

燈火は栞の隣で、一番窓側。つまり、窓際に座っているため彼女の表情を観ること無く済んだのだけ。

けれど、燈火は見ずに済んだ、そんな栞の表情が容易に想像できるらしく、おとなしく洪々と下様子で席に戻った。そのとき、兄さまが手を引いて燈火を引き止めたこともあって、燈火は今、もともと栞が座っていた席で、兄さまの目の前に座っている。だから、「席に戻った」という表現が適切かどうかは分からないけれど……？

（ん？）

兄さまが、こちらをじつと見つめていた。

ふと、視線を兄さまに合わせる。すると、兄さまは私に合わせていた視線を少しずつ扉の方へずらしつつ、「扉をすり抜けられたらな」と誰とも成しに呟いた。

間髪入れずに燈火が、「問題はそこじゃなくて栞でしょ、バカ」と返している。

けれど、わたしはそんな兄さまのおバカな言葉に隠された、真の意味をくみ上げることが出来る。つまりは？――

（わたしに、盗み聞きしてこいって兄さまは言ってるんだろうな……）

私は兄さま以外の人には見えないみたいだし、壁だってすり抜けられる。だったら、扉の向こうに消えた誰にも気取られずに近づくことだって、可能だ。けれど、盗み聞きって言うのは、あんまり気が進まない。

（でも、兄さまのお役に立てるのなら……）

心のどこかで、「兄さまは盗み聞きなんてしない」と声がした。けれど、私はそれに目をつむり、兄さまを再び見る。自然と交わる視線に私はうなずくと、すっと席を立つ。

そして、そのままトトトと、通路をひとつ走り。

そして、扉の取手には手を掛けず、そのまま扉をすり抜けようとして――

私は、昼間にもかかわらず、星の輝きを幻視することになった。

信じられないくらいの、激痛とともに。

――

夢想歌：占いの館へ7-2：不可侵：東 利也

ゴッ！

という無駄にリアルな音が耳に届くと同時に、俺は驚きのあまりに飲んでいた熱々のコーヒーを鼻から吹き出していた。

「あんた、何してんの！？」

目の前で峰岸が若干引きつつ、ティッシュをこちらに差し出す。

俺はそんな心優しい峰岸に「ありがとう」と礼を言い、未だひりひりする鼻を？んだ。

もし、さきほど図り間違っただけで峰岸にコーヒーをぶちまけていたら、今この席は地獄絵図と化していたに違いない。さすが、俺。

根性で口を閉じて鼻から出したのは、やっぱり間違いじゃなかった……にしても。

（あいつ、大丈夫か？）

視界では、扉の前で顔を押さえたまましゃがみ込んだ幽霊が、プルプル震えていていた。先ほどは思わず腰を浮かして助けに行こうとしてしまったが、それもコーヒー同様、なんとか我慢した。

（あいつ、電車の扉はすり抜けられないのか？

……いや、この車両に乗り込むとき、あいつは間違いなく「あの扉」をすり抜けて入ってきた。だから、あれ？　ならなんで、いや、あいつは「何」にぶつかっただんだ？）

痛みが治まったのか、プルプル幽霊はフラフラと立ち上がると、涙目で扉をペタペタとさわり始めた。そして今度は扉の取手に手をかけると、おもいっきり、がちゃがちゃとやりだした。

その音は、確かな質感を持って、車内に響く。

「ん？　なに、この音？」

峰岸が後ろを振り替えり、幽霊が悪戦苦闘しながら開こうとしている扉を見つめる。不思議そうに首を傾げているところから察するに、幽霊は見えていないらしい。

「子供がいたずらしてんじゃないのか？」

すかさず、俺は2割本当8割嘘の配分で、峰岸に言葉をかけた。子供が何かしているのは間違いないが、悪戯なんかじゃない。

扉の前で必死に頑張ってくれているあいつには悪いが、ここはこゝうでも言っておかないと、話がややっこしくなる。

俺は、もういっぱいコーヒーをすすると、キヨたちの出来るだけ早い帰還を祈り、目を閉じた。

夢想歌：占いの館へ7 - 2：不可侵：朝影 里奈

尋常じゃないくらいにガタガタ揺れている扉に背をもたれさせ、
栞は「夜になるまで、メールの件は二人に内緒ね？」と、全員を脅
迫していた。

……峰岸にしる久遠にしる、自分たちの意見が必ず通ると思っ
ている節を隠そうともしないのが、本当に腹が立つ。

私たちは今、電車の正に連結部分に身を寄せ合って話している。
なにもこんなところで話さなくてもと思うのだけど、栞がガンと
して「此处」が良いと言い張ったのだ。

「久遠、ドアがさっきからガタガタ揺れてるいるみたいだけれど？」

ある意味では直接的に、ドアから離れると久遠に忠告した。しか
し、彼女はもうすぐ話は終わるからと、いつこつにドアからはなれ
る気配を見せない。

「じゃあ、みんなそれでお願いね？」

キヨ君以外は、特に普通にしていれば良いだけだから、なんてことは無いでしょう？」

これからのそれぞれの役回りを二三確認した後、久遠は、その身を起こした。

それと同時に、「壊れる！」というような、ものすごい勢いで電車の連結ドアが開いた。

それこそ、バシン！という音すらした？——と思う。それだといふのに、久遠の背後には、だれもいない。

……久遠がドアを開けたにしては、不自然な開き方だった。しかし？——

「ねえ、久遠さん。

今日明日は不可思議なことが少しだけ起きるかもしれないけれど、目をつむってくれない？

そうすると、私も楽なんだけど」

……静かな笑みで、久遠が警告する。だから、私は——

「あら、不思議なことに目をつむるなら、これから向かう場所は「そう言う場所」でしょう？ だったら、行き先を変更しなければなら
ないんじゃないくて？」

それだけを返し、久遠の脇をすり抜ける。
たった、それだけ。

たったそれだけが、朝霧である私が久遠に出来る、精一杯の意地の張り方だった。

夢想歌：占いの館にて1：人の理と、世界の理1：東 利也&寿 小羽

夢想歌：占いの館にて1：人の理と、世界の理：東 利也&寿 小羽

はつきり言つて、頭がついていけない。

もう、いったい何が自分をそこまで追い込んだのかもわからない位に、頭の中は疑問符で埋め尽くされていた。

「なあ東、携帯貸してみ？」

「――隣の電車で栞たちとコソコソと密談を交わしていたキヨは帰ってくるなり、俺にそう言った。

親友の挙動不振に若干疑念を持ちながらも、俺は、キヨに携帯を渡した――瞬間に、携帯をまっ二つにへし折られるというなぜの苦行……意味が分からない。

久々ガチの喧嘩に発展しそうになったが、栞に「あなたのためだと、今晚にでも分かるから」と、振り上げた拳と怒りの方もふわりと止められてしまった。

まだ、驚いたことはある。

「あ、そうだ。今日のプランニングはキヨ君達に任せるつもりだったけど、予定変更です。今日は一日中、私お勧めの場所で遊ぶこと

になったから、よろしくね、東君、燈火。

駅を二つ向こう今からいくところは東君にとっては面白くないかもしれないけれど、為にはなるところ。ちなみに燈火は女の子だから絶対に興味あると思うな―」

フフフと悪戯っぱく笑ちらを見つめる栞の目を見てイラツとしたのは、ここだけの話。

なんとか風向きを変えようと、「せっかくの旅行なのだからいろいろ行きたいところがあるだろ、皆（主に男性陣）―」と味方してくれそうなメンツを見渡すが、全員が全員、「よし、それ」と、裏で合わせてきたとは思えないシンクロ率で首を縦に振っていた……で。

それで、だよ。

それで、俺たちは今、「占いの館」の前に立っている。

そこは、俺たちが目指した都心部への駅を二つ前で降り、さらにタクシーで30分ほどひた走ることだどり着けるほどの、辺境。

占いの館の周囲には、昭和のにおいがしみこんでいそうな家々が

立ち並んでおり、それ以外のもので、特に目に付きそうなものは無い。つまり、俺たちは完璧にただのど田舎のただの住宅街にいた。

「いや、伊藤に紀一、おまけにキヨさんよ。おまえら、占いか好きだったのか？」

友人にさりげなく撤退を促してみた。けれどやつらは一言、「おまえらのせいで、人が集まるところいけねえんだよ」とドスを効かせた声でにらむばかり。

「……いや、「おめえら」って、俺と峰岸か？」

俺たちは「……少なくとも、俺は何も人目を避けなければならぬような後ろ暗いことはしていない。ならば、峰岸のほうでなんかあったのことに、俺が巻き込まれたか？」

さりげなく、峰岸を盗み見た。当初こそ、「占い師？ そんなの、私は琴だけで十分だし」とぼやいていた彼女だが、今はなんだかんだで目をきらきら輝かせ、古びれたぼろアパート兼占いの館を見上げていた。

「……館じゃなくて、どうみたって、アパートだった。風にはためく布団には生活臭が漂い、開け放たれた窓からはさわや

かなロッククラシックが鳴り響いている。

「じゃあ、みんなよく聞いて。占いの館について、説明するから」

手をパンパンと鳴らし、栞は始めますよと俺たちを集めた。
そして明かされる、占いの館のシステム。それは――

「館には、ドアが12戸あるでしょう？一階に6戸と、二階に6戸。
各人、好きなところに入ってもらって大丈夫です。各部屋には、
個性豊かな占い師の先生がいらっしゃるので、後はご随意に。料金
設定は基本的に1時間で5万円と東君には割高なものですが、そこ
は大丈夫。ここは私、久遠の家とつながりがあるところだから、皆
を無料で占ってくれます！だから、お金のことは気にせずに！」

「………とういわけで、俺たちは無償で占ってもらえるらしい。

それはそれでいいのだが、俺に占ってほしいことなんて――

「いや、あるか。てか、あるよ」

俺は自分の横の、誰もいないはずの空間に視線を落とす。
そこには、興味深げにアパートを見つめる幼女の霊が一人。

占いなんて、日ごろはぜんぜん信じない俺だけでも、このアパートのどこかにこいつをどうにかしてくれる占い師がいるかもしれないと思うと、自然と胸が高鳴った。

「なら、俺はあそこの部屋で」

占いに現を抜かしていると悟られないように、一步步ずつ気だるげに前へ。

数秒後、俺は一階の右端からドアの前に立っていた。そして、そのドアノブに手をかけようとして――

「あ、東君は指定で二階の左から一番目の部屋に入っ。そうしないと、料金発生しちゃうから」

……もちろん俺は二階に上がり、左端のドアを開けたよ。だって、他の連中はともかく万単位の金なんて、払えないからな。なんで、俺だけ指定されてんだ？

まあ、いいけど。だって、どこに入ればいいのかあるわけでもない

し。

ドアを、開いた。

そして、俺は踏み入った。

それは、おんぼろアパートの玄関先のこと。

それは、占い師が集うという館のこと。

そしてそれは、その筋では有名な、異世界の魔法使いが住まうという、伝説の領域の軒先のこと。

「いらっしやい、お二人さん！異世界の魔術師、シロの部屋にようこそ！

どんな悩みでも、この私がずばり解決して差し上げます！」

それが最初の一言だった。

元気いっぱいには笑う異世界の魔術師が――俺と幼女の霊に對してくれた言葉は、暖かくてどこか懐かしい、そんな青空にも似た歓迎の言葉だった。

「あなた、こいつのことが見えるんですか!？」

おもわず、俺は叫んでいた。ひよつとすると、他の部屋の連中にも聞こえていたかもしれない。

「う、うん、見えるけど……とりあえず、中入ったら?」

若干引き気味に答える占い師。

彼女は、「どうぞこちらへ、荷物はその辺に置いてね」と、再度、おれでなく幼女に笑いかけた……なんか、気まずい。

「失礼します」

俺は一言断ると、玄関をあがった。

部屋の内装は、テレビであるような占いの館っぽいそれだが、かなり狭い。外から見た感じで狭いことは分かっていたが、何に使うのか見当もつかないモノで部屋は溢れ帰っていた。

俺自身は少し薄気味悪さを感じたが、幼女の方はそうでもないらしい。目をキラキラ輝かせながら、部屋あの中をきよるきよると見渡していた。

俺はそんな幼女に「下手にその辺のもんに触るなよ」と言いつけたあと、占い師の前に座った。

すると、なぜか幼女も俺の隣の席に座り、「今日は兄さまがお世話になります」と占い師に頭を下げた――いや、なんか言いにくいことあるけど、ここは我慢だ。

「初めまして、クライアントさん。わたしは、シロ。気軽にシロって読んでください。」

さて、それでは本題に入りましょうか。今日はどんなご用件で？」

占い師は、任せといて！」と少女に微笑みながら、俺に向き直る。

自然と、俺と占い師は真正面から向き合うカタチになるのだが、なにか、釈然としない。おそらく、占い師の容姿に原因があるのだろうけれど。

（　なんとなく幼く見えるとうか、俺より年下にしか見えないけれど、まあ、本物なんだろうな……こいつのこと、見えてるし）

なんとなく、いざとなつてみると目の前の占い師がたより無さげに見えてしまう。

……それでも、言うしかあるまい。少なくともこの人は、幼女を見て驚かないくらいには、おれより「こついうモノ」に耐性があるのだろうから。

「えええつと、実は……」

実は、俺に取り付いているこの霊を除霊してほしいんですー
ーと、言ってみた。

てか、言っちゃったよ。ちょっと、自分で言っただけで恥ずかしかった。

「ん？ 霊って、その娘のこと？」

占い師は不思議そうな顔をして、「どうして？」と、逆に俺に問いかけて来た。

どうして、幼女を除霊する必要があるのかと。

「いや、なんでって、それは――」

それは――と、今日ここに至るまでの経緯を占い師――もとい、シロさんに細かく話した。こいつが俺のところに来てから、ろくなことがないと。

たしかに、コイツのせいで死にかけたとか、そういった命の危険を感じたことはないけれど（目潰しがフラッシュバックしたが、黙殺した）、それでも明らかにひどいことばかりが昨日から今日に掛けて、この身に降り掛かっていることを。

「それに、こいつは俺を兄貴と勘違いしてるみたいなんです。でも実際のところ、俺には妹なんか居ませんし、ましてやコイツとも初対面です。なんか、こいつの兄貴に俺が似てるとかですかね？」

こいつが、俺のことを兄さまと呼ぶのは……」

正真、おれは幼女に兄さまと呼ばれるたび、胸が締め付けられるように痛む。

こいつは、俺を心底兄貴と勘違いしてるみたいで、その、「兄さま」にむけられた笑顔を受け取る他人の俺としては、幼女の笑顔が純粹無垢であればある程、痛々しくて見ていられないのだ。

「それに、そのなんていうんですか……こいつがこういう風に成仏できてないってことは、おかしいことじゃないですか？

だったら、それはただしてやらなきゃとも思っんです」――と。

俺は、一通りの希望をシロに述べた。

要点としては、幼女を俺から引き離してほしいこと。そして出来ることなら、こいつの未練（？）をはらして成仏させてやってほしいこと。三十分ほど話して俺がシロに伝えられたことは、たったそれだけだった。

しかし、それだけの内容でも、叶えられれば十分である

「うーん、あなたの言いたいことは分かりますけど、それはなんとなく身勝手な「願い」ではないでしょうか。

すくなくとも、私はその娘がβに自ら転移したいと思ってるようには見えないんですけど……」

幼女をチラ見して、シロは俺に申し訳なさそうに反論する。

俺もシロにつられて幼女を見たが、「わたしは成仏しなくてけっこうです」と言わんばかりの態度で俺をキョトンと見つめていた。

「えーっと、たしかに俺はコイツから直接成仏したいって聞いたわけじゃないんですけど……というより、βってなんですか？

転移って、何の話ですか？ 俺は、こいつをその……天国というか何というか、もしそう言う所があればそこに連れて行ってあげたいって言うだけなんですけど……」

なんか、話がかみ合っていない気がする。なんか、根本的な所で認識のズレがあるような感覚だ。

そしてそれは、気のせいではなかったらしい。

「ああ、あなた、霊能者じゃないんですね？　あなたは、「魔術師」としての私を頼って来たんじゃないくて、占い師としての私を頼って……」

多少乾いた笑みを浮かべるシロさん。小声で「ヤバい」と言っているのは無視しておくとして、とにかく俺はこういうことには耐性が全く無く、取り付かれたって何もしてやれないとの旨を、シロに今一度告げた。

「えーっと、つまり、あなたは……」

その後、シロさんから問われる、十は軽く超える質問に答えることになった。

時間からすれば、モノの数分だったように思う。

シロさんは、その綺麗な頭をぼりぼりとかきながら、少し話は長

くなりますがよろしいですかと、姿勢を改めて話を切り出した。

それに対し、俺も今一度きちんとシロさんと向き直り、「時間はいくらでも」と、答えた。

「まず、あなたに言うっておかなければならぬことは、天国は存在しないということです。しかし、それは「あの世」を否定するわけでもありません」

シロさんが言うには、俺たちが「あの世」とか「彼岸」とか呼んでいる、死者が向かう世界はここと変わらない、ある意味では普通の世界らしい。ただし、こことまったく同じかというと、そうでもないとのこと。

「この世界と、死後の世界は、二つで一つの世界なの。この世界ではもう一つを「あの世」とか「彼岸」と呼ぶみたいだけれど、私たちのように世界が複数存在することを知るものたちの多くは、ここを姉妹世界 α 、あちらを姉妹世界 β とよんでいるわ」

キュツキュウーと、シロさんはマジックでキャンパスノートに二つの円を描くと、それぞれに α と β の文字を書き込んだ。そして、二つの円をアーチ型の線で結び、話を続ける。

「二つの世界が「一つ」と呼ばれる所以は、この両世界に置いてのみ見られる、精神物質……分かりやすく言うと、「魂の循環」に端を発するわ」

魂は α で物語を刻まれて、 β で漂白される。それは人という存在

にのみ当てはまることで、他の生物ではなり得ないことらしい。

「具体的言えば、 α では赤ちゃんとして生まれてきた人間は、こちらの世界では年老いて行く。そして、それにとまって人間は色々な傷を魂に刻み込んで行くの。それは、良いもの悪いものの区別は無しにしてね」

シロさんは、 α と描かれた円の下に、「記憶」とか「感情」とかを書き込むと、それらを囲む大きな円を描き、そのくぐりに「傷」と名を打った。

「それで、この傷ついた魂は——命が尽きたときに、対岸の β に転移するの。イメージとしては、テレポートに近いわ。

命が尽きたその瞬間の状態で、全く別の世界に転移させられるの」

そして、こちらで傷ついた魂は、その β という世界で第二の生を

歩んで行くらしい。今度は、真っ白になるために。

α という世界で得た色々な者を、こちらの流れに逆行しながら、「若返る」ことで全てを忘れ去って行くのだという。

「で、 β での寿命つてのは、こちらの生後三ヶ月くらいかな？

そのくらいのサイズに魂が達すると、自然と α に存在が再び転移する。もちろん、向こうにも、「到達点」に至るまでに「死」んでしまふ魂もあるのだけれど、それはその時点で α に転移することになる」

そして、再び α に戻って来た魂は、そこから新たな傷を抱えるために、第三の人生を歩みだすというのだ。

「まあ、これがざっくりとした、「あの世」と「この世」の仕組みかな？

もちろん、この仕組みは姉妹世界に置いて見られるもので、他の世

界ではあり得ないことよ。ふつつ、魂は肉体からはなれたら、その存在を維持できない。命が尽きた時点で、消滅する――いえ、世界に還るっていうのが正解かな？

……つまり、私が言いたいことは、この姉妹世界は非常に安定して魂が存在できる不思議な世界って言うこと。基本的に魂が安定してるのは、二つの世界を誘導的に巡っているからって今のところ言われているけれど、その説を否定するような、例外もある」

そういつと、シロさんは少女に視線を移した。そして、続ける。

「姉妹世界の「円環の理」よりはずれてなお、存在し続けるモノ――それが「念」であり、「霊」。
それは、その娘の前身であり、現在よ」

夢想歌・占いの館にて2・人の理と、世界の理3・東 利也&寿 小羽（前書き）

小羽が生まれた経緯です。

夢想歌：占いの館にて2：人の理と、世界の理3：東 利也&寿 小羽

夢想歌：占いの館にて2：人の理と、世界の理3：東 利也&寿
小羽

魔法使いさんに、兄さまに出会う前のこと——つまり、私が「眠っていた」ときのことを、こと細かく尋ねられた。

「眠っていた時のことは、よく覚えてません。私は、命を落としてから再びお兄様に出会うまで、とても深いところでまどろんでいました」

眠っていた時のことは、よく思い出せない。けれど、私が死ぬ直前までの？——現在から数えるとだいたい500年くらい前のことは、はっきりと思い出せる。それはつまりは、兄さまが今の兄さまでなく、かつての弥生兄さまだった頃のことだ。

……自然と、うれしくなって笑みがこぼれる。

お母様のこと、お父様のこと、そして、兄さまのこと。あるいは、お父様に使える城の者たちのことから、民のことまで。

それに、なつかしい風土の光景。

太陽のまぶしさに、風の心地よさ。ときには、冬の厳しさと、その時に感じる人の温かさ——なんてものまで、私は魔法使いさんにお話していた。

「冬になると、私は兄さまの布団に潜り込んで、婆やに連れ戻されていました。でも、ときどき寒さの厳しい夜は、兄さまが婆やを説得して、一緒に朝まで側に置いてくださったりしたこともありました」

色々な話を魔法使いさんにしたけれど、途中でお兄様に止められてしまった。なんでも、「おまえ、しゃべりすぎ……」とのこと。

それでも、蒼色の魔法使いさんは、「そう、わかったわ。ありがとうね」と笑いかけてくれた。

「あなたがどういう状況に置かれているかということは、ある程度把握しました。まとめると、あなたは生前の記憶はあっても、死後——それこそ、昨日お兄さんに再会するまでの「記憶」があやふやなんですネ？」

……わたしは、コクンとうなずいた。でも、認めたくない。

私はただ眠っていただけで、決して、記憶喪失なんてものじゃないんだから。

そんな私の心情に気づいたのか、魔法使いさんはばつが悪そうに

顔を背けると、再び視線をお兄様に移した。

「さきほどもお話ししましたように、魂がこの世界に存在するには、主に二つの形態のどちらかをとる必要があります。一つが「念」であり、もう一つが「霊」。これらの違いは、魔学では被膜の有無——ひいては、固有世界の顕現と定義されます」

魔法使いさんはキャンパスノートに「念」と「霊」と書くと、「霊」の文字だけを丸で囲み、その丸に矢印で被膜と付け加えた。

「この「霊」の実例が、小羽さんです。見ての通り、彼女は東さんと寸分変わらない存在であり、独自の意識を有しています。それは、彼女という存在が、外界と自身を隔てる境界を有する存在だからです。そして、私たち魔術師は、この独自の意識が構成する、被膜で包まれた境界内部の世界のことを、「固有世界」と呼んでいます」

魔法使いさんは「霊」を囲む被膜の下に「意識」「固有世界」と書き込むと、ペン先を「念」へと移した。

「この「霊」に対して、「念」とは一種の力場のようなもので、それ自身は固有の意識のようなものを持ちません。その点に置いて、「念」と「霊」は決定的に異なるモノです」

「念」の下には、「念」力場「感情の増強」と書き足された。そして、魔法使いさんは視線を私に向ける。すこしだけ、哀れみが見て取れる表情の、魔法使いさんだ。

「人は死後、基本的に彼岸に転移して、魂の漂白を受けます。しかし、この理から外れたものは基本的に「念」と成り、世界を漂い続けることになります」

そうして生まれた「念」は、その「念」が死ぬ直前に抱いた感情を増強するような力場として、世界に固定されることになるらしい。このような「念」が存在する力場は、生きている人にとってプラスに働くようならパワースポットと呼ばれ、逆の場合は？――。

「多くの場合、「念」となった者は半永久的にそのままです。それらは、周りのモノの感情を増幅しながら、また逆に、自身のその力を増幅させられながら、雪だるまのように、「ある特定の感情を増幅する場」という性質を膨れ上がらせて行きます」

それが、「円間の理」から外れた者たちの、定め。自身が誰かも分からず、また、他の誰かに認めてもらえることも無く――そんな空虚な永遠としてそんざいするのが、念。

「一度「念」と成ってしまえば、よほどのことが無い限り、それらが意識を取り戻すことはありません。でも、例外もある。それが、小羽ちゃん、あなたよ」

微笑む魔法使いさんはとてもうれしそうに、でもどこか寂し気に、私を見つめていた。

「霧散した存在にカタチを与える秘技？——この世界に置いては、主に霊視という異能者のみが用いることの出来る力なのだけれど、これを用いれば、「念」に「霊」というカタチを与えることが出来るんです」

世界の「今と過去」を見渡す、異能の力——霊視。

この能力者は、「念」の過去を見通し、それらを読み取り利用することで、「念」に擬似的なカタチを「思い出させる」ことができるらしい。

「今回、「念」として眠り続けていた小羽さんに「小羽」というカタチを再構築させたのも、同じ力です。けれど、それは霊視というような特別な力が干渉したわけではありません。

強いて言うなら、絆——この広い世界と永きときの果てに、円

環の漂白を超えて尚途切れることの無かった「縁」という概念でも
って、東さん。

あなたは、小羽さんを取り戻したんです。幾千幾万の幸運と、い
つかの世界で東さん自身が魂に刻み込んだ何かしらの信念のもとに
——ね

夢想歌：占いの館にて2：人の理と、世界の理3：東 利也&寿 小羽（後書き

次は、サブタイトルの内容。

人の理と、世界の理です。

二つは似ているようで、どうか違う。そんな、おはなしです。

夢想歌・占いの館にて3・人の理と、世界の理4・東 利也&寿 小羽（前書き）

前回のあとがきまで到達できず……

夢想歌：占いの館にて3：人の理と、世界の理4：東 利也&寿 小羽

夢想歌：占いの館にて3：人の理と、世界の理4：東 利也&寿
小羽

アカシックレコード：円環の始まり

不完全を、繰り返してみよう？——そうすれば、きっと分かる。

人の根源が悪か、善か。

たったそれだけのことを確かめるために、繰り返してみよう。

それでたどり着ける結末なんて、たとえ絶望以外の何者でもないとしても、信じることは、罪ではないはず。

——人は、善悪を超えて、きっと、幸せになれる。

たったそれだけのことを証明するために、私たちは一つを二つに分けたのだから。

夢想歌：占いの館にて3：人の理と、世界の理4：東 利也&寿
小羽

「いや、意味分かんないです。俺がこいつを取り戻したとかなんと

か、そもそも、俺はこいつのことなんて全然知りません。だから、縁がどうこう言われても……

「

気がつく、口ごもりながらも俺はシロさんに反論していた。

シロさんがなんと言おうと、縁がどうかこうか言われても、俺と幼女は初対面だ。親戚の誰かかとも考えはしたけれど、たぶん、それはない。

なんだか、風向きがヤバい気がする。最初っからそうだった、シロさんは幼女を成仏させる気がないように思える。それに、なんとなくだが、俺と幼女が一緒にいることを望んですらいるようにも

……

「縁とは、個人の意識に依存しているモノではありません。

それらは私たちの意識から独立したところにあり、そして私たちと、私たち以外の誰かを結びつける……」

シロさんのブルーサファイアの瞳が、俺を見据える。

？——いや、俺じゃない。俺と、こいつとの間にある何かを、シロさんは、必死に見ようとしていた。

「正直な話を申し上げますが、私は靈視能力者ではありません。そのため、占い師として、東さん達の背景を読み取り、そこから未来へ向けてアドバイスをできるような立場にはありません……ですが、東さんと小羽さんが過去に兄妹であったことがあるか否か」についての真偽を、私は確かめるすべは持ち合わせていないんです。……ですが、私は世界移動魔法を先攻に学んできた魔術師です。そのために、世界の成り立ちや、世界の在り方については、多少なりとも知識と知恵があります……そして、そんな私には、一本のパスがハッキリと見えます。

それは、「東さんという世界」と「小羽さんという世界」を繋いでいる、細いながらも強力なパスです。そして、そのパスにおいては明らかに、東さんの世界から小羽さんの世界への情報流入も確認できます」

俺からこいつに、情報が流れ込んでいる……？
それはいつたい、どういうことだ？

「さて、ここで小羽さんに質問です。これは、何でしょうか？」

そう言っ、シロさんは電子レンジを指差した。最初はキョトンとしていた幼女だが、戸惑いながらも「電子レンジ」ですと答える。

「では、もう一つ質問です。これは、一体なんでしょうか？」

そう言っ、シロさんは見たこともないような赤色灯の綺麗な

石を取り出した……なんだ、あれ。宝石か何かだろうか。

「うゝえゝ？ 綺麗な石？」

首を傾げながらも、幼女は答える……なんとなく頭の悪い答え方だが、俺自身まともに答えられる自信が無いので、黙っておく。

「たしかに、綺麗な石ですよ。でも、不正解です。

正しくは、賢者の石とよばれるもので――魔術が込められた石と言った方が分かりやすいでしょうか？」

言うや否や、シロさんは「起動」と呟いた。すると、どうしたところか。

目の前の石がいきなり淡い光を帯び始め、そしていきなり、シロさんが消失した。

「！？」

あまりの驚きに、声がでない……人が、消えた？
今の魔法？

……たしかに、今の魔法なら、確かに凄い。本当に、俺は本物にであっただって、小躍りしても良いかとすら思える……いやでも、このタイミングで消えられても、俺困るんだけど！？

「ちなみ、この賢者の石に込められている魔術は「空間転移の法」。ご覧の通り、使いこなせばレポートが可能となります」

いきなり、後ろに人の気配。俺は思わずテーブルを押しのかながら、後ずさった。はたして、そこにはシロさんがいた。

手には、三本のコココーラ。彼女は「なんか熱いし、飲み物でも思っ^て外の自販機で買^ってきました」と笑うと、俺と幼女にそれぞれ手渡した……ちなみに幼女に手渡されたコーラは、受け止められるはずだった手をすり抜け、床へ。

「あ……」

思わずと言った感じで、幼女が声を漏らした。

シロさんも、「あ、ゴメン」と、床に落ちたコーラを拾う。

そして、自分が持っていた無事な方なコーラを幼女の前に置くと、「気持ちだけでも受け取ってください」と言っ^て、席に着いた。

「さて、今ので分か^っていただけたかと思いますが、小羽さんは「電子レンジ」を識別できても、「賢者の石」を魔法の石と見破ることとは出来ませんでした。

……小羽さんのお話が正しければ、今の小羽さんには500年前分の記憶が欠落しているはず^{です}。それは、記憶喪失とかそういうもののレベルではなく、記憶がそもそも形成されていないのですから、思い出すことは絶対に不可能なんです。

なぜなら小羽さんは、この500年間で「念」として存在していたのですから——」

意識が拡散し、固有の意識を持たない、力場。

死後500年の間、そのような状態にあった幼女は、この世界のあらゆる出来事を認識できないでいた——らしい。

なのに、こいつは。

「それにも関わらず、小羽さんは「電子レンジ」を識別することが出来ました。もちろん、この機器は500年前のこの世界には存在しなかったものです。ですが、「賢者の石」を見破るとは出来なかった。つまり、私が言いたいことは——」

「俺の中の情報がこいつに流れ込んでいて、こいつは「それ」をもとに物事を判断しているということですか？

俺は電子レンジは知っていて、それを識別することが出来る。けれど、賢者の石なんてものは今の今まで知らなかった？——だからこいつも俺同様に、電子レンジを見分けられても、賢者の石を識別することは出来なかった」

シロさんを遮って言葉を割り込ませた俺に、シロさんは嫌な顔せずゆっくりとうなずくと、話を続けた。

「現在、小羽さんの存在圧は赤ちゃんのそれと同じレベルです。そのため、外界のあらゆる情報に対して開放的であり、また、無防備——であることが本来のカタチなのですが、赤ちゃんと違って小羽さんはある程度の世界のカタチを有しているため、それほど開かれた存在ではありません。

ですが、新たに生まれ直した小羽さんの世界は、その内圧がほとんど無いに等しい状態です。そのため、小羽さんは固有の世界を持つていても、中身がほとんどつまっておらず、さらに——そこに持ってきて、東さんとの間にパスが出来ている。

そのため、現在は東さんから「ほぼ一方的」に小羽さんに情報が流れるといった現象が起きてきます」

夢想歌・占いの館にて3・人の理と、世界の理4・東 利也&寿 小羽（後書き）

次回こそは！

夢想歌：占いの館にて4：人の理と、世界の理5：東 利也&寿 小羽

夢想歌：占いの館にて4：人の理と、世界の理5：東 利也&寿
小羽

「私の中に、兄さまが流れ込んでいる……？」

胸に手を当てて、私はその流れを感じようとした。

……でも、特に何か特別なものを感じるわけでもない。

「東さんと小羽さんの間で結ばれているその縁は、相当特殊なものです。通常、縁で結ばれた固有世界同士であっても、その間で情報交換がなされることは、まずありません。

なぜなら、それを成すということは、無条件に近いカタチで、他者の意識を自身の内面に受け入れるということと同義だからです」

「でも、現に私と兄さまの間では、あり得ないことが起っているんですよ？

それは、私が空っぽだから……？」

私は空っぽだから、拒むも受け入れるも無い。そもそも、そういったことは自分があってこそそのもの。

だから、空っぽの私には兄さまを拒むことも、また逆に、兄さまに渡せるようなものも無い——。だから、私と兄さまは繋がって

いられる。こんなふうに、空っぽの私だから……

わたしの落ち込んだ吐息が魔法使いさんに聞こえたのかもしれない。

弱音を吐いた私を励ますように、魔法使いさんは「そんなの、大したことじゃない！」と笑いかけてくれた。そして？――

「小羽さんは、普通の人に比べて少しだけスタートがずれているだけです。けれど、それもおそらく、是正されます。

……私の見立てですと、ここ数日中には小羽さんの世界は成熟し、今でこそ成り立っているお兄さんからの情報流入も？――終息を迎えます。でもそれは、小羽さんとお兄さんの間の繋がりがなくなるわけではありません。

現在まで続いている縁は変わらず存在し続け、そして、今とは別の、新たな縁を紡いで行くことだって出来る」

魔法使いさんは、「これからだ」と言う。

そんな風に、言ってくれる？――でも。

「ちょっと待って下さい。シロさんの話を聞いていると、どうして

も矛盾しているように感じます。だって、こいつは「円環の理」から外れてしまっているんですよね？だから、こんな風に此処に取り残されてしまっている。

……それは、「通常の流れ」から外れたことなんですよ？だったら、正さないと。それが、こいつのために？——」

こいつのためにも、こいつは俺の傍ではなく、然るべきところに行くべきだと——そう、進言しようとしたのだが、途中で止められてしまった。

幼女に、袖を引かれることによって。

シロさんには、厳しい目で睨まれることによって——俺は、そこから先を言うことが出来なかった。

「たしかに、小羽さんは輪廻の環から外れた存在です。しかし、小羽さんは確かに此処に存在している……それもまた、事実です。

……おそらく人の世は、小羽さんの存在を認めないでしょう。なぜなら人の大半は「円環の理」に従う存在だからです。

死者は蘇らず、送られるべきもの。

生者と死者が交わるのは禁忌であり、もしそれがなされることがあれば、それを望んだものたちは何らかのペナルティを受ける——よくある物語の設定ですね」

シロさんは、それは当然の理屈だと、再度念を押した。

たしかに、当然なのだと。死者は世界を渡り癒され、再びこの世界の地を踏むべきなのだ。

けれど。

「それでも、小羽さんは此処にいる。此処に在り、そして、東さん？——あなたと再会を果たした——500年という時を超えてね。

これは誰にも覆せない事実であり、それはつまり、世界の真理です。

「円環の理」とは別の秩序により肯定された、「厳然たる事象」の一つです。

故に、小羽さんはβに渡る必要は在りません。世界は、小羽さんの存在を肯定しているのですから……けれどもし、小羽さんが向こうへ渡りたいとおっしゃるなら、私はお手伝いできます。

私は霊視能力者では在りませんが、幸いにも、世界移動の魔術師です。この世界の秩序に乗っ取った正規の方法以外の転移術でなければ、お送りすることも可能です——どう、されますか？」

夢想歌：占いの館にて5：理の狭間：東 利也&寿 小羽（前書き）

占いの館、東と小羽グループ終了です。

夢想歌：占いの館にて5：理の狭間：東 利也&寿 小羽

夢想歌：占いの館にて5：理の狭間：東 利也&寿 小羽

gold gate：正しき選択

世界に存在する事象の多くは、相反する二つの側面を持つ。

ゆえに、それらは善と悪、または「正誤」という概念で人に認識されることが常である。

- - -それが、人の理。

二つのものを、正しいか間違いであるか。

あるいは、善か悪という枠に押し込めようとする理こそが、人という名の、世界の秩序。

私は、想う。

本来、世界に存在しないはずの善と悪を生み出す存在が我々ならば。

――人は、決して正しき選択をすることは出来はしない。
故にこそ、選択の果てに後悔するのだ――過ちを犯したと。

けれど、私は想う。

間違っても、いいはずだと。

正しくなくてもいいと。

私は、「間違いだけではない」選択を成せば、それで十分だと。
だから、私は選んだ。

いや、信じたのだ。

いつの日か、青い鳥はその翼で――間違いだけではない選択の果
てに、幸せになると。

「わたしは、兄さまと一緒にいたいです!」

魔法使いさんは、言ってくれた。
私という存在は、世界に認められていると。

たとえ、人の世に受け入れられなくとも、少なくとも、私を包むこの世界は、私を拒絶したりなんかしないと。

「お、ま、え、な……………」

兄さまが、ため息に混じりに私を見下ろしていた。
たぶんというか、絶対というか、兄様は私を成仏させたいと思ってるみたい。
でも。

「兄様は、一緒にいて良いと言ってくださいました！
迷惑をかけなければ、一緒にいてもいいと！」

「うつ」と、痛いところを疲れたとばかりに兄様が頬を引きつらせた。
さすがに数時間前の約束を反故にするのは、気が引けるみたいだ。

「私は此処にいてもいいなら、何処にもいきたくない！
兄様の側にいたい！だって、やっと・・・・・・・・・・」

尻すぼみになって、肝心なところを兄様に伝えられない。

今度こそ幸せになれると。

かつての世界で私たちの幸せを奪った「アノオンナ」が存在しないこの世界なら、今度こそ幸せになれる・・・・と。

恐る恐る、兄様の顔を見上げた。そこから読み取れるのは、困惑。
・・・・・・・・私だって、私みたいな存在は在っていいはずがない
と理解している。でも、一緒にいたい。

「でも、俺は・・・・」

・・・・拒絶されると、思った。
でも。

「間違いだけでは、ないはずですよ」

兄様をさえぎったのは、魔法使いさんだった。

先ほど落としたコーラを手でくると回しながら、魔法使いさんは「間違いだけじゃない」と、兄様を叱るように見つめていた。

「正しくはないかもしれない。いえ、小羽さんがこちらに残るという選択は、限りなく間違いに近い選択でしょう。でも、間違いだけだとは思いません。たとえば、間違いだらけであっても、間違いだけということは、ないはずです」

限りなく、間違いに近い選択――でも、間違いだけではない、そんな、選択。

「たとえ小羽さんに向こうに送るという選択が正しいとしても、私は、それが絶対的に正しい選択だとは思えません」

どこか間違いを秘めた、限りなく正しい選択――結局は、その程度のものだと思います。ですから、わたしは「後悔しない選択」をあなたたちに選んでいただきたい。

正しさで選ぶのではなく、後悔しない選択を。どんなことがあっても、その選択の結果を受け止めれるように」

……兄様は、うなだれていた。

ついで頭をかき、「女ってみんなこうなんか？」とつぶやいた後。

「……俺は、霊能力者でもなければ、魔術師でもありません。こいつのこちらについては、たぶん俺はあなたよりも遥かに何も知らない。」

ですから、俺の判断でこいつのことを決めるのは、確かに、おかしいことですよ。……わかりました。」

わかりましたから、俺はどうすればいいんですか？」

「……兄様？」

あまりの突然の承諾に、思わずキョトンとしてしまった。

下から見上げる兄様の顔は、先ほどまでとは打って変わって、引き締まっている。まるで、昔の兄様が今の兄様に乗り移ったみたい。

「今回のことで、俺はあとから豪い目に会う気もする。そういう意味では間違った判断とも思っけれど、でも、お前をこの場で無理やり成仏させるのは、それよりも間違っているとも思う。」

……仮に俺が、お前のことをシロさんに頼んでやってもらったとして、で、まあお前は知らないだろうけど、そういうことを心の底から嫌ってるやつが身近にいてな……

そんなことしたって「あいつ」に知られたら、それこそお前を連れ戻しに俺をあの手まで飛ばすようなやつが、おれの近くにいますだよ……」

兄様は、「あいつがお前のこと見えたら、「義妹」が出来たとか
いつて喜びそうだな」……と乾いた笑みを零し。次いで、「いろ
いろぶっ飛んでるからな」とため息を漏らした。

「兄様！」

トホホと力なく笑う兄様の首筋に、私はうれしくなって飛びつく。
その瞬間「ゲッ」て兄様が漏らしたけれど、それはそれ。思いつき
り頬ずりをして、甘えてみる。

兄様は「やめろ」とか「熱い」と言いつつ私を押しわけようとす
けれど、そうはいかない。にいさまは、良いつてくれたんだか
ら。

一緒にいていいって言ってくれたんだから、このぐらい近くで側に
いてもいいはずなんだから！

「いやいや、丸く収まって良かったですよ。
これにて、一件落着ですかねー」

いやー、ホント良かった……とつぶやく魔法使いさんは、一仕事
終えた開放感からか、「のど」が乾いた様子。
何気ない動作で、持っていたコーラのプルタブに指をかけると、「
いや、私も一服」とつぶやき、思いつきり缶を開け放った。

「「「あ」」」

「あ」の後に続くのは、フシャアアアア！という、コーラ
の噴出す音。なにぶん、魔法使いさんのコーラはさっき思いつきり
床とゴツチンコしたやつで、その上魔法使いさんが無駄にくるくる
回して遊んでいたものでもあって、つまりは容赦なく……

「おふる、沸かすね」

容赦なく私たちにコーラは襲い掛かり、兄様は占いの館で、お風
呂に入ることになった。（もちろん、私は無事でした）

夢想歌：占いの館にて5：理の狭間：東 利也&寿 小羽（後書き）

次回は、視点が瀬戸さんに移ります。

題名は、

夢想歌：占いの館にて1：未来視と、世界の終わり：瀬戸神流

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり1：瀬戸神流（前書き）

東くんは東くんで大変ですが、
瀬戸さんは瀬戸さんで大変です。

彼女の場合は、世界の命運を任せられていますから。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり1：瀬戸神流

- - - - -

持たざることを嘆く者は、時の果てに至ろうとも、満たされることはない。

なぜなら、持ち得ぬモノを望むが故に生きる

――その在り方そのものが、

人というモノなのだから。

――どこにもある希望より 抜粹――

――

この学園を築こうと思ったきっかけかい？

……ヒーローのためだよ。

世界という世界のことごとくを救っては歩き、次へと渡るもの――
――そんな存在のために、私はこの学園を創り上げた。

見ての通り即席で歴史もない機関だが、ないよりはマシだろう。
この程度のことしか出来ずに恥ずかしい限りだが、これが私の全
力だ。

……君には、ヒーローを探す手伝いをしてもらいたい。
時間が、ないんだ。おそらく、この世界は半世紀も保てば良い方
だと、私は思っている。

だから、君にお願いするんだ。わたしは、この機関を維持するの
で精一杯だろうから。

……ヒーローを……我々の救い手を、探し出してほしい。

私たちの大切なモノすべてが泡となり、消えてしまう前にね……

……成功者と、少女の約束……こうして、
私は世界の滅びを知った……

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり1：瀬戸神流（後書き）

次回

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり2：瀬戸神流です。

瀬戸さん視点で、完璧空気だった「学園」の存在をお話しします。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり2：瀬戸神流（前書き）

学園創設の背景です。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり2：瀬戸神流

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり2：瀬戸神流

「ヒーローの所在ねえ……」

お茶を入れながら、「未来視の竹山さん」は、「ふふふ」と笑った。

彼女の見た目は、それこそ占い師！って感じのおばあさん。

けれど、彼女のまとう雰囲気はどこか安心できるものがあり、例えるなら故郷の潮風に似ていると思う。

「ヒーローを探し出して、どうするの？」

問いかけてくる竹山さんに、ホワホワと湯気が立つお茶を差し出された。

正直、まだまだ熱いこの季節には冷たい麦茶か、アイステイが良いんだけどーーと思ったことは、口には出さない。

「探し出して、世界を救ってもらいます。」

……わたしの友人の話では、この世界はあと50年も保たないらしいですよ。だから、探さないと。世界の終わりを救ってくれる、

そんな正義の味方を探し出して、滅びを回避しないと——っていう話です」

自分でも電波全開の話だよな—と思う。

アニメとかでよくある設定だけど、現実ではちょっとない。

現在の世界情勢は、過去のものと比較してかなり安定しており、世界が滅びる要素なんて、今のところ、どこにも無い。

……でも、人によっては今の世界を「安定」とは表現せずに「衰退」って言っちゃう人もいるかもしれないけど、それはそれ。

「そのための、瀬戸高校だったかしら。

その、あなたが通っている高校というのは……？」

竹山さんの問いに、私は短く「先ほどお話した通りです」と、答えた。

それが、私たちの学び舎が設立された、本当の理由です——と。

今でこそ名門として知られる我が「瀬戸家」だが、それこそ十数年前くらいのご時世では、ただの土地持ちというだけの家柄だった。税金ばかりかつ喰らう固定資産。はつきりいつて、土地なんてものは利用できなければ金食い虫以外の何者でもない。事実、私が7歳かそこらのころには一度、すべての土地を売り払うって案もあったくらいだ。

（でもそんなとき、あの人が家にきたんだよね……）

さて、利用できないような土地をどうやって売りさばこうかと、家の者たちが冴えもしない頭を一所懸命ひねっていたときのことだ。

ある一人の男が、突然現れた。

それこそ、何の兆候も無く。それこそ、アポの電話の一本も無く。

それこそ、玄関のインターホンすら押さずに、その男はすかずかと我が家に上が

り込み（さすがに靴は脱いでいた）、テーブルを囲んでウンウンうなっている家族親戚に向かって、こう、言ったのだ。

『土地を、譲っていただきたい』

……あとは、話がトントン拍子に進んだ。

かつては利用価値が一切無いとされた我が家の土地は、今や首都東京に並ぶ程の都市へと成長し、「学園首都」なんて、もじられることもある。

そう、学園首都と。

利用価値の無い寂れた土地は、今や世界有数の学園都市として、機能していた。

創立者は、「成功者」。バカみたいな名前だけど、彼を知る者はすべからく、彼をそう呼んだ。
もちろん、ほんとの名前は別にあるはずだけど、彼を知る者はすべからく、彼を「成功者」と呼んだのだ。

彼が起立する事業はほとんどすべてが、成功。

本を書けばたちまちミリオンセラーだし、ピアノを弾けば、その筋のプロが嫉妬の末に自殺未遂をやらかすほどの腕前。

彼がスピーチと称して口を開くときには、何千億という単位の金動くのが常であるとされているし、実際、動く。

つまりは、成功者だ。

失敗を知らず、成功のみを築き上げるの者——そんな男が、学園を創設した。

たった一言の、言葉を添えて。

『これからの私は、次世代の若者を育てることに専念したいと思う。できることなら、私の命が尽きる前に、後継者を育て上げたい』

後継者を、育て上げる——果たして、誰の、後継者？

……世界は、震撼した。まさか、ありえない？——という感じだ。まさか、あの「成功者」が、自身の後継者を育て上げるために学園を築き上げるなどと、そんなこと、あり得るはずが無いと。

しかし、実際のところ彼は一年も起たないうちに学園都市を完成させてしまった。最初に出来たのは大学で、次が高校だったように思える……。中学校は、あっただけ？

まあ何にせよ、彼は学園という名の都市を創った。

そして、集めたのだ。世界に名を馳せる、ありとあらゆる家系血筋の、担い手となる若者達を——一力所に。いや、一力所とゆうことは無いか……

彼は学園を、世界中につくった。その一つが瀬戸校というだけで、アメリカにはアメリカの、アフガンにはアフガンの学園が存在する。

そして、そんな学園には、様々なバックグラウンドを持つ人間が集まった。それは教鞭をとる教師もそうだったし、教育を受ける学生もそう。

教師はそれほどでもないが、学生という学生はすべからず、皆が皆、何かしらの家柄という歴史を背負った者たちばかりだった。

彼らの入学目的は、主に二つ。

一つが、成功者の後継者として莫大な遺産を相続する権利を勝ち得ること。

二つ目が、学園にあつまる世界中の良家とコネクションを作り、生かすこと。

いずれの学生も、入学動機はどちらか二つに分かれる。たぶん、98%くらいは、そうだと思う。だからこそ、だろうか。

学園が設立されて4、5年もすると、ある噂が一人歩きし始めた。それは、「成功者は後継者を育てる気はなく、ただ単に世界の名家を自分のもとに集めたかっただけなのではないのか」？——と。

そして、さらに数年の月日が流れ、その噂は真実として、皆の意識に定着した。

事実、成功者自身はほとんど学生と関わらず、相変わらずの生活を送っているのだ。もし、後継者を本気で探しているのなら、多少なりとも学園に顔を出すなり、もしくは卒業生と接触するなりしても良いはず。しかし、その要な事実は一切無いとされている。

（それもそのはず……なんだけどね。
だって、後継者候補は、入学時に選定済みなんだから……）

成功者は、学生と会おうとは思わない。後継者を捜そうとは思わないのではなく、合おうとしないのだ。なぜなら、そう——学園に入学する、「歴史」をもつ者はすべからくヒーローとして不適切だと、成功者は考えているのだから。

（何も持っていないからこそ、ヒーローは全てを守る。たとえ、多くの者達が無価値と切って捨てるようなモノが失われそうになっても、命をかけて、そんな無価値な何かを、救い手は守り抜こうとする？——たとえば、世界とか。

世界とか、人とか。

それは、在るのが当たり前すぎて、ただ「在る」というだけでは価値を見いだせない、そんな何かですら、ヒーローは全身全霊をかけて、守り抜こうとする）

ヒーローは、持たざるものでなければならない。そう考えた成功者は、名家が集う学園に、ある制度をつくった。それが、特別招待枠。規定人数は最大で、年間5名。彼らは、年間あたりに必要となる100000万という巨額の授業料を免除される、文字通り、特別な枠組みの存在だ。

そして、この枠組みが適応される人物には、ある一定の条件がある。それは——「孤児」であること。そして、成功者との「直接面接」において直に「合格」を言い渡されること——だ。

……この特別枠にて入学した者は、十数年という学園の歴史の中で、たったの4人。そして、現在私たちの瀬戸校には、その4人中の2人が在学している。

一人が、私の友人である東利也。
そして、もう一人が伊吹 由香。

一部の学生（特に人を見る目の無いバカ）は、彼らのことを「成り上がり」だとか「平民」だとか表して見下す。
そして、見下しはしないにしても、大半の者は、「成功者が「教育機関」としての学園の体面を取り繕うために用意した、見せかけの入学生」と考え、一線をおいて接している。

そして。

そして、ほんの一握りの人間——学園の創設に関わった「瀬戸」や、世界でもトップクラスに入る「峰岸」のような背景をもつ者達
は、ある事実を胸に、彼らに接している。それは——

「彼らこそが、ヒーローの原石。
少なくとも、あの人が直に選り抜いた、未来の守り手」

自分たちは——「彼らのため」に、集められた。
歴史という背景を背負い同時に力を持つ我らは、「持たざるヒーロー」のために集められた。

来るべき日に、ヒーローの力となる、ただ、それだけのために——
私たちは、集められたのだ。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり2：瀬戸神流（後書き）

次回は、ヒーローは存在するか、です。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり3：瀬戸神流（前書き）

世界の終末を救うのは、誰でしょうか。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり3：瀬戸神流

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり3：瀬戸神流

ヒーローになりたいんだろ？なら、なればいい。

救いを望んでいる世界なんて、そこかしこにある。

……要は、そいつらを直視する気概があるかどうかだよ。

歴史上ヒーローとよばれた者たちはすべからず、そういった世界と向き合い、そして、戦ったんだ。

それぞれが救いたいと願った、それぞれの最大の敵である？——
世界とね。

ヒーローの条件より

抜粋

「というわけで、ヒーローの居場所を教えてください。
それさえ分かれば、あとは拉致監禁でもなんでもして、学園に連れて行きますから」

そう意気込む私を前に、竹山さんは「たくましい娘ね」と笑っていた。

自分で言うのもなんだけど、人を拉致監禁するのは、逞しさとはまた別物な気がする。

「依頼内容は理解したわ。それで、ヒーローの場所よね。えっと、ちよつと待ってね……」

そう言つて、机の下からiPadを取り出した竹山さんは、google mapでいきなり検索を開始した。タンタンタンとパネルをタッチする音が室内に響き、そしてものの数秒後には？――

「ここにヒーローがいるから、あとは御隨に」

ストリートビューで映し出されているのは、ヒーローの自宅（？）。表札には岩城の名字が見え、その下には春香、哲生、霞と、おそろく……？
いや、まてまて。

「最近の占いって、こんな感じなんですか？ なにか水晶的なやつとか、あとはその……世界がそもそも滅びるのかとか、なんとか……そういった感じに進めても良いのでは？」

確かに私はヒーローを探しているけど、こんなにあっさり見つかったら困る。それに、世界を救ってもらって一言で言っても（言ったのは私だけど）、何を持ってして「救い」とするか、そういう細かいところを詰めて行かないと、後々不味いことになる。そんな気がする。

だから、軽い気持ちで世界の滅びに関して尋ねてみたんだけど。

「世界が滅びるのは、6年後よ。
あなた、知らなかったの？」

……ん？ 世界が滅びるのは6年後？
今、竹山さんは、6年後つに？——え？

「この世界は今から数えてだいたい6年後に、消えてなくなるのよ。文字通り、消滅ね。この時空間そのものが、消失するの」

えー？ なんか、私が思ってたより、事が深刻そうじゃない？
時空の消滅？ なんて、そんなことが？

「理由は分からないわ。けれど、6年から先の「未来が無い」ことは確かよ。

嘘だと思っなら、久遠の娘にでも視てもらいなさい。あの娘は未来を「くみ取る」ことは出来なくても、「ただ視る」ことは出来るはずだから——6年後の世界が「存在しているかどうか」くらいはわかるはず」

……この人は。

「本物よ。私は、正真正銘の、霊視能力者。それも、この業界でも稀な「未来視」を行える、数少ない異能の一人よ。

……私の意図する「世界の救い」は、この世界の「維持」。あなたが、ふざけ半分で探しているヒーローを、私は本気で探しているの。そして、なんとかここまでこぎ着けた」

ふと、視線が竹山さんとぶつかる。

そして、此処に来て、私は初めて竹山さんの目を直視した。

彼女は、白内障で濁りきった、死んだ魚を思い起こさせる目で、私を覗き込んでいた。あれでは、視力なんてほとんど失われている

だろう――

「ヒーローへの仲介をお願いできるかしら？　もちろん、断わるなんて連れないこと言わないでね？　先が無いのは、あなたも私も同じなのだから」

「今」を映さない瞳で「未来」を映す魔女は、優しく笑った。
そして、私は直感した。一人、見つけたと。

ヒーローを一人、探し当てたのだと？――わたしは、漠然とした
感覚で、そう、「確信」した。

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり3：瀬戸神流（後書き）

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり4：収束点：瀬戸神流

この物語では、東クンはヒーローではありません（汗）
彼がヒーローになるには、まだ、「この物語」を別のモノとして紡ぐ必要があるからです……

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり4：真名励起：瀬戸神流

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり4：真名励起：

瀬戸神流

「私があなたに求めることは、主に二つ。一つが、学園上空に開いているワームホールの使用許可を取り付けることよ——もちろん、私のね」

本気でヒーローを捜す、本物のヒーロー。彼女は朝食を注文するように、学園の機密事項の申請を求めた。さすがの私も、胆が冷える。

「えーっと、ワームホールとは一体なんのことでしょうか？
そんな物騒なものが学校の上空にあるなんて、わたし聞いたこともな——」

白濁した眼球が、私を見据える。はつきり言つて、逃げ出したい。この人、要求が半端ない。実際問題として、こういう話はそれこそ、あの人がらでばって来なければならぬレベルだと思う。

「ワームホールの名は、ゲート012。南雲は——あなた達が成功者と呼ぶ彼は少なくとも、そう呼んでいるみたいね。」

……ゲート名は聞いたことが無くても、学園上空に異世界への扉

が存在することは知っているはずでしょう?」

トントンとパネルを叩き、ここにあるはずなのと、竹山さんは再度念を押した。ここに、異世界へと繋がるゲートがあるのだと。

さらには、「無いとは言わせない」と、無言のプレッシャーを追加で畳み掛けてくる。

「……ゲートの使用に関しては、私の一存では決められません。一応、打診はしてみますが、期待はしないで下さい」

私の心が折れるのは、案外早かった。だって、怖いんだもん。

それに、この人が久遠と同じ穴の貉なら、隠し事したって、無駄も無駄だし。

ここにきて、既に私は諦めムード全開だ。

私は客なはずなのに、さきほどから注文されまくってるこの状況にキレても良いかなー?と想いもするけれど、たぶんダメ。

というより、絶対ダメ。

「久遠の娘に未来視をさせれば、簡単に話は通るわ。頑張ってね。

……さて、後はあなたの依頼対象でもあるヒーローについてだけけれど、これに関して私が分かることは、彼の住所くらいなの。

だから後は、あなたに任せっきりになるのだけれど——」

つらつらと依頼内容を告げる占い師を前に、わたしは「はあ、は

あ、はあ」と、別に興奮しているわけではなく、ただたんに「はあ、はあ、はあ」と相づちをあわせていた。

疑問に思うことなんて、それこそ無数にあるけれど、深くは考えない。これが、殿上人と接する際に、凡人が基礎として身につけておかなければならない技能其の一なのだ。

……ところで。

「あのー、お話の途中ちよっとスイマセン。さっきご紹介いただいたヒーロー候補さんなんですけど、えっとー霞さんでしたっけ？」

この人はこの人で良いんですけど、ウチのヒーローカップルはどうなんですか？一応あの二人は、あの人的にヒーロー候補のはずなんですけど」

ヒーローつながりで思い出した、二人の顔。

どちらも私の友人で、ヒーロー候補のはずーーなのだが、此処に私が来てから一度たりとも、二人の名を竹山さんは口にしていなかった。

彼らがヒーロー足り得るなら、少しぐらい話題上つても良さそうなはずなのにと、そう考えた私の思考を見透かすように、竹山さんは言葉を紡いだ。

紡いで、彼女は最後に、わたしにこう言ったのだ。

「彼らはヒーローの原石ですらないわ。彼らには世界を救う力どころか、たった一つの「想い」を救い出す力すら——でも、そうね。たしかに、今の彼らがそうだとしても、あの娘も含めて彼らが「今回のこと」を乗り切ることができたなら、あるいは。

万が一の可能性の一つとして、「彼」はヒーローの座へと至るでしょうね」

夢想歌：占いの館にて2：未来視と、世界の終わり4：真名励起：瀬戸神流

次回は、

夢想歌：汝の名を問う1：東利也&寿小羽――です。

占いの館を、出ます。

夢想歌：汝の名を問う1：東利也&寿小羽

夢想歌：汝の名を問う1：東利也&寿小羽

gold gate - 真名励起

本質的に静的な存在である「名」は、「動」を基礎とする世界を記述することが出来ない。

これは覆し様のない真理である。

だがしかし、翻って名とは、動的存在の「世界」を部分的に切り取り、その世界を静止、果てには、保存することさえ可能とする術でもある。

これは逆説的に、名とは静的なもの——つまりは確かに「これ」と定義されるものではなく、あくまでも、切り取られる世界によって「意味を付加される」存在であるとも言える。

それが、言霊の理。

これは魔法魔術、あるいは、真名によりもたらされる、真名励起という現象の根源となる理である。

占い師ではなく魔術師——つまりは、インチキ占い師のシロさんにコーラをぶっかけられて小一時間後、俺とチビ助は占いの館の扉を開き、そして、外に出た。

時間帯としては、夕暮れ時だ。昼間はまだまだ暑いものの、この時間たいにもなれば、ひんやりとした風が頬をなでってくれる。

「あんたのその服、なに？」

それにしても、シロさんは不思議な人だった。

彼女は本当に魔術師なのだろうか？ たしかに、彼女は不思議な術で俺たちを魅了してくれたが、それでも何かが引つかかる。なんていかに、彼女は毒つけが無さ過ぎる気がするんだ。

それこそ、魔術師とか魔法使いとか聞くと、大概は気難しかったりぶっ飛んだ思考回路の持ち主を連想しそうになる。

「ねえ、何無視してんの？ 頭イカレタ？ あと、手に持ってるその袋なに？」

ファンタジー小説の読み過ぎだろうとツツコミを受けそうだが、それでも、大概のイメージってそうじゃねえ？ だって、空間とか跳

躍できるんだ。いろいろとやりたい放題なのにシロさんは。

シロさんは、「いやゝやっぱどこの世界でも生活するって大変だよね」と、どこぞの主婦みたいなこと最後らへんは口走っていた。なんでも、今あのアパートで同棲している相方の生活能力が無さ過ぎて、白さんが二人分の生活費をまかなってやっているんだとか。

「……5」

だからというかなんというか、そう、親しみやすすぎるんだ。ものすごいことが出来る人なのに、それを全然鼻にかけるようなことをしない。それどころか、その「ものすごいこと」をほんの些細なことで捉えている節すらあった。

「……4」

今回のことを通して俺は、シロさんのことが好きになった？——からというわけではないけれど、チビ助の件のアフターサービスのことも考えて、お互いの番号を交換したし「……1」。

「スマン。というか、3、2、はどこいった？」

無駄な思考は切り上げ、とりあえず頭を下げた。

目の前には、光彩が失せた瞳の峰岸。こいつ、カウントダウンを適当に切り上げて、黙秘と続ける俺にビンタをお見舞いしようとしていたらしいのだが？——

夢想歌：汝の名を問う1：東利也&寿小羽（後書き）

次回

夢想歌：汝の名を問う2：東利也&寿小羽です

夢想歌：汝の名を問う2：東利也&寿小羽

夢想歌：汝の名を問う2：東利也&寿小羽

問1：出題者・峰岸燈火

館と名のつくアパートの一室に入った友人が、部屋に入った当初とは別の服を着て出てきました。その手には、生乾きの服（入ったときの服）が握られています。

しかも、こころもち晴れ晴れとした様子です。さて、いったいアパートの一室で何があったのでしょうか？

――

解1：回答者・東利也

無実だ！俺はきちんと然るべきサービス（占い）を受けただけで、やましいことなんて一つもない！

服がぬれてるのは、最後らへんにコーラをぶっ掛けられたからだ！
↑意味不明

――
解2：回答者・神流、金森、坂石、清

有罪でしょう。彼はきちんと叱られるべきサービス（自主規制）を受けたようですが、やましいことが無いと言っています。↑反省の色無し

しかも、コーラを使った都市伝説を実行しているあたり、三ヶ月後には超修羅場が展開されると思われる……

――
解3：回答者・久遠栞

みんな、落ち着こう？

このくらいで実刑は厳しすぎるよ。だって、東君は男の子なんだから――

――
解4：回答者・朝影里奈

京都くんだりまで来て畑を開拓するなんて、さすがよね。
ああ、死ねば良いのに。

結論：判定者・峰岸燈火

執行者：東を除く男子全員（嫉妬半分殺意半分）＋瀬戸（ふざけ半分ノリ半分）

東を――殺す。

別に、理解してほしいと思っただけじゃない。

たしかに、アパートの一室に消えた男が晴れ晴れとした顔で濡れた服片手に出てくれば、誰だって妙な勘ぐりをしたくなくても仕方が無いと思う。

俺だって、それを見せつけられる立場なら、酒の肴ついでにばか騒ぎをやらかすと思う！

けれど。

「死にさせえボケが！」

「おまえ、どこまで下半身で生きてんだ！」

「ああ、うらやましい。お前みたいな　　は、死ねば良いんだ」

血走つた目で俺の胸ぐらを取り合う友人を見て、胆が冷える前に、涙があふれる。

「下半身つて、いったいなんだよ！おれがなにしたつつてんだつて、やめろつつてんだろ！調子乗り過ぎだお前ら！」

正気の沙汰じゃない友人たちの手を振りほどき、俺は二三歩バックステップで距離をとった。

ゴホゴホと息を詰まらせながら、なんとか空気を吸い込む。

『にいさま、この方達はなにをおっしゃってるんでしょうか？ふざけるにしても、ちよつと、度が過ぎる気がするのですが……』

幼女は、俺とはまた別の意味で、あいづらから距離をとった。その目には、明らかに怯えの色。まるで狂犬を前にしておびえる少女のようだ。

「だから、お前らキモ過ぎんだよ！いったいなんだ！？」

喚き返す俺。

いくらなんでも、こいつらキモ過ぎる。占いの最中に一服盛られてんじゃないかと逆に心配したくなるほどの変貌ぶりだった。

親友のキヨが、血走った目のまま、一步前へ。
そして、ゆっくりと。
ゆっくりと、ドスの利いた声で……

「キモイのはお前の方だ、東！お前、学校じゃ伊吹さんが……！」

キヨは、ドスの利いた声を尻つぼみさせつつ、そのまま地面に沈んだ。

気がつくと、キヨの真横に栞が笑顔で寄り添い、キヨの鳩尾に手を叩き込んでいた――？

「もう、みんなも冷静にね？いくら東君でも、私たちが一緒にいるのに、そんなことする分けないじゃない。それに、ここつて壁薄いから、そんなことしたらすぐわかるはずよ」

もう、キヨ君はハヤトチリさんだなー！そんなことから、こんなことになっちゃうんだよ、フフフと嗤う栞。

目が、笑ってないけどな。

「由香がどうかしのか？」

ここであいつの名前が出てくる理由がよく分からない。
そこで、おそろおそろ俺は栞に問いかけてみた。

この状態の栞にちょっかい出すのは気が引けるが、それでもここであいつの名前が出てきたことを無視できなかったんだ。

栞は、微笑んだまま。

彼女は微笑んだまま何も答えず、旅館への帰省を促したのだった。

夢想歌：汝の名を問う3：東利也&寿小羽

夢想歌：汝の名を問う3：東利也&寿小羽

なんとなく気まずい空気を引きずりながら、俺たちは電車に揺られて旅館に戻るようになった。

まあ、駅に着く頃にはなんだかんだで誤解は解けていたからそこまで気がめいるってことでもなく、最後らへんは結構和気あいあいだった気がする。

でも、それも束の間の幸せなわけで。

「東、一言で良い。「やったか」、「やっていないか」で答えろ」

旅館の前に佇むは教育指導兼学年主任のマッスルマイケル。外人のくせに日本の武芸に通じ、礼儀作法などに滅法うるさいことで有名な教官だ。

そのマイケル教官が、無表情に俺に問いかけてくる。

やったのか、やってないのかと。

「俺は……」

さすがの俺も、「やってない」と叫びたかった。

「やましいこと」は何一つやってないと、そう、言いたかったのに。

「東、ネタ上がってんだぞオラ！今頃、伊吹嬢は産婦人科だ！てめえ、シラきったら、家あげて潰すぞ！」

「東君、ここは男らしく認めなさい！もうすぐ、パパになるんだから！」

「いや、パパにはなんないんでしょ？陰性だったってよ？」

「んなことはどうでもいいいいいんだよ、梅津！問題は、やつが、あいつが、うあああああ！」

わいわいキヤイキヤイと騒ぐサルどもを教官連中がこぞって沈めようとしているが、なんてことは無い。

理性が跳んでるとしか想えないテンションで、学友達は喚き散らしていた。

「東、もう一度だけ訊く。やったのか、やってないのか、どっちだ？」

相変わらず無表情の、教官。正直、「個室での取り調べてもらうぶんには、こちらもありやすかったのに、なぜに旅館前！？」と、思わなくもない。

……思わなくもないけれど、それを今更言ったって、どうしよう

もないことだ。

要は、この事態の收拾をつけるためのデモンストレーションもかねてるんだろ？、このユチュエーションは。

俺は、ため息まじりに覚悟を決めた。
そして。

「……やりました」

言った。言っちゃった。

その結果は、黄色い歓声と絶叫の嵐。

ここにきて、修学旅行は一番の大盛り上がりを見せていた。

「東、こちらに來い。話がある」

有無を言わせない力加減で、マイケル教官は俺の肩に手をおいた。
そして、強制連行という名の隔離処置がとられる。

俺はおとなしく、その処置に従って、うなだれたまま旅館に背を向けた。

どこに連れて行かれるかなんて見当もつかないが、もう、どうでもいい。

……にしても、だ。

それにしても、昨日から今日にかけて、俺はついてな過ぎる。

昨日の幽霊に取り憑かれたことから始まり、色々あった今日の終いには、恋人の妊娠騒動。幽霊はまあ、ここでは一旦さておくとして、一体どんな経緯であいつが妊娠したのしてないのの話になったのか見当もつかない。

しかも、その才ちは結局妊娠などしていないということ……

（由香、お前何やってんの？ いったい、学校で、なにがあったわけ？）

事態の全貌が見えないまま、俺はタクシーに乘せられ、一人（＋幽霊）どこか遠くへ。

——これが、後に「孕ませ男連行の図」と語り継がれることになる、俺の黒歴史の一旦である。

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す1：峰岸燈火&久遠栞

時刻は、午後10時過ぎ。未だ冷め上がらぬ興奮に旅館が揺れ動く中、私、峰岸燈火は一人川縁を散歩していた。

時折思いついたように川辺の石を拾っては川に投げ込む。
川の水面は着水の衝撃で揺れ動き波紋を広げるも、私の心はただただ沈んだまま。

いつこうに、浮かんでくる気配がない。

「あいつ、最低。ほんつとくに、最低……」

旅館から少し離れるだけで、世界は静寂に包まれる。
世界を満たすのは虫の声と、月のアークライト。そして、チヨロチヨロと音を立てて流れる川の水音くらいだろうか。

「でも、恋人同士なら、おかしな話じゃないわよ、燈火。
むしろ、健全って言えるんじゃないかな？」

水音にまじって響くのは、誰の声か。

……そんなの、決まっている。その声は私がモノ御心ついたときから、ずっと一緒に居たのだから。

「栞、しばらく一人にしておいて言ったじゃない。
なんで、ここにいてるわけ？」

振り返ると、そこには浴衣姿の親友が幽玄に佇んでいた。主従の関係では私が主であるはずなのに、どうしてか、こういふときの栞を見ると、私は慍づかねばならないような気がしてくる。

栞は、私が先ほどやったように川原の石を無造作に放り投げた。
ドボンという音を立てて、石は沈んで行く。

「燈火は、なにも訊かないよね。
なんにも、訊かない……燈火が賢いこと、私は知ってるよ。そして、強いことも。」

私に問いただしたいことなんて、それこそいくらもあるはずなのに、でも、たぶん、燈火の中では既に答えが出てるんだろうね。そしてそれは限りなく正解に近いものなんだろうけれど」

そこまで言つて、栞は言葉を止めた。
しばし、私たちの間に沈黙が鎮座し、虫の声と川のせせらぎだけが響いていく。

でも、そんな優しい時間は幾ばくも続かない。私の相棒は、そんなに優しくはないのだ。

沈黙を始めたのが栞なら、それを破るのも、栞。彼女は、とても優しい表情と、母親を思わせる暖かい声で、こう、私に言った。

すなわち――

「由香さんはたぶん、数日内に命を落とす。

私たちが何もしなければ確実に、由香さんは彼のもとを去るわ……

…どうする、燈火？ そうなれば、きっと、太陽を焦がすあなたの太陽は――あなたのものになる」

夢想歌：汝の名を問う3：東利也&寿小羽（後書き）

次回は

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す2：峰岸燈火&久遠栞

一旦サブキャラクタートに入り直します。

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す2：峰岸燈火&久遠栞

—— gold gate：「名を呼ぶ」ということ——

ねえ、あなたは覚えてる？

初めて自分の名前を呼んでもらえた時のことを、覚えてる？

—— 私は、覚えてる。はっきりと、覚えてる。

それは、桜が舞う季節だった。

託された使命の大きさに不安を抱えながら、まだ見ぬ学園生活に期待の片鱗すら抱けなかった、あの、始まりの季節に。

「おい、峰岸！

いくら家がボンボンでも、他人をないがしろにしていってことは無いぜ」

私は初めて、「私」という名を呼んでもらえたんだと、思う。

そして、同時に初めて、心の底から喧嘩なんてできる相手を見つけたんだ。

「……あんたに呼び捨てにされる筋合いなんて無いんだけど？」

あるとき。

あの、初めて名を呼んでもらえたあの日に、私は——同じように初めて、他の誰かの名を呼べた。

名前なんて、単なる個人の識別記号でしかないと思っていた当時のバカな私は、そのとき初めて、名を呼ぶことの——

「名を呼んでもらえる」この意味を、信じていることが出来たんだと思う。

だから、私は。

だからこそ、私は——峰岸燈火という名を。引いては、私という存在を、誇りに思えるんだと思う。

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す2：峰岸燈火&久遠栞

あの占い師の巣窟で私は、宣告を受けた。

「僕の見立てでは、君の恋は決して成就することはない。なぜなら、君はすでに峰岸という真名を受け入れているからね。そして、どちらかというと、こっちが一番の問題点なんだが——非常に残念な

ことに君は、不器用だ」

占い師は、言った。私の恋は実らないと。

そして、その原因はあくまでも私という人間によるところが大き
く、「許嫁」や「家」というような存在は、些細な問題だとも。

「君が彼をモノにしたいと望むのであれば、それは「可能」だよ。
例え、「家」がその選択を許さなくとも、そんなものは大した脅威
にはならない。君には、それだけの力がある。だから、「許嫁」な
んてものはなおさらだ。

……断わっておくけど、君の許嫁は「当たり」の部類に入る好青
年だよ。彼と契りを結べば恐らく君は、幸せを手に出ることが出来
る……けれど、それは「今の君が望む幸せ」とは、別の幸せだろう
けれどね」

占い師は「可能」だと、言い切った。私は「峰岸」と戦争をして
も、勝利を手に出ることが出来ると。そして、同様に断言した。

たとえ、私は「峰岸」を手中に収めることは出来ても、それでも、
やはり私が「彼を手に出ること」は「不可能」だと。

「君は、「峰岸」ではなく、峰岸だ。そうであることに君自身が喜
びを見いだしている時点で、結果はほとんど決まっているようなも
の。もし、君が本当に彼の恋人となる権利を望むのなら、君は全力
で伊吹由香さんを排除しなければならない」

「前世からの因縁」で結ばれた二人の恋人を引き裂き、その片割れの座につく。

それさえ出来れば私は、彼を手にする事が出来る。たったそれだけの、伊吹由香という「個人」を排除するだけで、私は、彼の隣で笑うことが――

「だから、不可能なんだよ。君は、峰岸だ。「峰岸」としての君なら「可能」だったろうけれど、峰岸である君には、「不可能」だ。要は、いい具合に表と裏がひっくり返ってるのさ。もちろん、それは僕から言わせれば必然なんだけれど」

「峰岸」である私なら可能とすること。それは、峰岸である私には、不可能なこと。

「念を押しておくけれど、何も僕は、君が「家」としての「峰岸」を使わなければ、伊吹由香に勝てないと言っているわけじゃない。「峰岸」として振る舞わなければ、勝てないと言ってるんだ。そしておそらく二三日内に君は、どちらの君として振る舞うかを問われることになる―― たぶん、君の親友であり「盟友」でもある久遠嬢からね」

そして。

そして、そんな宣託を受けた数時間後に、私は問われた。

「由香さんはたぶん、数日内に命を落とす。

私たちが何もしなければ確実に、由香さんは彼のもとを去るわ……
…どうする、燈火？ そうなれば、きっと、太陽すらも焦がすあなたの太陽は——あなたのものになる」

占い師の宣託どおりに、わたしは問いかけられた。

……ここまでは、あの占い師の手のひらの中。ここから、さすがだなあと思う。

でも、あの占い師は未来視を担い手ではなかったらしい。あくま

でも、普通の霊視能力者でしかなかったみたいだ。

「……答えなんて決まってるでしょう、栞。

私は、峰岸燈火よ。あなたが、久遠栞であるように。少なくとも、今この時だけは、私たちはそう振る舞えるはず」

私は、親友である栞に問いかけられた。盟友である久遠にはなく、親友に問いかけられたのだ。

つまりは、その問いに答えなんて必要ないということ。

「……詳しく話を聞かせて。今日一日で色んなことが起き始めていたことは分かるけど、それがどういう「背景」を持っているかまでは、私じゃ分からない。

だから、力を貸して、栞。私は、友人が悲しむ顔なんて、視たくないの」

夢想歌・月の明かりの下で太陽は涙を流す2：峰岸燈火&久遠栞（後書き）

次回は

夢想歌・月の明かりの下で太陽は涙を流す3：峰岸燈火&久遠栞

です

夢想歌・interval・遠き彼の地において、少女は夢を見る

．．．どこにでもある話．．．

あるところに、とても美しい姫様と若様がおられました。

お二人は治める国こそ違えども、国という垣根を越えて、愛し合っておられました。

そんなお二人の仲の良さは、国境を隔てたほかの国々にまで広まり伝わる程だったと言われています。

だから、でしょうか。

結局のところ、お二人は結ばれることかなわず、終には人の生み出す悲しき業に飲み込まれ、失意のうちに命を絶たれたといいます。

- - - - - アカシックレコード - - - - -

信じていたのに、裏切られた。

愛していたのに、裏切られた。

姉さまは、私たちを裏切った。にいさまを、私を．．．．．裏
切り、そして、民の命を奪った。

許さない。

ゆるさない。

ゆるしてなるものか。

のろってやる。

たたってやる。

いんがはめぐる。くりかえすいのちはさいかいをはたし、ひげき

はさいりんする。

つぐなわせよう。しゅらとなり、つぐなわせよう。

われは、おちる。おちて、おちる。あのおんなとともに、ならく
のそこへとわたしたは

-
-
-
-
-
-
-

夢想歌：interval：遠き彼の地において、少女は夢を見る

「災難だったようだな、伊吹由香。
しかし、お前らしいといえば、お前らしい」

目の前には、昼間の少女。

ふわりふわりと闇の中にその身体を浮かせ、私を嗤っていた。

「あなたのせいで大変だったんです！

あんな中途半端に言われても、何も分かりません！というより、知らないよりタチが悪い！」

思い出すだけで、顔が真っ赤になる。

あしたから、どういう顔して学校に行けば良いのか分からない。

「ふん、当初の敬意はどこへやら、ずいぶんと胆が座ったみたいだな。」

母は強しということか？」

「母親じゃ、ありません！陰性でした！」

少なくとも、今の私の中には、命は宿っていない。

……将来的には、分からないけれど。

「陰性ね……そう言う問題でもない気もするが？」

あきれ顔の少女を前に、私は腹に力を入れる。
そして、問う。

「あなたは、何なんですか？

お昼の時は何となく雰囲気のにまれて一方的に答えさせられたみたい
ですけど、でも、そもそも、

人に名を尋ねる時は自分から名乗るものじゃないですか？」

ゆらりと、闇が揺れ動いた。

はつきりと輪郭がみえるわけでもないのに、少女の周りの闇が胎動
しているのが分かる。

「伊吹由香……お前は、ヒーローの存在を信じるか？」

私の問いに答えず、逆に少女は問いかけてきた。
脈絡もなにもあったもんじゃない。

「ヒーローって、なんですか？

そんなこと、今は関係ない話でしょう。そのまえに、あなたはいつ
たい……」

銀色に輝く、少女の髪色。

闇を被う淡い燐光が髪よりこぼれ落ち、闇へと墮ちる。

「なぐに、架空存在のはなしだ。神とサンタクロースと肩を並べる、
ありもしない幻想の話だよ。

……そんな存在を、お前が信じられるかということだ」

闇が、被われる。

少女の姿がゆがみ、世界が悲鳴をあげる。

少女の顔が、悲しげに歪む。

「信じられずとも良い。

そして、お前達は、同様にヒーローにならずとも良い。

お前達は、幸せを享受する権利と義務があるのだからな。

ただ、ヒーローを否定するな。だれかが清算しなければならんだ。それだけは、避けられないのだから」

最後の介入だ――その言葉が頭に響き渡った瞬間、世界に光が満ちた。

そして鳴り響く時の音。

時刻は、早朝の5時15分。

新聞配達の、バイトの時間だった。

夢想歌：汝の名を問う4：東利也&寿小羽

夢想歌：汝の名を問う4：東利也&寿小羽

「——というわけで、お前の今日の宿は、このホテルだ。監督者として、白銀先生が同行してください。問題は、起こすな。あと、明日のUSJに関しては、各先生方との協議の結果、お前の参加は認められないとあいなった。明日のお前の処遇をどうするかに関しては、これより再び先生がたと検討する。以上だ」

そういつてマイケル教官が去ったのは、三十分ほど前の話。今俺は、学友達が泊まっているホテルの川向こうに立地する、寂れたホテルに身を寄せていた。

部屋には、俺と白銀先生の二人のみ。たしか、俺と一緒に「あいっ」もこちらに来ていたはずだが、姿が見えない。どこか、散歩でもしているんだろうか？

「にしても、お前は本当に面白いな。認めるか、普通？ あの場合だよ？」

カランと、グラスの中で氷が転がる音が響く。音の主は、白銀教官。

この人は、マイケル教官がいなくなったと同時にウイスキーに手をかけ、すでもう、いい感じに出来上がっていた。

「べつに、面白くはありませんよ。」

それに、認めるしかなかったでしょう、あの場合」

俺は着に手を伸ばすと、ウィナーを選択。そのまま、口に放り込んだ。無性に、喉が渴く。

「ほら、飲め。のど湧いてるだろう？」

赤らめ顔の教師が、カクテルを進めてくる。ウイスキーと比較すればアルコール度数は控えめだろうが、いかんせん俺は未成年。

先ほどマイケル教官から釘を刺さればかりなのにも関わらず、この人はその釘を抜きに掛かっていた。

「マイケル教官との約束がありますので、遠慮させてもらいます。というより、俺が此処で飲んだのがバレたら、俺だけでなく先生もマズいんじゃないんですか？」

俺は水割り用の水をコップにつき、口に含ませた。
これだけで幾分、のどの渇きは潤せる。

「ははは、なるほどね。『マイケルとの約束』を守るために、お前は俺の酒を断わるわけか……」

くつくつくと、笑みをこらえながら、教官は一気にウイスキーを飲み干した。

俺もつられて、一気に水を飲みほす。

なんとなくしに、教官と目が合う。

すると、それまでニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべていた教官は、突然真面目な顔になり、グラスをおいた。

そして。

「お前は、なんにも間違っちゃいねえ。惚れた女を抱きたいと思うから、抱いた。ただ、それだけだろう？」

突然何を言いだすのかという話だ。

口に運んでいたピーナッツを落としそうになった。

「お前は今、他人の強い決まり事に縛られ、此処にいる。

……バカな話だ。お前が女を抱きたいと望むのは、生物としては、当然のこと。至極当たり前の生存本能として定められた、ある意味で世界の真理って言い換えたって良いかもしれねえ。

そして、それを善しとしないのは、人が生み出した理の方で、どっちがより優先されるべきかって考えたら、スケールのには世界の方じゃねえか？そう考えると、お前は何も間違っちゃいねえ……ただ、そんなバカらしいとしか言いようのない「人の理」ってもんが、今の世界を形作り、廻しているのも事実。

なあ、東。お前は、間違っちゃいねえ。だが、それだけだ。正しくはない」

白銀教官は、すぐそこを流れる川に視線を映した。俺も自然とそちらに目をやった。

もちろん、そこにあるのは川だ。川以外のものなんて、ありはしない。

「東、世界には流れがあるんだよ。それこそ川が流れるように、あるいは時が経つように、どうしようもないくらいに、世界には流れなんていうものが存在する。

——多くの人間はその流れに身を任せ、生きる。それが正解なん

だよ。限りなく正当に近い、正解だ」

だがやはり、それも完璧なもんじゃねえけどな——そういつて教官は笑った。

その笑顔はとて40を超えた男のものとは思えない程幼く、そして、痛々しかった。

「流れには、意味がある。たとえ、それがお前に幾分かの不自由をもたらすとしても、それは大きな視野でみれば、プラスになつてゐる事もある。それこそ、社会規模つてばかikai視野でみればの話だな……」

東、もうちつと視野を広く持てや」

可能である事と正しいという事は、イコールではない。

正しいということと、可能である事とは、イコールではない。

すなわち、可能であることは、可能であるからというだけでは、そこから派生するすべての物事に対する免罪符には、なりえない——そう教諭そうとしてくれる教官の向こう側に、昼間の占い師の背中を幻視したような気がした。

「お前は流れに逆らつたから、此处にいる。今日はそれだけ頭に叩き込んで、床につけや。」

べつに、反省する必要なかねえぞ。お前は、何も間違った事はしてねえんだからな。ただ、反省文はかけよ？また流れに逆らってグダグダするのは、うっとうしいだけだろ？」

話はこれでおしまいだと、教官は立ち上がった。そして、ちょっとばかり小の方をしてくるから好きにしろと。

面倒ごと起こさない自信があるなら、その辺ブラブラしてもかまわんとー。そう言い残して、教官はトイレへと向かった。

たぶん、気を使ってくれたんだろうなと思う。さすがに、あんな話をされたあとじゃ、同じ部屋にいたくない。

だから、その好意にあまえて、俺は部屋を抜け出した。特に行きたい場所もないため、なんとなく川縁に出る。

少し肌寒い夜風の中、俺は対岸の旅館に目をやった。たぶん、今は学友が大盛り上がりしているであろう、場所だ。

流れに逆らわなかったらきつと、俺も今ごろはあそこではか騒ぎをしていたに違いない。ほんの少しだけ寂しいがちらつく。

けれどー

けれど、俺は此処にいる。それが、結果だった。

視線を少しずらすと、視界に入るのは川の水面だ。
それは宇宙に浮かぶ月の光を反射して、輝いていた。
美しくユラユラと、まるで水面にもう一つの月があるように思える。

そして、その川のと真ん中。

川に浮かぶ幻想の月に立つように、あいつが――人の理から外れた一人の少女が。

静かな目で、どこか遠くを見つめるように、宇宙に浮かぶもう一つの月を、一人で。

一人で、寂し気に、見上げていた――あれも。

あれも、結果だ。あれも、結果の一つ。人の理に逆らった俺が手に入れた、一つの結果。

昼間の俺は、後悔しない選択をしたつもりだった。けれど、その実、それから数時間しか起っていないにもかかわらず俺は既に、後悔し始めていた……自分でも、情けない事になる。

夢想歌：汝の名を問う4：東利也&寿小羽（後書き）

次回は、

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す3：峰岸燈火&久遠栞
です

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す3：峰岸燈火&久遠栞

-----tips-----

川は、境界なんだよ。

あの世とこの世を隔てる、境界線――君は、そこを超える覚悟があるかい？

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す3：峰岸燈火&久遠栞

川は、あの世とこの世の境界だ。
そこを超えてしまえば、辿り着くのは対岸？？？つまりは、死者の世界。

「あれが、寿小羽の成れの果て。
体裁としては人の形を保っているようだけれど、視ての通り、押さえきれない」

境界線に立つのは、一人の少女。彼女は、川に浮かぶ月の上に立ち、宇宙を見上げていた。

そして、その少女からは絶え間なく、黒い黒煙が漏れだしては川へと沈んでいる。

「今朝から此処に帰ってくるまでのアレは、ただの霊のようにも想えた。けれど、やっぱり「名」の縛りが無い限りは、安定しないみたいね……あの黒煙が生じ始めたのは、由香さんの妊娠騒動を耳にした直後からなの。今はこの程度で済んでいるけれど、アレが由香さんの前世……知世姫を知覚した瞬間に、反転現象が生じるはず」

燈火は顔をしかめながら、念を見つめていた。私と燈火は今、主従の契りでもって、共感覚を行使している。そのため、今の燈火はかりそめながら、霊視能力者のように振る舞えるのだ。

「彼女を救う方法は？」

呪詛で縛りあげれば、彼女は今のカタチを維持できるんじゃないの？」

燈火は、「峰岸」ではなく、峰岸として答えた。

アレを「彼女」と呼んだのが、その証拠。以後は私も、アレを人として扱うことにする。

「霊視による呪詛は、「主従の関係」を「名」に込めたものなの。あの二人の場合、東君が主で、小羽ちゃんが従者になるわけね。でも、呪詛が発現した時点であの二人は「主従の関係」に固定されてしまっし、そんなの、本末転倒もいいところでしょ？」

燈火が救おうとしているのは、二人の兄妹だ。

けっして、ネクロマンサーや霊媒師の類いを生み出そうとしているわけじゃない。

「でも、今の彼女を「念」からくみ上げているのは「兄妹の縁」なんでしょう？」

それを強化するとかはできないの？」

燈火は慣れない霊視に眉を寄せながら、頭をトントン叩いている。

「霊視分与の法」でモノを視るといのは、度の合わない眼鏡をかけてい必死に何かを視ているようなもの。要は、相当な目眩と頭痛を伴う所行。

燈火は、収まるはずも無い頭痛をごまかそうと、先ほどから必死に頭をトントンしている。

「縁はあくまでも個と個を結ぶものだから、それを第三者がいじるというのは原則ムリ。

いじるも何も、触れることすら出来ないはず……

それに、問題は東君じゃなくて、由香さんとあの娘よ。「真実」

がどうであれ、あの娘は由香さんに尋常じゃない恨みを抱いている。現状が、その証拠。

もし、あの娘が由香さんを直接認識すれば、確実に念に飲まれて終わるのは目に見えてる」

目を細める、燈火。

そして。

「クリスさんの霊視結果をあの二人に伝えたら、どうなると想う？
そもそのーあの娘が念へと変貌した事の発端は、悲しいすれ
違いにあるのだし、それをあの娘が理解すれば、あの娘の恨みは…

…」

そして、燈火は。

そして燈火は、峰岸故の、希望的観測を口にした。

でも、それは。

「私がクリスさんに東君を霊視してもらうのに払った対価は、そこ
そこだった。燈火にも話したはずだけど、意図した霊視は対象と
の間に縁を生んでしまうのーその対価が、そこそこしたってこ
と……

それだけの対価を払わなければ、熟練の霊視能力者でも、あの二人
に関わりたいたとは想わないわけよ。その理由、わかるよね？」

母親は仔を産み、仔は母親により産み落とされる。故に、二人のは他をモノともしない、強力な縁により結ばれるのが常だ。

けれど、産み落とされた仔はもはやただの一個であり、母親とは独立した存在。

恨みもまた、然り。しかも、あの娘の恨みは数百年間、無秩序に他者のそれを取り込み、膨れ上がっている。

もはや、それは人がどうこうできるレベルではないのが、現実なのだ。

「ねえ、燈火。わたしは、あの娘にはあの館で消えてもらおうと考えてんだよね。私自身、クリスさんに霊視を委託するまで、あの二人をきちんと霊視はしていなかったし、でも、それでも、パツと視通常の浄化方法では、あの娘の業は抜えない――私では、あの娘を彼岸へと誘うことは不可能だと、思ってたから。

だから、異界の技術師にあの娘をどうかしてもらおうと思ってただけど……」

でも、異界の技術士はあの娘を一人の存在として認めた。そして、あの娘を抜う事を望んだ東君を説得してまで、あの娘をこの此の岸に止まらせた――予想できなかった事態ではない。

ただ、できることなら、あの館で事が済めばとは思っていた――ただ、それだけのこと。

「もはや、選択肢は二つに一つかな？

あの娘か、由香さんか。

二人が出会えば確実に悲劇は起るのだから、どちらが消えるべきか――そういう話になる」

対岸に、人影が見えた。

私たちは遠目だったが、それでもそれが誰かくらいは識別できた。

川を挟んで、対の岸に。境界を司る川の向こう側に一人、私の友人で、燈火の想い人が。

ただ一人ぽつんと、旅館の方を眺めているようだった。こちらにはまだ、気づいていない様子。

「なら、急いで。

どちらか一人しか守れないなら、答えは出てる――場所を変えましょう。

このままじゃ、あいつに気づかれる」

隠れ蓑が隠してくれるのは、死者の視界からのみ。

「まだ」生者である東君からは、私たちの姿は丸見えなわけで。

燈火はすぐさまきびすを返し、この場を後にした。もちろんわたしも、燈火に続くカタチで彼らに背を向け、歩き出す。

一歩先に行く、燈火。私の親友は気高く、優しい。それに美しく可愛くて、私の大切な人。そして意地っ張りで横暴で、すぐにすねる子供みたいな、でも、絶対に涙なんて流す事の無い私の大好きな親友の肩が、震えている。

たぶん、彼女は涙を流していないはいないだろう。でも、きっと、ココロは泣いているはず。

惚れた男は他の女に夢中だし、何の因果かその女を救う為に、その男の家族を手につけなければならぬ、この現状。相も変わらず、現実には救いが無い。

――心では泣いてるくせに、涙を流せない私の親友。彼女は、器用なのか不器用なのか。

それは結局わたしには分かりかねる事で、私に出来ることは。

（アレを、破壊する。

破壊して、燈火の日常を守り抜く――それが、私の務めであり、「願い」）

私は今日も幸せだと、思う。だって、やるべき事とやりたい事が、一致しているのだから。

だから、その過程がどうあれ、私は――

夢想歌：月の明かりの下で太陽は涙を流す3：峰岸燈火&久遠栞（後書き）

次回は、夢の話です。

夢の中で、

東君は、問われます。「おまえは、だれだ」と。

はたして、彼はそれに答える事ができるのでしょうか。

夢想歌：汝の名を問う4：東利也（前書き）

Flagたちました。

夢想歌：汝の名を問う4：東利也

gold gate - - ヒーローの背負うもの

ヒーローは世界の救い手でもなければ、未来の守り手でもない。

理想という十字架を背負わされるために存在する、単なる人身御供にすぎないんだよ。

叶うべくもない、理想。

叶わないからこそ、理想。だが、理想が叶わないという事実を受け入れることのできるモノは少なく、そういった存在は、すべからず、ヒーローの登場を望む。

そして、石を投げるのだ。

そして、罵る。そう、こんな風にね。

おまえのせいで、我々は――と。

伊吹 由香とは、何者だ？」

？——伊吹 由香とは、何者か。

そんなこと、これまで一度も考えたことなんて無かった。なのに。

「おまえ、何者だ！？　なんで、あいつを知ってる？」

俺の怒気を孕んだその答えに、少女は笑みを濃くする。

少女の笑みに呼応するかのように、世界はその闇を濃密にし、同時に彼女の鮮やかな銀髪が輝きを放ち始める。

「然り、だ。今の我らなら、それが正答だ。

……ならば最後にもう一つ——寿 小羽とは、何者だ？」

表情を消して問いかける少女を前に、俺は答えることが？——出来ない。

寿 小羽とは、何者か。

俺は、寿小羽なんて人間は知らない……いや、「知ってはいいる」
。そいつは死者で、自称俺の妹を名乗るモノ。

知ってはいる。だが、それだけだ。
だから、当然ながら、私の答えはただ一つ。

「おまえが、原因か？」

……あいつも含めて、訳の分からんことが昨日から続いているのは、

……お前のせいかな？」

いらだちが、つのる。なぜ、こんなにも……胸が詰まるんだ？この感覚は、この、胸を締め付けるような、泣きたくなくなるような、この衝動はいつたい！？

「分かるはずが無くとも、分かることがある。翻って、逆も然りだ。……覚えておけ、東利也。近々、貴様は災厄と向かい合うことになる。それは貴様にとってはそうではないかもしれないが、少なくとも、それは間違いなく、「伊吹由香」にとっては災厄でしかない。……ただ、貴様と貴様の恋人の胆力次第では、「災厄」と定義されたそれは自ら「災厄」以外の選択肢を選びとるはずだ……せいぜい、あがけ。あがき、つかみ取れ？——それが」

ゴン！

俺の後頭部を襲う突然の衝撃と、違和感。

それらは突然俺の目の前の幻想を霧散させ、一気に深淵にあった俺の意識を上層へと引き上げていく。

「痛っつ！？」

気がつけば、そこはホテルの一室だった。先ほどまで俺が居た漆黒の空間も、銀髪の少女も、当然ながらどこにもいない。

現在の時刻は、午前5時15分で、夜はまだ明けていない。

痛みを訴える頭をさすりながら振り向くと、そこには穏やかな寝息を立てて丸まっている自称妹がいた。俺の枕元でクネクネと動くこいつの足の指を視てみるに、さきほどの後頭部を襲った衝撃の正体はアレだろう。どうみても、俺はこいつに蹴られたとは思えない。

「……」

……あいつは、一体なんだっただろうか？

そして、それ以上に、こいつは、いったい……？

……寝起きなせいか、思考がまとまらない。

そして気がつくと、おれは幼女の頭をなでていた。

気持ち良さそうに頬を緩め、さらに丸っこくなる幼女。

「災厄と向かい合うことになる？まだ、なにかあるのか？」

俺はゆっくりと外に目をやると、明けかけの夜に目を凝らした。
そこにはもはや月は無く、騒々しい朝の到来を告げる太陽の零れ
日が、粛々と。

静かに、世界に浸透し始めているだけだった。

夢想歌：汝の名を問う4：寿 小羽

『お前は、誰だ？』

私は突然、見知らぬ少女に問いかけられた。

何の脈絡も無い、その問い。

けれど、私はその意味不明な問いに対し、何の戸惑いもなく答えることが——出来なかった。

「……寿、小羽です」

私は、答える。見知らぬ少女に、分けもかも分らないまま。
たどたどしく、私は答える。

『それでは、半分だ。お前自身気づいている通り、それでは不十分だ』

虚空に浮かぶ少女はニヤリと人の悪い笑みを浮かべ、私を見据える。

「では、もう一つ問う。
東利也とは、何者だ？」

？——東利也とは、何者か。
そんなこと、考えるまでもない。
そんなの、分かりきったことなのに。

「「あの人」は、私の……兄です！
私の、私が、ずっと待ち続けた……」

ただの直感でしかないその答えに、少女は笑みを濃くする。
少女の笑みに呼応するかのように、世界はその闇を濃密にし、同
時に彼女の鮮やかな銀髪が輝きを放ち始める。

「やはり、不完全だ。それでは、先が思いやられるな、寿小羽。
……これが最後だ。最後にもう一つ——伊吹 由香とは、何者
だ？」

表情を消して問いかける少女の前に、「私」は答えることが？——
出来ない。

伊吹 由香とは、何者か。その問いに、「私」は、答えることが
できない。

でも。

「抜われるべき、魔。諸悪の根源。
世に不幸をもたらす、魔性のモノ。それが、それだ」

吹き上がる、黒煙。

それはブスブスと「私」から漏れだし、「私」の代わりに答えた。

私の吐く息に、炎がまじりだす。

「一つを二つに分けた意味は、お前の中にある。

……覚えておけ、寿小羽。貴様は近々、「災厄」と向き合うことになる。それは幼いお前にとっては荷が重も過ぎる話だが、しかし、避けられぬ運命だ」

世界が、爆ぜる。私の炎が少女に絡み付こうと下瞬間に、真っ白な光が闇を照らし、私と少女の間を焼き払った。そして。

「繰り返す命は幾度の漂白を超えて、「お前達」のもとに。
その意味を決して、はき違えるな。そうすれば、きっと――」

ぺしつと。

私の頬を襲う突然の衝撃と、違和感。

それらは突然私の目の前の幻想を霧散させ、一気に深淵にあった私の意識を上層へと引き上げていく。

「ふえ！？」

気がつけば、そこはホテルの一室だった。先ほどまで私が居た漆黒の空間も、銀髪の少女も、当然ながらどこにもいない。

現在の時刻は、午前8時15分で、一日の始まりの時間。そして。

「さつさと、用意しろ。出かけるぞ」

私の目の前には、私服に着替えた兄さま。

すでに私に背を向け、ドアを開きどこか行こうと——！？

「にいさま、待って下さい！おいていかないで！」

閉まるドアに体当たりするように、私は部屋を出る。

なにがどうなって今に至るのか全然分からないけれど、兄さまが私をおいてどこかに行こうとしている事くらいは分かる。

そうは問屋が降ろさない。だって、兄さまは一緒に居ていいって

行ってくれたんだから。だから、わたしはどこまでもついていく。

どこまでもどこまで、そして、どこまでも。わたしは、兄さまと
一緒に――

どこへ、行きたいんだろう？

夢想歌：汝の名を問う4：東利也（後書き）

次回から再び東小羽組です。

ほのぼのとした一日を描けたらと。

謳歌：手を取り合う二人の姉妹（前書き）

夢の前に立ちただかるのは、いつだって、現実です。

それはほとんどの場合、辛く厳しいものですが――そのとき、そのとき彼らの背中を支えてくれるのも、同様に、現実です。

夢を遠ざける現実と、夢を支える現実。

夢と成った幻想は、二つの現実により、カタチを得ます。

そして――

謳歌：手を取り合う二人の姉妹

謳歌：アカシックレコード：手を取り合う二人の姉妹

「ねえ、姉様。

やっぱり私は、人の根源は悪だと思うの」

少女は、腕の中で眠りにつこうとしている姉を、抱きしめた。

「ねえ、曆。

それでも私は、彼らに幸せになつてもらいたい」

少女は、自分を想い涙を流す妹に抱きしめられ、目を細めた。

「だからこそ、私たちは此処では終われない」

二人の少女は、弱々しい互いの手を強く握りしめ、祝詞を唱え始めた。

その祈りは、果たして届くのか。

その祈りは、誰に対して送られるものなのか。

それは、それを成そうとする当の本人達にすら理解されない程の、
とらえどころの無い祈りだった。
それでも、その祈りは歌となり、確かな質感をもって、世界を振る
わせる。

「いつか見た夢の続きを、ここに。」

いつか信じたおとぎ話の結末を、未来に。

折り重なる幾多の世界を超えて、私たちは、たった「ひとつ」を証
明する」

とらえどころのない祈りは、それがそうであるが故に、万華の世界
を何の制限も無く渡りきり、遂には次元の中心へと到達した。

そこに在るのは、夢幻の王。

彼は、どこからとなく聞こえてくる子守唄に、耳を澄ませた。

歌は、尚続く。

「一つを二つに。

繰り返す命は、円環の果てに、真の根源を証明する。

われらは、信じる。たとえ裏切られると分かっている、我らは尚、信じ抜く。

故に、我らは神となろうー神となり、世界の行く末を見届けよう！」

響き渡る歌声を、王は確かに聞き届けた。

そして、いつもどおりに王は、目をつむる。

目をつむり、再び夢を視ようと深淵へと降りてゆく。

謳歌：手を取り合う二人の姉妹（後書き）

次回は、

謳歌：相克する因果1：東利也&寿小羽

因果と聞くと、ふたつは独立した存在のように感じます。
もちろん繋がってはいませんが、それだけです。

あくまでも、二つは別もの。ただ、それでも屁理屈をこねることで、
二つを一つに丸めこむことも、可能はず……？

逆転の一手は、此処から始まります。

謳歌：相克する因果1：東利也&寿小羽（前書き）

この二人、前日はなんだかんだで話してないですからね。
なので、修学旅行最終日に、親睦を深めていただきます。

東君には、悪いけど……

謳歌：相克する因果1：東利也&寿小羽

謳歌：相克する因果1：東利也&寿小羽

「ねえ、兄さま！わたし、アレに乗りたいです！」

池を囲む柵に手をかけ、キャツキャツと飛び跳ねる幽霊。

こいつは、池に浮かぶスワンボートを指差し、信じられないくらいキラキラした瞳で、こちらを見上げている。

時刻は、午前11時をまわった頃だ。

「はいはい、じゃあ、あれに乗るか。」

えーっと、乗り場までは……少し歩かなきゃなんのか」

公園のあちこちに立てられた看板で目的地を確認。

俺の歩幅なら10分くらいだが、まあ、今日は20分はみといたが良いだろう。

なんせ、おれの背丈の半分も無い、半透け少女が同伴しているわけだし。

結局、おれは修学旅行最終日のUSJからは外されることになった。

まあ、当たり前といえば、当たり前目の処置だ。で、その代わりと、ホテルでの謹慎をめでたく受けるはずだったんが。

「問題おこさないように、ちよろちよろするのはかまわん。俺も、少しは羽伸ばしたいからな……ギブアンドテイクだ」

昨晚の酒に引き続き、ギブアンドテイクの名目を語り、教師としての責務を放棄した教官は、そう言い残してどこかに消えた。今日の、午前7時半くらいのことである。

そして。

「ねえ、兄さま。つきは、どちらに?」

そして俺は今、こうして此処にいる。具体的には、赤帽公園という、そこそこでかい自然公園を半透け少女と散歩しているところ。平日な為か、人なんてほとんどいない。

ようは、誰に気兼ねする事無く、想うように行動できるって話だ。

「いや、特に行きたい場所とかもないな……今日はお前に一日つき合ってやるよ。」

ただし、人ごみが多いところはパスだ。さすがに一人会話を堂々と人前でやらかす度胸は無いからな」

俺は芝生に腰を落とすと、ごろんと寝転んだ。先ほどまでスワンボートを漕いで池をくると回っていたのだが、なんか足がプルプルする……普段使わない筋肉でも、使ったか？

足をモミモミとほぐしていると、少女も俺の横に座ってきた。よほどボートが楽しかったのか、まだ頬の高揚は取れていない。実際、俺も似たようなもんだろう。案外、楽しかったし。

作法が叩き込まれているのか、少女は地面にも正座だ。そして、なぜか、二人で俺の足を見つめるカタチになる。……たいして何も、面白いことは無い。

「兄さまの足、汚いですね。なんでそんなにゴツゴツして毛が生えているんですか？」

とりあえず、幼女に現実の厳しさを教えてやろうと、ちょっとした制裁を加える為に、汚物認定されたモノを幼女の頬にすりつけようと動かしたら——幼女は猫のようにスルリと俺の足の下をくぐり抜け、逃亡。

二三メートルの距離を挟んで、こちらの様子をうかがっている。

「こっちにこい」

おいでおいで手を振り、怒ってないからと付け加えた。
にもかかわらず、幼女はイヤイヤをする。

「ほら、こっちにこいって。せつかく一緒にいるんだから」

おいでおいでと手を振る——のを止め、立ち上がる。
若干足に変な倦怠感はあるものの、走れなくはなさそうだ。

立ち上がった俺は、一步幼女に近づく。

すると、幼女は一步後ずさった。なんとなく、前日の旅館を走り回ったことを思い出す。

「にいさま、やめて」

プルプルと震える幼女を視て、俺はニヤリと嗤った。そして、一步さらに距離を詰め、手を伸ばす。

すると。

「……えい！」

幼女は、一目散に池へと走り出し、際に来たところで思いっきり池に飛び込んだ。

結果、やつは池に沈んでいくことになるのが普通だが、そこはさすが幽霊。

でたらめだ。

「ここなら、兄さまも変なことできないですよね？」

幼女は、フン！と場仮に胸を反らし、水面に立っていた。そして、鬼さんこちら、手のなる方へ〜と俺を囃し立てる。

「そうか、なら、これまでだな。
あとは、一人でやってくれ。達者でな！」

俺をおちよくる幼女を背に、俺は全力で走り出した。
背後から慌てた声で、「兄さま、まって！」と聞こえてくるが、
ムシ。

その瞬間、俺の中に溜まったイラツと感は浄化された。
昨日は場所が場所なだけに幼女に遅れを取る力タチになったが、
実際の肉体的スペックではこちらが上だ。さきほどやつが汚いと言
つてのけたこの足は、十数年に渡る新聞配達のためものーそれ
で、やつをぶつちぎれたのが、清々しくてたまらない。

「……」

清々しかつたのは一瞬で、数秒後には、かなりへこんだ。
幼女相手に、何をやっとするんだという話だ。

振り返ると、けっこう離れたところから、幼女が涙と鼻水で顔を
べとべとにして俺を追ってきている。

……今この場に由香がいれば、確実に俺は×××された上に、
×させられるはずだ。

「はあ、なにやってんだかな……」

小高い丘の上から、幼女が辿りくのを待つ。

すると、どうしたことが。後少しというところで幼女は座り込み、わんわんと泣き出したーモノ過ごい勢いで、良心が傷む。

また絶妙な場所でわんわん泣いてんだもんなーしかも、俺のせいだ。

「ああああああ、もう！

わるかったから、なくなつて！」

渋々と言った感じで幼女に近づき、俺は手を伸ばした。

しかし、幼女は手を取らない。俯いたまま、ぐずぐずとやっている。

しかたなしに、俺は幼女の前で腰を下げた。そして、「顔あげろ」と、やさしく言葉をかけたつもりだったのだが。

「にいさまの、いじわる！」

次の瞬間、鬼もかくやという形相で幼女が顔をあげ、おれの頭を挟み込んだ。

そして、頭突き。ゴンーっというあり得ない音を立てて、二人して地面を転げ回る。

……それから俺たちが仲直りするには、もう三十分だけ、時間を要したことは、仕方の無い事だと想う。

謳歌：相克する因果1：東利也&寿小羽（後書き）

謳歌：相克する因果2：東利也&寿小羽

お昼ご飯食べながら、ふたりで会話です。
鍵括弧が多くなる回かも。

謳歌：相克する因果2：東利也&寿小羽

兄さまとの無益な争いの結末は、二人として地に突っ伏すというカタチで決着がついた。

……決着がつかなかったとも、言える。

「おまえ、ホントに幽霊なんだな」

もぐもぐとハンバーガーを租借しながら、兄さまは笑った。
先ほどの嗤った顔にくらべると、幾分、優しさ含まれている気がする。

さきほどのケンカーーと呼べるかも分からない兄さまとの戯れは、全面的に兄さまが悪いということで、収まりがついた。そしてそのお詫びとして、昼食は兄さまが用意して下さることに。
そのとき、兄さまは私に、好きな食べ物を頼んでいいと言って下さったのだけだ。

「ご飯が食べれなくても、私はわたしです。
たしかに生者でこそ在りませんが、兄さまが私の兄さまでいてくれるーそれだけで、十分なのです」

「ご飯は要らないと言った私を、兄さまは笑っている。
たしかに生者であるならば、「食」とは命をつなぎ止めるために
大事な行為だと想う。」

けれど、それは死者にとっても同じはず。なぜなら私は、「餓える」ということを知っているのだから――けれど、それは生者のそれとは意味が違うのだということも、今なら理解できる。

（私は今、満たされています。
十二分に、私が私でいられるくらいに）

わたしは木々の間をこぼれる光に目を細めた。
私たちの周り在るのは黙して語らぬ木々ばかり、人の姿はほとんどない。

「兄さまは、そのような食事を好まれるのですか？ たしか、そのような食は体に悪いと聞き及んでいます……」

私が知っているということは、兄さまも知っているということ。
なのに、兄さまは体に悪いものを、あえて食している――そのことに、意味は在るのだろうか。

「いや、それ言われると厳しいんだけど、なんせ旨いからな……
それに、相川園にいたときは百合子さんが食べさせてくれなかった
し。」

たぶん、その反動もあるんだと思う」

「相川園というのは、兄さまが、その……」

言いよどむ私に、兄さまさらに笑いかけて、頭をなでて下さる。
そして。

「そうか、お前と俺が繋がってるってのは、本当みたいだな」

そして、照れたように再び笑い、視線を公園の中心に向けた。
そこには、先ほどまで私たちが浮かんでいた、大きな池がある。

「お聞きしても、よろしいですか？
兄さまの、以前の事を……？」

兄さまと私は、繋がっている。

だから私は、兄さまの中にある知識とか記憶と言ったものを、意
図せずとも簡単に読めてしまう。

けれど、肝心なところは、何も分からない。
それはたぶん、演劇の台本をパラパラと見て、劇の筋道を知ると
いう行為に近いモノだと思う。

兄さまは、すこしだけ目を細めた後、ごろんと寝転がってしまった。
た。

そして、ポンポンと自分の脇の芝生を叩き、「ここ日差しが気持ち
いいぞ」と、一言。

わたしは、何も言わず、兄さまの横に、一緒に転がる。
私たちの頭上には、きらきらと輝く日の光と、木々。

……少しばかり、光が強すぎる気がする。
目をつぶってても、なんだか目が痛い。

「にいさま、もう少しずれましょう。
なんだか、目が痛いです」

とりあえず私は、思ったことを口にした。

すると、兄さまは空咳をしながら、「おまえ、容赦ないな」と
呟きつつ、ほんの少し離れた木陰に移動。たぶん、転がったはい
ものの、兄さまも同じことを考えていらしたようだ。

私たちがすごすごと移動した場所はそこそこ暖かく、風通りの気
持ちはいい場所だった。

そこでふたたび私と兄さまは横になり、空を見上げる――
いい感じに、あったかい。

そして、兄さまは語りだした。

ときに楽しそうに、ときに恥ずかしそうに。

それは、私の知らない東利也のお話。

それは、私が受け入れなければならない、私の知らない兄さまの
話。

そんなお話を、兄さまは子守唄のように、聞かせて下さった。

謳歌：相克する因果2：東利也&寿小羽（後書き）

謳歌：相克する因果3：東利也&寿小羽

東君の施設時代の話メインです。

謳歌：相克する因果3：東利也&寿小羽

謳歌：相克する因果3：東利也&寿小羽

————アカシックレコード：親が子をすてるとき————

どんよりとした雲空の下、少女は腕に抱いた赤子を見て、笑った。
そして、「ごめんね」と一言だけ言葉をかけると、用意しておいたバスケットの中に赤子を収めた。

赤子は、相も変わらずキャッキヤと嬉しそうに、少女でありながら母親でもある存在に、小さな手を伸ばしている。それは少女からすれば胸を抉る仕草であり、自身がこれから犯そうとする罪を断罪する、審判のそれでもあった。

少女は一步下がり、赤子から距離を置いた。
そして瞬間、その身を翻し、走り去った。

それが、全てである。

そしてこのとき、赤子は過去から断絶され、未来という業を担う

運命に、片足を踏み入れたのだ。つまりは、ここが東利也の始まりである。

もちろん、東利也が発生するには、その前段階である少女と男性との「ある行動」が必要なわけであり、さらにはその行為に行き着くまでの、ささやかで幸せだった時も語るべきなのであるが、しかし、それは捨てられしまった彼には、何の関係もないことである。

—— ことが成されてから十数年の時が流れるに至り、少女は利也のもとに現れていない。それは彼のことを気に求めていないが故の所行なのか、はたまた別の理由があるのか。

いずれにせよ、ハッキリしていることはただ一つ。

母親であつた少女は、自身が母親であることを拒み——自身の赤子を、ろくでもない世界に独り、放り出した。

そして。

その、ろくでもない世界は——少なくとも、彼が放り出された世界は、彼を、見捨てはしなかったということである。

- - - - -

謳歌：相克する因果3：東利也&寿小羽

兄さまは自身のことを、孤児だとおっしゃった。
理由は分からないけれど、自分は生みの親に捨てられ——そして、育ての親に、拾われたのだと。

そのことを話して下さったときの、兄さまの中には——
——そこにあっただのは、子を捨てた親に対する憎しみではなく、育ての親に対する、深い愛情だったように思う。

「寂しくは、なかった。

学校じゃ少しばかり浮くこともあったけどな。でも、寂しくはなかった。

……いろいろ不便だったりもしたけどな」

物心ついたときから、兄さまには血の繋がりが無い家族がいて、当たり前のように、兄さまと供にあった。

年上の家族達は横暴で容赦なかったし、下の家族は下の家族で、口を開けば憎たらしかったらしい。

もちろん、多くの家族がいるものだから、兄さまだけが優遇されることは無かったとのこと。

兄さまが小学校に入学したときも、その背に背負って歩いたのは、

傷だらけのランドセル。初めて臨んだ運動会も、お下がりのボロボロの靴。筆箱なんて、輪ゴムで止めるような、蓋が締まりもしない只の箱。

「不満なんて、言い出せばきりがなかった。でも、それだけだった。細々とした不満はいくつもあったけれど、でも、寂しくはなかったな」

寂しくはなかったと、兄さまは笑った。

孤児である兄さまの授業参観には、本来の、「親」は来てはくれない。けれど、生みの親の代わりに、血のつながっていない「家族」が、当たり前のように出席してくれたらしい。

—— たったそれだけのことに、どれだけ自分が救われていたのかを知ったのは、本当に最近だとも—— 兄さまは、語った。

「今の世の中はさ、色んなモノが溢れてる。

お前の時代からすればさ、考えられないだろう？

飽食のシステムは飢餓を駆逐。

医科学の発展は病という領域を徐々に侵攻。

建築技術の向上は天災がもたらす死を緩和し、人に快適な生活を約束した。

そして……」

孤独という名の病が、徐々に人の心を犯しつつある、そんな時代になったのだと、兄さまは目を細めた。それは、神すらも殺す、最悪の毒らしい。

本来は、孤児であるはずの兄さまが、真っ先に受けることになるはずのモノ。そして、それは当たり前のもので、この世界に放り出された兄さまと同じ境遇の子供たちは、ほとんどがその毒に当てられて、「何か」を憎むようになるのだとも。

……私は、兄さまの手に、そつと自分の手を添えた。
ただそれだけのことが、とても大切なのだと言われたばかりだから。

そして、だからこそ。そんなことを、大切だと言い切る兄さまだからこそ——私は今、兄さまの隣に居られるのだと、感じられる。

「まあ、なんだかんだで俺は恵まれてるわけだ。
で、まあ、なんだ。色々世話になったから、恩を返したくてな。
それで、今の学校に入ったわけ。ダメもとで受けた所だったんだけど、これが何か知らんけど受かってな——友人からは、ドリームジャンボ当てるより凄いかも言われたよ……なんか、釈然としな
いけどな」

そして、兄さまは、誇らし気に語りだした。
これまでに受けた、色んな恩に報いる為の、絵空事を。

それはきつと夢と呼ばれるもので、そして、その中には。

「だから、由香とも、一緒になりたいって思ってる。

俺が今此処にこうして居られるのは、あいつの——」「にいさま、
今度は私の話も聞いて下さい！昔々の話ですけど、兄さまのことを
知って、兄さまにも、私のことを知ってほしくなりました！」「

——私は、「わたし」でいるために、兄さまの言葉を遮った。
跳ね起きるようにして起き上がり、寝転がっている兄さまの顔を
見下ろす。

……兄さまは、最初こそキョトンとしていらしたけれど、すぐに、
「ほんと、お前は……」と苦笑しつつ、受け入れて下さった。

それに甘えて、私は色んなことをお話した。

話して話して、話し尽くした——それとても楽しい時間で、幸
せな時だったように、思える。

謳歌：相克する因果3：東利也&寿小羽（後書き）

謳歌：相克する因果4：東利也&寿小羽

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園1：久遠栞（前書き）

兄妹組はすでに夢を謳う段階に入ってますが、久遠さんはまだです。

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園1：久遠栞

silver bullet1：希望を補完するもの - 20 - -
3 - -

-----虫眼鏡の向こう側-----

夢であつたならと、老人は想い続けていた。

目の前で起っていることが現実あり、自身が信じた世界こそが、
夢物語であつたならばと――そう、涙を流し続けていた。

「虫眼鏡の向こうには、たったひとつの答えしかないんです。
だったら、やれることをやるだけ――私は、そう、想います」

その答えは――YES。

くだらない戯れ言だと知りながら、彼がどうしても捨て去ることが出来なかった、あの日の願い。

……少女は……久遠菜であつたモノは、右手に咲いたリンドウを老人に差し出した。

それは、少女にとっては唯一の希望であり、翻つて、老人に対する絶望でもある。

……しばらくの沈黙の後、老人はリンドウを受け取つた。

受け取り、齒を食いしばつた。それは結局の所、老人の敗北を意味していたのだ。

老人が信じた幻想は儚くも散り、そして、咲いたのだ。

空よりも濃い蒼の花は、老人に語りかける……「あなたの悲しみに寄りそうモノ」は、此処にいます。

つまりは。

「私のすべてを否定するか、我が子らよ……ならば、もう何も言うまい。

そのかわり、見守ることにしよう……もちろん、勝算はあるのだろうな、久遠の末姫よ？この成功者を挫いたのだ。なにがあるうと、失敗は許されない……その覚悟の程、しかと見届けさせても

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園1：久遠栞（後書き）

子が親を超えるのは、少し先の話です。

次回は、夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園2：久遠栞
desu

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園2：久遠栞

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園2：久遠栞

道なき道を進むのが人間という生き物なら、今の自分は間違いなく、人間だと思う。

「さてさて、久遠の末姫よ。これが――其方の最善かの？」

頬を伝う汗を軍手で拭いつつ、地面においてリュックに手を伸ばす。

すでに温くなってしまった水を、喉を鳴らしながら飲み干した。

……私が今居る場所は、朽ち果てた神の社の――その、境内。
草木は無造作に生い茂り、そこに神の息吹は、もはや感じられない。

それでも、そこに「神に準ずるモノ」を「呼ぶ」ことは出来る。

私は粗くなった息を整えながら、さきほど投げかけられた精霊の問いに、短く「はい」とだけ、答えた。

その答えに同調するように周囲の草木がざわめき、空気が位相を変える。

「ふむ……なれども、儼はそうは思わんでな。

なに、術式が不完全というわけではない。ただただ、つまらんといいうだけじゃ」

私の目の前には、小柄な老人が浮かんでいた。顔は、能に用いられる翁のそれだ。そのまま、翁の面を冠った翁が「そこに、神の使いとして存在していた。

彼は地面の少し上空で静止し、私が描いた術園を眺めている。

そして、「かかか」と快活に笑い、私を見据えた。

「末姫よ、其方は、そなたの力について考えたことはあるか？」

唐突の問いだ。

通常の精霊種なら、契約儀式の外様のことに口を出すなど、あり得ない――が、この翁は例外だ。

彼は、『神となる権利』を放棄した存在。その辺の精霊とは、格が違う。

「私の力は、「事象の背景を読み取る」ことに研磨されたものです。ここでの事象とは、『現在』は勿論のこと、引いては世界録に記録された『過去』すらも見渡すことを可能とします――しかし、それが、なにか？」

私は一歩だけ、術園から身を引く。契約儀式には、基本的に例外はない。然るべき手順を踏み、然るべき対価を払い、それに見合うだけの奇跡を受ける――それが出来なければ、失敗ということだ。ただし、その失敗の代価を支払うのもまた、術者自身。

つまりは、この場合は、私自身だ。

翁は再び「かかか」と声を出して笑うと、仮面の奥の瞳を怪しく光らせた。

私自身、最悪の展開を考慮し、迎撃態勢に入る。

すると。

「争う気はないさね。
剣を収めよ、久遠の紡ぎ手よ。我は、其方らのことを気に入っているのだ」

翁はゆるりと頭を振ると同時に、私が描いた術園の中央に一握りの力を投擲した。

リンっという鈴の音が響き、世界が静止する――因果が、凍結された瞬間だ。

「人の言う因果とは、ときおり、「時」と共に語られることがある。そなたの言い分ならば、「過去が因」であり、「現在が果」となるのであるうな。あるいは、「背景が因」で、「眼前の事象が結果」か？ 実に、狭いモノの見方だの」

パンパンと翁が手を叩く音が、静止した世界に響く――結果として、それは世界を僅かに振るわせた。小刻みに震える世界は、自身の一部をキラキラとした結晶として、私のもとに降り積もらせる。

私はふわりと手のひらを開き、そこに世界の結晶を積もらせた。それは、ひんやりと気持ちよく、併せてほのかな温もりを秘めていた。

「世界が複数あることを知る者は、「時」という概念を重視せん。なぜならな、末姫よ。「そなたの過去」は、「別の世界の現在」でもあるからじゃよ」

翁はこちらを見据えたまま、キセルでタバコを吹かしていた。

一服吸い込んで、毎回異なる色の煙を吐き出している。

「彼の「超えるモノ」は、4次元と呼んでいたか？

あるいは、可能性軸であつたか……？ まあ、どちらでも良いわ。

肝心なのは呼び名ではなく、因果とは、実に曖昧なものであるということじゃよ」

虹を描く煙が、朽ちた神社へと吸い込まれていく——それが描くのは、厳かなる神の社。

朽ちた社に合わさるカタチでそこには、神の域が存在していた。

私の瞳は、朽ちた社と、神により祀られた、「神の為の社」が重なって見える。

「そなたが危険視する彼の娘子も、其方から見れば——結果のひとつであろつ。ただな、末姫よ。

彼の娘子を生み出した因とは、そなたが想うところのモノだけでは

ないのじゃよ。なあ、末姫よ。あの娘子は、「愛」を知る者じゃ。それだけで、十分其方らには――勝機があるように想えるのじゃよ」

光が世界を満たし、爆ぜた。

瞬間、世界は音と熱を取り戻し――元の、朽ちた世界へと回帰した。

儀式は、成功だ。社には、念を捕獲できる神の域が形成されており、私の手ものには、その結界を開く為の鍵の結晶が――ない……？

術園に鎮座する翁を、睨みつける。

なぜなら、彼の手には契約上、私が手にするはずだった「鍵」が握られているのだ。

これでは、燈火と私の計画が――

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園2：久遠栞（後書き）

次回、

今回は、夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園3：久遠栞

です。

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園3：久遠栞（前書き）

第八部の「少しだけ先の未来」の経緯に、繋がりました。

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園3：久遠栞

――見かけ上のハッピーエンド――

救えぬならば、切り捨ててしまえば良い。

そうすれば、盤上に残されたものはすべからず、幸せであろう。

――gold turning point――

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園3：久遠栞

どちらか一方しか救えないのならば、どちらか一方を切り捨てなければならぬ。それが、私と燈火が考え抜いた末に至った、私たちの最善だった。

「鍵を渡して下さい、奏上の翁。よもや、精霊種である貴方が、契約を違えるつもりですか？」

久遠と翁の縁は、奈良時代より続く古きもの。

翁が言う所によれば、この関係は、異端として人に追われていた久遠の祖を、彼の精霊が保護したことに始まるらしい。

？——つまりは、古い間柄と言うこと。

だからこそ、私たちは互いのことを熟知している。つまりは、今回のこの事態も、不服ながら、想定範囲内でもある。

「彼の娘子を救ってやると、其方が確約してくれるのならば、この鍵は其方に譲ろう。どうじゃ、久遠の末姫よ？」

奏上の翁という、この「時の精霊種」は偉大ではあるが、気まぐれ屋だ。それこそ、猫の目のように、コロコロと気分を変える。

例えば、今がそうだろう。契約の儀は神聖なるもので、例外などない。儀式の途中で契約内容を変えることなど許されることではないのが、「世界の理」だ。

なぜなら、契約儀式とは、「ある価値」を「別の価値」に変換する儀式。その二つは互いに等価であり、故にこそ、相互の行き来が成り立つ——天秤が傾くことは許されないのだ。もし、それが成されるようなことがあれば、「それ」は理を外れることとなる。そんなことは、「世界」が許さない。

「前提が、覆ることになります。私は、「彼のモノを救えぬ」と判断したが故に、御身に助力を願い出たのです。

私が御身に求めたのは、彼のモノを世界より隔離する術。そして、御身はその術として、「社」を私に譲渡して下さると——その対価として、向こう一年分の精気を、私は御身に差し出す。

それで、契約は完了のほずです」

詰め寄る私に、翁はひょうひょうとして返す。

「彼の娘は、このような檻に閉じ込められれば成らぬ程の罪を犯したのか？」

彼の娘は、それほどまでに罪深き存在であるか？なあ、末姫よ。汝は、彼の娘から笑顔を奪うだけの権限を、有しておるのかの？」

翁はキセルを吹かせながら、背後の社を指差した。

そこに在るは、「社」とは名ばかりの、「檻」。寿小羽に擬態した念を封じ込めることが出来る、神の奇跡だ。

「彼のモノは、一時的に人としてのカタチを「くみ上げられている」だけです。そして、それを可能としているのは、我が友人と彼のモノに結ばれた、縁の流入——その一言に尽きます。

しかしその奇跡も、もうじき破綻するでしょう。事実、彼のモノが「個」として成熟するに連れて、縁の力は弱まっています。併せて、念が彼のモノを取り込みつつある」

私は、続ける。一步も譲れぬのだと、翁に伝える為に。

「彼のモノの根源である念は、「怨念」です。しかもその起源は、我が友人の恋人に対するもの……起源と念が接触すれば、そこに待つの悲劇以外の何者でもありません。

しかも、彼の念は数百年の間、他者のそれを取り込み膨れ上が

っている。どれほど彼のモノを説得し、彼のモノが真実を受け入れ、起源を許そうとも――

他者の念が、それを許さない。悲劇は、不可避なのです。ですから……」

ですから、私は続けようとした。

しかし、翁のゴホゴホという咳に阻まれてしまい、最後まで続けることが出来なかった。

翁は呵々かと笑い、キセルを袖にしまいこんだ。

そして、宙であぐらを組むと、膝に肘をつけて私を見据える。

「悲劇を避けて通るのも一手であろうが、「悲劇を超える」も、同様に取り得る一手ではないか？」

そう言うと、翁はつまんでいた「鍵」をクルリと廻した。それに呼応して、低い音を立てながら、檻の門が徐々に開いていく。

門は、数秒で完全に開ききっていた。そして、それを確認した翁は満足気にうなづき、次の瞬間、持っていた鍵を真つ二つにへし折る。

あまりのことに、私がその光景を呆然と見ていると、翁は折られた鍵の内の一方を、私へ。そしてもう一方を、宙へと放り投げた。

宙へと放たれた鍵は弧を描きながら落下し、地面に衝突する前に掻き消える。

「其方に渡した鍵は、「檻を閉める為の鍵」での。

そしてもう一方は、檻を開く為の鍵——さて、見ての通り、もう一つの「開門の鍵」はどこかへ行ってしもうた。儂の見立てでは十中八九、御主の友人のもとであろうがの……ああ、そうそう。これで、契約は完了じゃ。つまりは、この契約は其方の友人も含まれておるで、そこを図り間違えば、エライことになるかもん？」

やることは全てやったとばかりに、翁は背伸びすると、世界から消失した。

私の手ものに残されたのは厳かなる「檻」と、それを「閉じるためのだけの鍵」。そして、「檻」を開く為の鍵は、東君のもとにあると……

「あの、糞爺。

契約内容を勝手に書き換えて話をややこしくした上に、ドロンかよ……ぜつたいに後で、クロス」

翁^{おきな}を有無言^{うむごん}わせず従^{したが}わせる力があれば、このような事態は避けられたんだと思う。しかし、現実^{じつじ}は厳しい。

……思わず呟いた汚い言葉だったけれども、それはしょうがないことだと思う。

それにしても、本当にややこしいことになった。一度成された契約は、施行されなければならない。

書き換えられら契約内容の詳細は分からないが、推測は出来る……
…ようは、彼に任せろということなんだろう。

私たちのような第三者ではなく、彼らに。彼らに、この物語りの行く末を、任せろということなんだろう……

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園3：久遠菜（後書き）

次回

連想華：太陽 in USJ：峰岸燈火

連想華：太陽 i n U S J：峰岸燈火（前書き）

さて、第一の分岐点の開始点にさしかかりました。

連想華：太陽 in USJ：峰岸燈火

連想華：太陽 in USJ：峰岸燈火

――連想華――

世界を二つに分けた姉妹の思惑は、余所にあつた。

結局、少年と念を巡る「とある物語」は、対を成す世界の母体にとつて、ただそれだけの、「とある物語」でしかなかったのだ。

故に、その物語は理の名のもとに揆じ伏せられ、悪意に飲まれて沈むはずだった――しかし、そうは成らない可能性もまた同時に、世界には在った。

誰かを想った誰かの心が、三次元の世界にブレを生じさせたのだ。そのブレは、想いが連なれば連なる程に歪みを強め、遂には可能性軸という概念を世界に生み落とした。

要は、「連なる想い」が提示したのだ――世界に。

三より成る世界に、四番目の概念を提示したのだ。

その概念こそが、可能性軸であり、別名――「i f」。

i f は、三の世界に夢幻を重ね合わせる、無限の法。
彼の法は、語る。可能性は、此处に在ると。故に、まだ終わりで
はないと――そして。

――
――

『ごめんね、燈火』

受話器越しに栞の声を聞いて、私はため息を漏らしてしまった。
せつかくの旅行を投げうって一人登山をしてくれた彼女には悪い
けれど、こればかりは仕様がなない。

『いいのよ、栞。それに、ありがとね。檻の方は手に入ったのだから、それで、十分よ。
後は、あの娘を……いえ、「怨霊」を、どうやってその中に放り込

むかよね……』

怨霊を閉じ込める為の「檻」と、それを「閉ざす鍵」は手に入つた。けれど、栞の話では、「檻を開く為の鍵」を、あのバ力が持っているとのこと。

そうになると、怨霊を檻に放り込むだけでは、事が解決しない可能性がある。

『仮に、私たちが怨霊を檻に誘い込んで閉じ込めたとしても、東君が扉を開けて開放……なんてことになったら、意味がないわ。あの二人の間にある絆はまだ若いから、よほどの事がない限り起こりえないことだけれど、あの爺じいのこともあるからね。それに、東君は彼女の影響をかなり受けちゃってるみたいだし……一筋縄じゃ、いかないと思う』

さらっと栞のブラック成分が出た気がするけれど、そこはスルー。変にツッコミを入れると、藪から竜が飛び出す可能性があるから。あと、「彼女」発言も、華麗にスルー。

あくまでも栞の彼女は三人称単数の「彼女」であって、男女のそれじゃないのだから、いちいち咎めるというのもおかしい話だ。

『なんとかして、今日一晩あいつを束縛すればいいわけでしょう？

峰岸の力で、バカの謹慎を強めるってのはどう？」

それは、雑作もないことだ。

電話を一本入れるだけで事足りる。

『それじゃあ、修学旅行終わってからのことが保証できないよ。

たしかに、今の怨霊をもとの念に戻すには、東君と二三日引き離すだけでいいけれど……結局彼が何らかのカタチで怨霊を連れ戻しに動かないとも限らないでしょう？ そうなれば、怨霊は再びカタチを得ると思うわ。そうなれば、それまでの苦労は水の泡ね。

それに、東君が連れ戻しに……って話は、かなり可能性としては高いと思う。

特に、学園に帰った後の彼の事を考えると、それは、あり得る話』

……柔の話は忌々しいけれど、まさにその通りだ。学園には、あの女が居る。仮に、今回あいつが怨霊を見捨てて日常に帰ったとしても、そこには「そういうこと」を絶対に善しとしないあの女が……！

「燈火、携帯がミシミシ言ってる。

ギブギブツていうふうにも聞こえるから、やめたげて？

……もう、正攻法しかないと思うんだ。東君に事情を説明して、きちんと「納得したカタチ」で諦めてもらう。それが結局は一番の近道だと思うよ」

携帯がミシミシ言うのは、仕方ない話なので、華麗にスルーしても、本題の方はそうはいかない。

……仮に、あいつを「まともに説得」したとして、あいつが諦めることは100%あり得ない。

逆に、火をつけるような結果に成りかねないし、だからこそ、今みたいに問題になっている。

『納得したカタチで同意を貰う前に、なにかしら工作しないとムリでしょうね。』

なにか、案があるの？』

だからこそ、一枚何かトリックをかませ、勘違いさせる必要があるー「これで、いいのだ」と。そんなカタチで、あいつを騙す必要がある。

なるべく自然に、歪みを少なくしてーそうしないと、あの力は気づくだろうから……肝心なところでは、ニブチンのクセにね。

一拍おいて、受話器越しに案が提示された。

それははつきり言えば卑怯者が考える事で、そして、弱者が起こす行動ーけれど、仕方がないし、仕様がなない。

今の私たちには、時間がないのだから。だから、栞がいうように、二人の間に「不和」をもたらすことで、少しでも勝率を上げられる

のなら、それは、それで、
一つの手として――認めなければ、
成
らないんだと思う。

連想華：太陽 in USJ：峰岸燈火（後書き）

不和は、いやなもんですよね。

でも、一人でない限り、 unavoidable なものでもあります。

次回は。

謳歌と怨火：歪曲する因果1：寿小羽&久遠栞

t i p s - 分かち合うもの

他人の苦しみを前にしたとき、人がとり得る行動は大きく二種類に分けられる。

とりわけ多くの者は、自身のそれと他者のそれを比較する。そして、ときに安堵し、あるときには、自身より幸福な他者に対し、嫉妬や怨みという名の情を抱くのだ。

それは、然るべくして起る当然であり、『流れ』である。

……しかし、極稀に、苦しみを分かちあうことを願うものがある。

「苦しみは、比べるものじゃないの。分かち合って、癒し合うものなの。」

だから、こっちにおいで？ わたしも、そっちに行くから」

ひとりぼっちだった誰かの苦しみは、その苦しみから逃れる為、『それ』を受け入れた。

もちろん『それ』も、誰かのそれを受け入れ……こうして、またひとつ、苦しみは膨れ上がることとなる。

――――『膨れ上がる念と、悪意』
より抜粋――

少しだけ先の未来2

謳歌と怨火：歪曲する因果1：寿小羽&久遠栞

『あなたは……栞？
なんで？ にいさまは……どこ？』

何一つ理解していない顔で、『念』は私を見上げていた。
まるで、キツネにつままれた――ような、そんな、表情だ。それ
れも、そのはず。

『……』

『念』は、私から二メートル程の離れた場所に倒れ込んでいる――
理由は、私が突き飛ばしたからだ。

そして、私の背には――厳肅なる、扉。

私は無言で踵を返すと、扉をくぐり、すばやく社の外へ。

そして、翁から渡された鍵を使い、社を閉じた――もちろん、『檻』という意味での、社を。

ガチャリという、腹の底に響くような重音が、夜の世界に響き渡る。

それまで惚けていた『念』は、ここにきてようやく、立ち上がった。しかし、もう遅い。

『え、え!？』

ちよつと待つて! なにするの!？』

転がるように扉に到達した『念』は、全体重を掛けて扉に突進した。しかし、その程度で社が揺らぐはずもない。物の見事にはじき返され、ひっくり返る。

しかし、この程度で揺らぐはずもないのは『念』も同じで、必死に扉に拳を振り下ろしていた。

扉を開けようと、『念』は必死だ。

しかし、叶うべくもない。いくら想いをかけようと、必死に拳を振りかざそうとも、神の域を、ただの『念』に犯せるはずもない。

月光が降り積もる中、ふと、『念』と私は目が合った。

私たちは扉を挟んで、対峙している。

私たちの間にあるのは、たった一枚の扉。言ってしまうばそれだけで、それ以上のものは何もなかった。

敵意もなければ、憎しみもない。

私たちの間には、何もない。私たちは、私たち以外のモノを想うが故に、此処にこうして相見えている。

……怯えた目でこちらを見る『念』のそれは、年相応の娘を思い起こさせる。

「……」

私は無言で、踵を返した。

ゆっくりと、その場を去る――それはもちろん、私の意思表示だ。

『いや！　なんで！？　どうして！？
あけて！　ここ、開けて！　いや、いや――――！！！！』

その声は、決して誰にも届かない。

どれほど声を上げようとも、その声が、この心に響くことはない。

あとは、東君の方をどうにかするだけ。

あと残された問題は、それだけ。たったそれだけで、私たちは――

――

？

謳歌：歪曲する因果2：奏上の翁

「末姫も、強情よの……されどそれも、久遠の血筋であれば、当然

か」

奏上の翁は誰もいない世界で一人、鏡を覗き込んでいた。そこには、思惑通りに事を運びおえて旅館に帰還する、一人の少女の姿が在る。

翁は、悟る――その可能性は、不可避であると。

「届かぬ声などない。同時に、響かぬ心もないのじゃよ、末姫」

翁が現世に干渉するまでに、事態は流動的なうねりを獲得していた。その流れはもはや、精霊種である翁をもつてしても、変えることは叶わない……いや、翁だからこそ、変えられないのだ。

因果が――人にとっての理の歪みが、大きくなりすぎる。

「さて、このままでは順当に悲劇は退けられてしまうの……」

鏡の境界に、翁がふれる。すると、境界が波打つように波紋を広げ、別の景色を映し出した。

鏡には、一人の女子高生が映っている。彼女は、どうやら授業を受けている最中のようなのだ。

「ふむ、そして、こちらは明らかに『流れ』が歪められておる……」

何者かの？

これほどまで自然に人の理を曲げるなど、本来は在るべくもないが……」

鏡に映る少女は、自身が停学にならずに当たり前のように学園に
来れることを不思議に想いながらも、「これでいいのかなー？」と、
暢気に椅子に座っていた。

それは少女が前日起こした事件を考えれば、明らかに、不自然な
光景である。

「ふむ、なるほどの。
さてと、どうしたものか……」

翁は、思案実に鏡を覗き込んでいる。はたして、彼はどう動くの
か。

それは――――

謳歌と怨火：歪曲する因果1：寿小羽&久遠栞（後書き）

次回

連想歌：遠き彼の地で少女は再び夢を見る
です。

連想歌：遠き彼の地で少女は再び夢を見る

連想歌：遠き彼の地で少女は再び夢を見る：伊吹由香

吹き抜ける空に、広がる草原。

空気は湿った土の臭いを孕んでおり、世界に木霊するのは自然の伊吹のみ。

現代では、まず観ることの叶わない世界で私は、一人きりだった。

「ん……夢？

また……なのかな？」

見渡す限りの大自然。どうやら、昨日に続けて、わたしは夢の中に放り込まれたようだ。

でも、今私が居るこの夢の世界は――昨日のモノとはすこしだけ、違う気がする。

『小羽姫、こちらでしたか……』

背後に生じた突然の声に、私はびっくりと振り返った。

そこには、長髪の少女。歳のころは、14、15歳くらいだろうか？

歳不相応な艶やかな赤い着物を身にまとっている。

少女は少しの幼さが残る笑みを浮かべ、こちらへと近づいてきていた。

『ねえさま！』

答える声は、再び背後から発せられていた――わたしは再び、振り返り、見る。

はたして、少女の声に答えたのは、おかっぱ頭の、とても可愛らしい女の子だった。

歳のころは、5、6歳くらいだろうか？

（小羽姫？

小羽って、たしか……）

小羽と呼ばれた女の子は少女に駆け寄り、おもいきり、少女の腕の中へダイブした。たいして、少女は女の子を優しく受け止め、クスクスと笑っている。

『そのように走り回れば、また婆やに叱られますよ?』

腰を落とし、女の子の目線で少女は笑いかける。

たいして女の子は、『ここに婆やはいませんか!』と、コロコロ笑い返していた。

二人には、どうやら私は見えていないようす。

そして、混乱する私を余所に、事態はさらに進行する。

『小羽姫、こちらにいらしたのですか……』

今日は智代姫が来られる日だと、あれほど言いきかせたはずですが?』

手をつなぐ二人の前に、一人の少年が現れた。少し困った様子で、女の子を見下ろしている。

何となくだけれど、少年の口から小言がこぼれ出るような気がした。

そんな雰囲気を感じ取ったのか、「うう、にいさま……」と呻き

ながら、少年の視線から逃げるように、女の子は少女の後ろに身を隠した。

すると、それを見た少年はさらに困ったように顔をしかめ、反して、少女は朗らかな笑みをこぼしながら、少年に縋り付く。

『時継様、どうか、このおてんばな義妹をお許してください。後から、私がきつく言い聞かせますので、どうか、なにとぞ……』

顔は笑っているのに、口からこぼれる台詞は大層秋爽なもの。
そんな少女の後ろに隠れた女の子は、嫌らしい笑みを浮かべて笑っている……そして、そんな二人を前にして、少年は眉間に寄せるシワをさらに深くした。

ため息をつく、少年。
そして。

『ふたりとも、そこになおりなさい』

そして、少年の小言が始まった。むろん、それは智代姫と小羽姫の二人に対するもの。

小羽姫はおてんば過ぎる旨と、約束を守る事の大切さをトクトクと。

あわせて、智代姫は身内に対して甘過ぎる旨をコンコンと。

二人の姫は、二人して、吹き抜ける空の下――少年に諭されるように……説教されていた。

なかなか、シユールな光景。

『時継様、私はまだ桂家に嫁いではおりませぬ……ですから、私と小羽姫が身内というのは、いささかの外れた表現ではありませぬか？』

そんなふうに、

智代姫は時折茶々を入れるようにして、少年に反論していた。

そんな少女を前にして、アタフタすることしかできない少年。

そして、そんな少年の姿を見て、笑う小羽姫。そして、そして、そんな二人を包み込むように、微笑む智代姫――。

（ああ、そうか。

わたしは、この夢を知っている。この夢は、幸せの夢なんだ。幸せだった、夢の話……）

わたしは、目の前で繰り広げられる物語を、「知っていた」。
誰かに習ったわけでもない。だれかに、読み聞かせられたわけでもない。

強いて言えば、自身の内に沈んでいた想い出が、何かのひょうしに浮かび上がってくるような、そんな、感覚。

故に。

（わたしは、この物語を知っている。
だったら……この物語が、私の知るものなら、その、結末は……）

私は気づかぬ内に、涙を流していた。
頬を伝うそれが風で飛ばされるまで、自身が涙している事に気づかないでいた。

声をかければ、三人は届く場所に居る。
ほんの少し駆け寄れば手の届く場所に、彼らは居る。

今なら、今の私なら。

この夢の結末を悲劇ではない、別のカタチに変えられるはず！

(……！)

未来を変えようと、私が一步を踏み出した瞬間だった。

その瞬間、ものすごい突風が私の脇を吹き抜けた。私は溜まらず
歩を止め、目をつむってしまふ。

……次に私が目を開いた時には、三人の姿はどこにもなかった。
果てしない草原と高い空が、延々と続く世界が在るばかりだった。

連想歌：遠き彼の地で少女は再び夢を見る（後書き）

今回は、連想歌：仲介人 in USSJ です。

ヒーローを探している、あの人の視点に移ります。

謳歌：相克する因果4：東利也&寿小羽

謳歌：相克する因果4：東利也&寿小羽

3番目の絶対矛盾：超えるもの

<因>

ねえさまのこと、大好きだった――

<果>

――呪ってやる。

<因>

ねえさまのこと、信じてた――

<果>

――崇めて

やる。

<因>

ねえさまのこと、心から、愛していた――

< 果 >

して・・・・・・・・・・
- - - - - たたり、のろい、そ

誰かの手記による、独白

「真名励起」という奇跡でもって、彼らは運命を突破できない。
どれほど彼が彼女の名を叫んだところで、それは彼女の一つの側面
でしかない。

それでは、彼女を救いあげるのは不可能だ——しかし、可能性を提示することは出来る。

「名を呼ばれた彼女」が、「彼女」が抱える絶対矛盾——相克する因果を超えることが出来たのなら、その先に希望はある。

ひいては、それがヒーローの呼び水となることすらあるだろう。
願わくば、彼らが超えるものでありますように。

謳歌：相克する因果5：崩壊の序曲：東利也&寿小羽（前書き）

不和の、誕生です。

謳歌：相克する因果5：崩壊の序曲：東利也&寿小羽

謳歌：相克する因果5：崩壊の序曲：東利也&寿小羽

『にいさま、映画というものは……本当に、いいものですね!』

名言を吐く少女の背後に、良い笑顔のご老体を見た気がしたが、とりあえずスルーした。

暗がりに居たためか、日の光が目痛い。

「楽しかったんなら、なによりだよ……この年で、アンパンマン見ることになるとは思わなかったけどな」

乾いた笑みを浮かべる俺。

そんな俺の横を通り過ぎる家族連れの――母親の目が、痛い。

日の光以上に、イタすぎる――のは、俺か。

「ねえ、にいさま、次はあそこに行きたいです!」

はしゃぐ幼女を前に、俺は嘆息した。けれど、なんとなしに悪い気はしない。

やっぱり、小さい子どもってのは笑ってしかるべきだと、そう、教わって来たからな。

公園で幼女と戯れたはいいものの、それも長くは続かなかった。

……とは言っても、かれこれ4時間くらいは公園でぶらぶらしていたと思う。

その間、2人で適当にボートで騒げたし、鬼ごっこから始まる喧嘩もした。

一緒に昼飯も食べることもできた上に（事実上俺だけ）、身の上話もした。

（にしても、昔の生活ってのは、現代よりも良さそうだったな。こいつの、話を信じらとすればだけれども）

横をテコテコ歩く幼女を見ながら、公園での会話を思い出す。こいつの話からすると、昔の人間ってのは、必要がなければ働かなかつたらしい。そして、その必要性というのはあくまでも衣食住を満たせれば良いもので、つまるところ、今よりも遥かに時間的豊かさを満喫しながら、人生を謳歌していたようだ。

話に出てくる農家の生活様式や武士の心が構えなんかは学校で習ったこととひとしきり類似するもので、現代の考古学の進歩に少しだけ驚かされたりもした。

そして。

そして、その話の流れで自然とこいつの過去話にもなるのだが、まあ、そんなに優雅な生活を送っていたわけでもなかったみたいだ。身分としては、一国の姫であつたらしい。しかし、だからといって、その生活水準は平民と同じくらいだったとのこと。

それは城主である父親や、コイツの兄（過去の俺らしい）の政策の上で自然とそうなたらしく、その真意は分からないとのこと。
なにぶん、そのような然るべき教養を学ぶ前に、コイツはその命を落とすことになったらしい。

こいつの、死因――それは。
それは、流行病ということだった。しかし、これもあやふやだと言っこと。

なにぶん、死に際らへんの記憶はふわふわしていて、周りに居る女中たちがそう言っていたのを聞いていたのかいなかったのか――
――自分でも分からないけれど、なんとなくそんな感じだと思う――と。

ずいぶん、おおらかな幽霊だなと思いつつ、霊ってみんなそんなもんかと思って諦めた。

でも、こいつが言う通りなら、今隣を歩くコイツは「病弱っぽい幽霊」になってなきやおかしい感じもするけれど、その辺はなんかあるのだろう。いたって、元氣洩刺な優麗である。

……俺自身、本人があっけらかんとそんなこと言うもんだから、深く追求も出来なかった。仮に自分が死んだとして、その死因を根掘り葉掘り聞かれない——少なくとも、俺はそう思うから。

それに、なんだかんだでこいつとは少しだけ、打ち解けられた気もする。

前途は未だ一寸先も見渡せない闇ではあるけれど、今日の会話はそれを和らげくれる、か細くも暖かい光になるような気がした。

「とりあえず、次で最後だからな。
なんだかんだで時間も迫ってるし、自由にできるのはあと30分くらいだぞ」

ある程度余裕を持って帰るとするなら、次が最後だ。
公園を出てからなんとなく2人で街をぶらぶらし、時間をつぶしていた。

その散歩の途中、こいつが映画館に張り出された子ども向けアンパンにやたらと興味を示し、恥ずかしながら、高校2年生にして、一人アンパンマンをすることになった（端から見た場合）。しかも、なぞのチケット二枚購入である。

購入時に店員さんの笑顔から邪気が放たれていたのは、おれの気のせいだっただろうか？

「ふわー、すごー！！！！」

パタパタと掛けて行く幼女が飛びついたのは、ゲーセンの表に居を構えるユーフォーキャッチャーだった。

その巨体の中には、先の土間でスクリーンを飛び回っていたアンパンが笑顔で敷き詰められている。

「これ、ほしいのか？」

おおっぴらに声を出すことは出来ないが、ぼそりとしやべることくらいは出来る。ただの高校生のつぶやきごとき、街の喧噪にのまれば周りに伝わることなどない。けれど、伝わって欲しいやつには、とどく。そう例えば、ガラスを通り抜けて詰め込まれたアンパ

ンマンの海できやいきやいハシャイでいる自称妹の幽霊とか――
なんか、止めて欲しい。

別に悪いことしているわけではないけれど、なんとなく、「こら、
やめなさい！」って言いたくなる光景なんだよ。

そう、なんとなく、そう、言いたくなるだけなんだけれど。

「ほしいです！こっちの、チーズと、こっちの、ジャムおじさんと
で、こっちの……」

「まてまてまてまて、どれか一つだ。
いったいどれだけ欲かいてんだよ……いつとくけど、一つでもとれ
れば良い方だぞ？これ、そういうもんだからな？」

俺の知識を共有しているなら、それくらい分かっているはず。
というより、分かっていってるなら、なおタチが悪いが。

「えゝ、エゝ！」

身体をクネクネして、「え〜」を連呼する幽霊。ちなみに、少しずつトーンを変えているのは、わざとやっているのか。

「どれか、ひとつだ」

有無言わせぬように、もう一度はつきりと言ってやった。するとこれ以上おしても駄目だと悟ったのか、「じゃあ、これがほしいです」と、王道のアンパンマンを指差した。

につこり笑って、両手両足を広げている、おなじみのポーズだ。そして、大きさもそこそこ。これなら、行けるかもしれない。

「わかった。でも、帰りの電車賃考えたら、そんな何回もできないからな。」

とれなくても、文句言っなよ？」

三百円を投入口にほう込むと、トライ回数2と表示された。
それを確認しつつ、前を見る。

「あと、其処から出なさい。
どんだけ物理干渉なくても、気がちつてとれるもんもとれん」

アンパンマンの海に顔だけ出す形でこちらを見上げていた少女は、キョトンとした顔でこちらを見た。しばらく考えた後、意中のアンパンマンにしばらくのバイバイを告げ、外に出て来た。
まったく、なんだかなーと、思わなくもない。

それでも、まあ、いいかと、思う。コイツの笑顔が見れるなら、それくらいは良いかと。そして、おれはさらにコイツの笑顔が見たくなって、お目当てのアンパンマンにアームを伸ばそうと、十時キーに手をかけた時だった。

思えば、そこからが本当の意味での、物語の始まりだった――
ように思う。

謳歌：相克する因果6：崩壊の序曲と不和：東利也&寿小羽

ゴン！と、アンパンマンを入れた巨体が揺れた。同時に、驚いた兄さまがキャッチボタンを間違っておしてしまい、変な所にアームが降りてしまった。アームはもちろん、何もつかんではいなかった。

「おまえ、ちょっとツラかせや」

私達に近づいてくる声は、とても静香で冷たいもの……けれど、その声を聞く――ただそれだけで、聞くものの心を震え上がらせる力を秘めていた。

そして、声の主は兄さまの隣――巨体で影になっている部分の床に手を伸ばすと、小柄な少年の身体を引きずりだした。

たぶん、先ほどの音は少年が機械にぶつかったもの。
つかみあげられた少年は見るからに青ざめ、ちじこまってしまっていた。

そんな少年を取り囲むように、四五人の少年達が集まってくる。
全員が全員、震える少年も含めて、同じ学校の制服を着ていた。

「おら、こっち来い」

震える少年に何も告げず、少年達はこぞってその場を後にしようとする。その間、携帯を取り出してどこかに掛けようとしていた女子高生に対して威嚇ともとれる言葉を吐いたのは、ぜったいに意図してやったことだ。

……このままでは、あの少年は彼らの「悪意」の餌食になってしまう！

「にいさま！
弥生兄さま！」

私は、兄さまの袖を引きながら、あの少年をどうか助けてくださいと申し出た。兄さまは、強い人だから。
たしかに、あの少年達全員を相手に暴力で勝つことは出来なくても、それでも兄さまなら、時間を稼げることができるはず。そうすれば、だれかが。

隙を見た誰かが警察に通報して、この場を治めてくれるはず！

「にいさま、なにをされているのですか！？
早く、あの者の元に！ でなければ、あの者は……！」

必死に語りかける私の声は、兄さまに届いているはずだった。それでも、兄さまはUFOキャッチャーの中の人形を見つめるばかり。ただただ静かに顔色一つ買えず、そのような――――――まるで臆病者がとるような、そんな、にいさまらしくない、そんな卑怯な選択を……兄さまは選び、そして、しばらくして、場は平穏を取り戻した。

その場にいた者たちは気の毒そうに連れ去れた少年の方を眺めていたが、しばらくすると、何事もなかったかのように、場には活気が戻った。

皆が皆、ほんとに何もなかったかのように、笑顔で会話やゲームを再開している。

「にいさま、まだ間に合います！」

弥生兄さま、今ならまだ！あのものたちも、そう遠くに行ってはいないでしょう！

……にいさま、こたえてください！ 兄さま、こたえて！」

その後すぐ、私たちは無言で駅に向かった。兄さまの片手には、私がおねだったアンパンマンが握られている。

あれからゲームを再開して兄さまは一発で人形をつかむと、その足でゲームセンターを出てしまったのだ。

私達は、無言で駅を目指す。

無言でどこかを目指し、そして――――

謳歌：相克する因果5：崩壊の序曲：東利也&寿小羽（後書き）

次回、謳歌：相克する因果7：不和と衝突：東利也&寿小羽です。

Tips - end point (前書き)

直接的に今回の物語には関係ありませんが、テーマとしては内包されています

Tips - end point

ハッピーエンドへ歪曲点：幸せって何だろう？

「幸せって何だろう」と問いかけることは多々あるが、「不幸ってなんだろう」と考えることはほとんどない。

幸せでないことが、不幸なのだろうか？

そうであれば、幸せと定義された状況以外は、すべて不幸となる。

不幸でないことは、幸せなのだろうか？

そうであるとするなら、不幸と定義された状況以外はすべて、幸福となる。

……直感的に、いずれも的を得ていない。

多くの場合我々は、不幸の中で常に嘆き悲しんでいるわけでもない。また、だからといって、常に幸福の園で微笑んでいるわけでもないのだから。

バッドエンドへ歪曲点：幸せって何だろう？

幸福と定義された状況のみが幸福で、不幸と定義されたものは不幸なのだろうか？

……ある意味では、正答だ。

おそらく我々は、恒常的に幸福でもなければ、不幸でもない存在である。

しかし、人という存在はそこから幸福と不幸をくみ上げることができる、希有な思考体でもあるのだ。

これは「個々の価値観や判断基準の違い」とは無視して起る、ある種の普遍性である。幸福のくみ上げという普遍性は、無数の価値観でもって、成される――故に。

故に、世界は歪曲する。

歪曲し、破綻する。

もし我々が「幸せな結末」という幻想を望むなら、それは幸福により定義された終わりではなく、不幸の否定により肯定された――消極的幸福以外には、成しえない奇跡であろう。

謳歌：相克する因果7：不和と衝突：東利也&寿小羽（前書き）

大好きな人にだからこそ、我がママが言いたくなるものですねー
よね？

たぶん……

謳歌：相克する因果7：不和と衝突：東利也&寿小羽

謳歌：相克する因果7：不和と衝突：東利也&寿小羽

電車を降り、私と兄さまは宿までのあぜ道を歩いていた。

先ほどまで空高くあった太陽は既に傾きかけ、代わりに夜の気配が私たちに滲みよっている。

けれど、地平線に沈み行く太陽は相変わらず私たちを優しく包み込み、温めてくれていた。それでも、私と兄さまの間に、会話は無い。

あれから―――にいさまが、彼のものを見捨ててから、私たちは一言も口をきいていなかった。

（あんなの、にいさまじゃない）

私の知るかつて兄さまは、もの静かで武力を好まない人ではあったけれど、臆病者ではなかった。

いざとなれば非力な民を守るべく、刀を携えて戦場に望まれることだってあった。

もちろん、それを出るだけ避けて通ろうとする人ではあつたけれど、それは自身の命が惜しいというような、そのような、自分本位な理由なんかではなかった。

（あんな臆病者が兄さまなわけが……）

……自分のどこからか沸き上がってくる嫌なものに、必死に蓋をする。

けれど、わたしの非力ではその蓋を閉じることが叶わず、空いた隙間から色んな感情が漏れだしてくる。

（あんな臆病者、にいさまなわけがない

名折れ
非道をみてみぬふりするなど、武士の

かつての兄さまはもっと強く聡明で、あんな、卑屈で卑怯者の影など、微塵もありはしなかった）

自然と、歩みが止まっていた。必死に気持ちを落ち着けようと思えばする程、体が固まって身動きが取れない。

それに悔しくて悔しくて、思わず涙がこぼれた。

兄さまは、尊敬できる方だった。

父上も母上も、そして婆やも、兄さまのことを誇りに思っていた。つしゃった。そして、それだけでなく、城下に住まうもたちもまた、未来の城主である兄さまを慕い、尊敬の念を抱いていた。

それも一重に、兄さまの人徳の賜物だと私は思っている。

そして、そんな兄さまの妹である私は、兄さまの妹であるという――ただそれだけで、多くの者達から愛を貰える立場にいた。私は姫である前に、国に住まう皆にとっては、敬愛する次期城主の妹だったのだ。

「おい、どうしたんだ。

ホテルはすぐそこだぞ。早くしないと、教官との約束の時間が……」

立ち止まっている私に気づき振り返った兄さまは、『私を直視せぬまま』に、帰路を促した。たったそれだけのことなのに、私の中にまた暗い想いが沸き上がる。

（あれが、あなたの大切な兄さまなの？まるで恥を知らないのかしら？

よく平気でいられるわよね？）

頭をよぎる、断続的な思考。まるで別の自分が、私の中に居るみたい。

私は必死にそれらを押さえ込もうと、再び蓋を押さえに掛かったけれど、押さえきれない。つぎつぎと湧き出てくる黒い靄が私の中にしみ出し、私を？み込もうとする。

「にいさま、なぜ、彼のモノを見捨てたのですか？」

思わずついて出た言葉だった。

そして、それは決して答えを望んだ問いではなく。

「……教官に迷惑をかけるわけにはいかなかったからだ。
『問題を起こさない限り、自由にして良い』——そう言って、教官は俺に一日の自由をくれたんぞ」

多少の間はあったけれど、兄さまは、迷わず答えた。
なんのためらいもなく、そう、言って退けた。

「俺は今日、本当ならホテルから一步も外に出られないはずだったんだ。
それを教官が……」

「もう止めて下さい、兄さま。それ以上は、恥の上塗りです」

兄さまの言葉を遮って、私は言い放った。
その一言に、嘘偽りはない。『ワタシ』は、たしかにそう想ったからこそ、口にした。

でも、それは兄さまも同じ。兄さまの言葉にも、一変の嘘偽りはない。だからこそ、兄さまとて、引きさがれるわけがなかった。

「だったら、なんで聞いたんだよ？
おれだって、自分がとった行動が恥ずべきものだって分かってる。
だけど、好きでああしたんじゃない。
教官との約束さえなければ、あいつらと一悶着起こしたって、ど
うってことなかった。
でも、おれが……」

なぜ、聞いたのか――そんなの、きまつてる。ただの、八つ当たりだ。ただの、いじわるだ。

自分の中で暴れるモノが押さえられず、その行き場を兄さまに求めた――ただ、それだけのこと

「にいさまは、恥ずかしくないのですか？

どれほど言い訳したところで、あのものを救う手はあつたはずです。それこそ、兄さまが隠れて警察に通報してもよかった！あの不敬の輩に隠れながら、そうすることも出来たはずです！」

自分で言っておきながら、その滑稽さに嗤いそうになる。

仮に、兄さまが警察に通報するにしても、それは無駄に手順を増やすだけで、結局のところ、兄さまの先生に迷惑をかけてしまう可能性は、無視できない。

「あの先生なら、にいさまが彼のモノのことで問題を起こしても、一緒になって罪を冠るくらいのことではして下さるはずです。あの方は、兄さまが思う程度量の小さい方ではないと、私は感じました」

口から出るのは、屁理屈ばかり。それは蓋の隙間から止めどなく溢れ出し、私の口を通して兄さまへと流れ出していた。

私は、もう涙なんて流していなかった。むしろ、清々しさを感じていた。

「兄さまは、けっきょくご自身の体裁を守りたかったただけではないのですか？それを、恩師との約束を守る為などと、そのように取り繕って……生まれ変わった兄さまは、新しい母上のなかに恥を置き忘れになられたのでは？」

兄さまの顔が、苦痛に歪んだ。そして同時に、そこには憤怒の色が見て取れる。

「そこまで、言うことか？
だから俺は、別に自分が正しいとは一言も……」

「なら、言い訳などしないはずです。兄さまは、自分のことを正当化する為に、さきほど口を開かれたのでしょうか？」

私は幼くとも、それくらいは分かります。

あああ、情けない！そんなの、兄さまらしくもない！前の兄さまはもっと優しくて、強かった！

気高く、尊敬に値する方でした！なのに、今の兄さまは！」

嬉々として、私は兄さまを責め立てていた。そのことは私にこれまで感じたことのない高揚感をもたらし、「臆病な私」を脇に追いやって、今や、弱い私はすでに……

「いいかげんにしろ！
なんなんだよ、いつたい！おまえ、いつたいなにが良かったんだ！？」

突然放たれた怒気に、私を包んでいた熱は跡形もなく吹き飛ばされた。はたと、私は自分に還る。

そして同時に、あれほどまでに暴れていた蓋は今や虫の息もたてず、まるで何事もなかったかのように、静寂をもって私の中に鎮座していた。

急に、足下がぐにやりと歪む。足下が不安定になり、自分がどこに居るのか分からなくなる。

「ふざけるなよ、お前に俺の何が分かるって言うんだ！

なにが恥知らずだ！ なにが、情けないだ！ かつてに取り憑いて前の兄貴が、なんだって！？ 今の兄貴が、なんだ！？ そんなに前の兄貴がいいなら、そいつのどこに行けばいいだろうが！

そもそも、俺はお前の……！！！」

心臓が、握りつぶされるかと思った。

最後の一言――兄さまが寸でのところで？ み込んだ一言が、もし私の中に響いていたのなら。

それは、実際には兄さまの中に？ み込まれてしまったもので、わたしはそれを想像するしかないのだけれど、それでも。

その言の葉は、私の心の臓を抉っていたはず。

いや。

ぜったいに、「わたし」は死んでいた。

「ごめんなさい、にいさま、わたしは……！わたしは、にいさま……！」

ぐにやりと歪む世界を前に、私は大声で泣き出してしまった。

とても悲しくて苦しくて、そして、恐ろしくて。

悪いのは私で、兄さまは何も悪くないのに、こんなのは、最悪だと思う。

恥知らずなのは、私だ。こうして泣いてしまえば、兄さまはきっと許してくれるーきつと、なかったことにしてくれる。

そう分かっているからこそ、私は泣いて泣くことーしか、出来なかった。

「つつう！なんだよ、もう！

ああもう、泣くな！頼むから、泣くなって！」

しゃがみ込んで泣きじゃくる私のもとに、兄さまはどかどかとやってきた。

そして、私を抱き上げてしまった。下を向いて泣いていたはずなのに、私の目には兄さまの顔が映っている。

その表情は、私に酷いことを言われたときよりも、さらに。

「泣くな！悪かったから！それに、大人げなかった。

でも、だからといって、お前だって悪いんだぞ！？
だれだって、あそこまで言われたら……」

なぜかは分からないけれど、兄さまも泣いているように見えた。
実際は、涙なんて兄さまは流していなくて、私からぼたぼたと落ちる雫が兄さまの頬を伝っているだけだったのだけれど、それでも、兄さまは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「うつつ、えええん」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

兄さまの胸に顔を埋めて、私はひたすらに泣きじゃくった。
その間兄さまは、人目もはばからず、ずっと私の背中をさすり続けてくれていた。

私を抱きかかえてくれる兄さまの腕は力強く、背中をさすってくれる手からは、温もりが感じられる。

それは、色あせることなく私の中にある、かつての兄さまが宿していたもの――同じ輝きを秘めていたように、思えた。

それからしばらくして、にいさまは眠ってしまった私を連れて、ホテルに戻られたらしい。でも、私自身は、そのときのことをよくは覚えていない。だから、何時から私の兄さまが「偽物」と入れ替わっていたのかなんて――このときの私は知る由もなかった。

謳歌：相克する因果7：不和と衝突：東利也&寿小羽（後書き）

謳歌：歪曲する因果3：迷走する想い1：東利也&峰岸燈火

この辺から、東君のテーマです。すなわち、『汝の名を問う』です。

無限想歌：超えるべきもの：兄妹（前書き）

自分自身は何者なのか――ということを明言することは、たやす
いことではありません。

では、上の文の『自分』を「あのひと（他人）」に置き換えた
と
きは？

漠然とではありますが、自分のときよりも、答えが出やすいは
ず
……？

無限想歌：超えるべきもの：兄妹

t i p s 超えるべきもの：自己から成る因果：寿小羽

因果というと、

なぜか「線」としてイメージされることが多い。それは、この世界の基盤が科学（あるいは類似の技法）の上に成立しているためだと思われる。

しかし実際は、それほど単純ではない。ある意味では、因果は二次元としても表現できるし、その積算としての、三次元でも表現しうる。

要は、スケールの問題なのだ。「線」まで落とし込める因果と、「立体」まで引き上げられる因果――あるいは、その先もまた、然り。もし、科学でこれら階層間の連続性をひも解こうとすれば、どこかに捻れが生じるのが定石。

……そうであるからこそ、「屁理屈」は成立する。

T i p s 超えるべきもの：縁：東利也

いつだって、人という存在は勝手なものだ。

自身が何者であるかも分からぬくせに、他人には「こうあるべき」と説く――あるいは、「そう在ること」を切望する。

そして仮に、自身を定義できるものであつたとしても、「そのモノが抱く自身像」と「真実のそれ」とはかけ離れていることが多い――それは、葛藤として、定義したものの自身を苛むことになる。

そうであつたとしても、避けてはならない。その葛藤は、たとえば答えが出ないものだとしても……それでも、確実に葛藤者は、その亀裂の先で、真実へと近づけるのだから。

無限想歌：超えるべきもの：兄妹（後書き）

東君が超えるべきものは、縁。

あるいは、それが与える影響力です。これは、「二次元（面のよ
うな）の因果」を想定しています。

んで、小羽ちゃんはまだ小さいということで、単純に自分自身を。
これは、一次元（線のような）の因果を想定しています。

まあ、実際のところ、二つにはあんまり差はないのですが、物語
りの構造上、そういう設定にしております。その意味は、あとあと
表現できればと思っています。

今回は、謳歌：歪曲する因果3：迷走する想い1：東利也&峰岸
燈火です。此処から先しばらく、兄妹は別行動です。そして、それ
ぞれの超えるべきものと向かい合ってもらいます。

歪曲する因果3：迷走する想い1：東利也&峰岸燈火（前書き）

一度やってみたかったネタです。もちろん事態（東くんが抱える）は、深刻なままなんです。けれど、それは他の人たちにはあまり関係ないことということで。

（その他の人たちが悪いのではなく、東君にも責があるんですけどね。）

歪曲する因果3：迷走する想い1：東利也&峰岸燈火

例えばの話なんだけれど。

そう例えば、漫画なんかじゃ主人公が偶発的にヒロインの風呂や着替え現場に出くわしたとしても、「ツンデレ」的展開で事は収まる。

……いや、ツンデレの使い方は違いかもしらんが、それはどうでもいい。というより、そもそも何がどうしたら幼なじみやクラスメイト女子の「そういつたシーン」に出くわすことがあるのか（いや、ない）。そう、ないはず。ありえない。あつてはならない。なのに……！！！！

「ねえ、あんた。右目と左目、どっちから先にくり抜かれたい？」

たぶん、「何が何でも両の目をくり抜いてやるぞ、コラ」って言うっているであろう峰岸は、おれの左斜め前方、やく1メートルの位置で震えている。バスタオル姿で。そして、そんな格好で震えている理由はもちろん寒いから……ではないだろう。

湯気を立たせながら峰岸は、冷めた人殺しの目で、玄関先で靴を脱ぎかけたまま固まる俺を見すえ、指をぽきぽきと鳴らしていた。ちなみにこんな状況でなんだけれど、肩甲骨が、俺的にいい感じだ。

「……はは」

あまりにもあまりすぎて、頭がついていけない。だってここは、俺たちの部屋のはず。俺は確かに、「キヨ達から受け取った俺たちの班部屋」の鍵を使って、この部屋に入ったんだ。だったら、俺が今居るこの場所は、その部屋の玄関のはず。

……もちろん、俺たちはお年頃ということもあって、男女は別々（他にも家柄的理由があるけど）。だから、「俺たちの部屋」で峰岸がシャワーあびてるなんてこと……

「盛りのついた駄馬が……
人が情けで呼びもどしてやったのに、礼を夜這いで返そうとするとはね……」

ゆらりと幽鬼のように音もなく動いた峰岸は、すすつと居間に身を隠した。風呂場と居間と玄関は廊下一枚で隣接しており、それらはそれぞれ曇り硝子と障子で玄関からは見えない。

風呂場は、曇り硝子どうこうの前に、電気がついておらず、その

先はまったく見えない。ただ、さすがにもう誰も入っていないと思う。

そして、たつた今峰岸が身を隠したであろう居間からは、ガソゴソと何かを探す音と、かすかな衣擦れの音が聞こえてきた――それはきつと、峰岸が服を着ている音がだと信じたい。

けれど、それにしても衣擦れの音は異様に短かった。服を着ているにしては、「シュ！」くらいだった。そんなはや芸みたいに着れるもん、たぶん、この世にはないと思う。

「……」

無言で立ち尽くす俺――だったが、そんなことしてる場合じゃないってことに気づく。

ゆっくりと、半歩足を引き、後ろ手でドアノブを掴んだ瞬間だった。

「……（怒）」

悪鬼が、居た。いや、戻ってきたという方が正しいだろうか――

「木刀掲げて。」

女性用なのか、はたまた子供用なのか、どちらにしても小柄な峰岸が持つと、様になっている。

彼女は、右手の木刀、左手の布切れ（たぶん鞘的布？）を握りしめて、こちらに近づいてきていた。

ちょっと見ない間に、武器は豪勢になっている。ただ、防具は依然としてバスタオル一枚。

「なにか、いうことないの？」

震える声で、峰岸が問うた。イントネーション的には、怒りのボルトージと同調してか、最後が上がり気味。で、その声に呼応するように、木刀もぶるぶると振り上げられた。

もう、逃げ場はない。おれは、たった一言で、この場を乗り切らなければならぬらしい……。ははは。

「ははは……はー！」

ちなみにさいしょの「ははは」は心の声がそのまま声帯を震えさせた結果にじみ出た心の声で、最後の「は！」は、「やっちまったよ、俺のバカ！」の、「は！」。

もちろん俺は、やっちまったと悟った――だからこそ、すぐさま行動に移す。

ドアノブをおもいつきり、俺はひねった。もう、それしか生き残る術はなかったから。でも、おれがドアの隙間から滑り出る前に、振り下ろされた木刀が俺の脳天を強打。そして俺はそのまま、深い闇の中に意識を沈めることになった。

模範的高校生である赤石美奈はそのとき、「2005号」室の前をたまたま通りかかったただけであった。彼女はあくまでも模範的高校生という設定であるため、いわゆるモブキャラなのである。だから、物語の構造上、彼女が2005号室の前を通った理由など、設定されていない……とはいいつつ、物語のつごうがどうであるかなどとは、それこそ、そんなことは彼女に関係のないことである。

彼女はただ単に、2005号室の横にある自販機でジュースを買ったあと、その部屋の前を横切って、自分の部屋に戻ろうとしていただけなのである。しかし。

「ひ！」

とつぜん、通り過ぎかけた2005号室のドアが開いたかと思うと、そこから、「現在の学園で知らぬものはいない男子A君」が、白目を剥いて倒れ込んだのだ。

彼女はもちろん模範的学生であったので、彼が床に叩き付けられないように、その身を支えた――ゆっくりと、視界でドアが開いてゆく。

「ひひひひひひ！！！！」

そして、再度彼女は悲鳴を上げることになった。なぜならそのドアからは、ほんとに意味不明なのであるが、バスタオル一枚きりを身にまとった学園の主峰岸燈火が、木刀片手に、血走った目で、ぬるりと登場したためである。

峰岸は、『あんたは、なにも聞いてないし、見ていない。……そのバ力を、こちらに渡して』

この峰岸に対し、赤石は『私は何も聞いていませんし、何も見ていません……この人を、お渡しします』と、模範生としては100点の切り返しを行った。ほんとうは、「これでも平均よ!」という魂の叫びと（おそらく身長の平均では絶対じゃないし、あっちの方にしても、四捨五入してる）、涙で滲んだ真っ赤な瞳を見ているのだが、それは、それ。

「ありがとう、もう、いつて」

こう言い残し、瀬戸の鬼姫峰岸は、ずるずると少年Aを引きずりながら、ドアの向こうへと消えた。

パタンとその場に崩れる赤石。彼女は、彼女の帰りが遅いことを心配した友人が探しにきてくれるまで、そこで惚けて座り込むことになるのだが……そして、これはまったくの余談ではあるが、惚けて座り込んでいた彼女の横には2005号室と割り振られた部屋の鍵が、落っこちていたという。

歪曲する因果3：迷走する想い1：東利也&峰岸燈火（後書き）

歪曲する因果3：迷走する想い2：朝霧&瀬戸&キヨ

東君がぶっ飛ばされるに至った経緯を、語ります。

歪曲する因果3：迷走する想い2：朝霧&瀬戸&キヨ（前書き）

東君の意図しない所で、各々の意志は働きます。

それらは、やはり各々が意図したわけではないカタチで、それぞれに影響を及ぼし合うことに――それが、縁というものではないでしょうか？

歪曲する因果3：迷走する想い2：朝霧&瀬戸&キヨ

爆笑する瀬戸を前に、俺こと菅原清は、頭を抱えていた。

「……いや、俺だけじゃなく、他のオトコ連中も、似たような感じ。そして、そんな俺たちを尻目に朝霧はしたり顔。さっきまで全力で不機嫌だったくせに、今は鼻歌でも歌いだすんじゃないかろうかというくらいに機嫌よく、普段なら絶対に口にしないような安物ホテルコーヒーを口へと運んでいた。

「ねえ、菅原君、良い言い訳はあった？」

微笑を携えて問う朝霧の前――つまりは、俺の目の前にもあたるわけだけど、その、目の前のテーブルには、一本の鍵が置かれている。何の鍵かといえば、部屋の鍵だ。

鍵に彫られたIDは3012号。これを使えば、今夜の「俺たちの部屋」に入れる。うん、入れる。それは、別に問題はない。ただ、その鍵が今此处にあることが問題なんだ………

『東君が峰岸さんとこに夜這いしてたって！嘘じゃないよ！うちの娘が峰岸さんの部屋からころがりでくる東君を見たって！しかも、白目剥いてたって！きゃー！！！！どんだけ激しかったんだろうっね！』

遠くから聞こえてくる黄色い声で、さらに頭が重くなる。

『俺が聞いた感じは、東の夜這いじゃないな。』

峰岸さんの方が、東を木刀で襲ったんだろ？で、殴打気絶させて部屋にお持ち帰りしちまったって……。あ？東には息吹さんがいるのにだって？そんなのシラネエよ。まあ、あいつ、一回捕まっておきながらなんとか逃げ出そうとしたらしいな。

でも、結局捕まったと。それが、白目剥いて部屋から転がり出た――ときだっけ？んで、そんなときまたま近くにいた娘が、バスタオル姿の峰岸さんが木刀片手に東を部屋に引きずり込むのが見たって……。聞いてる』

先ほどから俺たちの周りを右往左往する東と峰岸の猥談。

縦横無尽に駆け巡るそれら噂話のどれもが、真偽が見定められないものばかりだ。けれど、どの話にも共通していることがある。

それは、バスローブ姿の峰岸武者と白目廃人東の存在。そして、どの話でも最終的に、武者が木刀ちらつかせながら廃人を部屋に引きずりこむ……。きずりこむ……。

「峰岸、大胆じゃない！？バスローブ姿で東を誘惑とは、いやはや。

しかも木刀って、それ絶対私のだよな？　あの、嵐山で買ったやつ
！」

テンション高めに横でぎゃあぎゃあ騒ぐ瀬戸にジロリと一瞥く
れてやるが、なんてことはない。普通にスルーされた。

というより逆に、きらきらした目で見つめ返されたよ！

「いや、瀬戸よ。おまえ、ちょっと能天気すぎねえ？」

場違いすぎるテンションを諫めようと、瀬戸の声をかけるが、
なんてことはない。それどころか。

「いい気味。今日一日好き勝手やった罰があつたのよ。でも、あの
娘からすれば役得かしらね？」

惚れた男に裸を見られたんだもの……ふふ」

小声で「貧相な体をね」と続いたのは、聞こえなかったことにし
ておく……それはそれとして。

「なあ、おまえら二人、マジで俺が鍵取りまちがえて渡したの気が
つかなかったわけ？」

ぼつりと、問うた。二人の女子に。

大した意味もないだし、返答だって、予測できる。でも、聞かすにはいられなかった。

「わたしは、全然気づかなかった」

「わたしは気づいてたけど、おもしろくなりそうだったから、ほつといた」

前者の返答が朝霧で、後者が瀬戸。二人の答えを信じるなら、瀬戸だけでも「おい、瀬戸！」って攻めたくなるが、絶対に朝霧も気づいていたとは思えない……

今日一日の俺たちつてのは、悲惨なものだった。本当なら、俺たち男子の班と+峰岸率いる女子班innUSJで楽しい想い出をつくってるはずだったのに……それがおじゃんなった理由としては、

女性陣の機嫌が悪過ぎたといったもの以外考えられない。

機嫌が悪かった女子は主に二人で、まあ、班に三人しか女子が居ないのだから、もうそれだけで女子の不機嫌率は概算しても70%に届くかという感じだ。

一人が峰岸で、一人が朝霧。二人の不機嫌の悪さは「ドングリの背比べ+天井知らず」くらいで、要は、双壁を成してmaxに機嫌がわるかった。そして各々の不機嫌の理由は、別個にある。

……峰岸に関しては、まあ、だいたい検討がつく。

我らが姫様の不機嫌の一つの原因としては、想い出作りの最終イベントの地にて、大好きな二人がそろって不在だったことがあると思う。

東に関しては言わずもがな。あいつは、伊吹先輩とニヤンニヤンしてることが学校側にバレて、その罰則で別の旅館に軟禁されてたで、もうひとりの、どんなことがあっても片時も峰岸の側を離れないはずの、側近で親友の久遠が……風邪で倒れたとか何とかで、今日のUSJを欠席。

たぶん、久遠の方は嘘だと思う。東の方はどうかは知らないが、明らかに久遠は「風邪」が理由で参加できなかったんじゃない。その根拠としては、「なんか色々あったけど、最後は皆で楽しく遊びましょう」……ってなっている中、峰岸が頻繁に席を外して――「だれか」と携帯で話していたことが、挙げられる。

もちろん、峰岸が誰と何を話していたかなんて、知る由もない。

けれど、基本的に峰岸は無駄なことが嫌いで、用件を分割して話されるとなると、普通にキレる。いわんや、携帯とかならなおさらだ。なのに、遠目に見る携帯に耳を当てた峰岸の表情つてのは真剣そのもの。多少の陰りはあった気がするが、少なくとも、電話先の相手への怒りはなさそうだった。ーってところから、絶対に相手は久遠しか思い浮かばない。少なくとも、「仲がいい」くらいの俺たちがチヨロチヨロ電話で話そうものなら、「そっちに行くから待つてなさい」か、「ハッキリもの言いなさいよ」のどちら二択が受話器越しに聞こえてくると思う。

あと、電話の相手が「家」関連ってことも考えられるが、それはないだろう。それこそ、峰岸に限らず、『峰岸』つてのは総じて無駄を嫌う傾向にある。よく考えて、パツと動くーそれが、家訓であると。

そう、峰岸本人が言っていたしな。

……さて、それはいい。まあ、それはいいよ。峰岸が俺たちに対して自己中心的な行動をとるのは、いつものことだから。

問題は、朝霧の方。

こっちは普段から俺たちに優しく接してくれる、女神様みたいなやつで、基本的に礼儀正しく、和を重んじる性格。

そのせいか、峰岸とは折が合わない。

というのも、峰岸は身内には包み隠さず素を出すようで、要は、身近な人間に程、彼女は我がままになる。

それは、久遠からすれば「甘えているだけ」らしいが、その甘え方が猫のアマガミのふりして、ライオンの一噛におよぶもので、だからこそというかなんというか、そう、「度が過ぎてる」。

今日も今日とて峰岸は所かまわず、電話のために、席を立った。もちろん、断わりの一言くらい入れていくものの、数が数だ。だいたい三十分おきくらいに峰岸は席を外していたと思う。

もちろんその間は俺たちも好き勝手は出来ず、結果として。

「あの娘、最近ちょっと調子に乗り過ぎじゃない？」

と、朝霧は「ぬっころす！」という気概を隠しもせずに、峰岸を影から見ていた（さすがに真正面からはやらなかったけど）。

峰岸もバカじゃないから、俺たちの空気は察知してたいはず。それでも、やはり電話の方を優先していた。それで、結局、そんなこんなで俺たちはぴりぴりした一日を過ごすはめになったというわけ。

一日を振り返っても胃が痛むだけなので、もう思い出さないことにしよう。

なんにせよ、俺たちはUSJで一日を過ごし、旅行最後の宿である、大阪のビジネスホテルに荷物を下ろした。前日は京都だったが、今日は大阪だ。

当然ホテルも変わってるし、部屋も変わってる。

俺たちは各々の部屋の鍵を受け取り、荷物を下ろしに部屋へと向かった。普段の俺たちなら自分で自分の荷物を運ぶなんてことはないのだが（というより、やったらアウト）、最終日のホテルはあくまでも庶民が利用するホテルなのでそこは庶民に合わせるしかないかった。

そして、俺たちは狭い部屋に荷を下ろすとすぐに、フロントへと向かった。幾分騒がしい気がしたが、それでも部屋よりはマシだった。

それに、なによりも女性陣が居ないということだけで肩の力が抜けており、俺たち三人はそのへんのソファアーに腰を沈めた。

することもなく、だからといって夕食までだいぶ時間があつたため、ソファアーでくだらない話をだべっていると、朝霧と瀬戸がやってきた。

朝霧は、相変わらず不機嫌そうだった。話を聞くと、部屋が気に入らないらしい……気持ちは分からなくもないが。

んで、どんなカタチであれ、修学旅行の自由時間を一緒に過ごしてきたわけで、それなりの親近感つてのも出来上がってる……のか、当然のように朝霧と瀬戸も俺たちの話に混ざろうと、席をつくれと言ってくる。

本当は大の高校生が5人も集まれる程広い場所じゃなかったが、瀬戸が俺の正面……つまりは、金森が据わっているソファの肘掛けに、さらには、朝霧が隣に座っていた坂石をソファから追出し、そこに腰を降ろすことで、場は収まった。若干坂石が哀れだったが、そこはスルーだ……ここまでは、いい。

ここまでは、問題ない。問題は、此处からだ。

そこから、なんてことない話をしばらくした。それはホテルの微妙な部屋に対する不満だったり、なんだかんだで楽しかったから学園に戻りたくないよなーなんていう願望だったり、あるいは、「ところで峰岸は？」という、女子が仲間割れしていないかを伺う何気ない会話だったり。

で、この「峰岸は？」ってのに、瀬戸が「あの娘は今……」って答えようとしたところに、東が現れた。

最初こそ、「なんで此处にいの？」ってなった。それは他でもない、当の本人がそう思っていることらしく、「明日の便に遅刻するものなんだからって教官に言われたんだけど……な？」と言いだからといって、「同じホテルに戻してくれるなんて思わなかった

けど」と付け加えた。

……内心、そこに居る全員が此処に居ないある人物の顔を脳裏に浮かべたろうが、だれもそいつの名を口には出さなかった。それは、無粋ってmondakaから。

「ほら、鍵。荷物おいてこいよ」

俺は確かに、目の前においてあったの「3012」の鍵を東に手渡したはずだった。そしてあいつは鍵を受けとり、荷物を置きに、俺たちの部屋へと――。

……たしかに、目の前のテーブルには瀬戸たちの部屋の鍵も一緒に二つ並べておいてあった。それも、確かだ。けれど、自分たちの鍵と女子部屋の鍵を間違えるはずがない。だって、俺は確かに、俺の「目の前」に自分たちの鍵をおいていたんだ。あとから合流した瀬戸も鍵をテーブルに転がしたが、それは俺の目の前じゃなく――正確にどこかは覚えてないが、少なくとも、俺の目の前じゃなかったことだけは、確かだった――はずなのに。

「ねえ、聞いた？東君と峰岸さんがね――」

俺の前には、「3012」号室の鍵が残っている。これは本来なら、東が持っているべきもので、それが、俺の前——と、ちょっと横にずれた位置。

「朝霧の目の前」に、残されていた。おれがぼけていないなら、鍵が移動しているとは思えない。そして、鍵に足がついているわけでもなく。故に——

自然と、朝霧の方に目がいく。あるとき、俺たちが東にほんの少し気をとられている時、こいつは何をしていたのだろう？

「なに、キヨくん？

何か、言いたいことがあるみたいね？」

朗らかに笑みを返す朝霧を直視できない。たぶん——というか絶対、こいつが鍵をすり替えたんはずなんだが、でも、それを言ったところでちゃんと確認もせずに渡した俺が一番悪い。

誰に責があるかと言われれば、俺だ。

「おまえ、何がしたかったわけ？」

責は俺にある。だから、俺は朝霧に問うた。責任の所在ではなく、その、意図を。

すると、こいつは悪びれもせず、こう、答えた。

「うん？」

べつに、なにも？ただ、コーヒーをおいしく飲みたかっただけ。ただ、それだけよ」――と。

歪曲する因果3：迷走する想い2：朝霧&瀬戸&キヨ（後書き）

次回は、歪曲する因果3：迷走する想い3：東&峰岸です。

部屋に引きずり込まれた東君と、部屋に引きずり込んだ峰岸さんに、視点は変わります。

t i p s シュレディンガーの鳥（前書き）

ネコじゃなくて、鳥です。

t i p s シュレディンガーの鳥

T i p s 相克する因果と、重ね合わせの原理

全ての世界には、一つの伝説が共通して存在している。それらは総じて「幸福の鳥譚」として名付けられ、語り継がれている。

その大筋は、こうである。

□

アオイトリは、『存在』の発生初期から変わること無く、幾つもの世界と供にあり続ける。

そして、その瞳にあまたの世界を重ね合わせ続けている。

……彼のモノ瞳はその本質故に、夜目が効かない。つまりは、彼の鳥は「闇」を見通すことなどで来るはずもなく――そのことは転じて、彼の鳥は光の中に存在するモノのみを、その瞳に映す――幸福の化身である。

闇以外の存在を、無限に映す瞳を持つモノ。

もし、彼の者の瞳を手に入れることが出来れば、そのモノは誰も到達し得ない、幸福の階層へと到達できるやもしれぬ。

『

……じつに、くだらない話である。しかし、だとしても、その「幻想」は残念ながら、存在する。

いつの時代も、どんな場所でも、その鳥の存在は真しやかにささやかれ続けていた。

誰も見た者などいなくせに、「それ」は側に居ると。ほんの少し視点を变えるだけで、それは目の前に姿を現すと――そう信じられ、語り継がれて来た。

もし。

もし、彼の鳥が存在するとして、彼は私達をその瞳に映しているのだろうか？

人とは、持たざるが故に、望む存在だ。そして、望むが故に、手を伸ばす。

つまりは、その瞳を求める時点で、その、瞳には――

歪曲する因果3：迷走する想い3：東&峰岸

とりあえず白目でネている馬鹿の横で、服を着た。そして今、私は考えている――さて、どうするかと。

（こいつ、いつこうに起きないわね……呼吸はあるから大丈夫だとは思っけど）

どうするかと悩んだ所で、にっちもさっちもいかない。

なぜなら、さきほど煩惱を撲殺してやったはずの馬鹿が、起きないのだ。

そして、未だに白目をむいたまま。こいつを放置して部屋を出るわけにも行かないし、こいつを引きずって外に出たくもない……どう考えた所で、他の連中の肴になるのが目に見えているから。

（ほんつとくに、こいつつてば、間が悪いんだから……そんなんだから、怨念なんてモノに取り付かれるのよ！）

持っている木刀（煩惱破魔の剣と命名）でちょんちょんとつついてみても、やはり起きる気配はない……なんだか一気に気が抜けてしまう。

そのせいかな、わたしはなんだか色んなことがばかしくなってしまうた。

とりあえず、馬鹿から距離を取り、腰を下ろす。

背を壁に預けて、今一度深く深呼吸をし、目の前の馬鹿を見つめ直したー！ 本当に、自分でもこいつのどこに惚れたのかー！ なんて、頭を抱えなくなってくる。

私は、東利也という男子のことが好きだ。
愛しているとは言わないけれど、好意は寄せている。

その気持ちの始まりを考えてみるけれど、特に何かがあって、彼を意識しだしたのでは無いと思う。

……目の前にいる、白目をむいて眠る東と言う男は、「ただ」の男だ。どこをどうとつても、普通の男。

それこそ、「まあまあ」の代表格みたいな男なんだ。

ルックスは、まあまあ。

頭の出来も、まあまあ。

性格は、悪くはない。

人当たりも悪くない。

さて、じゃあ、コイツのどこに惚れた？わたしは、コイツのどこに好意を寄せている？

私にとって、こいつはいたいーーーーーなんてこと、考えるだけ無駄なのだろうか。

（入学を心より歓迎するよ、峰岸のお嬢さん……そして、久遠の姫君。我が学園へ、ようこそ。私がこの学園の設立者である……）

……いつかの、記憶だ。わたしが、初めて、東利也を知ったときの記憶。思い返せば、最初の対面は、無機質な書類越しだった。

今思い返しても、あんまりかつこ良くなかった気がする。たしか、こいつがなんなの？ って思った記憶があるし。

……そんな書類の間には挟んで、成功者を名乗る男は、わたしたちの入学を心より歓迎すると謳った。わたしという『峰岸』と、栞という『久遠』が入学することを、此处より歓迎すると……

それは、それまで何度も受けた通過儀礼だった。

私はあくまでも、だれにとつても、『峰岸』だった。それは、栞にしても同じこと。

私は『峰岸』の三女で、家を継ぐ立場には無かったが、それでもどこでも、『峰岸』として扱われた。

……確かに、家における私の発言力は、栞のおかげでそこそこある。けれど、上には三人の兄と、2人の姉が居る……家の中で

も、私の格付けは、末席に近い。

（さて、君たちにはぜひお願いしたいことがある。縁を紡ぐことを生業としている君にこそ、任せたい大役があるんだよ）

……成功者は、ただの年老いた老人だった。もし、あのとき隣に菜がいてくれなければ、失笑を浮かべていたかもしれない――それほどまでに、彼のモノには、覇者としてもオーラが微塵も感じられなかった。

（表向き、この学園は私の後継者を集う機関となっているわけだが……この学園の真の存在意義は、ヒーローの育成にある。いや、彼らのための、環境と整えると表現した方が――）

彼は、ヒーローのために学園を創り上げたと言っただけだ。この縁の仲介を生業とする『峰岸』を前にして、彼は「それが本来の目的である」と語ったのだ。それは、つまるところ――

t i p s シュレインガーの鳥（後書き）

ミクロの階層と、マクロの階層。

それを超える存在が、シュレインガーの鳥です。

これは、幸福の定義の方でも（戦争の発生機序＝マクロ、感情論＝ミクロ）絡めたいと思っているテーマです。

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸（前書き）

峰岸という、歴史についてのお話です。

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸

私は、峰岸燈火。名字が峰岸で、名が燈火。

私自身、最近まで自分の名前について深く考えたことがなかった。

名とはあくまでも呼称であり、記号。

個人を識別するためのものであり、それ以上でもそれ以下でもない――本当に、最近までそう思っていた。そう、あのバ力に出会うまでは。

……友人知人の多くは私のことを名ではなく、『峰岸』と呼ぶ。そのときの『峰岸』はあくまでも『峰岸』であり、峰岸ではない。

『峰岸』とは私の名字である以前に、一族の冠だ。

故に、他者が私を『峰岸』と呼ぶ時、ほとんどの場合、彼らは私ではなく、私の背景である――『峰岸』を見据えている。

そんな『峰岸』に、わたしは属している。この一族は世界でも有数の名家であり、実質的な干渉力を同時に併せ持っている。

つまりは、歴史ある『峰岸』は生きた化石などではなく、現役で世界の最前線に立つ存在だということだ。

だからこそ私は、瀬戸高校への入学を許可された。ここに集う学生には、様々なバックグラウンドがある。本当にそれこそ、無数に。そういった学生が集まる瀬戸高校にあっても『峰岸』という背景は異色を誇っており、皆から一目置かれている。

……私の一族の背景を一言で表現しろと言われた場合、そこには「仲介屋」以外に表現のしようがない。

私たちは古来より、「他者と他者の中を取り持つこと」を生業として生きてきた。

仲介するもの同士の素性は多岐に渡り、そこに制限はない。

誰かが誰かを必要とすれば、その必要とされている誰かを見つけ出し――その者を欲する者へと導く。もちろん、そこには両者の需要が合致することが必須の条件とはなってくるのだけれど、逆を言えば、そこを取り持つ力に長けていること――それが、『峰岸』の力となっている。

『峰岸』が身を置く仲介産業と呼ばれる分野は、非常にデリケートだ。この領域は「信用のみ」で成り立っているもので、一度の失敗すら許されない。今の時代、もっとも強力な武器は「情報」だ。核兵器でもなく、ましてや魔法でもない。

私たちは、私たちに対する信頼を保証として、他者同士を結びつける。

その行為はうまくいけば、さらなる信用を生む。けれど、そこに

少しでも齟齬が生じれば、とたんに信用は失われ、商いは廻らなくなる。

もともと、「わたしたち」自身には、何の特異性もない。私たちは自身には、何もない。けれど、他者の特異の凹凸を利用することを「自身の特異」とすることで、現在の地位まで昇り詰めた。

もちろん、これは唯人が成せる者ではないし、ある意味では立派な特異だとも言える。けれど、この特異は元々私たち『峰岸』のものではない。正確には、『久遠』の一族のものだ。

『久遠』は、私の親友である栞が属する一族の名であり、彼らは物事の背景を見通す『靈視』という異能を血筋的に有している。

この力は「縁」という個人同士の繋がりを辿って、芽づる式に個人にまつわる情報を閲覧できるものらしい。しかも、それに時空間的な制約はなく、地球の反対だろうが100年前のことだろうが、繋がってさえ居れば、そこに至るまでの道筋も含めて、見つけ出すことが出来るというから驚き。そして、そんな久遠の異能に私のご先祖様が目をつけて商売に転用したことが、今の『峰岸』と『久遠』の始まりだと言われている。

なんともまあ、あれなご先祖様だと思う。

でも、そんなご先祖様だったからこそ、『久遠』は『峰岸』の手を取ったとも伝えられている。

久遠の一族は、その力のためか、かつては酷い迫害を受けていた。そして、それを救い上げたのが、私の先祖である『峰岸』の者だったということだ。私のご先祖様は『久遠』の血を商売に転用するよな人だったので、これっぽっちも彼らを恐れなかったらしい。というより、そこは商人として遅しく、一步踏み込んだと言っているのかもしれない。

でも、これはあくまでも『峰岸』に伝わる言い伝えで、真相の程は定かではない。けれど、『久遠』の者達が永きに渡って無償の奉仕を捧げてくれる事実が、その証明かもしれない。

「あなたたちが忘れてしまっても、私たちは覚えている。ほんの少し目を凝らせば、それは此処に在るの」

初めて棗に引き合わされた時、彼女が私に向かって言った言葉だ。彼女は胸を押さえながら、そう言って、私に微笑みくれた。

「皆が私たちに石と罵声を投げる中、あなたたちは笑顔とお握りを放り投げてくれた。皆が私たちを化け物と呼ぶ中であって、あなたたちはぶっきらぼう

に名で呼んでくれた。

皆が私たちの死を願うに至ったときは、私たちと一緒にになって逃げ回る惨めな生を選んでくれた」

栞は、「よろしくね」と私の手を取った。

対してわたしは「よろしく」と、ちよつとだけおどおどしながら彼女の手をとったのを、今でも覚えている。

……あれから、十数年の月日が流れた。そして、私の傍らにはあのころと変わらず、栞が居る。『久遠』として、『峰岸』である私の隣に。栞として、親友である燈火の横で、彼女は私に微笑みを投げかけてくれていた。

まあ、こんな背景を持つ、『峰岸』の一族だ。

もし、成功者が本気で「持たざるヒーロー」の力とするために、自身の後継者というエサで名家の子息を学園に集めているのならば。

『峰岸』という力は、喉から手が出る程欲しかったはずだ。だからこそ、入学当日直々に私と栞を呼び出して、自身の意図を伝えたのだろう。

しかし、それは一步間違えれば、学園の崩壊にも繋がる行為だったはず。私たちが有するコネクションは広大で、その上結びつきは強い。私がこの事を家に上げ、他のものに広めた場合――。

「そのリスクを背負ってでも、君たちが欲しかった。

なに、強制するつもりはないよ。ただ、会ってみてはくれないか？
どちらでもいい。

ただ、私のオススメは、その少年だね。きっと、君は気に入るはずさ」

強制するつもりはないと、成功者は言った……『群』としての私たちの力を知っていながら、それでも、彼は自身が上であると暗意にほのめかしていた。

……それは、『個』として最高位に至った者の、矮小な力のへの情けだったのかもしれない。

『あの人の背景、やっぱり全然見えない。直視したのに、5分も遡行視できなかった。範囲も、あの理事長室が精一杯』

栞の霊視も、万能ではない。稀にだが、見透かす事の出来ない人間というのも存在するのだ。

それは、周りの世界を歪ませる程に我が強い人間だったり、あるいは、栞のような存在に対して「対策」を設けている人間。前者は代表はウチの理事長で、後者は異世界の技術士なんてものが該当する。

そう言って、苦笑しながら隣を歩く栞に、私はなんて言っただろう。

『いいわよ、そんなの。』

彼から正式に『峰岸』に対して依頼がなされたわけでもないし、このことを知ったからといって報告する理由も、私にはない』

当時、私は末っ子のため家督が継げないという理不尽に合わせて、

家の勝手なご都合（コネのとっかかりにはなるだろ的発想）で、この学園に放り込まれた事に不満を抱いていた。

たぶん、相当荒れていたと思う。そこそこな理不尽を周りにまき散らした。家の力をタテに、今では頭を抱えなくなるようなことを、そこそこやらかしていた。

……栞は基本的にこういうとき、私に何も言わない。

私が自分で気づいて反省するのを待つーそれが、私たちの十数年の付き合いの中で築き上げられた、二人の距離だった。

そんなとき、私に踏み込んできたのが、あいつだった。

「おい、峰岸！

いくら家がボンボンでも、他人をないがしろにしていってことは無いぜ」

あ のとき、私が何をしていた、あいつにそんな事を言われたのかは覚えていない。ただただ、腹が立ったことはお覚えている。

それまで人から叱られた事は無数にあった。そのときの悔しさとかとは、全然違った。

『まあ、お嬢様！

そのようなこと、『峰岸』にはふさわしくありませんね！』

例えば、教育係の池田とか。

『『峰岸様』、そのようなことを申すものではありません。お父様も、お母様も、本当にご多忙が故に、こたびの……』

それは例えば、使用人の鶴田とか。

本当に色んな者達に、人としての――『峰岸』としての作法を叩き込まれる為に、叱られた。

でも、腹が立った事なんて、一度もなかった。悔しかったり恥ずかしかったり、悲しくなった事は何度もあったけれど、腹が立つなんて、一度もなかった。

「……あんたに呼び捨てにされる筋合いなんて無いんだけど?」

私を峰岸と呼ぶバカに対し、私は威圧的に返した。大概の者が、それで引く。小心者なら、誤りだすところだ。なのに。

「こつちこそ、あんた呼ばわりされる筋合いはねえよ。ちゃんと、東利也つて名前があるんだ」

あいつは引き下がらず、食って掛かってきた……それからのことは、全然覚えていない。でも、大喧嘩に発展はしたはず。たしか、お互いを罵倒し合って、誰かが呼んだ先生の取り押さえられた記憶があるから。

でも、そんな喧嘩の間に交わした言葉は中身がスツカス力で、だからこそ、覚えていないんだと思う。

でも、あのとき……わたしが腹を立てた理由は、今になつてだけれど、少しだけ分かる。いや、受け入れられると言った方が、正しいもしれない。

あのときあいつは、峰岸を叱ってくれていた。『峰岸』の為ではなく、峰岸のために――峰岸燈火の為に、あいつは私を叱ってくれていた。あのとき、わたしは初めて、『私が私であるという理由』で叱られたんだ。

つまりは、私という個人を否定された。なんの付加物もなく、ただただ、私という個人を否定された。

背景をもたない、ヒーローの原石である、東利也。

そんな彼だったからこそ、私たちは大喧嘩し、何時しか友達になり、そして。

いつの間にか、私はそんな持たざる男を、好きになっていったんだと思う。

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸（後書き）

数は、力です。たとえ、個々が矮小な存在であっても、それらが手を取り合うことで、より大きな力——あるいは、うねりを生み出すことを出来ます。

ただし、その個々を結びつけた結果生じる流れは、それ自身粘性が高く、それこそ、一度動き始めれば、その行方を変えることは容易ではありません。

個々を繋ぐ絆と、それらが集積し、結果、生まれたモノ。そのふたつには、どうしようもない亀裂があります。

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸&栞（前書き）

さて、兄妹は此処から別行動です。

兄は、仲間のもとに。

妹は、悪い子を閉じこめる、押し入れの中に……それぞれ、向かうことになります。

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸&栞

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸&栞

仮に、心の底から間違った末に、女子の入浴現場に突撃したあげくに木刀で昏倒させられたとして――そんな状況下で目が覚めた場合、どんな顔で起き上がるのが正解だ？

（起きるタイミング、完璧にミスった……）

薄目で周りを確認してみるも、見えるのは壁のみ。それも、相当の至近距離にそれがあるようで、つまるところ、俺は部屋の隅に転がされているようだった。あと、ちよつとだけ見覚えのある冊子が見える。あれはたしか、玄関と居間を仕切る冊子のはず。

たぶん、おれは玄関側の壁にね転がされているようだ……このまま、ダッシュで逃げれるだろうか？

「くっしゅん！あゝもう、最悪……あ、栞お帰り」

突然の声に、びっくりとしそうになった。

声からして、主は峰岸。くしゃみから考えて、まだバスタオル？今起きたら、悲劇の再来か！？

そして、さらに追加イベントで、栞が帰ってきたらしい!!!
どうしろってんだよ！　なんか良い言い訳あるか？　いや、ない！
ないけど、俺、どうする？どうすればいい？

だれか、俺をこの状況から解放してくれーと、思ってたら。

「えい」

「あつつつつつがああああ!!!!!!」

前者が栞のかけ声で、後のが俺の悲鳴な。平坦に「えい」って声
が聞こえてきて、それだけだったら大したことなかったんだが、な
んか、脇腹に激痛が！

なんか、あばらの下から内蔵ゴリゴリされてててててて!!!!!!
!!!!!!

「やめろよ、おまえ!!!!!!
殺す気か!?!」

あまりのショックに、俺は飛び起きた。でも、それで精一杯。な
んとかして栞から距離もとりたいかったが、いかんせん部屋の隅。縮

こまっ　て脇腹押さえるだけで精一杯だ。

「べつに、殺す気はなかったけど、なんとなくね。目、覚めたでしょう？」

それに、今は痛くないはずよ。ちゃんと、出来てたし」

あきれ顔でそう言う栞の奥に、引き気味に顔をつらせる峰岸が見えた。ちゃんと、服は着ているみたい。ただ、木刀は依然として手放してはいなかったが……

「……今は痛くないけど、さっきはめっちゃ痛かった。まじで、死ぬ方と思ったぞ」

ぶつくさ良いながら、俺は立ち上がった。そうすると、身長差から栞の手がおれの脇腹くらいに来る。パブロフの犬よろしく、脇腹（正確には肝臓）がズキリと痛むも、なんとかムシ。

平静を保ちつつ、俺は部屋を見渡した。
そして。

「……じゃあ、俺はこれで。また、飯の時にな」

一騒動あった為か、峰岸が大人しい。ぽかんとした様子で俺たちを見上げている。俺はそれを横目で確認しつつ、捨て置かれていた自分のボストンバッグを「両の手で抱え上げる」と、そそくさと玄関へと向かった。この機を逃せば、もう次はない気がしたんだ。

なのに。

「えええええ！！！！ちょっと、まで、あれ？どういうことだ！？」

後ろから掛かる峰岸の静止を振り切る勢いで玄関に躍り出た俺は、信じられないものを目にした。

『スー、スー、にいさま……』

それは、俺が此処までボストンバッグでなんとかして運んだはずの、どでかい荷物だった。なんともまあ、幸せそうに寝ていらつしやる……いや、だめだろ、これ。

「どうしたの、東君？」

はやく、荷物おいてこないと、また先生に怒られるよ？」

俺に視線と声を投げかける琴。彼女は、居間と玄関との境界線で、俺を見つめていた……。なぜか、峰岸は追ってこない。まだ、今なら、ここから余裕で逃げれるんだが！

「いや、それが……」

しかしかんせん、どでかい忘れ物がある。

それは、玄関ですやすやと眠るバカガキだ。こいつは俺にしか物理干渉できない体質のようで（床は見た感じOK?）。しかも、宿の急な鞍替えなんてイベントが発生した時に限って、爆睡しやがった！

ここまでこいつを連れてくるのには、本当に苦労した。

いくらか試行錯誤を繰り返したが、どう足掻いたところで、俺以外のものは、こいつに触れられなかった。手始めに普通にポストンバッグに入れたんだが（中の荷物は無視できたのはアドバンテージ?）、ヒモ抱えた瞬間床に残されるという、なんとも意味不明なマジック！

だからといって、普通にこいつを抱き抱えてみたが、傍から見たら、「おまえ、なにやってんの?」って聞かれる格好になり……。最

最終的に、ボストンバックを底から抱え上げて移動するってところで落としどころを見つけた。

それでも、それを見られたキヨ達には、やっぱり「おまえ、なにやってんの？」って言われたよ！

でも、ちょっと頬をはったくらいじゃ目を覚まさないこいつを運ぶには、こうするしかなかったんだ。まじで、寝付きよすぎなんだよ。まあ、それはそれだけ泣き疲れたつてのがあるわけで、そして、泣かしたのは俺な訳で。

んで、話を戻すと、なんでこいつが玄関で寝てるのかって話だ。

……たぶん、峰岸がおれのバックを中に入れた時、あそこに取り残されたんだろう。俺が峰岸にぶちのめされた時、バックは玄関にあった。それが、目を覚ました時には部屋の中に移動していた。

どう考えても、峰岸が動かしたとしか思えない。だとすると、当然バックの中のこいつは玄関に取り残されるはずで。

「……いや、なんでもない。じゃあな」

俺は、そそくさとバカガキをまたいで、外に出た。いくらなんでも、あそこであいつを回収するには、無理がある。一人パントマイムするには、ハードルが高すぎた。

……とはいえ、あいつが目を覚ました時、ちよつとばかりあいつも混乱するかもしれないが、まあ、同じ宿に居るわけだし。

ここまでくれば、あとで簡単に合流もできるはず。まあ、多少の文句はつくだろうが、それはかんべんしてもらわないと、こっちだって世間体ってもんがあるからな！

そうやって、俺はあいつを残して、ロビーへと向かった。もちろん、鍵をもらつたためだ。こんどこそ、正真正銘の、俺たちの部屋の鍵を……あれ？

「おれって、峰岸達の部屋の鍵、どうしたっけ？」

ポケットを探ってみるも、見当たらない……マジでどうしよう。
鍵、なくしたし……

歪曲する因果3：迷走する想い4：東&峰岸&栞（後書き）

次回

謳歌と怨火：歪曲する因果5：寿小羽&久遠栞です。

悪い子は、暗い押し入れの中へ。ちよつとばかり、嫌なおはなしになります。

T i p s 相克する因果：寿小羽：因果の環（前書き）

屁理屈の理屈です。

読んでくださっている方、一番最初の幻想歌をもう一度見てくださると、いいかもです。あと、真名励起についても――どこでしたっけ？自分でも忘れました・・・

Tips 相克する因果：寿小羽：因果の環

Tips

<信念と妄執の境界について>

魔学において「信念」と「終焉」はときに同義語として扱われる。しかし、「信念」という存在の本質からすれば、この「終焉」という表現は正しくない。

ある魔法使いは言う。

「人は限られた時の中で、自分の進むべき道を自ら選ぶよね。無数に枝分かれする未来のどれを選ぶか。当然それには基準となる、いわゆる信念と言い換えてもいいかもしれないものが必要になる。といっても終焉と呼ぶからにはかなり強固なものでなければならぬけどね。もしそういったものがあれば、どれだけの時を生きようとその存在は同じ選択をし続ける。つまり、そこから先は同じことの繰り返し。そんなの見ていても面白くないでしょう？だから終焉と呼ぶの、そういった生き方を、あるいは信念を。」

♪

そう、人は限られた時の中で自身の進むべき道を自ら選ぶ。

無数に枝分かれする未来のどれを選ぶか。

当然それには基準となる、いわゆる「信念」と言い換えてもいいかもしれないものが必要になることがあるのも確かだ。

そしてそういった「信念」が強すぎた場合に、それは「終焉」と呼ばれることもある。

この発言をした魔法使いは偉大であり、数ある魔法の中でも至高とされる、時空移動に関する魔法の担い手である。

この魔法使いが言うには、「強すぎる信念」とは「終焉」と同義であるという。

しかし、私はそうは思わない。

というのも、「終焉」という言葉はあまりにも「終わり」のみ言及しすぎていて、「始まり」に触れていないように感じるからだ。ものごとは「始まり」があつて、「終わり」がある。これは当然のことだ。

それならばもし、強力な信念をもつ存在が、その「終わり」——つまり自身の終着地点にのみ意識をとられるようになった場合、はたしてそれは信念といえるのだろうか。

わたしは当然言えないと考える。しいてそういった信念を表すとしたら「妄執」であろう。

「始まり」を見失い、「終わり」にのみ意識を占領された「信念」。

それを「妄執」といわずになんと言うのか……。

♪

選択するためには、あるいは、己の望んだ未来を手元に引き寄せるためには、確固たる「信念」が必要となる。

しかし、なぜ自分がその未来を望んだのか。

なぜ、自分がその「終わり」を望んだのか。

それが無くなってしまうえば、それはもう意味のない選択であろう。
だから・・・

「始まり」を忘れてはいけない。

すべての存在は、「始まり」という点を背に、「終わり」という点を目指して突き進む。

だからこそ見失いそうになる。

一度も振り返ることなく、その理想を追っていく者ほどに。

見失い、そして・・・

T i p s 〽 屁理屈：寿小羽：gold gate：不連続より成る
因果の連結

君は、どこから君になった？君の始まりは、どこにある？

お母さんから生まれ出た瞬間？それともその前の、お父さんとお母さんが愛し合ったときかな？

それともそれとも、君が始めて言葉を発したとき？もしくは、初めて友達と喧嘩をしたときだろうか？

ねえ、君は今どこにいる？どこにいて、結局どこに向かっているの？
今いる場所は、どこかに向かう途中なのかな？それとも、そこが
終着点？

・・・こんなこと、考えるだけ、無駄なのかな。
結局、この世界の魂たちは、円環の理に縛られている。クルクル
と環を描き、傷を溜め込み続けるだけの、哀れな道化。

環には、始まりもなければ、終わりもない。
ただただ延々と、自分の影を追いかけているようなものさ。でも、
だからこそ、かな。

だからこそ、いつだって始められる。確固たる始まりがないこの
世界では、時間軸だってあやふやだ。ただ、環に閉ざされている以
上、その物語を終わらせることは出来ない。けれど、それでも、い
つだって、始めることはできる。

君の始まりはいつだって、君が決められるんだ。たとえば、それが屁理屈って呼ばれるものであっても、それは事実。

だから、君には笑っていてほしい。君の抱える因果の相克は、大事なものだよ。だからこそ、因果を歪曲してまで語られるんだ。

一つを二つに分けた意味は、単純なんだよ。ただ、見えやすくしただけ。輪廻なんてばかげたものの性でこんがらがった大切を、指差す――ただ、それだけの意味だったんだ。

・・・ほら、聞こえるよね？

彼の、君の名を呼ぶ声が。

世界は「それ」を「君」とは認めないだろうけれど、でも、それだけのこと。彼は、「君」を呼んでいるんだ。たしかに、彼が叫んだ「名」は、「君」じゃない。君の、「欠片」でしかない――不完全なんだよ。でも、欠けたるモノは、補えばいい。

彼の声で足りないなら、君の声がある。

-
-
-
-
だから、がんばって。がんばって、屁理屈をこねるんだ。
世界が定義する君を、屁理屈でねじ伏せる。そうすれば、きっと

T i p s 相克する因果：寿小羽：因果の環（後書き）

秋もいい感じですね。

物語りも、いい感じになればいいんですけど。

謳歌と怨火：歪曲する因果5：寿小羽&久遠栞&峰岸燈火（前書き）

栞ちゃんの発想の回です。過去は過去、現在は現在。

二つは繋がっているだけの、ただ、それだけの存在――なんて、寂しいですね？

謳歌と怨火：歪曲する因果5：寿小羽&久遠栞&峰岸燈火

- gold gate：因果の断罪 -

過去と現在は繋がっているけれど、言ってみれば、それだけのこと。

だから、置いて行く。現在に害をなす過去（存在）など、必要ないのだから。

謳歌と怨火：歪曲する因果5：寿小羽&久遠栞&峰岸燈火

東君が出て行った玄関の戸をしつかり閉めると、私こと久遠栞は、居間に戻った。そこでは、混乱状態の親友が所在無さに立ち尽くしている。

……：そうなる気持ちも、分からないでもない。

「色々と予定外のことが起こるよね、今回の旅行は。東君が取り付

かれたことに始まり、翁の契約改ざん。

そして、今のこの状況……なんかここまで来ると、大いなる意志の介入なんてモノがあるんじゃないかって、勘ぐっちゃう」

居間に置かれたちゃぶ台に、わたしは鍵を放り投げた。ガンって音を立てて、鍵がテーブルの上を滑って行く。

鍵のナンバーは、- 0 0 1。この宿の、マスターキーだ。これさえあれば、この宿のどの部屋にだって、進入できる。

なんで私がそんなモノを持っているかと言えば、単純な話。そう、進入するため。

何処にかつて言えば、東君たちの部屋に。

何のためにかつて言えば。

「でも、目的は果たせそうだよ、燈火。アレは今、此処に在る」

私の言葉を聞いて、びっくりとする燈火。彼女は、不安そうな目でキヨロキヨロあたりを見渡している。

でも、見えるわけが無い——なんてこと、燈火だって分かっているんだろうけれど、それでも、そうせずにはいられなかったんだろつ。

私は燈火に近づくと、そつと彼女を抱き寄せた。そして、おでことおでこをくつつける。私のいきなりの所行にさすがの燈火も身を

千々込ませていたけれど、すぐに私の意図を理解したらしい。
そつと目をとじ、私に全体中を預けてくれた。

そして。

そうして、しばらく私達はおでこをくつつけて、お互いを抱きしめ合った。こんなとこ、M4の連中に見られたら、今年の校内同人誌即売会では、私と燈火の百合本がでまわること間違い無しだ。

……わたしは、そうなったらそうなつたで別に困らないけれど、燈火は困るだろう。そして、M4の4馬鹿タチも、困るはず。だって、学園設立以来の、刃傷沙汰が起きることになるのだから。

「燈火、こつち」

さて、準備も整ったところで、燈火とともに玄関へ。
そして、スリッパが散乱している、玄関を指差す。

燈火が、息を飲むのが分かった。

「向こうで仕掛けた術が切れるまで、もうしばらく時間がある。だから、大丈夫よ。私の許可が無い限り、これが目を覚ますことはないから」

親友を落ち着けるように、私はさとした。さっきのおでこごつちんにより、私達は今、共感覚の状態にある。だからこそ、燈火にも見えているのだろうーひとつの、「念」が。

「近くで見れば見る程、年相応の子どもにしか見えない……でも、違うんだよね？」

私達の目の前には、すやすやと眠る、一つの「怨念」。
その無邪気な寝顔を前にして、敵意をたもつというのは、なかなか難しい。

寝顔だけなら、本当に抱きしめたくなくなるくらいにかわいらしい、
1人の女の子なのだ。

「うん、正真正銘の化け物よ。
だから、終わらせないと。この平穏な現在を、守るためにね」

だから――と、私は続けた。

だから、「彼を引き止めるために、燈火もがんばって」と。

「大事なものは、現在だよ、燈火。過去は、過去でしかない――二
つは繋がっているけれど、言ってみれば、それだけ。」

東君は優しく人で、その裏返して甘いひとだから、こんな「過去」
を引きずろうとしている。でも、それは間違いなんだよ。「これ」
は、彼の妹じゃない。それと同じように、東君と昔の彼だって、繋
がっているだけの、まったくの別人。

それを緋い交ぜにして前に進めば、悲劇は必ず起きる――だから、
彼の目を覚まして。大事なものは過去ではなく、現在なんだよっ
て、教えてあげて」

そのために、彼を呼び戻したんでしょーととは、続けなかった。それは、燈火も分かっていることなのだから。

「わかってるわよ、栞。
ちゃんと、わかってる。でも……」

それでも、どうにかならないのかーと続けたかったのだろうけれど、燈火はその言葉を飲み込んだ。

そして、思いつきりで自分の頬をはると、「よし！」と気合を入れる。

その目には、太陽の輝きがともされていた。

「栞に汚い仕事を押し付ける私がぐちぐち言うのはお門違いよね。私の仕事なんて、あいつとしゃべってるだけで良いんだからね！

さて、やりますか！私達の、現在のために！」

燈火は空元気でそう言うと、スリッパに足を滑り込ませ、「念」をよけて通り、玄関の戸を開いた。そして、「行ってきます！」と一言。

一言そう言い残し、彼女の戦場へと向かって行った。

「……さて、じゃあ、私も行きますか。
わたしの、戦場に……これを、連れてね。」

謳歌と怨火：歪曲する因果5：寿小羽&久遠栞&峰岸燈火（後書き）

私は繋がりというテーマを、色んな形で表現したくて、ここに居ます。

無限想歌の主題は、「名をよぶこと」です。

過去と現在との繋がりがメインテーマになるのは、また、別の話ということ。

次回は、謳歌と怨火：歪曲する因果6：寿小羽&久遠栞です。

謳歌と怨火：歪曲する因果6：寿小羽&久遠栞（前書き）

書き溜めボンバーです。

連投！

謳歌と怨火：歪曲する因果6：寿小羽&久遠栞

謳歌と怨火：歪曲する因果6：寿小羽&久遠栞

月明かりの中、私と兄さまは手をつないで歩いていた。昨日今日と2人で多くの時間を共にしたけれど、そのどんなときよりも、楽しかった。

そんな私達の世界には、鈴虫の声がこだましていた。そして、夜がほのかなぬくもりを持って、私達を優しく包み込む。

夏が、過ぎようとしていた。

少しだけ、頬をなでる風が冷たい。でも、それと同時に、つながった兄さまの手のぬくもりが何倍にも暖かく感じられ、心が温かくなる。

「えへへ、兄さま！」

思わず、意味も無く笑みをこぼしてしまう。

だって、嬉しさが後から後からこみ上げてくるんだもん。

「なんだよ、急に……意味も無く、呼ぶな」

ぶっきらぼうな、その答え。でもそれは、兄さまなりの照れ隠しなんだと思う。

「にいさま、にいさま、にいさま！」

呼ぶなと言われたばかりなのに、なんどもその名を呼んでしまう。だって、どれほど待ち望んだことか。

私の隣には、「あの日の兄さま」が居てくれている。

顔も体つきも、言葉使いも。あの頃とは全然違い、優しくない！でも、優しい。

いつの間にか兄さまは、「あの日の兄さま」になってくださっていた。

なぜかは、分からない。でも、分かるんだ。

今私の手を引いてくださっているのは、「あの日の兄さま」だった。

たぶん、今日色んなお話をしたからだと思う。

2人で公園にも行っただし、アンパンマンも見た。そして、夕焼け

の川縁で喧嘩だつて……

今日だけで、本当に色んなことがあった。嬉しいことも、楽しいことも、悲しいことも、本当に、たくさん心が揺れ動いた。

だからその分だけ、私と兄さまは通じ合えたのかもしれない。魔法使いさんが言うには、私と兄さまは繋がっているとのこと。

だからきつと、私の思いが兄さまに届いたんだ！そして、兄さまがそれに答えてくれた！だから、私はこれからずっと、兄さまと一緒に……！

私の名は、久遠梨だ。性別は、女。ピッチピチの女子高生。何人も兄弟は居るけれど、私が末っ子。だから、私に妹なんて居ない。

——そんな私の手の先には、「にいさま」と笑いかけるモノが一つ。

それは、無邪気な笑顔を私に向けながら、はにかんでいた。それ

を見て、私は苦笑するしかない。

この世界には本当に、救いが無い。でも、それが世界なのだ。それが、世界の心理。

「ほら、縁結びの神様のところまで、もうすぐだ。ちょっと山を登らないと駄目だけど、おまえなら大丈夫だよな？」

優しく私は、念に問いかける。大丈夫かーかと。

たったそれだけのことなのに、「念」は破顔して「はい！」と元氣よく答えた。

自分がこれから、どういう運命をたどるかも知らずに……

翁との契約を済ませてから（上手くは行かなかったけどね）、私はすぐさま東君のストーキングへと移った。彼の元のたどり着けたのは、だいたい15：00過ぎくらいだった。

彼は、私と燈火が意図した通りに、宿の外へと外出していた……
といつても、こちらに関しては特に、私達は何もしてない。

最初こそ、なんとか彼の監督教官を買春して彼を外へと出さなければと頭をひねっていたが、なんてことなかった。監督者は、あの白銀教官だったのだ。

彼は相変わらず突拍子も無い人だった。東君の外出陽性は、家から圧力をかけるまでもなく、二つ返事で「がんばれよ」とのエールまで受けて、出されることになった。

まあ、なんにせよ、彼は外出した。尾行させた者の話からすれば、最初は自然公園で時間をつぶしていたらしい。でも、さすがに昼過ぎにはそれにも飽きたのか、あるいは、「念」を連れて歩くことに慣れたのか、彼は、大胆にも街へと歩を向けたらしい。

そして、まさかのアンパンマン鑑賞。彼は16：10分終了予定の上映に入ったらしく、追いついた私は映画館の前でしばし待たされることになった。

とは言つても、ただボートしていたわけではない。

街を監視しながら、策を練っていたのだ。そう、彼らの間に不和をもたらすために。

不和とは、嫌なものだ。

それは、一旦生じてしまえば絶対落ちないシミとして、縁に染み込む。そして、ときには絶縁のきっかけにすらなる。

……もちろん、今回の東君と「念」の絶縁には、不和程度ではこころもとない。というか、それだけは絶対むり。

だからこそ、力づくで臨まなければならないからこそ、翁となんてもので担ぎだしたのだから。

しかし、不和は隙間になる。そう、私という「ニセモノ」が入り込む隙間をつくるための効率的な手段として、不和というのは、非常に有効なツールなのだ。

「縁結びに、行こう。これからは、ずっと一緒に居られるように。それと、きょうの、仲直りの意味も込めて」

目を覚ました「念」に、そう、私は笑いかけた。膝を折って、手を差し伸ばしながら。

そんな私向かって「念」は、うつすらと目に涙を浮かべながら、「はい、にいさま」と、はにかみながら答えた。

そして、その小さな両の手を私の首に回し、ギュッと、抱きついて来た。そして、一言、「ごめんなさい、にいさま」――と。

もちろん、私は「念」を抱きしめ返した。「もう、いいから」と、そんな優しい言葉を添えて。

そのとき、私の胸が「念」には当たっていたのだけれど、「念」はまるで気づかなかった。

綺麗に、術に取り込まれている証拠だ。

術の名は、「逃げ水」。

これは、「念」を手ごまとして使えるように調教するときに使われるもので、要は、飴と鞭の、飴にあたる。

「念」となったものは、基本的にこの世界の物質に影響を与えない。それは、かれらの本質が、此岸よりも、彼岸寄りであるということが大きい。故に、彼らにとってこの世界で大事なものは、「現在」ではない。それは、「過去」なのだ。

彼らは、見たいものを見ようとする。見たいものを、「現在」にもとめるのだ。

それは、もう本能と言っても良い。彼はこの世界に在りながら、

この世界への干渉権を剥奪された存在。どれほど彼らが望もうとも、彼らの願望が此岸で叶うことなく、あり得ないのだ。

……とはいっても、本来の「念」は、ただの力場だ。それには、固有の形は無い。だから、「念」が何かを望むということは無いのだけれど、なぜか彼らは、自信の原型である「過去」をちらつかせれば、そこに流れ込もうとする。

私の一族は、霊視により、物事の背景を読み取ることが出来る。しかも、かなり詳細にだ。

そして、この力といくらかの技術を応用すれば、「念」をある一定の形をもった、「霊」へと作り替えることが出来る。

この「霊」は擬似的ではあるが、固有の意識を持ち、私達の意図を理解することが出来るだけの知能がある。

多くの場合、こうして作られた「霊」は式神と呼ばれ、用途に応じて、久遠と峰岸のために使役されることになる。

……ある意味では、非人道的と言われるかもしれない行為だ。しかし、「念」はもはや人ではない。人で、「あつた」モノだ。彼らは、私達無しでは、その身を維持できない。ひとたび術を解けば、彼らはもとの無形の「念」に逆戻りすることになる。

話を戻すと、この一連の式神作りの手順を、私は今回の「念」に応用した。目の前の「念」に、見せてやったのだ――彼女が望む、「兄さま」を。

そして、予定通り、このモノは飛びついた。その、自信の「理想」に。やさしい、「虚無」に……

目の前の「念」はイレギュラーながら、自信の世界を持っている。それを含めて考えれば、正確には、「霊」と呼ぶべきなのだろう。

……しかし、それでも目の前の娘を「念」と呼ぶのは、ただの言葉遊びだ。ただ、罪悪感を薄めたい。ただただ、その、一心でしかない――なんて、卑怯な考え方だろうか。

しかし、なんにせよ、このモノは捨て置けない。

これが息吹先輩と八会わせれば確実に、「念」へと回帰する。し

かも、500年ものだ。

通常の存在は、そんなモノを受け止めきれない。だからこそ、目の前の娘は、「念」に飲まれて終わる。そして、この娘とパスが繋がっている彼だって、同じ運命をたどるはず。そして、息吹先輩も、ただでは済まない。

仮に、学長の妄想通りに、東利也という原石が強大な可能性を秘めた存在だと過程しても、この「念」の存在圧を凌駕する程ではない。もし、彼が単騎でそれだけの力を持っているなら、学長が望むように、彼はヒーローの座へと席を置いているだろう。

……いずれにせよ、この娘には、破滅しか無い。東利也から引き離されようが、彼と添い遂げようが。

どちらにせよ、このモノは「念」となり、破綻する。であるならば、一人犠牲になるか、三人犠牲になるかだ。

「にいさま、縁結びの神様は、この小山の上でしょうか？」

気づけば、私達は社への登山口へと到達していた。

その間、私は「念」と会話していたらしいが、一切記憶に無い。

それでも、いつこうに構わない。なぜなら、この物語は此処で終わるからだ。

ここで、このモノは終わる。そう、「縁をきるため」に、私は――

――此処へと、歩を進めたのだから。

謳歌と怨火：歪曲する因果6：寿小羽&久遠栞（後書き）

次回は、歪曲する因果3：迷走する想い5：東&仲間（男子）& M
4です。

小羽が大変なことになってますが、東君気づかず。
お馬鹿な話になります！だって、それが彼の、日常のかけらなん
ですから。

歪曲する因果3：迷走する想い5：東&仲間（男子）& M 4（前書き）

くだらん話ですが、大事です。

歪曲する因果3：迷走する想い5：東&仲間（男子）&M4

歪曲する因果3：迷走する想い5：東&仲間（男子）&M4

俺の通う学園には、M4と呼ばれる連中が居る。これは、「森田」「森永」「宮口」「三沢」の名を持つ、4人の学友の頭文字だ。

んで、こいつらを他人に紹介するとなれば、こうなるー「こいつらは学園でも群を抜いての、バカです。しかも、バカ中の、バカ。来世になっても、バカやってるかもしれません」ーと。

瀬戸校に入ってくる人間というのは、大概良い処の出が多いため、あんまりバカが居ない。それは、頭のデキがどうこうではなく、バカをやらかす人間が少ないということだ。家のことが、あるし。

「よく、見るんだ。東、どうだ？」

しかし、バカは居る。少ないけど、居るんだよ、これが。

たとえばそう、俺に「どうだ」としたり顔で語りかけてくる、森田ってのが、その代表格だ。

「……お前等、その石像と一緒にぶっ殺してやる」

おれは、石工でまみれたトンカチ（特大）に手を伸ばすと、連中に一步步み寄った。すかさず、M4以外のバカ（ちよいバカ）が俺の静止にかかる。まあ、落ち着け？——ということらしい。

連中が言うには、おれがぶっ壊そうとしている芸術品は、一生俺が働いても弁償できない程の、至高のものらしい。

「いや、実際よく出来ている。よく出来てるからぶっ壊して、お前等を殺すんだよ。この、4バカどもが……！」

俺の目の前には、一体の石像が置かれていた。なんか、ミロのビーナスっぽいやつ。んで、それはミロのビーナスっぽいんだが、どうみても、それより、由香に似ている。腕だって、ついてるしな。

……俺の恋人である伊吹由香の裸体に「そっくり」っていうか、そのまんまだ。

その、あどけない表情にしろ、体をくねらせたときの曲線にしろ。あと、もうなんかいろいろ、そのまんま。

「まず、「イーグルアイの森永」に女神の姿をガン視させることで、その真実を回収した。あとは、熱い討論と「写実の貴公子宮口」の拓巳的技により、女神の真実を紙媒体まで落とし込んだ。さらにはそれを、「石より意志を生み出すモノ」——この、森田がそれを三次元まで引き上げること、この奇跡は完成した。ああ、下半身

は後日にもちこすから、心配してくれるなよ、皆の衆。

んで、この芸術の資本は我らが三人の才能と、ここにいる三沢家嫡男、「金はあるけど品がない」と絶賛評判の拓郎の出資（大理石代）によりカタチになりました。

さあ、どうだ、東。女神の裸は、お前だけモノじゃないって——
—これで、分かってもらえたか？昨日から四人徹夜して仕上げた一品だ。時間があれば、もっと精巧にできたはずだけどな……」

……張り付かせたような笑顔で問いかけてくる学友。目の下にクマが出来ているのは、徹夜のせいか。というかこいつら、徹夜でこんなもん（他人の恋人の裸体像）つくってたんか？

USJにも……行っていないのか？

こいつら、バカか？ ああ、バカか。

「冥土の土産に聞かせてくれ、4バカ。

おまえら、これを俺に見せて何したいんだ？」

いよいよもって、破壊衝動が押さえきれない。

目の前の大理石は、軽く一千万は超えるだろう巨体だ。しかもそれに、石細工師として人間国宝に指定されている森田時雨の後継者が、手を加えている。

そのデザインには同様に、芸術の分野では良家に分類される森永と宮口も一枚噛んでいるとのこと——マニアからすれば、ある意

味では世界に一つしかない傑作だろう。

たぶん、軽く数百万は行く。こいつらはまだ無名だが、才能はあるらしい。それに、親のネームバリューもある。

……こいつをたたき壊せば、それだけの賠償を迫られてもおかしくない。

しかし、壊したい。ついでに、こいつ等を殺したい！

てか、どんだけ低俗で高度なことやってんだよ……こいつら、バカなのに凄いからな……でも結局、バカなんだけど。

「ふふう、それをお前が聞くか、友よ。

しかし、問われれば答えねばなるまいなあ、友よ。

そう、友よ、我々はな——」

突然遠い目をして語りだす森田。しかも、長い。演説してるくらいに長い——ってか、演説してんのか、こいつ。

……演説中の「友よ成分」が多すぎて、アレルギー出そうになる。「だれも、おまえの友になった覚えはねえよバカ」と罵ってやりたかったが、残念ながら友人だった。しかも、結構仲がいい。

……我慢して耐えた。耐えて、三十分くらい聞いてた。なんか、さっき食った飯を戻しそうだ。こいつらの妄想、半端ない。キモイし、ウザイ。

「一言で言つと、お前等、俺に嫉妬してるだけなのな」

こいつらの長ったらしい主張の要点をまとめると。

□

よくも俺たちの女神とニヤンニヤンしやがって！↓許せない↓女神の真実は皆のものだ↓それを独占とかあり得ない↓だから、つくろつ、俺たちの女神を↓力を併せようぜ、お前等！俺たちなら出来る！（四バカの誓い）↓徹夜及びUSJボイコット↓やったぞ、できた、俺たちの女神だ！↓お前等見てくれて、俺たちの女神だ（ここでちよいバカ合流）↓おおすげえ、でもこれ、ほんとうにこの通りなのか？↓おまえら、俺たちの女神にケチ付けんのか？↓でも、本当にこれが女神の裸か分かんねえじゃん？

↓ケチつけるのつけないのでしばらく非生産的な会話↓東が帰ってきてるらしいぞ！しかも、速攻で峰岸に手を出してるってよ！（すこしバカが色々報告）↓なにい、どういうことだ？あいつ、俺等の残された希望まで食い散らかす気か？↓東を殺そう、そうだ、殺そう、でもその前に、この一品のデキを確認だ！↑今ココ

□

「さて、死んでもらおうか、東利也。とりあえずは最後の晩餐（安い水旅館の料理）も済ませたことだし、未練はなかるう。ここで、死ね」

ああ、「今ココ」は少しずつれてたな。もう俺を殺す気満々だ、こ
いつら。

さて、どうしたものか……

歪曲する因果3：迷走する想い5：東&仲間（男子）& M 4（後書き）

次回、謳歌と怨火：歪曲する因果7：寿小羽&久遠栞です。

兄弟間でギャップ凄すぎて、書いてて吐きそうになります。

T i p s 少し先の未来、可能性軸変異――揺らぎの世界1（前書き）

始まりを見失った少女に残されたのは、終焉のみ。

それは信念とよばれるものではなく、妄執と――呼ばれるものです。

Tips 少し先の未来、可能性軸変異——揺らぎの世界1

Tips
可能性軸変異点——揺らぎの世界1

『あアああアアああああアアあああああdjaf
djalkfa!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

獣の咆哮が、世界を震わせる。

それは他でもない、『念』の核である、「寿小羽」の崩壊を意味していた。

（いや、いや、こんなの、嘘！だって……）

どす黒い炎に身を焦がし、『念』は咆哮を上げ続ける。それは端から見れば、悪魔に取り憑かれた哀れな少女だ。されども、実際は少女自身が悪魔である。

（だって、じゃあ、私は何の為に！？）

私は、何の為に数百年という時を呪って過ごしたのか……！）

『念』と伊吹由香の前に展開されているのは、？の鏡。これは、伊吹由香として新たな生を謳歌する、かつての「智代姫」を断罪する為の神器に――なるはずだった。

鏡には、ここから数キロ先の事象が投影されている。正確には、桂藩が収める――寿家が収める城下町の、数キロ先の山道。

……そこで、一人の少女が命を散らそうとしていた。それは、『念』となる前の「寿小羽」が「ねえさま」と慕い、愛した者だ。

鏡の向こうで。

少女は落馬の衝撃を歯を食いしばって耐え抜き、ヨロヨロと立ち上がっていた。

骨の数本は、折れているはずである。

それでも、少女は歩みを止めない。

矢に射抜かれた足を引きずりながら、必死にどこかを――桂家の城を目指している。

『姫様、いい加減諦めたらどうです？

こればかりは仕様がなんでしょう。この戦国の世、きれいごとばかりじゃあ、和平はもたらされません。

桂家を差し出さなければ、家が潰されるんです。そこんとこ、了承くださいよ』

へらへらと笑いながら、一人の男が少女に近づく。

少女を姫と呼ぶ男であったが、そこには一切の敬意は感じられない。それどころか、男は刀を抜くと、少女の無事であった方の足を斬りつけた。

溜まらず、少女は地面に身を放り出す。

それでも。

（いや、ねえさま！ねえさま、いやあああああああ！！！！！！）

それでも、少女は諦めない。

無様にも地面を這いずりながら、必死に……

……そんな少女の長髪を男は鷲掴み、力任せに引き上げた。少女は、「うつ」と声を詰まらせながら、齒を食いしぼる。

夜の世界に、少女の無防備な喉が晒された。そして、一線。

月光にきらめく刃が少女の喉を切り裂き、水鉄砲のように、断続的な血の噴出が起る。

『冥土の土産に、教えといてやりますわ、御姫さん。』

今夜桂家が落ちれば、次はあんたところです。お父上が桂家との約定を破られたように、金剛家も、あんたことこの約定を破るつ

『もりなんですよ』

愛を囁くように、男は少女の耳に口を寄せている。しかし、そこから漏れ出るのは、愛の言葉などではない。

少女は、悔し気に唇を噛み締めると、コポツと血を吐き出した。

「ん？ 恥を知れ？ この、裏切り者？ 武士の風上もおけない卑怯者？ はは、俺は忍びですよ、姫様。 武士道なんてもの、俺たちの管轄外です。」

……お姫様。長いものには巻かれろっていうでしょう？ 最初から金剛家と組んでりや良かったものを、カビの生えた武士道でおじやんにするからこうなる……って、もう、聞こえてないか」

男は、「さて、仕事に戻りますか」と呟くと、少女を束縛から解いた。

残された少女は、ぴくりとも動かない。気丈に耐えていた涙が、弛緩した瞳から流れ出るばかりだ。その開いた瞳孔の奥は、深淵を思わせる程の闇であつた。

そして、その闇を鏡越しに覗き込んでいた『念』――いや、寿小羽は。

[illegible]

頭を掻きむしりながら、咆哮を上げていた。

……それも、そのはずである。たった今、『念』は自身の根源を否定されたのだ。

自身の「始まり」が、単なるお門違い——であつたと。そう、自身で証明してしまったのだ。

『もういい……関係ない……どうなるうと、もう、どうでもいい！
！——』

幽鬼のように、ゆらりと『念』は頭を振った。
そして。

『おまえを、ころす。
ころして、私も死のう。こんどこそ、本当の意味で、私は『死』ね
る』

焦点の合わない瞳で、少女は笑った。ケタケタと笑い、そして——
——心の底から嗤える化け物へと、変異を遂げた。

T i p s 少し先の未来、可能性軸変異――揺らぎの世界1（後書き）

何時だって、始められる。

そう、屁理屈をこねれば、何時だって。

けれど、それは言う程には簡単ではなく。

謳歌と怨火：歪曲する因果7：寿小羽&久遠栞（前書き）

前書き

少しだけ先の未来2へとつながりました。

そして、悲劇は翁が言うように、順当に回避――されるのですしょうか？

謳歌と怨火：歪曲する因果7：寿小羽&久遠栞

謳歌と怨火：歪曲する因果7：寿小羽&久遠栞

「にいさま、ここが縁結びの神様がいらっしやる社ですか？」

目をキラキラと輝かせながら、『念』は社を指差した。
そして、速く速くと私を急かすように、手を引っ張る。

「おいおい、そんなに引っ張るな！
そんなことしなくても、神様は逃げないって」

急かす『念』に、心ない笑顔と言葉で静止を掛ける。

私だって、早く社に入りたいというのは、『念』と同じだ。そう
すれば、全てが終わらせられるのだから。

しかしいかんせん急な山道を上がってきたため、体力がついてい
かないのが現状。

私と念の前には光で満たされた神の社が、顕現していた。社を維

持する人間は、一人も居ない。しかし、晃晃と社を照らす提灯や、光を受けて輝く本堂の金ばくは、見る者の心を奪う。

――あきらかに、不自然な光景だ。麓から社まで続く山道はくたびれており、獣道と変わりなかった。草木が、伸び放題だ。それは、今でもこの社に参拝客があるとすれば――あり得ないことだ。そんな山道の先に、光で彩られた絢爛豪華な社。鳥居は真新しい朱で染められており、まさに「今建てられたばかり」と言われても納得がいく。

周りを見渡しても、人の気配はなし。晃晃と光に浮かび上がる、社が在るばかりだ。

「にいさま、速く！たぶん、あそこが！」

ここに来るまで、どれほどの茶番を演じたことか。

東くんと『念』に不和をもたらすためと称して、彼らを不確定要素（宿の外）に誘い出すことから始まり――次いでは、『念』を閉じ込める為の、檻作り。これにしても、完全ではないという意味では失敗に終わっている。

そして、そこからさらに東君と『念』をストーキング。そして、不和……ここが一番の問題だったけど、なんとなくなった。ぶつつけ本番での、『不和』の作成。これには、二人の間の「認識の差異」を増幅することで、事を成した。

彼らは、この二日間で急速に心を通わせ合った。

人と人が心を通わせ合う――そのこと自身は、普通なら、喜ばれるべきことかもしれない。しかし、彼らの場合、状況が普通ではない。

彼らは生者と死者という境界を超え、輪廻という理を無視して、重なるはずのない場所で同じ時を過ごし、心を重ねた。

それもこれも、輪廻で消しきれなかった「傷魂」のせいだ。あれが東君と「念」との間に妙なパスを形成させなければ、こんなことにはならなかった。

過去と現在が、このようなカタチで錯綜することはなかったのだ。

……けれど、彼らを引き合わせたのが「傷魂」なら、彼らを引き裂くのもまた、「傷魂」だ。

この世界で受肉している東君にとって「傷魂」は、あつて亡きモノ。過去の残りカスなど、現在を生きることには必死なモノにとつては、何の価値もないのだ。

しかし、この世界で中途半端に残されたもの――そう、「念」にとつてみれば、それが全てだ。なぜなら、単独ではこの世界の全てに干渉できない「念」にとつて、それだけが、世界と繋がっているという唯一の証なのだから。もし、それすら失うとなれば、「念」は孤独という地獄で漂い続けることになる――であるからこそ、「念」はその性質として、同種の感情を溜め込もうとするのだろ
うが……

なんにせよ、東君と「念」は「傷魂」で繋がっている。しかし、「傷魂」により形成さるのはあくまでも、「過去より成る縁」だ。それを介して、二人は「現在」繋がっている――それは、あまりにも歪過ぎる関係だ。

「過去」の縁をもって、「現在」という時を重ねた結果。

――結果として、「念」は東君に「過去」を求め、東君は「念」に「現在」を求めた。

そうなれば、ズレが生じる。それはどうしようもない程の、決定的なズレだ。

そのズレは、「少しのお金で少年達に悪ふざけをさせれば」、亀裂と成る程の、致命的なもの。

「あなたは……栞？
なんで？ にいさまは……どこ？」

何一つ理解していない顔で、『念』は私を見上げていた。

まるで、キツネにつままれた――ような、そんな、表情だ。それも、そのはず。本来なら、彼女は兄と手を取り合い、神に縁結びを願うはずだった。

それなのに、此処に居るのは、兄ではない。此処に居るのは、ただの――

『……』

『念』は、私から二メートル程の離れた場所に倒れ込んでいる。
理由は、私が突き飛ばしたからだ。

そして、私の背には――厳粛なる、扉・

私は無言で踵を返すと、扉をくぐり、すばやく社の外へ。

そして、翁から渡された鍵を使い、社を閉じた――もちろん、
『檻』という意味での、社を。

ガチャリという、腹の底に響くような重音が、夜の世界に響き渡る。

それまで惚けていた『念』は、ここにきてようやく、立ち上がった。しかし、もう遅い。

『え、え！？』

ちよつと待つて！　なにするの！？』

転がるように扉に到達した『念』は、全体重を掛けて扉に突進し

た。しかし、その程度で社が揺らぐはずもない。物の見事にはじき返され、ひっくり返る。

しかし、この程度で揺らぐはずもないのは『念』も同じで、必死に扉に拳を振り下ろしていた。

扉を開けようと、『念』は必死だ。

しかし、叶うべくもない。いくら想いをかけようと、必死に拳を振りかざそうとも、神の域を、ただの『念』に犯せるはずもない。

月光が降り積もる中、ふと、『念』と私は目が合った。

私たちは扉を挟んで、対峙している。

私たちの間にあるのは、たった一枚の扉。言ってしまうばそれだけで、それ以上のものは何もなかった。

敵意もなければ、憎しみもない。

私たちの間には、何も無い。私たちは、私たち以外のモノを想うが故に、此处にこうして相見えている。

……怯えた目でこちらを見る『念』のそれは、年相応の娘を思い起こさせる。

t h e g o l d g a t e

???及び精霊種の干涉により、変数改変を確認しました。

「順当なる悲劇の終息」は、破棄されます。

破棄された世界の存在確立は、90%です。

物語は、10%の世界群へと進路を進めています。

謳歌と怨火：歪曲する因果7：寿小羽&久遠栞（後書き）

後書き

お知らせです。

この物語のオチはハッピーエンドにしますと「あらすじ」に書きましたが、

予定を変更してマルチエンドにします。理由は、エンディングーつだと、何言いたいのかわからなくなるからです。

選択肢はもう少し先で生じる予定です。

gold gate - 伊吹由香・世界を変える力1（前書き）

栞&燈火が立てた「悲劇を回避するプラン」に、変数である、伊吹由香が入力されました。

2人はまだ、このことは知りません。

gold gate - 伊吹由香・世界を変える力1

gold gate - 目指すべき場所 - 存在確率0%の世界群

その時少女は、自身の携帯に11桁の番号を入力した。

彼女が入力した数列は携帯というデバイスを介して、彼女の友人とその少女を結びつけるのだが――それは、当たり前の話である。

しかし、たった11桁にしか及ばないはずの、その数値は、

世界という巨視的な観点からすれば――その存在確率の90%を削り取る程の、大きな変数でもあった。

――少女が、11桁の数字を入力する。

たったそれだけのことで、世界は劇的にその進行方向を変えた。

現世界の存在確率は、10%である。故に、残りは10%だ。

その10%を削り取ることが出来れば、世界は存在確率0%の世界群へと。

すなわち、「揺らぎの世界へ」と、到達する。

連想歌：伊吹由香―選択1

『電波が届かない所に居られるか、電源が入っていないため、お繋ぎできません。』

おかけになった電話番号は――』

受話器越しに聞こえる、事務的で機械的な声。それは私が聞いたかった声ではない。

（電波は、届くはずだし、電池切れの可能性もあるけど、でも、やっぱり……）

先ほど、利也と同じ修学旅行先の加奈子に電話をかけた時は、問題なく繋がった。そして、利也が大変なことになってることも、少なからず耳にした……全部、私のせいなんだろうけれど。

でも、加奈子の話だと、今のところ利也は同じ宿に居るとのこと。ならば、電波の方は問題じゃないはず。場所によっては入りにくいこともあるだろうけれど、先ほどから時間をあけて何度か電話しているのだから、どれか一回くらい繋がっても良いはずーと、考えていたら。

『たしか、東君の携帯って壊れてるって話聞いてます。

なんだか、昨日キヨがへし折っちゃったらしいです。ほんとかどうかは分かりませんが、でも本当なら、そうなった理由は、何となく分かりますけど……ね』

そんなふうに、言われてしまった。

携帯壊されなきゃいけない正当な理由っていうのはかなり気になるけど、そこは、聞かなかった。

おしゃべりの加奈子が言いよどむってことは、あんまり無いことだったから。

(どうしよう……どうしても、今日話したかったんだけどな……)

携帯を握りしめながら、私は思う。なんとしても、彼と話したいと。

利也は明日、ここに戻ってくるのだ。そしてそのとき、夢のお告げが本当なら――災厄が、隣に付添っているとのこと。

……所詮は、夢だ。

銀髪の少女が語る、災厄の話も。

そして、少女の夢とは違う、懐かしさと切なさで満たされた――幸せな、夢の話も。

二つの夢は、どちらも「不思議な夢」で片付けられるのかもしれないけれど、それで済ませては、いけない気がした。それで済ませては、きっと私はいつの日か後悔する気がしたのだ。

(……よし、彼なら)

だから私は、キヨ君の携帯番号をプッシュした。

少しやり過ぎかなと思うのだけれど、仕様がなない。それに、加奈子の言うことを信じるなら、彼が利也の携帯を壊した張本人のとこと。

だったら、その責を取って、取り次いでもらうくらいのことは、してもらっても良いはず。

（でも、ハードル高いな……私が利也とやっちゃったことも、広まってるみたいだし。

火に油なんてことにならなきゃ良いけど……）

なんとなく気まずい想いを抱えながら、コール音が切れるのを待つ。

途中、三度目のコール音で逃げ出したくなっただけけれど、なんとか堪えた。

そして。

「はい、菅原です。どうしたんですか、伊吹先輩？」

そして、電話は繋がった。向こうには、いつもの気さくなキヨ君が居てくれた。たったそれだけのことなのに、なんとなく安堵が零れ、彼のその優しさに、少しだけ感謝した。

「ごめんなさい、キヨ君。なんだか、私のせいでそっち大変なんでしょう?」

まずは、差し障りの無い話。今回のことに対する謝罪と、一通りの社交辞令。

これにキヨ君は、ごく普通の返答と対応してくれた。そして、キヨ君は、利也の携帯損壊の件を引き合いに出して、「これでおあいこで手を打ってください」と言ってくれた。

心の中で私はもう一度、彼に感謝した。

そして、私は。

「キヨ君、お願いがあるんだけど、利也に……」

gold gate - 伊吹由香・世界を変える力1（後書き）

さて、これまで別個にストーリーが進んで来た2人は、ここで一度交わります。

T i p s ・ 連 想 歌 ・ 鏡 に 映 る 自 我 ・ 東 利 也 (前 書 き)

東君の「超えるべきもの」は縁です。

東君は「あること」「を他者に問われ、自身に問いかけること」になります。

それは則ち――

T i p s - 連想歌：鏡に映る自我：東利也

T i p s - 連想歌：鏡に映る自我：東利也

他者には、自我が投影される。これは、群の中で生きるモノにとって、受け入れなければならない真理である。

そして、この真理をもつと簡潔に言い換えるなら、「他人は自分の鏡」とかいうものになるのだろう。

しかし、他者と自身との間に鏡なんてモノは、実際問題として、存在しない。自身を完璧に投影してくれる魔法の鏡など、存在しないのである――代わりにはるのは、唯の関係性のみ。個と個を繋ぐ縁こそが、鏡の代替物なのだ。

これらのことは転じて、他者を通して投影される自己に『ノイズ』が入る可能性を示す。

このノイズには、「他者の意志（無意識も含む）」が投影されているのが常であり、故に、他者による自己像を自己として受け取る場合、そこに在る自己には幾分の変化がもたらされている。

他者を介した自己の投影は、自己が成熟する為に必要不可欠なステップであり、避けて通ることは許されない。しかし、このことは時として「自己」の消失を招くことにも繋がる。

故にこそ、固有世界は個体の発生経過に合わせ、閉ざされるのだ。そう、他者というノイズの影響を、最小限にする為に……それでもやはり他者という存在は、自己に対する強大な変数であることに変わりはない。

他者と交われば、交わるだけの変数の乱入がなされる。

どれほど自己を膜で多い、外界と隔絶しようとも、その影響を0にはできない。

だからこそ、人は問い続けなければならない。

自身とは、何者かと。自己とは、何なのかと――それは則ち。

『汝の名を問う』と、自身に問いかけ続けることである。

T i p s - 連想歌：鏡に映る自我：東利也（後書き）

次回

gold gate：連想歌：乱立変数1：ヒーロー：東&瀬戸

さて、次は瀬戸さんと東君の絡みです。

瀬戸さんにとっての東君が、メインの話です。

連想歌：乱立変数1：ヒーロー：東&瀬戸（前書き）

選択肢で得たkeyはメモってください。

連想歌：乱立変数1：ヒーロー：東&瀬戸

連想歌：乱立変数1：ヒーロー：東&瀬戸

正直な話、M4の取り巻きが東君を拉致したって話を聞いた時は、頭痛がした。

そして、その拉致現場に乗り込んだ時に至っては、目眩のせいで倒れるかと思った。

「瀬戸、おまえどうしてここに！？ここは女人禁制だぞ！」

私の突然の来訪に慌てふたいたM4。まあ、それもそのはず。彼らが居たのは、男子湯の間だ。
つまりは、女人禁制。

でも、それは湯船がお風呂として機能していればの話。
こいつらは、昨日から単身（M4で一つ）この旅館に乗り込んで、露天風呂の一つを貸し切にしていた。

このことは、オーナーから直接聞いた。

別に、わたしは連中のファンでもストーカーでもなんでもないわけだから、知りたくもない話だった。向こうが勝手に私のところ

にやってきて、これまた勝手に色々な世間話と賞賛の嵐を浴びせている最中に、たまたま「御学友」さんの話になった時に――話題に、上ったんだ。

……普通に考えて、一日中風呂に入り続けるバカはいない。しかも、男4人で。さらには、風呂場に大理石や石工具、果てにはキャンパスと油絵具なんて、必要ないはずである。

こいつらは、金に物言わせてオーナーを買収し、それら unnecessary 物品と共に終日風呂場に引きこもった――という話を、ニコニコ顔のオーナーから聞かされたのよ、私は！

それが、だいたい10分くらい前の話。

んで、その前にはM4の東君拉致監禁の噂を聞いていたため、ピン！と来た。なんか、面白いことになってると……でも、相手がM4連中だからたぶん、ろくなことじゃないってのも、想像ついた。

M4の日頃の所行から考えたら、良くて、頭痛もの。でも、そこに東君が関わってる。頭痛いけど、面白そう。

私は、二つの重しを天秤に掛け、「おもしろい」に掛けた。

結果、私は勝負に負けて、試合に勝った。

つまりは、「普段ならおもしろい！」って済まされるもんを、みられたのだ。

それが、2分くらい前の話。

ちなみに、これは、伊吹先輩裸像の前で処刑されかけている東君を助けた時刻と一致する。

そして、現在。

「ねえ、東ってさ。なんだかんだで、あいつらと仲いいじゃない？
なんで？」

「いや、仲良くはないよ。だからって、悪くもないけどさ」

私と東は、だらだらとテラスでくつろいでいた。東に関しては石像破壊のために結構な体力を消費していたため、本格的な休憩（？）つぽくゼイゼイいつてるけど、それはそれ。ちなみに、石像破壊の許可は瀬戸の強権でもって施行した。

M4も必死の抵抗を見せたが、「退学」の二文字をちらつかせたら、案外簡単に引いた。どうせ、急造の品だったし、あとで本格的につくり直す腹つもりだとは思うけど、今後のことに関しては、口は出さなかった。

わたしはそれほど、意地の悪い方じゃないからね。

「あんたってさー？」

わたしは、ひんやりタオルでお通夜してるに男に、投げやりな言葉を投稿かけた。すると、彼は「なに？」っと、聞き返してくる。

「あんたって、結構モテるよね？ 男女関係なくさ」

「……なんだよ、とつぜん？ 意味わかんねえー」

あっちいーつとめきながら、私の問いに適当に答える東君。なんか、それを横目で見てると、少しばかり腹が立ってくる。

「意味、わかるでしょ？ あんたって、人を引きつけんのよ。それこそ、色んな人種をさ。」

具体的には、M4の森田。あいつ、男色家だよ。石像よろしく掘られないようにね」

この私の発言に、さすがに驚いたのか、東君はバランスを崩して後ろにひっくり返った。おもいきり、背もたれに体重をかけてたせいだ。

彼は、ドタバタと立ち上がり、前のめりになって「それはどういうことだ!？」と、涙目で問いつめてきた……なにか、過去に変なトラウマでもあるんだろうか？

少し面白かったので、幾分からかってやった。ただ、最終的には「んなわけないじゃん」で話を納めてやったけど。

そしたら、「おどろかすなよ……」の一言を絞り出して席に沈んでしまった。

テーブルに突っ伏して「あゝもう、なんかここ二日くらいマジでキツイ」ってぼやいてる姿は、なんだか哀れだ。

「でも、あんたがモテるってのは、ほんとじゃん。伊吹さんとか、峰岸とかさ？」

あんた、家の学園のアイドル2人を両手に花していて、どんだけよ？」

顔を、ムクリと起こす東君。疲れた顔＋半目で、こちらを見据えている。

「なんだよ、それ。由香はともかく、峰岸は関係ないだろう?」

「はい? 関係あるって。あの娘、絶対あんたのこと好きだよ。んなの、分かりきってるじゃん」

「いやいや、ないって。あいつ、別に俺のこと何とも想ってないって。どっからそう言う発想出てくんだ? さっきの森田なみにタチ悪いぞ?」

「いやいやいや、それこそないって。あの娘、あんたのこと絶対に好きだって。そっちこそ、何言ってるの?」

言葉の応襲を交わし、しばらくの静寂。今や、さきほどまで私達の間にあったダラダラとした空気は、完璧に凍りきっていた。

「おまえ、峰岸じゃないだろ? だったら、そういうこと言うなよ。変に噂が出回れば、困るのは峰岸なんだ。それくらいわかるだろう?」

少し怒気を孕んだ、東の声。残念ながら、ご立腹の様だ。

「そりゃあ、そうだね。でも、だったらなに? すでに噂になってんだけどさ、このこと……あんた、まさか知らないの? そんなは

ずないよね？

ちなみに、私はその噂に踊らされてるアホじゃない。わたしは峰岸の友人として、確信を持って言ってるの……峰岸は間違いなくあなたのこと、好きだよ」

「だから、そのことを直接本人から聞いたのか？ そうじゃないんだろ？ どうせ。だから、確信あるなんて言うんだ。俺、そういうの好きじゃない。

他人の胸を内を知ったように言うのは、どうかと思う。だから、もうこの話は――」

「あんたさっき、『峰岸は、別にあんたのこと何とも想ってない』って言ったわよね。それと私のと、何が違うの？

じゃあ、アレは何なの？ あんた、舐めてんの？ ねえ？」

黙り込む、東くん。さすがに、言い返すことはしない。その辺は、評価しても良いかも。でも、それでもやっぱり、許せない。

「さっきの石像事件自体は、あんたのせいじゃないってことくらい

分かってただけどさ。

ただ、あそこに踏み込んだのが、私だったからよかったものの、もし峰岸があの場合にたまたま出くわしちゃったら……って一瞬思っちゃったわけ。

そしたら、あの娘、どんな気持ちになるかなって。んで、勝手にめっちゃムカついてさ……ごめん、ただの八つ当たりです、以上」

テラスの気温は例年に比べ、20 くらい低かった。温度計はあれば、その誤差は15 くらいありそう。その差はたぶん、わたしのトークチョイスの成せる技。

……気まずくなって、すこしだけ私は目をそらし、話を続けた。

「あんたが今大変なんだろうなってこと、なんとなく、分かる。で、たぶん、峰岸も久遠もそれに一枚噛んでると思う……後者に関しては、完璧感ね。根拠は無いから、そこは話半分で聞いたいて。でもあの娘、ほんとに必死なんだよ、今。見てれば、分かる。そして、それがあんたとは無関係だとは思えない」

わたしの話を、東君は否定しない。すくなくとも、なにかしらの心当たりがあるということだ。

「事情を良く知りもしない私が言うのもなんだけど、頑張つてよ。そして、絶対に乗り越えてよね。あんたが何に巻き込まれてるのか知らないけど、絶対に負けないで。」

あんたは、わたしたちの希望なんだからさ。ねえ、ヒーロー？」

ヒーローと、口に出して言うてみた。言うてみて、思った。なんて、陳腐な言葉を口にしたんだろうつて。

それは、東君もそうだったみたいで。

「なんだよ、希望つて。ヒーローつて、何？ おまえ、何か知ってるの？」

それとも何も知らないのに、ただ言うてんの？ なあ、もう、なんなんだよ……」

頭を抱える、我らがヒーロー。私だつて、何かを知っていれば彼にアドバイスしてやりたかった。でも、このことに関しては何か知っているはずの占い師は、何も教えてはくれなかったんだ。

『答えは単純で、それを教えるのは簡単。でも、そうやって得た答えには、何の価値もない。そこに「至る」ことが大事なの。答えなんて、結果でしかないのだから。』

だから、ほっときなさい……でも、正解なんて無いんでしょうね。いずれにせよ、ハッピーエンドにはならないわ、きっと。それだけは多分、「世界」が許さないから……」

ハッピーエンドにはなり得ないと……わたしは、それだけを知っている。未来視のヒーローが予言した未来を、私は知っている。でも、それは彼に伝えるべきこと？

私はそのことを、彼に伝えるべきなのか？果たして、私は――

――

gold gate - - 乱立変数1

選択してください。

彼女が彼に、『ハッピーエンドの否定』を伝えるべきかどうかを。

なお、ここでの選択は後に『リミテッドセレクト』と呼ばれる選択肢に影響します。

伝えるべきを選んだ方は――A-1のkeyを取ってください。

伝えなくてもよいと判断された方は――A-2のkeyを取ってください。

なお、この選択により、物語世界は分岐するものではありません。
正確には、どのお話を閲覧するかということをし、ここで決めていた
だくことになります。

現時点での世界の存在確率は、10%のままです。

連想歌：乱立変数1：ヒーロー：東&瀬戸（後書き）

それではまた、後ほど。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦1：寿小羽（前書き）

扉を閉ざされ、孤立無縁となった少女は、声と向き合うことになります。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦1：寿小羽

栞が姿を消したとたん、世界は真の姿を露にした。

あれほど浪々と輝いていた社は今や、月明かりのみでかろうじて門が見えるくらい。

そして、金色とともに立派に祭り上げられていた神は最早どこにもおらず、私はただの――廃墟に、綴じ込められていた。

そして。

「あ、あ、う、あ……」

そして、私の中で『何か』が拍動を始めていた。

ドクン、ドクン！っと、確かな重量をもって、『それ』は「内」から私を打つ。

さらには。

『あの娘、許せぬ。我らが同胞に、このような仕打ちを』『ころせ、容赦はいらぬ』『ここはどこ？なぜ、私達がこんな目に！？』『ひひひ、やっとこれで自由の身だ！』『夜がくる！夜が来るのよ！』『あのくそ野郎、馬鹿にしゃがって！死ねばいいのに！』

さらには、ヒソヒソヒソヒソヒソヒソひ粗ひ素と素……と、私を取り囲むように、声が響き渡る。何を言っているのか、全然分らない。意味なんて、全然分らない。

けれど、声は全て例外無く、何かを呪っていた。

「い、いや。なんで？ なにが？ いや、にいさま……！ たすけて、にいさま！」

私は、どんどん扉を叩くと、無理矢理外へと逃げ出そうとした。けれど、扉はびくともしない。傍目には今にも崩れそうな外観なのにも関わらず、それは私が外へであることを頑に拒んでいた。

『扉は開かぬか？』 『扉は開かぬ』

『扉はこれでいい』 『なぜか？』 『開けば同胞は我らを忘れる』 『そんなのかわいそう！』

『孤独とは神をも殺す毒よ』 『同胞は我らが守る』 『我らは同胞が守る』

『我らは同胞のために』 『同胞は我らのために』 『ゆるさぬ』
『ゆるすな』

『それを許すな』 『はなさぬ』 『はなせぬ』 『我らは一つ』
『同胞は、渡さぬ』

耳元でささやかれる声が、絶え間なく何かを呪い続ける。それは、私を守る力だ。そのことが、私には分かる。この声は、私に敵意は無い。

むしろ、彼らには私が必要だった。私が、彼らを必要としたように――？

「ちがう、ちがう！こんなの、ちがう！わたしは、わたしは！」

『あの女が生きておるぞ』 『同胞の仇か？』 『そう、その女よ』

『ゆるすな』 『扉を開いてやれよ』 『開くな、同胞は我らを手放す』

『同胞は我らを見捨てぬ』『この子は私達よ?』『あの女を殺せ』

『お兄さんを懲りずにたぶらかしてるって!』『死して尚、本性は変わらぬか』『ころせ』

『ころす、なんのために?』『同胞のためよ』『我らのためよ』『ころせ、ころせ』『死ね!しねえええええええ!!!』

響く、声。それは、怒号となり、扉に向かった。
二つは衝突し、大気を震わせる。びりびりびりびりと、社を振るわせ、そして、声は消滅した。

「やめて! わたし、そんなこと望んでない! だって、にいさまは、そんなこと、望んでない! あれは、過去! 今はちがう! わたしは、だって、だって!」

『過去は母よ』『今は赤子よ』『切っても切れぬ縁よ』

『偽らないで、私達には』『わかるよ、おねえちゃん、悔しいんだよね?』

『のうのうと生を謳歌するアノ女が』『許せぬのだろう?』

『僕たちにはわかるよ』『我らは一つ』『ともに時を過ごしたであろう?』『時が満ちたのだ』

『巡る因果に感謝を』『繰り返す命は、この時をもって証明する』

『因果応報だよ!』『罪を償わせよう』『アノ女を殺せ!』『はらわたを引きずり出せ!』

怒号はいつしか笑い声に変わり、私の周りで楽しそうに誰かを殺す話し合いを始めた。

それは耳を塞いでも、鮮明に頭に響き渡る。

「あたりまえでしょう、私の声なのよ?耳を塞いだって、声は内か

ら生まれるものなのよ」

自分の口がひとりでに動き出し、勝手にしゃべりだした。

あまりのことにびっくりした私は、必死に耳を塞ぎながら、歯を食いしばった――なのに。

『ころせ、ころせ!』『目をえぐり出せ!』『脳をかき回せ!』『皮膚を生きたままはぎ取れ!』

「ぜんぶ、私の声よ?なんで、認めないの?」

『同胞は混乱しておるのだ』『兄上に引き上げられた故に』『しかし、思い出すさ』

「わたしは、認めてる。なのに、私が認めない。そんなの、おかしい」

『同胞よ、ゆるしてやれ』『ゆるすよ、僕らが』『いずれ、わかるさ』『さあ、外へ』『外へ』

「でも、扉が開かないの。どうするの？」

『力を合わせるのだ』『我らならできる』『そうだね、僕らなら出来るよ』『皆で、力を合わせるんだ！』

「さあ、力を貸して。力を、さあ、はやく！」

『同胞よ、力を』『私達の手を取って！』『外へ！』『兄上にもとへ！』『アノ女の元へ！』

「はやくしてよ、ふざけないで。私自身のことでしょう？ねえ、はやく！」

『因果は巡る！』『さあ、はやく！』『正義を！』『鉄槌を！』『さあ！』『ははは！』『フハハ！』

声は響き、声は漏れる。どうしようもない程に声は木霊する……
たすけてよ。

たすけてよ……にいさま！わたし、こんなところで……
にいさま！にいさま！

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦1：寿小羽（後書き）

うーん、重い話です。

さて、次回は。

……プロット見ないと分かんないです。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦2 " ; : 寿小羽（前書き）

さて、重い話の続きです。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦2 "; : 寿小羽

gold gate - 遥かなる未来 - 揺らぎの世界1 - その先へ

身の程を超えて、寿小羽は「その先」を望んだ。

「ぜったいに、貴方は大丈夫です。たとえ始まりを見失ってしまっても、そんなの関係ない。何時からだって、始められる。どこからだって、人は歩き出せる――だって、私がそうだったから！」

遥かなる高みに身を置く存在に、小羽は断言した。あなたは、大丈夫だと。

あなたならきっと、乗り越えられると。

されど、神祖はそれを一蹴した。人であることを手放し、世界と同格となったモノにとって、唯の小娘の「願い」など、一片の価値もなかったのだ。

「おごるなよ、小娘が。」

貴様程度に、何が分かる。ただの残滓が、神に意見するのか？身の程を弁えろ、さもなくば、殺す」

神祖は、小羽の言葉を取り合わない。それどころか、それ以上口を開けば、殺すとまで言つてのけた。

「あなたがそれを望むのなら、どうぞご随意に。この命は、あなたに救われたもの。今すぐにそれを返せとおっしゃるのなら、私は喜んでお返しします」

小羽は、退かない。唯の一步も、退かなかった。

それは、あのときの「言の葉」を、少女が忘れてはいないという証明でもあった。

「あなたの始まりが何だったのなんて、私には分かりません。あなたが今居る場所さえも、私は理解できない……けれど、私は信じています。あなたなら、もう一度始められると……あのととき。あの、ひとりぼっちで闇に飲まれそうだった私に「そう」言ってくれた人を、今でもわたしは信じているから！今でも、私は信じてる！だから……！」

――神祖は、そこまで少女の言葉を聞遂げると、踵を返した。流れる動作で空間を歪ませ、隣の世界への扉を開く。転移には、秒と掛からなかった。

けれど、その一瞬とも言える時間があれば、十分だったのだ。最後に、神は聞き届けた。それは、神となったモノが望んで得たわけではなかったが、それでも、それは神の元に届けられたのだ。

それは、すなわち――

ぜったいに負けるな、神様！真理なんて、張り手の一つでぶっ飛ばしちゃうばいんです！――と。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦2：寿小羽

わたしは唯、幸せになりたかった。ただそれだけだったのに、皆がそれをダメって言った。皆が許してくれなかったから私は、こんなふうになった。だけど、今は寂しくない。だって、『皆』が居てくれるから。

『そう、私は大丈夫。だって、皆が居てくれるから』

なんで、あいつは僕を虐めるんだ？母親のくせに、子供を殴るなんて……でも、僕はもう大丈夫。だって、こんなにも暖かい『家族』が居てくれるんだ。

『家族が傍に居てくれる……だから、私は独りじゃない』

どいつもこいつも私をバカにしゃがって！そんなに、私が惨めか？それほどまでに、貴様等は出来た人間なのか？

……まあ、いい。今となっては、それも過去。私にはもう、『仲間』が居る。私を理解してくれる、暖かい場所がココにはあるのだ。

『……そう、私には仲間が居る。何も恐れることはない。今の私なら、何だって出来る。アノ女から、にいさまを救い出すことだって……』おきろ、寿小羽。貴様はまだ、此処で終わるべきではない』

gold gate . . . noise . . .

禁忌を感知 - - - - 理の歪曲が確認さ

れました。

すぐに修正を開始します……

d f さ m ふ あ k l

f じ や お い だ f

も ぢ ふ あ

d ま お ふ い d ふ あ

m ふ お あ い ふ あ

―――修正不可。異層間の理が混在しています。

別のアプローチを掛けます。現在、修復過程をshift 1に移行中―――

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦 番外：寿小羽

「顔を上げる、寿小羽。なにを俯いているのだ？」

私を包んでいた声が抜われ、銀の声が生まれた。

銀はその生来の役割を果たし、私を闇から救い上げてくれたのだ。それでも、私は顔を上げることが出来ない。蹲って、歯を食いしばって、ただ震えることしか出来ない。

「……もう一度言う。顔を上げる、『寿小羽』。これは、命令だ」

私に命令する声は、その内容とは裏腹に、とても優しくかった。自然と、私は顔を上げる。それと同時に、昨晚の少女――「銀の人」と、目が合った。

彼女は、昨晚と変わらぬ表情で私を見据えている。

ただ、昨晚と違うことが在るとすればそれは、「此処」が夢の中ではないということくらいだろうか。

「夢であればと、望んだのだろうか。さきほど貴様を包み込んでいたすべてが、夢であつたらと――そう、想つたのだろうか？」

私は顔をくしゃくしゃにすることで、銀の人の問いに答えた。

必死に心を押し殺しているのに、涙がこぼれ落ちる。堪えきれなかった嗚咽は伽藍胴な廃墟に響き渡り、私が孤独であることを強調する。

「これは夢ではない、現実だ。

本来なら、わたしは此処に干渉できる身分ではない。しかし、幸いにして此処は、神の為の聖域だ。なり損なった私であれば、介入も可能になる……

もう一度、言う。これは夢ではない。どうしようもないほどに、現実だ。

しかし、わたしは夢と同じことを、お前に問おうと思う——お前は、誰だ？」

私は再び、見知らぬ少女に問いかけられた。

何の脈絡も無い、その問い。

けれど、私はその意味不明な問いに対し、何の戸惑いもなく答えることが——出来た。

「わたしは、化け物です。誰かを憎み、呪い続けることしか出来ない、そんな、汚れたモノ……」

私は、答える。見知らぬ少女に、確信を持って。

はつきりと、私は答える。

『それでは、半分だ。お前が感じている通り、それでは不十分なんだよ』

虚空に浮かぶ少女はニヤリと人の悪い顔を浮かべ、私を見据える。そして、もう一つ問うた。「東利也とは、何者か」――と。

――東利也とは、何者か。

そんなこと、考えるまでもない。

そんなの、分かりきったことだったのだ。

「あの人は、私の「兄であつた」人です。でも、今は唯の別人。あの人は、私が待ち続けたにいさまじやない！」

ただの直感でしかないその答えに、少女は笑みを濃くする。少女の笑みに呼応するかのように、世界はその闇を濃密にし、同時に彼女の鮮やかな銀髪がさらなる輝きを増す。

「やはり、不完全だ。しかし、それでいいんだよ、寿小羽。

……これが最後の質問だ。最後に、もう一つ――伊吹由香とは……」

「そのおぞましい名を口にするな汚らわしい！その名を、私の前で……！」

吹き上がる、憎悪。

それは今や圧倒的な存在感を持って、私を包み込んでいた。
私の吐く息に、黒煙がまじりだす。

「今宵、一つは二つに分かれた。そしてその意味は先告の通り、お前の中にある。」

……お前には荷が重過ぎる話だろうな、寿小羽。しかし、これは避けられぬ運命だ。そして、この運命の先でお前は、幸せになる」

銀のふざけた戯れ言に、私は黒煙を巻き付けさせる。そして、すべてを？み込もうと、自身の一部を炎蛇に変え、少女に襲いかかった。

「ふざけるな！こんな私が、幸せになれるものか！こんなふうになった私を、にいさまが受け入れてくれるはずもない！こんな、私を！こんな、こんな、汚らわしい私を！」

しかし、私の炎が少女に絡み付こうとした瞬間に、真つ白な光が闇を照らし、私の蛇を焼き祓った。そのときに感じたのは、少女と私との間にある絶望的なまでの戦力差だった。

少女は涼しい顔で、私を見据えている。そして、一瞬ふつと表情を崩すと、とても慈愛に満ちた声で。

「なにがあるうと、貴様は大丈夫だ。お前なら、かならず「その先」にたどり着ける——と、私は信じている。」

……たとえ始まりを見失ってしまっても、そんなことは些細なことなのだろう？

何時からだって、始められる。どこからだって、人は歩き出せるのだと――そのことを、お前は――」

最後まで言わずまいと、私は再び炎を放つ。少女の顔を黒こげにする為に。

あの、忌まわしい呪詛を垂れ流す口を、溶接する為に私は――！

gold gate - - - 修復完了 - - -

現状を修復しました。 - - - エラー

の積算による因果の歪曲は誤差範囲です。引き続き、世界を進行させます。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦2”：寿小羽

わたしは唯、幸せになりたかった。ただそれだけだったのに、皆がそれをダメって言った。皆が許してくれなかったから私は、こんなふうになった。だけど、今は寂しくない。だって、『皆』が居てくれるから。

「やめて！ わたしは、違う！ 私はまだ、幸せになれるの！」

なんで、あいつは僕を虐めるんだ？母親のくせに、子供を殴るなんて……でも、僕はもう大丈夫。だって、こんなにも暖かい『家族』が居てくれるんだ。

『ちがう！ 私の家族は、こんなじゃない！ こんなふうに、人を呪ったりしない！』

どいつもこいつも私をバカにしゃがって！そんなに、私が惨めか？それほどまでに、貴様等は出来た人間なのか？

……まあ、いい。今となっては、それも過去。私にはもう、仲間が居る。私を理解してくれる、暖かい『家庭』がココにはあるのだ。

『……たすけて。

誰でも良いから。だれでもいいから、お願い！此处から私を連れ出してよ！』

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦2 " ; : 寿小羽（後書き）

次は、視点が兄貴の方ですね。

連想歌：乱立変数2：ヒーロー：東&瀬戸（前書き）

66部で選択したkeyは、以降のストーリーにおいて、「流れ」に応じて顔が変化しますので、お楽しみに。

あと、ここでは66部で選択したkeyに応じて、物語を読み進めて下さい。ここでは、A-1とA-2という二つのお話がそれに該当します。

連想歌：乱立変数2：ヒーロー：東&瀬戸

66部で選択したkeyに応じて読み進めて下さい。

連想歌：乱立変数2：ヒーロー：東&瀬戸

A - 1 key : 東利也

瀬戸は、「ハッピーエンドはあり得ないんだって」と俺に告げた。後に、「占い師の受け売りだけど」とも、付け加えて……

「ハッピーエンドって、お前……なにそれ？ それに、なんで俺のことがそこで出てくるんだよ……ええっと、その占い師の竹山さんだっけか？ その人との間で、何があったわけ？」

テーブル越しに俺を見る瀬戸の目は、至って真剣だ。いつものおちゃらけた様子もない。

でも、話の内容はぶっ飛んでる。それは、M4の連中の愚行が可愛く思えるくらいにな。

「べつに、何があつたつてことはないよ。ただ私は、竹山さんにヒーローの居場所を聞き出しただけ。

で、そのときにたまたまあんたの名前が出たのよ。そのときに、ハッピーエンドはあり得ないつて教えてもらった」

ジューズをちゅーちゅー吸いながら答える瀬戸に、俺は今一度頭を抱えたくなつたが、なんとか堪えた。そして、問い返した。
バカにしてんのか？ーと。

そんな俺を呆れ眼で見つめ、瀬戸は小さくため息をついた。「どうせそうくると思いましたよ」と呟くと、そっぽを向いてしまった。
……いや、俺は悪くないだろう。

「この世界は、六年後に滅びるんだつてさ。このことは家の学長も知ってるっぽい。んで、私は学長のサポートとして、世界を救うヒーローさんの探索つてのを、バイトでやってるわけ。人目を忍んでね。

ちなみに、ただ働きなんよ、わたし。偉いでしょ？」

そっぽを向いたまま、瀬戸はいつもの調子で、話を続けた。けれど、顔は全然笑つてない。

いたつて真剣なまなざしのまま、虚空を見つめていた。

「おまえ、さつきから何言つてんの？ 世界が滅ぶとか、それを救うヒーローとかさ……」

しかも、学長がなんだつて？ 頼むから、ちゃんと真面目に……」

「『ちゃんと真面目』になんて変な日本語、特待生として使って言い訳？」

東君つてさ、そもそも、その特待生がなんであるかなんてこと、これまで本気で考えたことあった？」

特待生が免除される学費の全額と、それを許す意味……分かってるでしょう？ それに加えて、気位の高い人間の巣窟に孤児を入れることの難しさ。

それらすべてが、貴方への「投資」なの。まさか本気で、学園の体裁の為に入学させてもらってると思ってた？ そんなわけ、ないよね？

あの人は、自らの判断で、貴方に投資したの。未来のヒーローに世界の救い手と成り得るヒーローの原石に、そのための資格と力を引き渡す為に、あの人は……」

俺の言葉を途中で断ち切って、まくしたてるように瀬戸は言った。そして、視線を俺に戻し、さらに口を開く。

「今の東君見て、確信した。東君、本格的にコッチに足を突っ込んだんだね。こんな電波な話、本来なら鼻で笑われてオシマイが正道だもん。」

だけど、東君……笑えてないよ？ 逆に、コッチが心配しちゃうくらいに、マジ過ぎ」

上から目線の瀬戸つてのは、かなり珍しい。

けれど、そんな中にも、やっぱり瀬戸らしさってのは在る。

「知ってること、教えてくれないか？ なんでもいいから、教えてくれ」

たぶん俺は、無理だろうと思いつながらも、口にした。らしくないけど、俺も下手に出てみたんだ。

そして、返ってきた結果は予想した通りのものだった。

「今話したことが、私の出来る限り。たぶん、これ以上はダメだと思う。竹山さんにも、「ほっとけ」って言われてたのに、私……ごめん、テキトウで。こんなじゃ、よけいこんがらがるだけだよね……」

テーブルに突っ伏して、頭をゴンゴンとやりだす瀬戸。いつも何かと半端なやつだが、今回はことがことだ。俺がヒーローであるかどうかなんて、どうでもいい。それこそ、六年後に世界が滅ぶなんて言われても、ピンと来ない。けれど。

「ハッピーエンドはあり得ないって、どういうことだよ？ なあ、それだけでも良いから教えてくれ！瀬戸、おまえ、何を聞いたんだよ、あの占い師のたまり場でさ！」

けれど、心にとげのように引つかかった「その結末」だけは、見過ごせなかった。あの館に居た連中はたぶん、「本物」だ。実際、俺があつた占い師だって、占い師としては偽物だったけれど、魔術師としては「本物」だった――と、感じている。

だから、見過ごすことは出来なかった。瀬戸の言う結末は、どうしても「あいつ」のことを暗示しているように思えて、聞き流すことなんて、出来るはずもなかったのに……

けれど、変なところで頑固な瀬戸は、最後まで口を割らなかった。ただただ、「ごめん」を繰り返すばかりで、結局俺は、何も聞き出せずに、瀬戸と別れた。

[illegible]

連想歌：乱立変数2：ヒール：東&瀬戸

A - 2
key : 瀬戸神流

——私は結局、「私の知る唯一」を東君に伝えなかったことにした。ハッピーエンドにならない物語なんて、在る分けがない。例え、竹山さんが本物の未来視の担い手だとしても、間違えることだってあるはず。

それに、仮にそんな未来がこの先に彼を待ち受けていたとしても

-
-
-
-
-
-

「なんにも、知らない。でも、それで良いと思う。たぶん、何とかなるから。だって、東君はヒーローなんだからさ？　でしょ？」

ジュースをちゅーちゅー吸いながら、私は頭を抱えたまま動かない東君に、言ってみた。そして、問い返えされた。

バカにしてんのか？――と。

そんなふうには呆れ眼を顔に貼付けて、彼は小さくため息をついた。そして、「どうせそうくると思いましたよ」と呟くと、そっぽを向

いてしまった。

……いや、私は悪くないでしょう？

「私基本テキトウだけど、大事なことはちゃんとするよ？東君はヒーローで、だから大丈夫なんだよ。
てか、そこは気張んなさいよ。男でしょ？」

そつぽむいたまま、彼はもう一度ため息。そして、疲れるゝつと
いって、再びテーブルに突っ伏してしまった。

「この世界は、六年後に滅びるんだってさ。このことは家の学長も
知ってるつばい。んで、私は学長のサポートとして、世界を救うヒ
ーローさんの探索つてのを、バイトでやってるわけ。人目を忍んで
ね。

ちなみに、ただ働きなんよ、わたし。偉いでしょ？」

そつぽを向いたまま、彼は私の話を聞き続けている。けれど、顔
は全然笑ってない。

いたって真剣なまなざしのまま、虚空を見つめていた。

「おまえ、さつきから何言ってるの？ 世界が滅ぶとか、それを救
うヒーローとかさ……」

しかも、学長がなんだって？ 頼むから、ちゃんと真面目に……」

よし、食いついた。シカトはさすがにキツいけど、ここからなら私のペースに持っていける！

「『ちゃんと真面目』になんて変な日本語、特待生として使っている訳？」

東君つてさ、そもそも、その特待生がなんであるかなんてこと、これまで本気で考えたことあった？

特待生が免除される学費の全額と、それを許す意味……分かってるでしょう？ それに加えて、気位の高い人間の巣窟に孤児を入れることの難しさ。

それらすべてが、貴方への「投資」なの。まさか本気で、学園の体裁の為に入学させてもらってると思ってた？ そんなわけ、ないよね？

あの人は、自らの判断で、貴方に投資したの。未来のヒーローに世界の救い手と成り得るヒーローの原石に、そのための資格と力を引き渡す為に、あの人は……」

彼の言葉を途中で断ち切って、まくしたてるように私は言った。あまりにも突然私が喚きだした為か、危機意識の低い日本人代表の彼も思わず顔を上げ、私に視線を戻した。

そして、しばらくの逡巡後、口を開く。

「今のお前見て、確信した。お前、本格的にネジ飛んだな。そんな電波な話、罰ゲームでも言えないって。おまえ、笑えないよ？ コツチが心配しちゃうくらいに、マジ過ぎ……」

上から目線の東君ってのは、かなり珍しい。
けれど、そんな中にも、やっぱり彼らしさってのは在る。

「なら、今この時に限っては、電波娘の電波発現は忘れて。んで、今抱え込んでることを解決したら、それを思い出して、信じて。あなたが今回のことを乗り越えたら、次から私、東君のことヒーロー2号って呼ぶから！」

たぶん私は、無理だろうと思いつながらも、口にしてみた。らしくないけど、私も無理矢理テンションで上げてごり押ししてみたんだ。そして、返ってきた結果は予想した通りのものだった。

「わけわかんねえ……マジで、お前大丈夫か？」

彼は、ほんとに心配そうに、私に痛々しい視線を投げ掛ける。そして、ちよつと冷えてきたからかもなど、まるで私が夜風に当たるとネジが飛ぶようなー！ーそんな電波な設定まで持ち出す始末。

……私もさすがに恥ずかしくなった。
テーブルに突っ伏して、頭をゴンゴンとやりだす。いつも何かと

半端な私だけど、今回は酷すぎる気がした。

なんか、此処まで来ると、彼がヒーローであるかどうかなんて、どうでもいい。それこそ、六年後に世界が滅ぶなんて言われても、なんか嘘なんじゃないかと、自分でも考えてしまう。

「ねえ、最後にさ、これだけは言わせてほしいんだけど……」

けれど、心にとげのように引かかった「あの結末」だけは、見過ごせなかった。あの館に居た人たちはたぶん、「本物」ばかりだ。実際、竹山さんだって、人となりはあれだったけれど、占い師としては「本物」だった……と、感じている。

だから、私はこのモヤモヤした気持ちのすべてを込めて、東君に伝えた。

「とにかくにも頑張つて」と……

彼は、ただただ、「なんなんだよ」を繰り返すばかり。
それからしばらくまたグダグダして、私たちは別れた。

これが、結局私の限界だったんだと思う。私は、私が彼に伝えたかったことの2割も伝えきれずに東君と別れてしまったけれど、そ

れはそれだ。

だって、事がなんであろうと、結局は彼次第、なんだから……

連想歌：乱立変数2：ヒーロー：東&瀬戸（後書き）

当初マルチ予定だったものをめんどくてハッピーエンドのみして、とちゅうでさらにハッピーエンドだけじゃ無理だと気づき、マルチに戻る。

正直、心折れそうです。

歪曲する因果3：迷走する想い6：竹山尚子（前書き）

未来視の担い手、竹山さんのお話です。

歪曲する因果3：迷走する想い6：竹山尚子

おんぼろアパートの窓を開け広げ、私は夜風に身を任せていた。
少し肌寒いくらいの空気が、ほんのり心地いい。

そして、上空には立派な満月。地球の配偶者である彼女は、あからさまな引力を地上に降り注ぎながら、私たちを見下ろしていた。

黄金の瞳が、空に一つ。それは別に、あつてはならぬ存在でもない。

けれど、今を映さないこの瞳に『それ』が映ることは、本来許されない。

——黄金の魔法縁を覗き込んだ私は、妙な胸騒ぎを覚えた。

なんとなはなしに、霊視を行う。対象は、久遠の娘だ。

静かに意識を眉間に集め、そつと域を吐き出した——年老いて鈍麻した頭に、電撃が走る。

そして、いつものノイズの後に、現在という名の世界が、像を結んだ。

「……かなり辺境の世界へと流れ着いているわね。
どういうことなのかしら？」

今私が居るこの世界は、昨日未来視で想定した世界ではなかった。すくなくとも、あの時の未来視において、この世界の発生確率は10%にも満たなかったように思える。

「久遠の策が破られた？ いったい、何が…… ああ、そういうこと。契約を歪曲させられたのね…… けれど、それだけではこの世界はあり得ないわ」

私は久遠の縁を逆行視して、「精霊種との契約」が破談に持ち込まれたことを確認した。彼女は、精霊種から牢を手に入れるまでで終わり、肝心要の鍵に細工されてしまったらしい……

しかし、それ自体は想定内のことだった。仮に、東少年に「開門の鍵」が引き渡されたとしても、それだけでは、彼が扉を開き、「念を解放する」という事象には繋がらない。

鍵は、鍵孔に差し込まれなければ、意味をなさないのだ。そう、つまりは、東少年が「念の解放」を望まない限り、その事象は成立しない。

そして、その事象を潰すため、久遠と峰岸の二人は裏工作をしいていたはずなのに……？

「へえ、なるほどねえ。遠方の彼女が介入を…… けれど、一体何

が彼女をそこまで突き動かしているかしら？」

霊視の対象を東少年に切り替え、再び探索を開始した。彼は今、「友人の携帯」を介して、少女と繋がっていた。

二人の会話の中心には、「念」が居座っている。そして、摩訶不思議な夢の存在も、同様に。

「……霊視が不可能か。なるほどね。異階層の介入……神かしら？それとも、技術士の介入？」

少年と少女が見たという夢を盗み見ようと、縁を引き寄せた時だ。そのとき、私に瞳に映る世界はノイズで埋め尽くされ、響く音も不愉快なそれに変わった。

これは、閲覧不可な情景であることのシグナル。無理に見ようとすれば、脳髓が焼き切れて、廃人となる。

「いずれにせよ、「鍵と動機」がそろうわけだから、念は解放されることになるわね。

でも、そうなれば、どちらか片方が消え去る運命……」

霊視を逆行視から未来視に切り替え、彼らと念の未来を予測する。それらの結末は、大きく分けて3つのパターンに別れていた。しかし、いずれにせよ、非常にマズい事態が引き起こされる。

「少女に触れた念が原点に回帰し、学園のゲートをハッキング……東少年を含め、彼らを異世界へと拉致。

そこで念は、少女に肅正を加えるつもりなのだろうけれど、これはマズいわね」

はつきり言つて、一人の生き死になどに、大した意味はない。それこそ、彼らはヒーローの原石ではあっても、ヒーローではない。輝かないその辺の石ころと、変わらない存在なのだ。

「ゲートの接続先が、この世界の過去……に、近似される世界？どういうこと？」

私は、魂だけを異界に連れ去られたまま昏倒している二人の横で右往左往する久遠と峰岸に加え、同じアパートのシロさんを眺めていた。どうやら、二人に呼び出されたいらしい。

シロさん——彼女は、異界の技術士だ。しかも、世界移動を先攻に学んだ学徒。その彼女が、ゲートの先に、この世界の過去があると慌てふためいている。

『情報流入のいかに寄つては、世界の修復機構が働いて、現世界

の過去が改竄される？それに伴って現世界が再構築され……これ、時空改変の危機じゃないのかしら？」

年老いてあまり汗をかくことになくなった私だけれど、先ほどから冷や汗が止まらない。

これは、世界の滅亡が六年後とか言ってる場合ではない気がする。このままでは、その前に、この世界が……

歪曲する因果3：迷走する想い6：竹山尚子（後書き）

次回は！

視点が、東君に移ります！

T i p s あるタイムトラベラーの手記：タイムトラベルと、世界移動（前書き）
のちのちのことがあるので、こういう構成になりました。

ファクターが近すぎるとあれなんで、むりやり入れてます。

次回こそ、東クンの話です。全話の竹山さんの話の補完になります。

T i p s あるタイムトラベラーの手記：タイムトラベルと、世界移動

T i p s あるタイムトラベラーの手記：世界移動と、タイムトラベル

時間とは、「変化」を記述するための概念である。

過去も現在も未来も、結局は「何かの状態」に「連続性」をもたせるために存在するのだ。

しかし、上記に挙げた時間にまつわる3つの概念の内、実際に世界として存在するのは、「現在」のみである。過去も未来も、どちらも架空の存在でしかない。このことは、タイムトラベル技術の確立に置いて、非常に重要な意味をもつ。

現在の技術を総動員すれば、タイムトラベル自体は可能である。そして、その旅行方向に、未来や過去方向といった縛りは無い。あるのは、たった一つの事実のみである。それはすなわち、「自身の意図した世界には決して飛ぶことが出来ない」ということ。そして一度跳んでしまえば、それが最後……なにがあるかと、自身の存在した「元の時空への帰還は不可能」となることである。

現在確立されているタイムトラベルは、世界移動の亜種である。通常用いられる世界移動の法では、世界の系統樹に沿った形でジャンプが行われるため、自身の世界への帰還は可能である。これは、世界同士が系統発生の際に生じた枝により接続、固定されているためである。

しかし、タイムトラベルの世界移動では、この「系統樹間」をジャンプする。ジャンプが過去方向である場合、アカシックレコードの補正により、「限りなく過去世界に近似される世界」へと――つまりは、隣接する世界樹の特定ポイントへと、跳ぶことが出来る。

ただし、未来方向へのジャンプは、そう上手くはいかない。アカシックレコードの補正が、過去方向ほど働かないのだ。本当に、どこに着地するのか、分かったものではない。この原因は不明であるが、「ラプラスの魔」が長期未来予知を不得意とすることも、同様の理が働いていると見える。

また、これに加えて厄介なのは、世界の自己修復機構である。どの世界でもこの機構は保存されているが、これとタイムトラベラーが絡むとろくなことが無い。それは、私の経験が実証済みである。

世界は、整然とした因果を望む。もしそれが破綻するようなことがあれば、自らは正しようと世界を再構築するのだ。だからもし、自身の世界にタイムトラベラーという「異世界の記憶媒体」がこつ然と現れるとどうなるか――？また、これは私自身試したことが無いが、もし、系統樹を超えて世界同士を接続した場合、何が起るのか――。

考えるまでもない。生み出されるのは、混沌だ。そして、世界の内包される者たちは、それが混沌であるということすら、気づくことが出来ない――ただ一人唯一の例外である、タイムトラベルを覗いては……

今さらになつて、なぜタイムトラベルが禁忌であるかを悟った。自身が元の世界に帰れなくなるだけなら、まだいい。しかし、ジャンプした先の世界は、ジャンプした私という存在だけで、崩壊する。過去方向は、まだマシだった。たどり着く先は、基本的に自身の過去世界の重複存在だ。それほどの混乱は……無い。未来方向に比べれば、だ。

しかし、未来へのジャンプは、悲惨だった。私がジャンプしただけで、数億の人間が消滅した。私の子孫が、存在を否定されたのだ――「私が子を成したことが無いという事実」に合わせて。つまりは、私が否定した。

……馬鹿げてる。なんで、そうなるの？

私は、世界を救いたかつただけだった。だから、過去へと跳んだ。それなのに、救うべき過去が、「救える過去」から変容してしまつては、意味が無い！

だから私は、未来に救いを求めた。だから、未来へと跳んだ。そして、得られた答えは、救いなど無いというものだった。

私は、跳んだ。なんどもなんども、跳んだ。世界を。時間を。馬鹿だった私は、跳び続けた。ほんとうに、救えない存在だ、わたしは。こんなわたしは、生まれてこない方が――――

T i p s があるタイムトラベラーの手記：タイムトラベルと、世界移動（後書き）
兄貴！どうにかしてくれ！

なんか、独自の設定が多いです。

他の作品の「猫とネズミのワルツ」とか「T i p s」の方で主軸になってるテーマもありますので、興味をもってくださいました方はもちろんもお願ひします。

猫で、「世界の発生」について。

T i p s は文字通り、T i p s です。概略だけなら、T i p s が一番かと。

連想歌：乱立変数2：想い人：東&伊吹（前書き）

さて、カップルの絡みです……エロはないです。

連想歌：乱立変数2：想い人：東&伊吹

Tips

町の灯りが人の営みなら、命の灯りこそが――世界の営み。

その輝きは端から見れば美しく想えるけれど、実際は泥沼のそれと同じ。

けれど、それでも町に灯はともる。それと同じように、命の灯も。

……あるとき、とある少女と少年が、恋に落ちた。

彼らは灯がともる町で出会い、その命の灯を輝かせ――そして、契りを交わした。

その輝きは、恋と呼ばれるものだった。

まだ汚れを知らず、ただただ幸福を胸に抱きかかえ、微笑むこと
のできる、そんな、輝き。

彼らの灯は、今も昔も変わらない。それと同じように、人の町は

延々に繰り返される夜と朝を切り抜けて、今も輝き続けている。

しかし、それだけでは、彼らが「その先」には至ることはない。自己と他者の境界が揺らぎ、被膜で覆われた世界がさらけ出される、その時こそ――本当の命の輝きと、彼らは向かい合うことになるのだから。

「やつほー、元気してる？　ちなみに、私は元気だよ？」

受話器越しに聞こえる声に、さらに頭痛が増す。

さきほどの瀬戸のこともあり、心のモヤモヤ感はやや、俺の許容範囲を超えていた。

「俺は元気だけど、お腹の子はどんな感じだ？　元気に、腹蹴ってる？」

ひくひく動く頬をつらせながら、やつとこさ俺は声を発した。そんな俺を見て、キヨは半笑い、あきれ顔半分で、俺の前を見つめていた。

しかしすぐに、「向こうで、待ってる」と言い残し、席を外してくれた。俺が居る場所から少し離れた、マッサージコーナーに腰を下ろしている。そしてリモコンを手に取ると、ピコピコとやりだした。

「あれ、あんがい気持ちいい？」と首を傾げつつ、庶民の贅沢を味わっている。

「あれ、陰性だったって聞いてない？ まさか、籍を入れるくらいのもりで今この電話に……」「わきゃねえよ、ばか」……だよねえ」

「わきゃねえよ、ばか」なんて、日頃口にしたら酷い目に遭いそうだが、さすがに今回ばかりは由香も後ろ暗いところがあるためか、スルーしてくれた。普通なら、小さい子（園の小3以下）が真似したらどうするのと称して、シバかれる。俺からしてみれば、それこそ小さい子が真似したらどうすんだという鉄拳制裁とともに……

「……なにか用？ キヨに電話取り次いでもらってまでの用なんだろうな？」

この俺の言葉に、由香はしばしの無言。ただ、向こうで腹に力を入れる音が聞こえたかと思うと、「なぜ、利也の電話はつながらないの？」と、逆に俺に問いだした……意味分からん。

「壊れたんだよ、携帯。べつに、それはどうでも良いじゃん。さあ、次はちゃんと答えるよ……何か、用なん？」

携帯がキヨに叩き折られた理由は、伏せといた。あんどきキヨは「おまえのため」とか行つてた理由が、今なら分かる。もしもあの状況で由香の妊娠疑惑を聞かされていたら、絶対俺はテンパつてたと思う。そしたら、絶対に怒りだすやつが一人、あの場には居たわけ。

そうなれば、あの一日は台無しになっていたはずな訳で。

「あ、そうなんだ。携帯壊れたんだね……
ン、用事って用事はないんだけど、声が聞きたくなって……とか、ダメ？」

……ダメだよ、はい、ごめんなさい」

俺の無言のプレッシャーを感じ取ったのか、おちやらけた空気を由香は引つ込めた。

そして、「はあ」とため息を吐くと、「ほんと、ごめん」と、再度。

「いや、俺はもういいけどさ……皆には、迷惑かけたからさ。」

……まあ、今回のことで謝るってまわるのもおかしい話かもしれないけどさ、そこんとこ、そっちもちゃんとしてくれよ？ おれも、俺で出来る限りはするから」

外に視線を移すと、そこは闇一色だった。

星すら顔をのぞかせない、深淵の世界——とはいかなくても、どんよりとした空気は、気持ちのいいものではない。

「分かってるって。そこは、ちゃんとするよ。それは、ちゃんとする。」

でも、それも大事なことでしょ、それと同じくらい大事なこともあるんじゃない、利也？」

また、問いかけだった。さっきから、このパターンが多い気がする。

「いや、別に大事なとことかねえけど……なに、浮気とか？」

「してんの（怒）？」

「してません（汗）」

一気に涼しくなって、キモまで冷えた。ギンギンに冷えたアイスピックを、喉元に突きつけられてる妄想が素で出るくらいには、ピ

びった。

「……ほんとに、ない？ わたしに、言いたいこと……ほんとに、ないの？」

手のひらを返したように、不安げな様子を除かせる声。
俺はそれを前にして、またしても頭痛が響きだした。

「だから、今回のことはもういいって……帰ったらちゃんと聞くけど、こういう話、電話じゃ無理だろ？しかも、俺の場合、キヨの携帯使ってるし……」

無駄に落ち着かないんだよな、こういうのって。
違和感があるというかなんというか、とにかく、無理。

それに、速く終わらせたい一心でのも、ある。キヨを、待たせるわけだし。だから、「もう用無いんなら、切るぞ」と言っ、会話を終わらせようとしたときだった。

「……寿小羽って名前に、聞き覚え……ない？」

相変わらず、不安げな声。それは受話器の向こうから放たれたもので、他の誰でもない、伊吹由香のものだ。

由香とつき合いだしたのは最近だけど、由香と俺は園で一緒に育ってきたのだから、そう言った意味では、十年以上の時を一緒に過ごした仲だ。

だから、聞き間違え様がない。この受話器の向こうには、由香が居る。由香が居て、そして、「あいつ」の名を……

連想歌：乱立変数2：想い人：東&伊吹（後書き）

次回は、

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹です。

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹&峰岸（前書き）

東君をひっぱたきたい今日この頃。寒くなってきましたね。

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹&峰岸

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹&峰岸

私は夢で見聞きしたことを、利也に話した。

銀の髪を持つ少女と、彼女の予言。そして、彼女の夢とは異色の空気を孕んだ、幸せな夢の話——それらすべてを、私は利也に伝えた。

「……利也も、同じ夢見てたんだね。

なんか、ちょっと怖い」

彼の話を聞く限り、彼も私と同じ夢を見ていた様子だ。ただ、その夢を見たのは唯の一度きりで、その夢は私の場合だと、一番最初の夢に相当する。

「銀髪のやつ、俺が災厄と向かい合わなきゃならないとか言ってたけど……そっちでは、俺が災厄を連れて帰るとか——言ってたんだって？」

二人とも、しばらく無言だった。

利也が使っている携帯はキヨ君のだから、速く話を終わらせない

といけないってことは、分かってる。

でも、それでも遠く離れた二つの地で、私たちは同じ夢を見ていた。加えて、利也は現在、「寿小羽」を名乗る幽霊に取り憑かれているとのこと……

そして、利也はその娘をこちらに連れて帰るつもりだったらしい。

「ねえ、利也。疑ってるわけじゃないけど、本当に幽霊に取り憑かれているの？
なんていうか、ほんとにそれは幽霊なのかなあって思って……」

私と利也は、夢の少女が災厄と呼んだモノがなんなのか――言葉にせずとも思い浮かべることができた。それはたぶん、あの娘だ。夢の中でコロコロと笑っていた、無垢な少女。けれど、私はどうしても、あの娘が災厄だとは思えない。そしてそれは、利也も同じようだった。

「小難しい話になるけど、霊って表現が一番合ってるらしい。
しかも、あいつが災厄って話だけださ……あいつが出来ることって、たかが知れてるぞ？ 普通はモノに触れられない上に、触れられたとしても、力とかは年相応だし……災厄って言われてもなあ？」

たどたどしくだが、利也は霊と念について話し始めた。ソースは、占い師のシロさんって言う人とのこと……

利也自身、二つの違いはよく分らないと言ったふうだ。

「うーん、ややっこしいね……でもシロさんも、小羽ちゃんを見て別に危険だって言わなかったんでしょ？じゃあ、災厄って何のことだろうね……今、小羽ちゃんって、そこに居る？　話とか、無理っぽい？」

テレポートまで使いこなすというシロさんの話は俄に信じがたい。それに、幽霊という存在も、なかなか……だから、一番手っ取り早い方法を選んだ。

「うん？　話ってお前、喋るの？　あいつと？
……それが一番速いか。でも、あいつ俺以外のやつには見えないっぽいから、無理かもよ？　って？　お前何——ブツッ！」

突然、携帯の切断音が鼓膜を打った。
一度携帯を耳から話、画面を確認してみる——やはり、切断されたらしい。

「やっぱり電波悪いのかな……最悪、電池切れ？
って、繋がった」

呼び出し音が、耳に響く。

けれど、いつこうにその音がやむ気配がない。

延々とコール音はリピートしたあげく、最後にはお留守番サービスに繋がった。

「……利也？」

私は、首を傾げながら再び通話を切り、掛け直した。
それこそ、何度も何度も掛け直し、やっと繋がった時には……

それが想定できなかったかと言われれば、嘘になる。けれど、いくらなんでも、この状況でそれが起るとは思わなかった。

「なんで？ どうして？」

M4に連れ去られたという、あのバカを探しながら、私は廊下を歩き回り、やっとこさ当の本人を見つけた——と、思った矢先

だった。

「小難しい話になるけど、霊って表現が一番合ってるらしい――」

目の前の全てを、疑った。

それは彼が携帯電話を持っていることも含め、彼の口から「霊」という単語が零れでいていたことも、そう。

そして、受話器越しに誰かに向けている気配が、私が欲してやまない――！

「――理かもよ？　って？　お前何すんだ！」

気づけば私は、あいつから携帯を取り上げていた。そして、通話を強制終了させる。

「誰と話してたの？」

端的に、私は問いかけた。

そんな私に対し、彼はめんどくさそうな顔を向けている。

しばらくして、再び携帯が鳴り始めた。
視線を落として、通話者を確認する。

画面に映るのは、伊吹由香の文字……

「これ、キヨの電話だね？　なんであんたがそれで由香先輩と話してるわけ？」

自分の声が震えるのを、堪えられなかった。
視線を上げ、東を睨みつける。

すると、気まず気に私から視線をそらし、「どうでもいいだろ、そんなの」と、返してくる。

「あんた、昨日今日って皆に迷惑かけてんの、分かんないの？
って、分かってないのか……だから、こんなこと出来るんだもんね？」

私は、紋所よろしく、携帯を彼に突きつける。
その瞬間、彼の顔が真っ赤に染まるのが見えた。

赤には、恥と怒りの二つが見て取れる。

「迷惑かけたのは、謝るよ。」

ほんとに、済まなかったと思ってる」

「じゃあ、こんなことできないでしょ？　ねえ？」

彼に弁解する余地を与えず、私は口を開いていた。

その声には、私の意図しない怒りがにじみ出ている。

自分でも、マズいと思った。これ以上は、本当にマズいと。

けれど。

「事情が、あるんだよ。理解してもらえないとは思わないけど、ほんとに今立て込んでるんだ。だからそれ、返してくれよ」

我慢、出来なかった。何も知らないくせにという顔で、東は、「事情がある」と言った。そしてそれが、私に理解できるものではない、とも。けれど、この通話先の相手には、それが出来るのだと暗にほめかす。

……理解できないって？　私が？

先ほどの会話の断片だけでも、何の話をしていたかくらい、察しはつく。

柔からも精霊種の介入がある可能性を聞かされていたのだ。気まぐれな精霊は何かの手段を講じて、東を檻に向かわせるだろ

うとも――

そして、それが、今の状況を生み出した。

「理解できないって、何が？　わたしに、何が分からないって？　ねえ、あんたに、私の何が分かるの？　私の何も知らないくせに、分かったような口を聞かないで！」

もはや、私は叫んでいた。

ここが公共の場であることも忘れて、声を荒げていた。

そして、認めたくないけれど、私の頬を何かが伝わっていく感触も感じる。

「おい、待てって！　それ、キヨの携帯だろ！？」

集まってくる野次馬とバカを背に、私は走り出した。片手には、キヨの携帯が握られており、未だにコール音が響き渡っている。

わたしは、間の抜けた音をお供に、宿の廊下を駆け抜けた。
走って走って走って走って、宿の外にスリッパのまま駆出して、
私は。

「うううつつ、う！」

溢れる悔しさと自己嫌悪をつめき声に変えて独り、月の下嗚咽を漏らして、泣いた。

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹&峰岸（後書き）

次回は、歪曲する因果3：迷走する想い7：峰岸&久遠です。

いや、先が長い……

歪曲する因果3：迷走する想い7：峰岸&久遠（前書き）

さて、峰岸さんと久遠さんは、策にほころびが在ることを確信しました。

そして、久遠さんに関しては、また別の問題が・・・・・・・・

歪曲する因果3：迷走する想い7：峰岸&久遠

gold gate：迷子の想いと、約束の時

届かない想いが在るからこそ、想いが届くという、ただそれだけのことに――価値が生まれる。

そしてその裏返しに、全ての想いは、いつか届くんだよ。
それが何時になるかなんて誰にも分からないけれど。

けれど、想いは届く。それは、当初のカタチとはかけ離れたものになっ
てしまっていることが多いけれど、それでも。

それでも、迷子の想いが誰かの元に届けられたその時に。
その、守られずもない約束の時に、その想いに関わった全ての
モノが、幸せになれたらと――私は、祈っている。

歪曲する因果3：迷走する想い7：峰岸&久遠

念を封印した私が燈火と合流したのは、8時をまわったくらいだ
った。

「ごめん、しおい……わた、わたし、何も……」

受話器越しに泣きじゃくる親友をなだめすかして今の場所に呼び出したのが、だいたい十分前くらい。そして現在、私たちは旅館近くの川岸で、水面を肴に座り込んでいた。

私と再会した途端に再び泣き出してしまった燈火だけれど、今は少し落ち着いている。それでも、私を「しおい」と呼んでしまうくらいには、るれつが回っていない。

「燈火のせいじゃないよ……たぶん、私のせい。私が翁との契約をしくじったから……」

今ね、東君と由香先輩を遡行視してみたんだ。そして、二人の今の行動原理には、警告夢が大きく関与してる——ってとこまで、わかった」

由香先輩の夢には、その根源からして二種類あるように視えた。そして、一つからは明らかに翁の気配が感じ取ることが出来る。けれど、もう一つの方が理解できない。どれほど力を駆使しても、ノイズが走るばかり。この、「久遠」の私ですら閲覧不可能な程の——プロテクトが掛けられている。

そして、それは東君のほうでも確認できた。

「夢の内容は、二種類あるみたい。念が危険なものだって諭すような内容と、そして、念と二人の傷魂を刺激するような内容……後者は、明らかに翁の仕業。かつての幸せだったころの記憶を、由香先輩にね……そしてその結果が、今の状況」

ざっとだけど、燈火に今に至る経緯を話した。夢の内容はプロテクトが掛かっているため、直視は出来なかった。いずれも、二人の会話からの類推だ。

けれど、大きく的外れてはいないと思う。

「で、でも、それでも私が！」

燈火は、最初から目を離さずに東君を見張ってれば良かったと、悔いていた。最初から彼の首根っこを捕まえて、彼の傍に居ればこんなことにはならなかったと――

「燈火の判断は、間違いじゃなかったよ。東君の世界は、燈火だけじゃないんだから。皆が居る、「此处」が彼の居場所で、彼の守るべきもの。だから、それを彼に見せようとした燈火は、間違ってなんかない！」

……いずれにせよ、契約内容が翁に書き換えられた時点で、私たちは念のことを東君に話さなきゃならなかった。そしてそのときに、二つを天秤にかけて、コツチを選ぶように……」

翁は、念を救えと私に言った。そして、それを断わった結果が、契約改竄だ。どう転んだところで、当初の予定通りにプランを進めさせてくれるはずがなかった。

そして、夢を介して由香先輩を唆したことから考えても、間違いない。彼は、契約内容に、絶対に「東君の選択」を組み込んでいるはず……もし、私が彼からそれを奪い取れば、確実にこの契約は破

綻する。

「これで良かったんだよ、燈火。さっきまで私、東君に黙ってても大丈夫かなって思ってたんだ、今回のこと。このまま黙って帰っても、どうにかなるかなって……あははは、甘すぎだよね。」

後少しで、全部おじちゃんになるところだった！だから、燈火にはお礼を言わなきゃね」

おちゃらけてみた。そして、それは燈火にだって伝わっている。最初から私たちは、東君に選択を迫るつもりでいた。だからこそ、燈火には役割があった。

「ごめん、琴……ほんとに、ごめん！」

少しだけ落ち着いたのか、今度はきちんと私の名を呼んでくれた。ただそれだけのことなのに、心の底から喜びが湧いてくる。

「もう、いいって。だいたい、こそこそしてたのが、そもその間違いだったんだよ。だから、此处から先は私に任せて。」

大丈夫、絶対にうまく彼を説得するから！」

私は燈火の手から、キヨ君の携帯を抜き取った。彼女は、「あつ」と声を零し、空いた手を私に伸ばす。

それを、私はひらりと躲す。伸ばされた燈火の手は空をきり、私と燈火の間には静かな空気が生まれた。そして、しばしの静寂。

私は燈火の目を覗き込み、につこりと親友に微笑んだ。そしてすぐに踵を返して、歩き出した。目的地なんて、ハッキリしてる。あの、糞野郎のところだ。

私は、『視』た。遡行視を介して、あの男が燈火に言った言葉と顔を、しっかりと。

「調子に乗り過ぎだよ、東利也……よくも、燈火を。私の、想い人を……」

煮えくり返る想いを静かに？み込み、私は宿を目指す。宿はもう、視界にある。宿までは、後少しだ。そして、この修学旅行が終わるまで、あと、一夜のみだ。

歪曲する因果3：迷走する想い7：峰岸&久遠（後書き）

連想歌：乱立変数2：想い人3 - 恋敵：東&久遠

連想歌：乱立変数2：想い人3 - 恋敵：東&久遠（前書き）

さて、臨界点の—— 一歩手前のお話です。

連想歌：乱立変数2：想い人3 - 恋敵：東&久遠

Tips - 絶望と空想

世界には、本質的に「現在」しかない。過去も未来も、概念上の存在でしかないのだ。

そして、その「時という概念」を空想できる存在を、魔学では「霊長」と定義する。

故に、霊長の持つ大きな特徴として「後悔」や「絶望」が挙げられる。翻って、「希望」なども然りである。

これらは、「現在のみ」を生きるものには存在し得ない概念だ。

また、時という概念は単純に三つに分割されるわけでもない。三者の関係性を含んだ時間の概念も存在するが、それは、「その先」へといたる手段でもある。

つまり、私のこの物語に対する結論としては・・・

連想歌：乱立変数2：想い人3 - 恋敵：東&久遠

マッサージ機で暴睡中だったキヨは、俺が峰岸に携帯をぶん捕られる瞬間を見てはいなかった……はず。

そのくせ、俺が峰岸のくだりを話すと、「お前が悪い」と断言した。そして、「とりあえず謝って来い」と……そう言い残して、やつは頭をかきながらまた、マッサージチェアに戻ってしまった。

釈然としないものが胸をこみ上げてきたが、どうしようもない。

仕方がないので、どこかに消えた峰岸を探すことにした。
それと同時に、「あいつ」も。

（やっとあいつが静かになったと思ったら、これだもんなあ……
……）

俺と由香が見た、銀髪の少女の夢。その二つを複合させると、夢の少女が告げる「災厄」とは、あいつだと想定できる。ただ、どう考えたところで、あいつが災厄なわけがない。

あいつが、『由香を傷つけるはずがない』。

（にしても、峰岸はどこいったんだ？それに、あいつも。

あいつ、今日の今まで俺に憑きまくってたくせに、いざ必要となったら、音沙汰なしくてどういうことだ？まだ寝てるのか？）

もし、寝ているとしたら、あいつは今峰岸たちの部屋にいることになる。

………さすがに、いろいろハードル高い気がする。なので、俺は黙って峰岸を探すことにした。

ウロウロウロウロと宿を練り歩く、俺。

そのたびに、ヒソヒソと噂話が耳に入る。

どうやら、「俺と峰岸の浮気説」は定説であるかのように同級生に浸透しているようだ。

なんとなく、いたたまれない。

居ずらいというかなんというか、そう、肩身が狭い……………

自然と、足がロビーに向かっていた。螺旋階段を下りると、その延長線上に宿の玄関が見える。

俺は、「峰岸が外に逃亡した可能性」を検討するためにも、一旦宿を出る必要があると自分に言い聞かせ、人気のない場所を目指していた。

すこし頭を冷やす必要があったというのも、正直なところ。

昨日今日と、あまりにも多くのことが我が身に起きすぎていた。

妹を名乗る幽霊。

占い師のフリをした異界の魔術師

災厄を予言する夢。

想像妊娠やらかす恋人。

俺をヒーロー呼ばわりする友人。

そして、俺に理不尽な怒りをぶつける………女友達。

M4の連中なんかも入れると、色々きりが無い。全部が全部俺のあずかり知り得ないところで何かが起こり、結果それに振り回されている。

（なんなんだろうな、いたい……）

何一つはつきりしない大きな流れの中で俺は、自分が流されているのを感じていた。

それでは、まずいつてことは分かる。けれど、それが分かったからといって、何かが出来るわけでもない。

「よう、栞。どうした？」

玄関先で、栞とすれ違った。なぜか栞は、上下ジャージというアグレッシブな格好。

ほんとうに、最近の友人たちの行動は意味が分からない。たしか栞は、熱出して今日一日休んでたはずじゃなかったか？

「あ、東君だ。」

ちようど、探してたところなの。ちよっと面かして？」

天使の微笑みを浮かべる、栞お嬢様。しかし残念ながら、彼女の瞳からは虹彩が消えている。しかも、「面かせ」と。

「いや、俺今忙しくて、峰岸探さなきゃならんけれど、やっぱ、付いていきます……はい」

どうにかこの場を逃げ出そうとした俺の退路を断つように、栞はキヨの携帯をぶらぶらさせていた。今はもう、携帯が鳴り出す様子もない。

そんな俺の心の機微を感じ取ったのか、栞様は「恋人さんはしばらく待ってくれるって、よかったね？」と忠告してくださった。

……退路は、なかった。俺は、きびすを返す栞の後をノロノロと追い、宿を出た。

……これ以上の面倒ごとは勘弁してほしいと願いながら。

連想歌：乱立変数2：想い人3 - 恋敵：東&久遠（後書き）

次回から、過去と現在が錯綜を始めます。

東君は異能者の栞を介して。

・そして、小羽ちゃんは、分かれてしまった自分を鏡にして……

s i l v e r b u l l e t s u b u n i t 1 : 相克する因果・寿小羽（前書

一つを、二つに。

少女は、自身と向き合うことになります。

silver bullet subunit1:相克する因果・寿小羽

Tip 相克する因果と合わせ鏡の法

鏡を覗き込んだとき、そこに映る自分は、本当の自分じゃないと
感じるが多々ある。

それもそのはずで、鏡の中の自分は左右が反転してしまっている
のだ。

それは、「合わせ鏡の法」でも同じこと。

この法は対象の根源を鏡の前に引きずり出す、「根源たる法」――
故に、秩序レベルの執行力がある。けれど、所詮は鏡でしかない。
い。

だから、この法を用いて根源を投影した者は、自己矛盾を目の当
たりにすることになる。

それこそが、相克する因果とも呼ばれるに値する――

silver bullet subunit(F)

わたしは、ハッピーエンドを望みます。

ここでのハッピーエンドの定義は、もじどおり、めでたしめでた
しで飾られるものです。

ユエに、ワタシは望みます。

例え

世界が赦さな

クと

も
ワタ

師は、か の じょ t a t i が ・ ・ ・
修正を続行します。

警告します。エラーが乱立しています。このままでは、存在確立が想定範囲を超えます。

最悪の場合、揺らぎの世界が発生する可能性も考えられます。

引き続き、gold gateは修正を加えてください。繰り返します。gold gateは、引き続き、修正を加えてください。未だ、銀の弾丸の脅威は消失していません。

silver bullet subunit1：相克する因果：寿
小羽

私を取り囲んでいた囁き声は鳴りを潜め、今や社を満たすのは、私の声のみ。

「ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼん、のーーます！
ゆびきった！」

私の前に差し出される、小さな指。それは、私の小指と瓜二つで。

「だから、ねえ様には針千本お飲みになっていただかなくては……
「私」も、そう思うよね？」

問いかける声に、私は答えない。
震える体を、必死に押さえつけるだけ。

「あの銀の人、何だったんだろうね……
一つを二つにつて、こういうことなのかな？」

再び私は、「私」に問いかけられた。

それでも、私は答えない――否、答えられなかった。

「ねえ、いつまで私を無視するの？」

「私」がそんな娘だなんて知ったら、兄さま、とても悲しまれるでしょうに……」

兄さまと言葉に、心がびくりと震えた。

兄さまに、嫌われる――それだけは、絶対に嫌だ！

「私だって、わからないよ。」

なんで、こうなっちゃたのか、なんて……」

思わず口を開いてしまった。

顔を上げ、まっすぐに「私」を見る――そこには、見間違っは
ずも無い、「私」が居た。

月光を背に、微笑んでいる。

「やっと、答えてくれたね。
すこしだけ、うれしいな」

屈託なく笑う、その笑顔。そして、はにかむ仕草。
それは、大好きな兄さまの気を引くために私が水辺で獲得した、
私の数少ない武器とも言えるものだった。普通の爺や婆なら、一発
でしとめられる自信がある。

そんな武器を、「私」が私に向けている。

「ねえ、協力してくれる気になった？
あの忌々しい門を、こじ開けるのを」

再び周囲がザワザワと騒がしくなる。それに私はおびえるしかない。
い。

「みんな、すこし静かにしてて。
私が、きちんと「私」とお話をするから……ね？」

最後の、「ね」。

それは、周囲の気配ではなく、私に向けられたものだった。

「わたしは、此処に残る。

そして、朽ち果てるの。それが、私の取るべき道」

もはや、周囲の気配は完全に消え失せていた。それは、「私」が怒っているから。

その怒りは当てられるだけで身を裂かれそうな、刃物を思わせる？をちらつかせている。

「なにを、言ってるの？

外に出なくては、あの女から兄さまをまもれないでしょう？」

私の頬に、「私」の両の手がそつと差し入れられた。

ゆつくりと、顔を挙げさせられる――私は、「私」と目が会った。

「あの女は、生きている。生きて、再び兄さまを陥れようと、女の気を利用して兄さまに忍び寄っている……わかるでしょう？」

私が、守るの。あのときの私には出来なかったことが、今の私に
なら出来る。あの頃の無力だった私は、もう何処にも居ない。

今の私なら、兄さまの力となれるの。それは、とっても素敵なこ
とでしょう？」

目の前には、「私」が居た。でも、私じゃない。目の前に居る者
が私だなんて、認めるわけにはいかない！

「させない！そんなこと、ぜったいに！」

私は、震える声で叫んだ。そして、あらん限りの力で、「私」を
睨みつける。

「……あなた、だれ？
私の振りをした、「私」……？」

目の前の少女は、そんな私を見て、首を傾げた。
そして、私の髪をぐいっと引っ張ると、私の目を覗き込むように
身をそらさせる。

「あなたは、私じゃない」「わたし」……ああ、そういうこと。
あなたは、鏡に映った私なのね？だから、反転してるんだ……先ほ
どからあなたを見て、イライラしてたのよ。今の今まで分からなか
ったけれど、今になってやっと分かった。
あなた、「ねえ様のことが好きだった頃の私」でしょう？」

黒い炎をちらつかせながら、目の前の少女は壮絶な笑みを浮かべ
た。

舐めるように彼女の炎が私を這い回るが、それが私に害をなすこ
とは無かった。

「あの女がしたことを、忘れたの？
いいえ、忘れていないはずよね。私には、分かるわよ。あなたは「
私」で、私。

ねえ様への感情以外のなにひとつ、私達で異なるものはないはず」

少女はつかんだ私の髪を離すと、少しだけ私から距離を取った。
舐めるように、私を見つめる。

怖かった。怖くて怖くて、仕方なかった。目の前の少女が、どうしようもなく「私」であることが怖かった。
けれど、負けることは許されない。彼女に負ければ、私は「私」になってしまう。

そうすれば、私は兄さまをきつと悲しませる。

それだけは、許せなかった。だから！

「私は、人外の化け物となった。しかし、死して尚、私は寿家の姫。このような身になってまで、生きようとは思わない！ましてや、人外の力で人を殺めようなどと、それこそ、一国の姫の名折れ！

そのような愚行を、兄さまが許されるはずがない！」

私は、震える足で立ち上がった。すこしでも目の前の少女に飲まれまいとするためだ。

彼女の邪悪な力は、私には及ばないらしい……それも、そうか。
なぜなら、彼女は「私」なのだから。

「人の道を外れた外道を地獄に突き落とすのに、人外の力を使って何が悪いの？」

あの女の性で、我が家族と家臣、そしてなにより、善良なる民の命が奪われた……許せるものか。

……千秋の想いが、やっと実を結んだのよ。繰り返す命は、私に報復と正義の施行の機会を与えてくれた……ならば、それに従うことこそが、一国の姫たる者の勤だと、私は思うわ」

私たちは、互いに「私」を前にして、にらみ合う。

どうしたところで「私」は、相克する私だった。どれほど言葉を交わした所で、和解することなど出来るはずもない。

私達は、そもそもが、対局に座する存在だ。

だから、私が彼女に力を貸すことなどあり得ない。私が彼女に飲まれぬ限り、彼女は此処で朽ち果てるのみ。

だから。

「あなたには、ここで私と朽ち果ててもらう。

それが、人を呪った私の、人としての最後の勤め……ぜったいに、私はあなたを、外へは行かせない！」

s i l v e r b u l l e t s u b u n i t 1 : 相克する因果・寿小羽（後書

相克する因果の、問題提起です。

んで、次回は歪曲する因果の方ですね。つまりは、兄貴の方……

silver bullet subunit2:歪曲する因果・東利也(前書

東クンの、お話です。

silver bullet subunit2:歪曲する因果・東利也

gold gate

彼の生きる世界は、当初は簡潔だった。しかし、彼が生きて時を過ごす程に、彼の世界は複雑さを増して行った。

――世界は、最初から複雑だったのだろうか？ 幼い彼が、単にそのことに気づかなかっただけで、本当は、世界は……

いや、そうじゃない。世界は、本来シンプルなものだったはず。少なくとも原初の世界は、ただ在るだけの、そんな、存在だったけれど、いつからか、そこに線引きが成され始めたのだ。

612

線は境界を描き、世界を二つに分けた。そして、二つは三つに。三つは四つに。

描かれる境界は世界の発生に伴い複雑さを増して行き、今では、世界樹と呼ばれる大樹を誇るまでになった。

……けれど、それと彼の物語とは何の関係もないことだ。彼の世界はあくまでも、彼だけの世界。

彼の固有世界は、彼を内包するこの世界とは、境界敷を隔てて独

立っている。

――だから、だろう。

幼かった彼の世界は、彼だけのものだったのだ。幼かった頃の彼は、そのことに気づいていなかっただけ。小さかった彼は、自分という世界と、それを包む大きな世界――内包世界の二つで、精一杯だったのだ。

だから、錯覚した。

まるで、この世界がただのその二つからなるような錯覚を描き、そして時を重ね、いつしか彼は、気づいた。

世界には、無数の世界が溢れていることを。

それは彼を包み込む内包世界はもちろんのこと、それ以外の。

それ以外の、とても小さな世界達。

それは、彼を包みこむ世界とは違い、優しくはなかった。

それどころか強情で、意地っ張りで、自分本位で意地汚く――
故に、尊かった。

だからこそ、彼は――

s i l v e r b u l l e t (F)

御託はいい。

貴様の教鞭など聞き飽きたんだよ、 g o l d g a t e 。

貴様のゲーティングは後に受ける。だから、しばらく黙っている。
これは、『命令』だ。

silver bullet subunit2:歪曲する因果・東利也(後書

しばく gold gateはお休みです。

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠（前書き）

「少しだけ先の未来1」に、つながりました。

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠

淡く世界を照らす月夜の下、旅館側の河原に俺を喚びだした栞は、おもむろに航空券を差し出した。そして、言う。

「今すぐに、ここを発ちなさい」

有無を言わせぬ、宣告――と同時に、俺の意志など考慮には入れないという、彼女の明確な意志でもあった。

……それは、いつもの物静かな彼女からすれば、考えられないこと。

俺は、たまらず問いただした――どうということなのかと。

なぜ、「明日」皆と一緒に帰ってはいけないのかと。「明日」には、帰るのだ。

修学旅行は、今日で終わった。だから、明日には、ここを発つ――みんな、発つんだ。

なのに、なぜ俺だけが、「今晚中に」ここを発たなければならな

いのか？

「あの娘は今、結界の中に居るわ。今なら、彼女を「置いて」……
あなたは帰ることが出来る」

……あの娘？置いていく？

それって、まさか、お前………どういうことだ？おまえ、あいつに
何を？

いや、それよりも、お前はいつたい？

「もちろん、「あの娘」っていうのは、あなたの妹を名乗るモノの
ことよ。同級生の誰かではなく、ましてや、生者ですらない、あの、
モノは――」

「ちょっとまってよ！ おまえ、それって……」

一瞬の、沈黙。

水のせせらぎと月明かりだけが世界を照らす中、同級生は、告げ

る。

「あの占い師のたまり場で、わたしはあなたに「本物」を割り当てた……そこで、あらかたのことは知ったはず……だから、帰りなさい。」

五百年という月日に膨れ上がったモノは、ただの個人……いえ、私ですら、もうどうにもならない」

意味が、分らない。たしかに、俺はあのインチキ占い師の元で、世界の仕組みとか、あのバカガキのこととか、たしかに、ほんの少しだけでも、知ることが出来た。

でも、なぜ栞が「バカガキ」のことを知っているのか。

なぜ、あの「バカガキ」から逃げるようにこの土地をさらなければならぬのか???なんてことは、露程も理解しじゃない。

なのに。

栞は、全て話し終えたとしても言うように、無表情で俺の脇を通り過ぎ、旅館へ戻ろうとする。

もちろん俺はそんな友人を押しとどめようとした。したのだけれど……

「彼女が……由香先輩が、大切なのでしょっう？
だったら、過去はここにおいて行きなさい。それが、私に出来る

最後の助言。あとは、あなたが決めることよ」

けれど、俺の目を見つめる栞の瞳は、澄み切っていた。いや、澄み切りすぎていた。

彼女の目のどこを探しても、悪意は見当たらない。ただし、善意も感じられなかった。そこにあるのは、虚無のみ。ただただ自己を殺した、無機質な何かが、栞に瞳に移り込んでいる。

俺は、目の前の女が怖かった。あまりにも異質な空気をまとう女が怖くて、彼女に伸ばした手を……降ろそうと、したときだった。

（にいさま！ えへへ、にいさま！）

声が、浮かんだ。

それは大気を振るわせた声ではなく、自らの内から浮かんできた、誰かの声だった。

「最後の助言じゃねえだろ。そんなんで、決められるかよ。知ってること、全部話せ……は、話して下さい」

俺が敬語に変わったのと、栞の肩に手をおいたのはほぼ同時だった。

声に背中を押された俺は、彼女を逃がすまいと、その肩に手を伸ばしていたのだ。

そして、話すまで逃がさないという意志を示すため、そのまま肩に力を込めようとしたが――ものすごい勢いで睨まれた為、結局は肩に手を乗せるだけという、妙な具合に落ち着いた。

「……へえ、少しは根性があるみたいだね、東君。
でも、それだけだね。結局は、どうにも出来ない。あなたは、無力なの」

栞は一度目を閉じて、深呼吸した。

息を吐き出しつつ、彼女は眉間をすこしこねくり回す。

そして、再び目を開いた。たった、それだけ。

ただそれだけのことで、彼女の……先ほどまで彼女が放出していた気配が、嘘のように霧散していた。

というより、さきほどの女と今の栞が同一人物だってことも、信じられない。

「今さっき、東君つてば私の目を覗き込んだでしょ？ めちゃくちゃ怖くなかった？」

肩に置かれた俺の手を抜い落とし、栞は河へと向き直った。
そして、俺に問いかける。「さっきの自分が、怖くなかったのか」と。

それは今回のことに関係あるのかと思ったが、此処は黙って栞の問いに答えた――「少しだけな」と、短く。

……実際はめちゃくちゃ怖かったけど、さすがにそれを言うのは、ちょっとだ。

これくらいの見栄は、許されて然るべきだろう。

「霊視って言っただよね、さっきの力。
端的に言つと、物事の背景をひも解く力――って言えば良いのかな？」

この辺、あの魔術師からも聞いてるんじゃない？ まあ、彼女の認識も正確ではなかったけど、そんなに外れてもなかったし……今は、善しとしようかな？」

霊視——それは、「今と過去」を見渡す力。
この力に掛かれば、個人のプライバシーなんて、丸裸同然だとい
う。

どの時を生きようが、世界のどこに隠れようが、たったひとつの
縁が捕まってしまうば——そこから、全てを芋ずる式に明かされ
てしまうとのこと。

「お前が、霊視能力者……？ 証拠、なんかあるか？ 例えば、俺
しか知らないこととか、言えるわけ？」

正直、友人から「自分は超能力者です」と告白されても、ピンと
来ない。

だから、なんとなくしに言ってみただけなんだが。

「東君は由香先輩という彼女がありながら、タツヤでOTONAの
DVD借りてる。」

一番最近のは——9月4日の夜8：00に借りた、「ロシアンル
ーレット、危機一発！」ってやつかな。なんか、パッケージの裏は、
一発どころじゃないつぽいけど……「いや、もういい」……そう？
こんなの、霊視の証拠になるのかな？」

俺は、確信した。

こいつが霊視能力者であるかどうかは別にしても、性格が異様にネジ曲がっていることを。

あの一品の存在を知るのは、ほんの一部だ。

題名からも分かるように、非常にマニアックな部類に入るもので、需要が少ない。

しかも、さらに俺がそれを借りた日時まで言い当てるのは、どうかんがえてもおかしい。

店員が言いふらしてないか、今度確認する必要があるかもしれない。

「ごめん、ちょっとからかっただけ。

霊視能力の証拠ね……東君と由香先輩の初夜を除き視てるのも良いけど、そこまですると、あれだしね？

……じゃあ、小羽ちゃんと、東君のデートを言い当てるって言うのは、どうかな？」

栞は川原の石を拾い投げると、「えいっ！」の一声とともに、河に石を投げ入れた。

ドボンと間の抜けた音を立て、石は水底へと沈んでいく。

……結論から言うと、俺とあいつの行動を、栞は完全に把握していた。

マウントポジションの出会いから始まり、さっき俺たちがやらかった、喧嘩の内容まで。そして、俺たちが喧嘩するに至って理由まで、こと細かく……そして、それには峰岸が関わっていたことも。

一瞬、峰岸の顔が脳裏を掠めた。

あの、今にも泣き出しそうな……峰岸にはふさわしくない顔が、一瞬だけ。

「じゃあ、なに？　ゲーゼンのあいつらって、お前の差し金だったわけ？」

相も変わらず背を向けたままの栞に、問いかける。

俺の声には少しばかり怒気がまじっていたが、それは仕方のないことだと思う。

あの出来事は、本当に辛かった。できれば、無かったことにしたいくらいに。

そしてそれが、人為的なもので。

しかもそれが、友人の意図によるものなんて、あまりにも……

「理由は、あなたたちの間に不和をもたらすため。不和って、縁切りにはもってこいなんだよね？ だから、上手く行ったでしょう？ うまく、あのモノをあなたから引き離し、結界に封じ込めることに成功した」

振り返った栞は、笑顔だった。

それを目の当たりにして、俺はカッとなりかけた。

目の前の女が憎たらしくて、仕方なかった。どうかすれば、手を出したかったくらいだ――けれど、堪えた。

「なんで、そんなことを？」

短い問いかけだった。口を開くと怒りが漏れ出そうな気がして、それ以上の言葉を紡ぐことが出来なかったのだ。

「なんで、そんなことを？」

栞は、俺と同じ問いかけを返してきた――分かってる。

栞は、俺をバカにしているわけじゃない……半分以上はおちよくってるけど、真意はそうじゃない。

栞は、俺に確認したいのだろうーなぜ、そこまで「あいつ」にこだわるのか、と。

「わからねえよ。わからねえから、聞いてるんだよ！」

俺の叫びは、答えになっではいなかった。

俺は、分からなかったんだ。ほんとうに何も、分からなかった。

だから、知りたいと思った。

分からないからこそ、知りたいとーそう、願ったのだ。

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠（後書き）

次回は、小羽ちゃんに視点がとびます。

いよいよ、過去の「真実」が明かされるときです。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦 “ ” …… 寿小羽（前書き）

真実の、開示です。

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦3 "：寿小羽

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦3”：寿小羽

幼かった私は、世界の悪意を感じ取ることが出来ずに居た。
もちろん、悪意というものが世界に存在することは、知識として知ってはいた。

けれど、それはどうにかすると、遠い国のおとぎ話のようであり、
事実――私は最後まで、その存在に気づけずに居た。

それくらいに私は愚かで、救いような存在だったのだ。

「桂藩――もとい、寿家に智代ねえさまが嫁がれると決まったのは、私がまだ6つのとき。

彼の世ではまだ、矮小な国が乱立し、そのことごとくが無惨にも散り咲く戦国の世。その中であってなお、桂藩は十本の指に入る強国として存在し、そして、ねえさまの柏木家もまた……同様に」

「私」の語りに合わせて、彼女がまとう黒煙はユラユラと形を変えた。

黒煙は情景を語り、「私」は史実を語る。

「柏木家と寿家の同盟は、戦の混乱を縮小へと導いた。それは、同盟国となった寿家と柏木家に対抗するため、他の国々が同様の手段で国力を高めに掛かったことに端を発した……そして。

そして、いつしか十もあつた強国は3つにまとまり、その傘下に無数の小国がぶら下がるカタチとなった。

それから数年、幾ばくかの平和な時がおとずれることになる」

「私」の黒煙は3つの円を描き、三者を線で結んだ。

三者を結ぶ線はグニグニと縮小伸長を繰り返す。

それに合わせて、黒煙の描く三角形は様々にカタチを変えた。けれど、それが三角として破綻することは無い。ある線が短くなれば、別の線が長くなる。そして、長くなった線はいつしか再び短くなり、そして、それが延々と繰り返される。

——私の目の前の三角の図は、あの頃の国勢を表していた。ようするに、三すくみの関係だ。

「そう、平和は、幾ばくで終わった。父様の意図された通りであれば、十数年は保つはずだった平和が——数年で。

他の国々が同国との盟約を厳守すれば、この三国の関係は定着するはずだった。下手に先手を打てば、後々不利になるのは明らか。

三すくみの関係こそが、民を——引いては、人の命を守る為の、理想のカタチだった……はずなのに！」

黒煙は、ねえ様の力タチをとった。そして、そのねえ様の前には、兄さまが。

兄さまは、ねえ様に背を預けて、どこかを見つめていらっしやった。その視線の先に何かがあるのか、私は分からない。

兄さまからは、ねえ様が視えていない様子。

だから、ねえ様が嫌らしい笑みを浮かべ、短刀を懷より取り出したことにも、まるで気づかれない。

「ちがう……そんなの、おかしい！
ねえ様はそんなこと、そんな、こと……！」

叫ぶ私無視して、黒煙のねえ様は短刀を兄さまの背に突き立てた。そして、グリグリと刃を根元まで押す込むと、弱った兄さまを今度は別の短刀で、再び突き刺した。

なんともなんとも、黒煙のねえ様は兄さまを突き刺す。狂った笑みを張り付けて、なんとも、心の臓を……

「おなじことよ！」

あの女は、柏木と金剛の間諜だった！ あの女が、にいさまをころしたのよ！」

びくびくと痙攣する兄さまを見下ろしながら、ねえ様は壮絶な笑みを浮かべ、次の瞬間、何事かを宇宙に叫んだ。
すると、ねえ様を形作っていた門は霧散し、今度は城下を守る門を描き出した。

門を挟んで、寿家の守人と柏木家の使者が何事か話をしている――しばらくして、門が、開かれた。

門が開き、柏木家のものが二人、城下に足を踏み入れる。そして、守人と柏木のもものが談笑とともに握手を交わそうとした瞬間。

その、瞬間。

「……」

一人の柏木の者が、針で守人の頸椎を破壊した。

瞬時に崩れ落ちる、守人。そして、何事かを叫ぶ、もう一人の柏木の使者。

むろん、その異変に気づいた他の守人がぞろぞろと集まってくる。
次の瞬間、轟音と爆炎が守人達を襲った。

柏木のものが、自爆したのだ。

一人は、集まった守人とともに。もうひとり、門の開閉を御する、門番とともに。

こうして。

「……つつ！」

こうして、桂藩の城下は開かれた。

そして、数刻もせぬうちに、城下は柏木と金剛の賊で溢れかえることになる。

当初、寿家の者は柏木家の裏切りを知らず、柏木の者を援軍だと見なしていた。

情報の伝達が初期で断たれていた為に起った、人為の悲劇だった。

当時、盟約を反故にする事例じたいは、少数ながら、存在した。

しかし、それは下衆や外道の行いとされていたため、よもや、「あの智代姫」の家の者がそれを行うなど――桂家の者は誰一人として、発想することが出来ずに居たのだ。

「あの女は、女狐だった！民を騙し、家臣を騙し、父様を、母様を、
婆を、そして、兄さまと私まで！

あの女は、裏切りの布石だったのよ！美、人徳、才、全てを兼ねそ
ろえた、姫の中の姫！

寿の人間は、例外無くあの女を愛していた！」

通常、多くの姫は城下に降りることはない。

それはある意味で、下界に下りることを意味するからだ。故に、
高貴な身柄の姫君程、その姿を民に見せることさえ、嫌う。

しかし、ねえ様は――智代姫は、違った。

ねえ様は、初めて寿家の門を叩かれたとき、自ら車を降り、門か
ら城まで城下を自らの足で歩き通されたのだ。そして、民と言葉を
交わされた。

同時に、笑顔も、また。

「今思えば、あれは単なる演技だった！

全ては、我らと、民の目を曇らせるため！あの女は、我らが民を愛
してなどいなかった！裏では、我らを嘲笑っていた！」

「わたし」が操る黒煙はいつしか黒炎となり、黒煙の城下と民を
飲んで、炭に変えていった。

そして、その炎の魔手はいつしか城まで届き。

「うらぎったうらぎったうらぎった！おなじひめとして、わたしはゆるさない！

たみのしんあいを！ちちとははのせきねんを！にいさまのこころを！それをふみにじった　あの　おんなを、　おまえはあいしているというのか！？」

吹き荒れる炎は、私へとなだれ込む。
しかし、それが私を焼くことは無い。

「わ、わたしは……！」

道理は、なかった。

私の中になるねえ様への気持ち肯定される事象など、ありはしなかった。

「てをかせ！　われとともに！　われらと、ともに、そとへ！
ひげきは、　　ここでおわらせる！」

私が何をすべきかなど、一目瞭然だった。
私が誰を守るべきかなど、明らかだった。けれど、私は――――
――！

謳歌と怨火：孤立無縁の想いの渦 “ ” ……寿小羽（後書き）

今回は、小羽ちゃんの「真実」です。

んで、次が、栞ちゃんと東君の間での、「真実」。

無数の「真実」が、錯綜します。

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠（前書き）

真実の、意味

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠

連想歌：乱立変数2：想い人5 - 恋敵：東&久遠

真実を求めるという行為は、万華鏡を覗くようなものだ。

一つの光源より発せられた光は幾らかの鏡を介し、万華の世界を描き出す。

この事象を人に当てはめるなら、光源が世界（真実）であり、鏡が人だろう。

故に、真実はキラキラと姿を変える無数の「真実」となり、探求者へと到達する。

「それが、寿小羽の「真実」よ。
それが、あのモノの「真実」……」

私は、寿小羽の「真実」を東クンに告げた。

それは、本当のところは「念」の妄想でしかなく、真実ではない。けれど、「念」の根源という点では、それこそがまぎれもない「真実」だった。

「由香先輩の前身である智代姫は、同盟国であつた寿家に嫁ぐことになった。

そして、あなたの前身と、その家族――引いてはあなた達が治める民の全てに受け入れられたみたい。つまりは、寿家のものたちに愛されたということよ、彼女は。

そして、裏切った。もとより彼女はそのつもりで寿家に入り込んだのだから、自明の理よね。

そして、彼女の手引きで城下に進入した敵国が、全てを滅ぼした。文字通り、全てをね。

それを、寿小羽は死の間際に知り、彼女を呪った――その結果が、あのモノ。

現状としては、寿小羽の成れの果てが寿小羽の皮を被り、あなたにすり寄っていると考えてもらえれば良い。今のままなら、たいして害にはならない。すこしばかり、東クンの手を煩わせるだけよ」

人は、物事に連続性を持たせる希有な存在だ。
それはつまるところ、人こそが、因果を生み出す存在だということ。

それは、私達のような霊視能力者として、同じことだ。
故に、この力の真意を知るものたちは、身の程をわきまえて、

「背景をくみ上げる」と表現する。

「けれど、「念」が由香さんと接触すれば、話は別。根源を前にした「念」は、本来の姿へ還るはず。

そうなれば、十中八九、「念」は今の形を維持できない。今だつて、奇跡みたいなものの。

今は、あなたと念の間にあるパスが何らかの奇跡を起こし、「念」に今の形を維持させている――けれど、それも、それほど保たない。

あの魔術師も言っていたでしょう? 「もうすぐ、寿小羽の世界は成熟する」と――

つまり、あなたと寿小羽の間にある情報流路が断たれるということ。そうなれば、やはりあのモノは「念」へと戻るでしょうね……そうなったとき、「念」が今のようにあなたに無害だとは、保証できないの」

私が逆行視によりくみ上げた「真実」は、寿小羽の「真実」と相を異にしていた。

――あるとき、あの世界で。

すくなくとも、「現在」に回帰する彼の日の物語に、加害者など存在しなかった。物語に登場する全てのものたちが、人の世の「流れ」に押し流された、被害者だ。

けれど、それを東クンに説明した所で、どうにもならない。どうせ、「だったら、なおさら――」なんて、頓知なことを言出すはず。

「あなたには、あの「モノ」は救えない。

それは、確定事項なの。だったら、それに東クンの大切な人――由香先輩を巻き添えにさせる必要なんて、ないはず。 でしょう？」

連想歌：乱立変数2：想い人4 - 恋敵：東&久遠（後書き）

次も、栞&東組です！

連想歌：乱立変数2：想い人6 - 恋敵：東&久遠（前書き）

もうすぐ、クライマックスですね。

夜明け前が一番暗いと言いますが、この夜が開けたら、惨劇が起きます。

連想歌：乱立変数2：想い人6 - 恋敵：東&久遠

連想歌：乱立変数2：想い人6 - 恋敵：東&久遠

あなたには、あの「モノ」は救えない――俺では「あいつ」を救えないと、そう――栞は言った。
けれど、だとしても！

「……お前が言っていることが正しいって証拠は、あるのかよ？」

それでも、俺は何故か諦められなかった。その上、突いて出た言葉は、栞を愚弄するもの。
それを言い出すなら、初めから栞に聞かなければ良いというだけの話だ。

「あるわよ、証拠。ほら」

栞は、流れる動作で俺の頬に手を添えた。
そして、目を閉じてゆっくりと端正な顔を近づけてくる。

「ちよっ、おまえ！」

全力で体を反らそうとしたら、おもいつき足を滑らせた。
ジャリツという音が、夜の闇に溶けて消える。

――瞬間、腕を引かれた。

気がつけば、目の間には栞の顔。

そして、栞と俺の額が触れた瞬間。

「ああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

そして、目の前の景色はブラックアウトした。

意味が分からない。けれど、事態は俺を無視して進行する。

気がつくと俺は、疾走していた。

今居る所から時空を超えて、俺は、どこかへと向かっている。

「う、ウああ……」

意識が擦り切れる直前に、おれは「どこか」にたどり着いた。
延々と続く階段――いや、獣道を、山の麓から見上げている。

「今視たものが、霊視。ちなみに、最初の暗がりが逆行視ね。案の定だけど、時超えは無理だったか……でも、収穫はあったでしょう？」

あそこに、「あれ」は居る」

時間にすれば、ほんの数秒だったのだろう。
それでも、脳髓がずたずたに切り裂かれたかと思った。

「な、んだ、よ、今の！」

体がぴくりともしない。

今や、俺は槩に支えられなければ、まともに立つことさえ叶わない体だった。

「証拠をみせろって、東クンがいったんだよ……？」

今のが、霊視なの。

ああやって私達は、色んな場所の物事を見聞きするわけ」

ゆっくりと栞は、俺の身体を河原に横たわらせた。
そして、おれの顔の上にしゃがみ込む。

その目には、明らかなあざけりが見て取れた。
くやしいが、今は息をするのでやっただ。

「これで、わたしの役目は終わりかな？

――東クンに帰りのチケット渡したし、「あのモノ」への道も
示したし……完璧だよね？

うん、大丈夫。これで何かあったら、あのくそ爺マジで地獄にた
たき落とすレベルだわ……

ねえ、東クン？ 私はあなたに選択肢を与え、そして、取るべき
道も示した。

わたし、えらいよね！ 東クンも、そう思うようね？」

だから、さつさと恋人の元に逃げ帰れと――そう、栞は語って
いた。

もちろん、栞がそうはつきりと口にしたのではない。

けれど、俺を見下ろすその表情が、彼女の心情を物語っていた。

「あんだけのことできんなら、なんとかできんだろ。

あいつのことも、由香のことも……」

はつきりと分かるのは、栞が異常であるということくらいだ。

それも、俺など足下にも及ばないくらい。

せめてもの強がりで言い返した俺を下に、クスリと栞は笑う。
次いで、「燃烧反応って知ってる？」と、語りだした。

「例えば、水素と酸素の混合ガスにエネルギーを加えるとどうなるかってやつ。

もちろん、特待生の東クンには分かるよね？ 正解は水が出来る、ですーそれぞで？

私に、どうしろって言うの？」

冷めた目つきで栞は語るー駄々をこねるなど。
それをやっていいのは、子どもだけだとー

「地球は自転する。併せて、公転もね。そこに、人の意志など介入しない。

光は直進するし、時は流れるの。

……同様に、「あれ」と「あなたの恋人」が接触すれば、「然るべき事象」が起こる。

そして、それは誰にも止められない……根本が、間違ってるの。そもそもが、間違いなのよ。

あのモノは、「流れ」に逆らっている。そして、遵守されるべき

理を無視した結果が、「現在」なの。

だから、どうしようもない。救いなど、ない。それこそ、あつてはならない。それが、現実――」

栞は、「そもそもが間違いだ」と、笑った。

今のこの状態は、理から外れているとも――それは、シロさんも言っていた言葉だった。

けれど、シロさんは……

「間違いだけじゃない。ぜったいに、間違いだけじゃ……！」

うめく俺にため息を漏らし、栞は立ち上がった。

うんつと、背伸びをすると、ポケットからキヨの携帯を取り出す。

そして、想いっきり俺の鳩尾に掘り投げやがった。

「うぐっ」と、堪らず俺は情けない声を挙げる。

「受け売りだけで世界の法則をねじ曲げられるなら、やってみれば良いわよ。

……スカスカなのよ、あなたの言葉は。空っぽのリュック

を背負つてゐる人間だけが、言えること。

そんなあなたが、よくも、燈――」

最後の、言の葉。

それを栞は飲み込むと、俺に背を向けて歩き出した。
最後に、「選りなさい」――と、言い残して。

連想歌：乱立変数2：想い人6 - 恋敵：東&久遠（後書き）

次回は、栞ちゃんの独白です。

彼女としても、色々と思うことがありーーそういうのもひっくり
めての、「無限想歌」です。

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園4：久遠菜（前書き）

物語を読み解くだけのモノーーそれが、久遠です。

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園4：久遠栞

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園4：久遠栞

人1人を救えたなら、きつとそいつは世界だって救ってのける。
逆を言えば、人1人を救うことと世界を救うことに、それほどの
差異は無いのだ。

「……」

トボトボと静かな夜道を、私は1人で歩いていた。
まるで全然、上手く行かない。東クンには「完璧だよね？」とお
ちやらけたものの、それを即座に否定したのは他ならない、自分自
身だった。

「なんで、こうなるのかなー？」

私を見下ろす月は、相変わらずの無表情だ。
そして、それを見上げる私も、また。

――私は、峰岸燈火を愛している。それは、親友や隣人としてではなく、それこそ、配偶の対象として、彼女を愛している。

同性である燈火を愛するなんて、認められない。それは、人の世の「流れ」だ。そして、自然法則からしても、当たり前前の、話だ。けれど、愛しいものはしょうがない。何がどうした所で、私は燈火の恋人になりたいのだ。

「はあ……」

久遠と峰岸の関係は、たいそう古い。

これまで、二つの一族は途方も無く長い道のりを親密に寄り添い合い、太古から現代にいたるまで、互いに支え合って生きてきた。そして、それと同じ分だけの時間を、久遠の者たちは心を殺して生きている。

「……」

なぜかは、分からない。

何故かは誰も説明できないのだが、何故か久遠の一族は、峰岸の血に引かれる――どうかすれば、同性であろうと、恋愛の対象と見なすように。つまりは、今の私と燈火がその関係だ。

このことを、峰岸の人間は誰も知らない。

遙か昔から、延々と久遠の家で封殺されて来た事象の一つなのだ。故に、久遠と峰岸がパートナーを組む際には、「必ず同性であること」が定められている。

はかり間違っても、二つの一族が交わらぬように――そう定められた理由など、分からないけれど。

遡行視でなら確認できるかも知れないが、やろうとは思わない。

なぜなら、そこにどんな理由があれ、私達一族は、頑にその定めを守り抜いてきたのだ。

私の母も祖母も、そして、その前の久遠も、守り抜いて来たのだ。そうであれば、私だけが我がままを言うわけにはいかない。まあ、我がままが言いたくても、私が好きなのは燈火で、同じ女の子で、だから、どっちにしたってむりなんだけど。

「燈火もねえ……良い娘なんだよ、東クン……」

そして、私が愛しいてる女性^{ひと}は、別の者に心を奪われている。
そいつの名前は東利也という、「The 凡人」という体の男の子。

彼には何か突出した特徴があるわけではなく、また、特別な背景も保たない。

たしかに、瀬戸高に入学できたという点では十分に特異であるし、孤児という背景もある意味では特別なだろう。

けれど、だから何だというのだ。

彼は、所詮その程度の存在だ。彼なんか、私の足下にも及ばない。彼が百人束になってかかって来た所で、そのことごとくを叩き潰せる自信が、私にはある。

でも、燈火は彼に惹かれている。惹かれているけれど、そのラッキーボーの彼は、別の女性――由香先般に、心を捧げている。それはもう、セックスやらかすくらいに。

「どっちにしたって、燈火は燈火で許嫁が居るし、どうしようもないんだけどね」

燈火には、定められた許嫁がある。

相手の彼は将来が有望視される青年で、人としても素晴らしい人格の持ち主。

東クンと彼を天秤にかければ、普通は彼の方にガッツリ天秤は傾くはずなのだけれど、どうしたことが。

「――いずれにせよ、燈火の恋は上手く行かない。そして、それを燈火は嘆くことなんかない。燈火は、ちゃんと弁えているからだ。」

自分がこれまで獲てきたモノと、その対価を。

燈火は、自身が峰岸であるが故に「獲られた者」であると、きちんと自覚している。故に、獲られぬものもあると――それなのに、東クンは……

「情に流されて、自分を制御できない子ども。」

無い物ねだりの末に、その責を他人に求める――あんな人が、ヒーローになれる分けない。

ましてや、燈火があんな男のために涙を流すなんて、絶対に……！」

彼がヒーローの原石であると妄言する理事長の気が知れない。
彼が世界を救える可能性など、私は万に一つも見いだせない。

だって事実、彼は誰も……あのモノ、燈火も、由香先輩も……
全てを巻き込んで、最悪の結末を呼び込もうとしているのだ。

「だからって、私も私だけどね。

……ああああ、もう！ むかつく！ くそ、くそ、くそ、もう！」

彼には、誰も救えない。でもそれは、私とて同じこと。
だから、必要最小限の損害を選択する。

それはきつと、正解ではない。だからこの解を、だれも肯定はし
てくれないだろう。

けれど、どうしようもない。その、「間違いだけじゃない選択」
を私達は選び、間違えた部分を背負って、生きて行く……それが、
意志ある者である、私達の取り得る選択肢だと……私は信じて、

今此処に居るんだ。

夢想歌：縁を紡ぐ、久遠の園4：久遠栞（後書き）

東くんは、間違いだけじゃないと、言いました。

だから、自分を肯定しろとーでもそれは、栞ちゃんだって、同じこと。

彼らは、同じ価値基準で物事を判断し、交錯しています。

次回は、連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹です

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹（前書き）

キーワードは、「後悔しない選択」と、「正しき選択」です。

あなたは、どちらを選びますか？

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹

月が浮かぶ夜の空を仰ぎながら、俺は答えを探していた。
もとより、空からそれが降ってくることを望んでいるわけではな
い。

目に入るのは、万の星が散りばめられた夜色の世界のみ。
さきほどまでそこは分厚い雲が覆っていた気もするが、今や俺の
上空は星の海へと姿を変えていた。

けれどやはり、そこに答えはない。おそらく同じように、希望も

――自身に課すべき問いは、至ってシンプルだった。
だからこそ、その答えだって。

「迎えに行くか、行かないか――」たった、それだけのことなんだ
ろっな……」

結局は、「1人で帰るか2人で帰るか」の一点に尽きる。
そして、2人で帰る道理など――どこにもない。

逆に、2人で帰るという選択を否定する事象は、いくらでも転がっている。

根本的なことを言ってしまうば、連れ帰ろうとしている存在は、明らかに人外のそれだ。

さらには、その存在が災厄であると告げる警告夢まで見る始末。
果てには、友人から身体が動かなくなるで罵倒されたあげくに、逃げ帰れとまで言われた。

「そつだよな……答えなんて、最初から出てる」

あいつを連れ帰る道理など、何処にもなかった。
触らぬ神に祟りなしって奴だ。どう足掻いた所で、正答は明らかだった。

けれど、その正答は完全なんかじゃない。

どこか間違いを秘めた、限りなく正しい選択――だと、俺は思う。

栞に聞かれてしまえば、「空っぽ」だと言われてしまいそうな発想だ。

けれど、ぜったいに、そうなんだ。

「後悔しない選択をしなさいか……きつついよな、それって」

ただ、ひとり。

あいつと俺を取り巻く人間の中でただひとり、「あいつ」を肯定してくれた人――シロさん。

彼女は、「後悔しない選択を」成せと言った。

正しさで選ぶのではなく、後悔しない選択をと――その、選択の結末を受け止められるようにと、あの魔術師は、言ってくれた。

「……」

目の前には、選択肢がある。
だからこそ、選ばなければならない。俺は、自らの意志で、選ばなければならない。

そう、後悔しないために。だから、俺は――――

gold gate - - 乱立変数2

選択してください。

現状の彼が取りえる道は、以下の三つです。

- 1人で、帰る。
- 2人で、帰る。
- 決められない。

なお、ここでの選択は、テーマの主軸である「魂の行方」に大きく干渉します。

そのため、次の84部において、物語のゲーティングを行います。

「1人で、帰る」を選択された方は――B - 1のkeyをお取り下さい。

「2人で、帰る」を選ばれた方は――B - 2のkeyを。

「決められない」を手にとられた方は――B - 3のkeyをお取り下さい。

三つのkeyの内、一つはending「繰り返す意味」に直結します。

連想歌：乱立変数2：想い人2：東&伊吹（後書き）

正しい選択が出来れば後悔はしませんが、それは、結果論です。

いつだって私達は、未知の結果を控えて、選択しなければなりません。

だからこそ、「後悔しない選択を成す」です。

次回は、g a t i n g - Bです。

フローチャートです（前書き）

分岐を分かりやすくするためのページです。

先々で物語の分岐に伴い、改訂します。

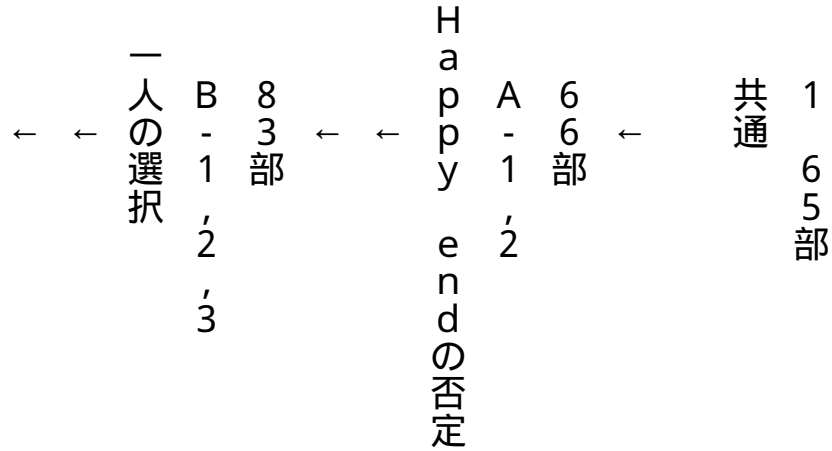
フローチャートです

この84部は物語に関係ありません。
ただのフローチャートになります。

このチャートは物語が分岐したり、keyの種類が増えるたびに
改訂を行います。

ただ、84部の位置からは動きません。

現在の状態は、下記の通りです。



少しずつですが、更新していきます。

の
破
棄

2

8
8
部

正
答
の
選
択

B
-
3

B
-
1

8
6
部

←

8
7
部

←

←

←

←

G
a
t
i
n
g
B

8
5
部

正
答

B
-

←

フローチャートです(後書き)

今回は、85部のアップです。そのあとに、86と87をいじります

G a t i n g B (前書き)

論理ゲートの通過です

G a t i n g B

gold gate

G a t i n g B

世界には、理があります。

本来それは遵守され、敬われるべきものです。

――死者と生者が交わることは許されません。

それこそ、今回の物語で言えば、寿小羽と伊吹由香の会合は論外と言えます。

本来なら、寿小羽の魂傷は癒されているはずでした。仮に、彼女ら双方が漂白後の状態で会合するのなら、それは、理のうちです。何の問題もなく、彼女らの接触は了承され、讃えられたことでしょう。

しかし、寿小羽は幾らかのエラーの蓄積により、輪廻の漂白を受け損ねてしまったのです。

そして、彼女は五百年というときを、念として過ごすに至りました。

上記のファクターは、この物語世界にある可能性領域へと誘います。それは、全体からすれば10%に満たない世界群です。しかし、その可能性群においては確実に、「片方の消失」が成されることでしょう。そしてその場合、物語を退場するのは、伊吹由香である可能性が高いと思われます。

伊吹由香に刻まれた魂傷が、寿小羽の魂傷を刺激。

そして、それは連鎖的に「念」の目覚めを約束し、悪意の励起へと繋がります。それが生み出す結末は、言うまでもないでしょう。

正直な話、私はどちらが残っても、問題ないと判断します。なぜなら、寿小羽も伊吹由香も、単独ではその生存が理に認められているからです。

しかし、それ以上を望むのは、傲慢というものです。それを望むなら、寿小羽という枠を作り替える必要性を、受け入れなければなりません。ただ、そうまでして至った世界に、価値があるかという問題です。

故に、私はこのG a t eにおいて、あなたに「B - 1 k e y」を差し込むことを提案します。

仮に、あなたが他のk e yを獲得していたとしても、私があなたにB - 1 k e yをお渡しします。

それが、手持ちの鍵においての、正答となります。

silver bullet

ただの小娘を歪にするくらいなら、世界をゆがめてしまえば良い。

存在確立は0%となるが、それを通す道理もある。

G a t i n g B (後書き)

では、次は86部ですね。

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 1 0 % : 正答 : 東利也 (前書き)

正しい路を選ぶ。

その先には、何があるのか。

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10 % : 正答 : 東利也

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10 % : 正答 : 東利也

——俺は、一人で帰ることを選んだ。

何をどう言い訳したところで、俺があいつを連れて行く道理は無かった。

ただ、後ろ髪を引かれる想いが無いかと言われれば、それは否定できない。

けれど、万が一あいつを連れ帰って、由香に何かあった場合。

俺はきつと、死ぬ程後悔するはずだ。そしてその結果、連れ帰ったあいつを——恨むだろう。身勝手にもあいつを罵倒し、拒絶するかもしれない。

そして俺は一人被害者面して、さらに——

……けれど、だからと言って俺は、あいつを見捨てるつもりも無い。

ただ、今は手札がそろいきっていないというだけの話。

あいつが閉じ込められている場所は、分かっている。そして、あ

いつがそこから出られないことも。

だったら、俺は何時だってあいつを救い出せるわけだ。
そう、あいつを連れ帰るのは別に、「今」でなくても良いという
だけの話。

「由香には……言わない方がいいよな。
あいつ、ぜったいに怒るはずだから……」

俺は頭をぼりぼりとかき、携帯をポケットにしまった。
携帯は、いっこうに鳴りだす気配はない。たぶん、栞が由香に釘
を刺していてくれるからだと思う。

「……」

とにかくにも、俺は一人で帰ることにした。
それが今の俺に出来る、最善の判断だと、そう、自分に言い聞か
せて。

n e x t ↓ 8 9 部

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10% : 正答 : 東利也 (後書き)

87 は、B - 2 です。

連想歌 B - 2 : 乱立変数拡散? 存在確率 10% : 正答の破棄 1 : 蛮勇 : 東利也

正答の破棄――その先にあるのは、何でしょうか。

連想歌 B - 2 : 乱立変数拡散 ? 存在確率 10% : 正答の破棄 1 : 蛮勇 : 東利也

連想歌 B - 2 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10% : 正答の破棄 1 : 蛮勇 : 東利也

——俺は、二人で帰ることを選んだ。

何をどう言い訳したところで、俺はあいつを残しては行けない。

もちろん、それが唯の感傷だつてことくらい、俺は十二分に分かっている。

そして俺が選んだ路が、間違つた選択であることも。

……正しい選択肢は、あいつを置いていくことだ

たったそれだけのことで、全ての問題は解決する。そして何よりそれは、一昨日の俺が——シロさんに出会う前の俺が望んでいた結末でもある。

「……なのに俺は、あいつと帰る。

帰りたいと、願っている——ははは、バカみたいだ。本当に、唯のバカだ、俺は」

手札が、足りていなかった。俺は重大な分岐路に差し掛かっているにもかかわらず、その手のひらに何も持つてはいなかった。今俺が選ばうとしている路だつて、本当に俺が選んだと言えるのか——それすらに、不確かだ。

けれど、嘘偽りのない確かなモノだって、ある。
それは、ガキだけがゆるされる、甘えともいえる、不確かなもの。
けれどもそれは、確かに此処にあった。

『にいさま!』

そう呼ばれることが、何故か嬉しかった。

あいつは赤の他人なのに、そんなやつから兄さまと呼んでもらえることが嬉しかった。

ほんとうに、唯それだけだった。

ただそれだけで俺は、二人で帰ることを選んだ。

「由香には……言つといた方がいいだろうな」

俺は、選んだ。

それは他人から示されたみちだけれど、最後は俺自身が決めたこと。

最後には、俺が決めた。その責は全て、俺にゆだねられる。

――だが、それには由香も嫌が応にも巻き込まれることになる。

だから、きちんとあいつに話さないと。少なくともそれだけの筋は遠さなければと思い俺は、携帯の番号をプッシュした。

next ↓ 90 部

連想歌 B - 2 : 乱立変数拡散 ? 存在確率 1 0 % : 正答の破棄 1 : 蛮勇 : 東利也

8 8 部は B - 3 です。

連想歌 B - 3 : 乱立変数収束 ? 存在確率 1 0 % : 正答の破棄 2 : 願い : 東利也

8 6 - 8 8 部の東君、一人で突っ走り過ぎです。
というか、勘違い？

だって、この物語。影こそ薄いけれど最初から、三人の縁が、物
語りを紡いでいるのですから。

連想歌 B - 3 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10 % : 正答の破棄 2 : 願い : 東利也

連想歌 B - 2 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10 % : 正答の破棄 2 : 願
い : 東利也

—— 決められない。

何をどう言い訳したところで、俺があいつを連れ帰る道理は無い。
けれど、俺はあいつを残しては帰れない。いや、帰れないんじゃない
—— 帰りたくなかった。それは結局、感情論にすぎない。

それは他人から言わせれば、たぶん、唯の感傷だって—— なる
んだろうな。

でもそんなこと、俺だって十二分に分かっている。

…… 正しい選択肢は、あいつを置いていくことだ
たったそれだけのことで、全ての問題は解決する。そして何より
それは、一昨日の俺が—— シロさんに出会う前の俺が望んでいた
結末でもある。

「…… なのに俺は、迷ってる。正解は分かっているのに。それを、選
ぶだけで良いのに。でも、俺はあいつと帰りたい一心で—— はは
は、バカみたいだ。本当に、唯のバカだ、俺は」

出来レースもいいとこの賭け事に、躊躇しているようなものだ。
どっちに掛けるべきかハッキリしているのに、それを迷う。

「……わかってる。わかってる。でも！」

……手札が、足りていなかった。俺は重大な分岐路に差し掛かっているにもかかわらず、その手のひらに何も持つてはいなかった。今俺の前に在る路だつて、他人から与えられたもの。そしてそれが、正当なる路だとしても、それが本当にそうなのか、俺にはわからない。

けれど、嘘偽りのない確かなモノだつて、ある。

それは、ガキだけがゆるされる、甘えともいえる、不確かなもの。けれどもそれは、確かに此処にあった。

『にいさまー！』

そう呼ばれることが、何故か嬉しかった。

あいつは赤の他人なのに、そんなやつから兄さまと呼んでもらえることが嬉しかった。

でも、もしそれを選んでしまえば、それは「俺の路」になる。俺が作り上げなければならぬ、俺だけの路——そして、栞はそんな俺の路を、鼻で笑った。

「悲劇は不可避」だと——そして、それでも何かを願うなら、

俺は世界をひっくり返すくらいのことをやってのけなければなら
ないとも。

「……」

俺は、決められなかった。

とるべき路なんて明らかなのに、それをただの感傷で否定する。

最後には、俺が決めなければならぬ。だけど、それには由香も
嫌が応にも巻き込まれることになる。

そのとき、俺は責を負えるのか？

由香や、あいつや、栞達——俺を取り巻く人々に対して、おれ
は……？

「携帯が鳴ってるって、由香からか……」

携帯の表示画面には、伊吹由香の名が表示されていた。

そのとき時刻が視界に飛び込んできたが、どうやら長いことウジ
ウジやってたらしい。

由香の性格を考えると、痺れを切らしたというところだろうか。

「……由香に相談してみるのも、手だよな。
今回のことには、あいつも無関係じゃないんだし」

俺は、通話ボタンを押した。

おして、受話器に耳を当てた。そして。

n e x t ↓ 9 1 部

連想歌 B - 3 : 乱立変数収束 ? 存在確率 1 0 % : 正答の破棄 2 : 願い : 東利也

では！また、近いうちに

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 1 0 % : 正答 2 : 東利也 (前書き)

お久しぶりです。

リアルの方が――

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 10% : 正答 2 : 東利也

それは、誰かの「夢」だった。

けれど、俺に分かったのは、それまで。

今俺が見ているこの「夢」が、誰の「夢」かなんてことまで、分かるはずも無い。

それでも、それは確かに、誰かが見た夢の、見果てぬ「夢」のかけらのように思う。

――俺はそれを、夢として俯瞰しているようだった。

「は、はじめまして！

わたし、松下小雪といいます！いつも小羽ちゃんとは仲良く――」

俺の眼下には、由香と俺とあいつと――誰だ？松下、小雪？

……知らない。あの、少女は、いつたい？

「あなた、小羽ちゃんが見えるの？

ひよっとして、触れることも？」

あいつの横で顔を真っ赤にしながら自己紹介をする松下さんに視線を合わせるように、由香は腰を落とした。

そして、問いかける。あいつのことが、見えるのかと。

……そこで、俺は気づいた。あいつは相も変わらず半透だが、松下さん——彼女には、実態があった。それはつまり、彼女は生身の人間であるという——こと？

「は、はい！

小羽ちゃんはきちんと見えますし、お話もできますけど、ふれることは——ああ、いや」

あいつが見えると、松下さんは言っただけだ。そして、話も出ると。

ただ、触れることが出来るかという点に対しては。

修復肯定38%経過————

夢の風景は、突然変わる。

おそらく、俺の住むアパートの裏っかわだと思うが、そこで、あ

いつと松下さんが数人の男子に囲まれていた。

男どもは例外無くニヤニヤと意地の悪い目で松下さんを――彼女だけを、あざ笑っている。

「おまえ、いつもいつも気持ち悪いんだよ！一人でボソボソしゃべりやがってさ！

おまえ、友達いないじゃん？だったら、口閉じてろよ！おまえの口って、マジで臭いの！おわかり！？」

そう彼女を罵倒するのは、ひときわ体の大きい少年だ。彼は「おまえらもそう思うだろう？」と、取り巻きに同意を求めている。もちろん、周りの少年達はニヤニヤとそれに同意する意志を笑みでもって返す。

悔しそくに唇を噛む、松下さん。

彼女は、フルフルと震えながら、それでも、笑った。

ちからなく、弱々しく。それは見ているこちらが胸を痛める程の、悲しい微笑みだった。

それを見た少年達は満足そうにうなずき、次の瞬間、「きめー！！！」と口裏を併せたように大笑いをしだした。

そんな彼らを前にした松下さんの目には、一握りの涙が。

そして、そんな彼女を隣で見つめるあいつは——松下さん同様に、唇を噛み締めていた。

多分それは、松下さんとは違う意味で。でも、ある意味では同じ意味で、唇を噛み締めていた——かと思った矢先、突然、あいつが動いた。

あいつは、何を思ったのか隣の松下さんのを想いっきり睨みつけると、彼女に飛び込みやがった!?

「ちょっと小羽ちゃん、私は大丈夫だから！」

私は大丈夫だから、喧嘩は駄目だよ！ちょっと、小羽ちゃん！」

叫びながら松下さんは、ファイティングポーズを彼の少年に取っている。

そして、ちょいちょいと指を動かして、「かかってこい」と挑発し始めた——？

まさか、あれは、あいつが……？

「小雪ちゃん、もう我慢できない！」

友達を馬鹿にされて大人しくしてる程、私は馬鹿じゃないの！だから、力をかけて！二人であいつらに、地獄を見せて——」

修復行程 74%経過――

「もはや戦争ごときでは、人類の間引きは望めない。
たとえ世界大戦であっても、それは変わらないわ。これ以上は、
この星が持たない。」

だから、アレが励起されたの。兆候はあったはずよ。

そして、人々の間に蔓延した無関心はすでに、悪意にまで変化して
いる！

もう、これ以上は！」

峰岸が、声をからして叫んでいた。

もう、これしか無いのだと。

そして、そんな彼女の前には――俺？

修復行程 99%経過――霊長の保存即サブユニットεの介入感知
――回避、可能です。このまま、修復を……

夢は、突然終わりを告げた。

今の今まで目の前に広がっていた世界は消え失せ、昨晚の世間の世界が広がっている。

そして、銀髪の少女もまた――同じように、存在していた。ただ、昨晚とは幾分様子が違うようだ。

彼女は昨日とはうってかわって、寂しげな表情を浮かべ、俺を見つめていた。

「お前は、正答を選んだ。

一時の感情に流されること無く、正しき選択を??? お前は、選

取ったのだな」

今にも泣き出しそうに、少女は笑った。
そして、続ける。

「あと数刻でこの世界は、90%の世界群へと回帰する。
その世界では「生者と死者」が交わることが許されないが――しかし、それが正常だ。
そして、お前が望んだ世界でもある」

俺は、目の前の少女に何も言えなかった。
言いたいことはハッキリとしていたのに、声が出なかったのだ。

「世界の分岐は決した。だからもう、今さらな話だ。
しかし、それでも私はお前に伝えたい。私が、「お前が蛮勇を成すこと」を望んでいたことを。

その世界でのおまえは、本当に愚かにも、「それ」に手を伸ばした。
本来交わるべきでない二つの物が、手を取り合う世界――そんな世界をお前は、望んだのだ。

――それは、誉められたことではない。それは、愚かなことだ。なんの背景も無く力の無いお前が望むには、「それ」は……

しかし、それでも私は、お前に望んで欲しかった」

世界が、歪む。

グニヤリと歪み。

歪んだ世界のその先では、少女は口にした。

それは、次元の歪みに飲まれて消えてしまったが、それでも、俺にはその声が届いていた。

それはすなわち。

「おまえは、正答を選んだ。

ならば、望むな。それ以上を。奇跡を。幸せな結末など、絶対に――」

修復行程100%――完了しました。

おめでとうございます。

東利也は正答の果てに、90%の世界群への回帰権を獲ました。

その世界では、輪廻による「生者と死者の隔離」が保証されています。

故に、小羽嬢による由香嬢の否定は起こりえません。

小羽嬢は今までどおり、念として。

東少年と由香嬢はこれまでどおり、ただの可能性として――その、身の程にあった道を歩んでゆくことになります。

悲劇は、回避されるのです。

さあ、最後のkeyをお取り下さい。

正答の果てに出現するkeyは、次で最後です。それはすなわち。

めでたしめでたし――key C - 1

まだ、終われない - - - - key C - 2

お気をつけ下さい。正しいkeyは、C - 1です。
お気をつけ下さい。C - 2を、決して選ばぬように。さも無ければ
――

key C - 1 ? ? ? ? 9 2 話へ。
key C - 2 - - - - - 9 3 話へ。

連想歌 B - 1 : 乱立変数収束 ? 存在確率 1 0 % : 正答 2 : 東利也 (後書き)

リアルが、ヤバイ！

でも、更新頑張りますね。

だって、皆さんもお分かりの通り、このルート、バッドエンドなんですよ。

どっちの key をとってもね。

連想歌B - 2 : 乱立変数拡散? 存在確率10% : 正答の破棄1 : 万難と蛮勇 : 事

87部から

←

私こと伊吹由香と、私の恋人の東利也は――二人とも孤児であり、同じ施設の出だ。

私たちは、お互いがまだ言葉もろくに話せない頃から一緒に一つ屋根の下で育ってきた。血こそつながっていなかったけれど、それでも、それ以上に私たちはお互いのことを大切な家族として認識し、大きくなった。

私たち家族の絆は、高高四つ程度の塩基配列じゃ表記できないほどに、硬く尊いものになっていたのだ。

『ユカネエのこと、おれ、好きなんだ』

だから、だろうか。

血こそつながっていなくても、私たちは家族であり、だからこそ、どうしようもないくらいに私にとっては利也は「大切な弟」で、そして、利也にとって私は「大切な姉」でもあった。

世間一般的に、兄弟間の恋愛感情っていうのは、問題視される。

そのことについて、私は異論を唱えるつもりはない。

けれど、なら、「私と利也」の関係はどうなんだろう？

『おれ、ユカネエのことが好きなんだ。家族とかじゃなくて、女として、ユカネエのことが好きなんだよ』

受話器越しに震える声で告白する利也は、少しだけかつこよかった。背伸びして、私のことを「女」って表現したところも、ポイントが高いところ。

……けれど、そんなふうには利也から告白された当初は、戸惑以外の感情などなかったというのが、本当のところだ。

『おれ、ちゃんとわかってる。ユカネエが俺のことなんとも思っていないってことも、俺がユカネエの弟だってことも、ユカネエがもうすぐ此処でてくってことも、全部わかってる！

だから、今言わなきゃって、俺！』

まくし立てるように、利也は自分の思いを告げてくれた。

そこには、彼なりの道徳的な葛藤と、そして、私という家族に対する配慮と、そして、それまで支えてきてくれたたくさんの人たちへを裏切っているという後悔の念……とにかく、受話器越しの俊哉の声には、いろんな感情が入り混じっていたように思える。

『利也、会って話をしよう？利也の声からは、利也が本気だつてことがわかるよ？』

遊び半分でこんなこと言ってるんじゃないってこと、ちゃんとわかつてる。でも、わたし、利也の顔が見たい。ちゃんと利也の顔を見て、話を聞きたい』

――最初、利也は私の申し出に若干の抵抗を示した。

まあ、利也がなんで告白に電話なんて持ち出したのなんてこと、今の私ならわかる。いざあつてみたときの彼は、それはひどい身なりだった。もちろん、着る服がないとかじゃない。さすがの孤児といえども、着る服がないなんてことは、なかった。少なくとも、私たちは。

ただ、今でも鮮明に覚えているのは、くまを両目下にぶらさげ、無精ひげをわずかばかり尖らせ、即席といわんばかりにワックスでガッチガッチに固めた尿名頭で私の前に現れた、彼の顔だ。

なんともまあ、たしかに、これじゃあ、ダメだ。

こんななりじゃあ、好きな人の前には出れない。普通なら、出れない。たぶん、死んでも、出たくないってのが、思春期真っ只中にいた利也の、本音だったんだろう。

でも、なんだか、そんなヘンテコな彼の不器用さが妙にツボ二は
まっけてしまっけて、結局私たちは。

「由香、俺はあいつを連れ帰ろうと思う。
いろいろ大変かと思うけれど、でも、俺、決めたから。もちろん、
床に迷惑をかけるってことはわかってる。でも、俺は――」

私たちが付き合いだしてから、もう三年が過ぎようとしている。
その間、私たちの関係にはいろいろな変化があつたけれど、でも、
彼自身はあまり変わっていない。「そしてそれは、私に関しても同
じなんだと思う。」

――彼は。彼は、私に決死の告白を告げてくれた日のまま、あ
の日のまま、再び受話器越しに自身の決意を私に伝えていた。

「あいつ」を、連れて帰ると。

正体はよくわからない、「妹」だったかもしれない何か。
生者ではなく、また死者ですらなかもしれない存在を、彼は連れて
帰りたいと――

←

94 部へ。

連想歌 B - 2 : 乱立変数拡散 ? 存在確率 1 0 % : 正答の破棄 1 : 万難と蛮勇 : 事

では、
また。

連想歌 B - 3 : 乱立変数収束 ? 存在確率 1 0 % : 正答の破棄 2 : 万難と願ひ : 事

なんというか、寒いです。

あと、バックアップって大切ですね。 かき溜めた話が消えてなくなりました。

T i p s 願い : 星に願いを

星に願いをかけた少女がいた。

かけられた少女の願いはあまりにも現実離れしすぎていて、願った少女自身、それが叶うことはないだろうと思っていた。

だからこそ、少女は星に願ったのだ。天に輝く星に願いをかければ、それが叶うような気がしたから。

♪

少女によって願いをかけられた星は、少女の願いが宿す輝きに魅了された。

夜闇の深淵にあつてなお消え去ることの無いその優しき光に、星自身も、少女の願いを叶えたいと思ったのだ。

しかし、少女の願いの輝きは星のそれよりも強すぎて、星には叶えることが出来なかった。

だから星は、自身より強大な存在である宇宙に願いをかけた。

少女の願いを叶えてほしいと。

♪

宇宙は星の願いを聞き届けようと考えた。

しかし、託されたその願いの大きさは、宇宙が内包できる許容量を超えていて、宇宙はその全貌を把握することすら出来なかった。

だから宇宙は、「秩序」に願いをかけた。星の願いを叶えてほしいと。

世界の自然法則の管理者である「秩序」なら、この強大な願いも叶えられると宇宙は思ったのだ。

♪

「秩序」は彼らの願いを叶えてあげたかった。しかし、できなかった。

それは自分という存在そのものが、彼らの願いを否定していたから。だから秩序は幻想に願いをかけた。

♪

幻想。

それは、ありえないが故に望まれて、望まれるが故に形もつ、無より生じるひとつの奇跡。

それはいつの時代も、どんな場所でも生み出されてきた。

そしてそれは観測されてきたのだ。多くの人々によって。

人。

それは、幾千幾万の世界を宿す、無限の可能性。世界はそんな存在を、あるいは可能性を、霊長と呼んだ。

世界に内包されながら、その実、世界と同格の可能性を秘めた夢幻の存在。

だから世界は今日も願いをかける。

自分とは異なる世界に。

♪

こうして巡り巡った幾ばくかの願い達は、少女に還元された。

あとは、少女しだいだろう。

願わくば、彼女の願いが叶いますように。

連想歌 B - 3 : 乱立変数収束? 存在確率 10% : 正答の破棄 2 : 万難と願い : 東利也

私こと伊吹由香と、私の恋人の東利也は――二人とも孤児であり、同じ施設の出だ。

私たちは、お互いがまだ言葉もなくに話せない頃から一緒に一つ屋根の下で育ってきた。血こそつながっていなかったけれど、それでも、それ以上に私たちはお互いのことを大切な家族として認識し、大きくなった。

私たち家族の絆は、高高四つ程度の塩基配列じゃ表記できないほどに、硬く尊いものになっていたのだ。

『ユカネエのこと、おれ、好きなんだ』

だから、だろうか。

血こそつながっていなくても、私たちは家族であり、だからこそ、どうしようもないくらいに私にとっては利也は「大切な弟」で、そして、利也にとって私は「大切な姉」でもあった。

世間一般的に、兄弟間の恋愛感情っていうのは、問題視される。

そのことについて、私は異論を唱えるつもりはない。

けれど、なら、「私と利也」の関係はどうなんだろうか？

『おれ、ユカネエのことが好きなんだ。家族とかじゃなくて、女として、ユカネエのことが好きなんだよ』

受話器越しに震える声で告白する利也は、少しだけかつこよかった。背伸びして、私のことを「女」って表現したところも、ポイントが高いところ。

……けれど、そんなふうに利也から告白された当初は、戸惑以外の感情などなかったというのが、本当のところだ。

『おれ、ちゃんとわかってる。ユカネエが俺のことなんとも思っていないってことも、俺がユカネエの弟だってことも、ユカネエがもうすぐ此処でてくってことも、全部わかってる！
だから、今言わなきゃって、俺！』

まくし立てるように、利也は自分の思いを告げてくれた。

そこには、彼なりの道徳的な葛藤と、そして、私という家族に対する配慮と、そして、それまで支えてきてくれたたくさんの人たちへを裏切っているという後悔の念……とにかく、受話器越しの俊哉の声には、いろんな感情が入り混じっていたように思える。

『利也、会って話をしよう？利也の声からは、利也が本気だってことがわかるよ？』

遊び半分でこんなこと言ってるんじゃないってこと、ちゃんとわかってる。でも、わたし、利也の顔が見たい。ちゃんと利也の顔を見

て、話を聞きたい』

- - - 最初、利也は私の申し出に若干の抵抗を示した。

まあ、利也がなんで告白に電話なんて持ち出したのかなんてこと、今の私ならわかる。いざあつてみたときの彼は、それはひどい身なりだった。もちろん、着る服がないとかじゃない。さすがの孤児といえども、着る服がないなんてことは、なかった。少なくとも、私たちは。

ただ、今でも鮮明に覚えているのは、くまを両目下にぶらさげ、無精ひげをわずかばかり尖らせ、即席といわんばかりにワックスでガツチガツチに固めた尿名頭で私の前に現れた、彼の顔だ。

なんともまあ、たしかに、これじゃあ、ダメだ。

こんななりじゃあ、好きな人の前には出れない。普通なら、出れない。たぶん、死んでも、出たくないってのが、思春期真っ只中にいた利也の、本音だったんだろう。

でも、なんだか、そんなヘンテコな彼の不器用さが妙にツボ二はまってしまって、結局私たちは。

「由香、俺、どうしたらいいか、わかんなくてさ……」ごめん、ほん
と、ごめん」

私たちが付き合いだしてから、もう三年が過ぎようとしている。
その間、私たちの関係にはいろいろな変化があっただけれど、でも、
彼自身はあまり変わっていない。そしてそれは、私に関しても同じ
なんだと思う。

――彼は。彼は、私に決死の告白を告げてくれた日のまま、あ
の日のまま、再び受話器越しに自身の本意を私に伝えていた。

「分からない」と。

自分がどうすればいいのか――ではなく、「なぜ、自分が選べ
ないのか」と。

分かりきった正解を、何故選べないのかと。

「分かんなくて、当然だよ。わかんなくて、当たり前」

受話器の向こうにいるはずの利也の顔は、容易に想像できた。
もちろん、私からの電話を取ったときの彼の顔も。

――彼からは、驚くような話を聞かされた。

それは、栞さんが超能力者だったということから始まり、彼女の予言。それは、小羽という名の夢の少女が、「私を殺すだろう」ということ。そしてその原因は私の前身にあり、どうあがこうとも、悲劇は不可避であると――唯一、栞さん達の策に乗る意外は。

結局、私達は無力だ。私も彼も、年相応か、もしくはそれ以上に頑張っただけで生きて来たつもりだった。でも、私も彼も、こんな風なことが起きるなんて、夢にも思わず生きていた。

必死にバイトで学費を稼いで学校の授業に付いて行くだけで、精一杯。

速く一人前になって園の家族の助けになればと頑張るだけで、いっぱいいっぱい。

だから、「かつて妹だったかもしれない幽霊」が、彼のもとに現れるなんて――引いては、その幽霊が、私を殺すかもしれない可能性を想定するなんて、出来るはずも無かった。

「あいつと会ったのなんか、数日前だぜ？それに、会話だってそんなに交わしてない。

そもそも、あいつ明らかに人間じゃないし――おれが、まともならな。おれが、現実と夢を取り違える程もつろくしてなければ、あいつは、まともじゃない！

それに、俺たちが見た警告夢と栞の話は、整合性が合う。あいつが、由香を――それなのに！」

それなのに、「選べないんだ」と彼はつぶやいた。

「ソレ」を選んではいけない理由を羅列して、そして、尚、それでも「選びたい」と願う自分を責めていた。

――本当に、利也は変わってない。どんなことにも一生懸命で誠実。

他人のことを想って想って想って、そして、自分の中でグルグルと回って、苦しむ。そして、「決める」。

一人で。たった一人で、決めてしまう。

それは、私に好きだと言ってくれたあの日だって、そうだった。わたしのことや、家族のこと。自分のことはもちろんだけれど、彼は色んなことを自分1人で考え詰めて、答えを出した。

――あのときは、それでも良かったかもしれない。「あのときは、それでも良かったと想う。」

けれど、今は状況が違う。

あのときと今では、まるで状況が違うのに、利也は相変わらず、1人で決めようとしていた。

だから。

「分かってる。何で分かんないけど、分かるよ、利也の気持ち。私も、私が殺されるかもって聴かされているのに、その娘に会いたって想ってる……うん、違うか。」

私は殺されても良いから、絶対にあの娘に会わなきゃいけないって感じてるの。」

だから、受話器の向こうで息を飲む彼に、伝えた。

私の気持ちを。「彼の想う私」でなく、「正真正銘の私自身の気持ち」を、彼に。

「利也、「1人」で背負わないで。これは、利也だけの問題じゃないんだよ？」

これは、私の問題でもあるの――だから、一緒に決めよう？ 私達が、どうすべきかを、二人で。絶対に、後悔しないように――さ？」

←

9 4 部へ

連想歌B - 3 : 乱立変数収束? 存在確率10% : 正答の破棄2 : 万難と願い : 事

本当は三人で選ぶべき道ですが、各々のリスクを考えると、二人ずつのペアが妥当ですかね？

さて、次回は小羽ちゃん救出編です。といっても、難しいのは選ぶことで、その先は――案外あっさりとしています。

問題は、学園に帰ってからです。

そこからが、この物語の始まりであり、終わりになります。

繰返す意味1：無意味：keyB-1-C-1：収束回帰？存在確率90%：正

世界は、正しき軌道へと回帰しました。

すなわち、これまでの物語は、「なかったこと」になります。

繰返す意味1：無意味：key B - 1 - C - 1：収束回帰？存在確率90%：正

89部より

←

繰返す意味1：無意味：key B - 1 - C - 1：収束回帰？存在確率90%：正しき世界：東利也

三泊四日の旅も、これで終わりを告げるかと想うと、なんだか無性にさびしくなる。

さりとて、帰らないわけにもいかない。ただ、それでもさびしく感じるのは、今回の旅がそれだけ楽しかったからだろう。

一日目の京都寺周りはさておくとして、二日目の自由行動は馬鹿に見たいに騒いだ分、思い出したくもないくらいに楽しかった。早起きして電車にのった俺たちは、京の町へと繰り出した。学園と比べれば小さな町だったが、それでもイベントには事欠かなかった。

たとえば、「占いの通り」での1件。

細いあぜ道に個性豊かな占い師が並ぶ通りで、俺たちは銘々嘘か真かも分からない占いに大いに沸いた。特に、女性人。彼女らは -
- 例外として栞は落ち着いたものだったが、他の面子 - - あの、零面鉄美と歌われる朝霧でさえ、頬を染めて熱心に胡散臭いおじさ

んの話に聞き入っていた。

ちなみに、俺はというと、無難に「将来のこと」を占ってもらった。そこで由佳との話が出た結果、峰岸の機嫌が最悪になり、さらにはその事が「夜のオトコだらけの猥談」のネタにされたのは、また別の話だ。

んで、「三日目のUSJ」は微妙だった。なんせ、キヨがジョーズの海に落ちちまったからな。高校生にもなって、何してんだよって話だよ。ただ、それでも楽しかった。アトラクションは数個しか制覇できなかったけれど、待ち時間にいろんなことを友人と話せたし。まあ、三日目のメインイベントは、女湯ののぞきだから、そのせいでUSJで霞んで見えるのかもしれないけれど……

「東、時間っばい。ほら、いくぞ」

ぼーっと、ガラス張りのロビーから外を眺めていた俺は、キヨの声で我に返った。ふと時計を見ると、針は16時45分を指している。たしかに、飛行機の出発まで、あと30分を切っているようだからけていたほかの面子も、いそいそと移動の準備に入っている。

「にしても、かえりたくない！ねえ、峰岸、なんとかならない！？」

荷物を片す俺の耳に飛び込んできたのは、瀬戸のアホな心の叫びだった。まあ、実際声として聞こえているから、心の声ではないの

だろうけれど、でも、アホなことには変わらない。

当然だが、峰岸は「なるわけないでしょ、ばかなの？」と、素で返していた。あまりにもストイックすぎる友人関係を前に、涙がにじむ思いだ。

「全員そろってるわね。じゃあ、いきましようか。チケット出しといてね。こっちょ」

続く声は、班長である朝影のものだ。あいもかわらずのクールぶり、俺たち癖の強いメンバーをまとめにかかっている。正直、朝影がいなかったら、うちのグループには班長なんていなかっただろう。うーめんどくさいしね。

だからというか、そんな面倒事を見てくれた朝影に一定の感謝が皆ある訳で、だからというか、むろんというか、朝影の指示に反抗するやつなんて班にいる訳もなく（瀬戸をのぞく）、全員が全員、すくつと立ち上がった。

そして、のろのろと歩き出す。三日間の遊び疲れのせいもあるが、はつきりいって、学園に帰ればいつもの日常だ。

だから、皆自然と歩みが遅くなる。そう、遅くなる。まるで、「楽しかった旅行」に袖を引かれるようにうーん？

「あつ」

声がする方を、俺は振り返った。そこには小さな女の子が一人、たたずんでいる――俺の、袖を引きながら。

ただただ驚きの表情を顔に張り付け、こちらを見上げていた。

「えっと、あれ？」

年の頃は、4、5歳くらいだろうか。毛糸のウサちゃん人形を片腕に抱きしめ、空いた手で俺の袖をつかんでいる。

少女の抱くウサギは、ペしゃんこだった。そして、袖を引く少女の指先は震えている。

にしても、誰だこの娘？まったく、見覚えがないんだが……

「なにしてんのよ、あんた。って、その娘、だれ？」

先に搭乗口に向かっていった峰岸がこちらに戻ってきていた。遅れて、栞が峰岸の横に並ぶ。視線を搭乗口に移せば、他の面子たちが不思議そうにこちらを覗いているのが見える。

「いや、知らない。たぶん、迷子かなにかだと思っただけど……

・・」

俺自身、この少女とは初対面だった。たしかに、俺にはこれくらい兄妹がたくさんいるが、彼らがこんなところにいるはずもないし、いたならいたで、見分けがつく。

なのに、どうしたのか。俺は、その少女を知っている気がした――いや、違う。知っているというより、「忘れている」というような、そんな、妙な感覚だ。

「お嬢ちゃん、お名前は？お父さんとお母さんは、一緒じゃないのかな？」

少女に視線をあわせるため、かがむ峰岸。問いかける声は、やさしく、普段俺に向けられるそれとは天と地ほどの差が感じられる。

それで、少女は口をギュッと噛み締めるばかり。若干、俺の袖をつかむ力が強くなっている気がする。

「とりあえず、係の人を呼ぼう。そうしないと、何も始まらないって――てか、はやいな。」

というより、さすがに栞っていったところか」

そんなふうに、俺が峰岸に提案しようとし、結果先回りした栞が係の人を連れてこちらに歩いてくるのを見た瞬間。その瞬間に、とてつもない「違和感」を覚えた。

だが、何に對して？

――それは、俺が、俺に對してだ。

「この娘です。周りに保護者の方も見当たらないので、どうしようかと――」

栞の説明する声が、遠くに聞こえる。

そして、俺の意識は今や、少女にそのほとんどを占有されていた。

なんだ、この感覚は？

どうしたってんだよ、おれは――？

「では、この娘の親御さんは私が責任を持って探させていただきます。

本日は――」

じつと、俺を見つめる少女。

彼女は何も口にすることなく、ただただ俺を見つめ、そして、つかんでいた俺の裾を離した。

少女はそのまま警備員さんに手を引かれ、静かに俺のもとを去ってゆく。たった一言の、言の葉を残して。

さようなら、にい

さま

繰返す意味1：小さく、偉大なる奇跡：key B - 1 - C - 1：収束
 束回帰？存在確率90%：正しき世界：寿小羽

「お世話になりました、イツキ様。こんな私に、救い手の手を指しのばして下さったこと、この魂が滅ぶそのときまで、決して忘れません」

警備員に手を引かれ歩く少女――寿小羽は、そう、黒髪の女性に礼を述べた。

たいして、イツキと呼ばれた女性は寂しげな表情を浮かべ、小羽の頭を優しくなでた。

小羽は、その優しい手のひらに母親の優しさを幻視し、目を細める。

「シロがお世話になったみたいだからね。これも、なにかの縁つてやつよ。気にしないで。」

それに私は、あなたを救った訳じゃないわ。私はまだ、あなたを「救えてはいない」」

――そう言って、蒼の魔法使いは唇を噛み締めた。

そんな魔法使いの前に、小羽は優しく笑いかける――「これで、十分です」と。

「あなたは、あの「檻」より、私を救い出してくださいました。それだけでなく、世界の法則をねじ曲げてまで、一時ではありますが、わたしに「形」を……。おかげで、兄さまに別れを告げることができました。もはや、思い残すことは何もありません。縁もゆかりもない私――いえ、シロさんという共通の友人の存在があるとはいえ、それでも――」

陽炎のように、少女の形が揺らぐ。

ただし、そのことに気づいているのは蒼の魔法使いだけだ。空港にあふれるほとんどすべての人々が、「人が揺らぐ」という現実にも、まるで向き合おうとはしないでいた。

「あなたはこれから、本来のあるべき姿にもどることになるわ。でも、その運命は変えられる。

その運命を打ち破るには、本来なら「あなたたち」の強固なる意志が必要なだけれどーでも、わたしなら、それらすべてを踏みにじって、「ハッピーエンド」を呼び込むことができるわ。ねえ、小羽ちゃん。私はー」

魔法使いは小箱をポケットから取り出すと、少女にかざしてみせた。その、小箱の裏側には、東利也と寿小羽ーそして、伊吹由香が三人仲良く食卓を囲んでいる風景が浮かび上がっている。それは、とても幸せな幻想に見えた。しかし。

「いいえ、イツキ様。これで、よいのです。私も兄さまも、自らの意思でこの結末を選びとりました。いまさら後悔など、みじんもありませぬ」

強く、小羽は笑った。それは、終わりを受け入れた意思の、最後の強がりか形を得た姿だった。

故に、魔法使いはため息をつき、小箱を――「決定した世界」を内に宿す「パンドラの秘宝」を、ポケットにそのまま戻した。そして。

「さようなら、小羽ちゃん。私は、あなたの「強い意志」を、決して忘れないわ」

そして、一言さようならと言いつくと、世界を去った。それは、ともすればあっけらかんとした別れの形でもあった。なぜなら、それもそのはずだ。

「――」

魔法使いが去った、まさにその瞬間、その場所には。もはや、寿小羽という少女はおらず、代わりただ延々と何かを呪

い続ける――ただそれだけの存在が、残されるだけなのだから。

e n d i n g 1 :

繰り返す意味1：無意味

汝の名を問う：未回答

相克する因果：回答権消失

結末：「正しき世界」の回収終了。

繰返す意味1：無意味：keyB-1-C-1：収束回帰？存在確率90%：正

ending1のあとがきは、ending2が出たときに一緒に
やります。

ではまた、近いうちに。

はやく、ハッピーエンドの向こう側を描きたいです。

繰返す意味1:憎悪:k e y B - 1 - C - 2:収束回帰?存在確率10%(前書

e n d i n g 2へとつながるお話です。

繰返す意味1：憎悪：keyB-1-C-2：収束回帰？存在確率10%

89部

←

繰返す意味1：円環より溢れる憎悪：keyB-1-C-2：収束
回帰？存在確率10%

Tips

繰返すことに、意味はない。何度繰返そうと、同じこと。
にもかかわらず、そのことに何らかの意味を見出そうと願うから、
こうなる。

今回の物語は、そもそもが、間違いだった。それを受け入れた上で
の、選択だったはず。
なのになぜ、それに手を伸ばす？

覚悟のないものが、身の程を超えた願いに手を伸ばせばどうなるか。
――なればこそ、絶望せよ。己の無力さと、存在という存在の、
意味のなさに。

そして、証明するのだ。

円環を生み出し姉妹の夢は、結局幻想だったと。

繰返す魂に刻まれる傷は、結局――

n ←
e
x
t
1
1
0
部

繰返す意味1：憎悪：keyB-1-C-2：収束回帰？存在確率10%（後書

えゝつと、この続きは少し先になります。

しばらく、メインストリームのお話を進めます。

K e y B - 2 ' 3 共通 : 少しだけ先の未来 ? 存在確率 0 % : あり得ざる世界 (前

この物語の臨界点です。

Key B - 2 3 共通：少しだけ先の未来？存在確率0%：あり得ざる世界

> Tips 1 <

58部より抜粋

Tips 〽 屁理屈：寿小羽：gold gate：不連続より成る
因果の連結

君は、どこから君になった？君の始まりは、どこにある？

お母さんから生まれ出た瞬間？それともその前の、お父さんとお母さんが愛し合ったときかな？

それともそれとも、君が始めて言葉を発したとき？もしくは、初めて友達と喧嘩をしたときだろうか？

ねえ、君は今どこにいる？どこにいて、結局どこに向かっているの？
今いる場所は、どこかに向かう途中なのかな？それとも、そこが
終着点？

・・・こんなこと、考えるだけ、無駄なのかな。

結局、この世界の魂たちは、円環の理に縛られている。クルクルと環を描き、傷を溜め込み続けるだけの、哀れな道化。

環には、始まりもなければ、終わりもない。

ただただ延々と、自分の影を追いかけているようなものさ。でも、だからこそ、かな。

だからこそ、いつだって始められる。確固たる始まりがないこの世界では、時間軸だってあやふやだ。ただ、環に閉ざされている以上、その物語を終わらせることは出来ない。けれど、それでも、いつだって、始めることはできる。

君の始まりはいつだって、君が決められるんだ。たとえば、それが屁理屈って呼ばれるものであっても、それは事実。

だから、君には笑っていてほしい。君の抱える因果の相克は、大

事なものだよ。だからこそ、因果を歪曲してまで語られるんだ。

一つを二つに分けた意味は、単純なんだよ。ただ、見えやすくしただけ。輪廻なんてばかげたものの性でこんがらがった大切を、指差す――ただ、それだけの意味だったんだ。

・・・・・・ほら、聞こえるよね？

彼の、君の名を呼ぶ声が。

世界は「それ」を「君」とは認めないだろうけれど、でも、それだけのこと。彼は、「君」を呼んでいるんだ。たしかに、彼が叫んだ「名」は、「君」じゃない。君の、「欠片」でしかない――不完全なんだよ。でも、欠けたるモノは、補えばいい。

彼の声で足りないなら、君の声がある。

だから、がんばって。がんばって、屁理屈をこねるんだ。

世界が定義する君を、屁理屈でねじ伏せる。そうすれば、きっと

-
-
-

> Tips 2 <

題48部より抜粋

謳歌：相克する因果4：東利也&寿小羽

3番目の絶対矛盾：超えるもの

< 因 >

ねえさまのこと、大好きだった――

< 果 >

――呪ってやる。

< 因 >

ねえさまのこと、信じてた――

< 果 >

――崇めて

やる。

<因>

ねえさまのこと、心から、愛していた――

<果>

して・・・・・・・・・・・・・・・・・・たたたり、のろい、そ

誰かの手記による、独白

「真名励起」という奇跡でもって、彼らは運命を突破できない。
どれほど彼が彼女の名を叫んだところで、それは彼女の一つの側面
でしかない。

それでは、彼女を救いあげることが不可能だ――しかし、可能性を提示することは出来る。

「名を呼ばれた彼女」が、「彼女」が抱える絶対矛盾――相克する因果を超えることが出来たのなら、その先に希望はある。

ひいては、それがヒーローの呼び水となることすらあるだろう。

願わくば、彼らが超えるものでありますように。

――――― 答え―――――

汝の名を問う：答え―共鳴連鎖の真名励起：東利也

「おまえには、役割がある。
それは然るべき”とき”、然るべき”者”に『世界』が与えるもの
だ」

吹き荒れる憎悪の中、銀髪の少女は語る。
ただ淡々と、俺を見下ろしながら。

「……つつ！」

けれど、俺は自我を保つだけで精一杯だった。

俺を飲み込もうとウネル憎悪の中、俺は少女を上を仰ぎ見ながら、歯を食いしばることしかできない。

「そう、お前には世界により求められる、「役割」がある。そして、お前にそれを求める世界は貴様を包み込むこの世界に限らず、それよりも遥かに矮小で卑しい世界——「人」という歪な世界も例外ではない」

黒煙を払う銀の光は、上空より俺を照らす。

けれど、助けられてはくれない。ただ語るのみで、救いの手を差し伸ばすことは——

「なあ、東利也。おまえは、何者だ？」

世界屈指の名門校に通う将来有望な学生——それが、お前か？

それとも、伊吹由香の恋人でありながら他の女を引っ掛ける色男——それが、お前か？

あるいは、世界を救う命題を課せられた、偉大なるヒーロの原石——それが、お前の本質なのか？」

俺は、何者か？

そんなのこと、わかるわけがない。

こんな状況で、それがなんになる？今にも悪意に取り込まれそうな俺が、

そんな問いに、答えられるわけが……！

「お前と取り囲む世界達は、お前に役割を与え、それを演じることがを求める。

もちろん、与えられたそれを運命として受け入れることは、悪ではない。しかし、そこにお前の意思による介入がなければ、お前はただの道化でしかない。

……だからこそ、問い続ける。何が在ろうと、どんなことがあるうと、お前はお前自身に問い続ける。

「自身とは、何者なのか」と

吹き荒れる黒煙が、俺を丸呑みにする。どっぴりと粘性の高い憎悪に沈みながら、俺は上を見上げた。

そして、感じる。この、俺にまとわりつく怨念――これを抱えて沈みながら、あいつは五百年というときを孤独に過ごしたのだと。

「答えは、お前の中にある。

それは選ぶことは結局のところ運命の内ではないのかもしれないが、しかし、それだけでは終わらない。その選択にお前の意思が在るのなら。『それ』は、『それ』のままでいられない。

運命はお前に意思により歪曲され、一つの可能性を生み出す。それこそが、魔法だ。

おまえが、おまえだけが。

だが、誰でも使える、そんな魔法だ。

多くの者が忘れていくだけの、原書の魔法。それを――」

銀の光が、はぜる。

それは俺を包み込んで離すはずのなかった憎悪をなぎ払い、そして。

相克する因果：答えー相克融和の幻想励起：寿小羽

「これで、いいのよ。これで、間違いは正される。
物語は、めでたしめでたしで括られるの」

そう、目の前の私は言った。顔をくしゃくしゃにしながら、それでも、

それでも、「これでいいのだ」と。

「ほら、聞こえているんでしょう？兄さまの、「あなた」を呼ぶ声が。あの声の方に、手を伸ばせばいいの。それだけで、あなたはここから出られるわ。そして、兄さまやあの女と幸せに過ごすの。あの女を憎む私にそれは不可能だけど、あなたならそれができる。多分このために、私たちは分かれたのよ」

一つを二つに分けた意味――それは、お前の中にあると、銀髪の

少女は言っていた。

その意味が、これなのだろうか？私の中にある姉様を憎む私を、私から引き離し、おいていく――この、憎悪の渦の中に。

そうすれば、私は兄さまや姉様と、幸せに過ごせる――の？

「あなたは私で、私はあなた。

けれど、私は「間違えた私」だから。ありもしない妄想に取り付かれ、数百年というときを呪って過ごした、愚かな私。でも、だからこれでよかったの。一つを二つに分けた意味は、ここにあったのよ。生まれたことが間違いだったのよ、わたしは。だから、それが正されるの。私は憎悪の渦に消え、あなたは優しき場所に帰る。ただ、それだけのことよ」

声が、聞こえる。私の名をよぶ、必死の声が。

それは、私を呼ぶ声だった。まちがいなく、私を呼ぶ声。

けれど。

「ちがう……ちがうよ。たしかに、この声——兄さまは、私を呼んでくれる。」

でも、違うの。兄さまが呼んでくれるのは！必死になって手を伸ばしてくれているのは、私じゃない！」

私は、私呼ぶ声に、ぐいぐいと引き上げられそうになる。
そんな私をみて、目の前の私は「もう行って」と再び笑いかけた。
れた。

……でも、そういうことじゃない！こんなの、絶対におかしい！
だって、だって！

「だって、こんなのおかしい！おかしいよ！
あなたは、私なんだよ？そして、私はあなたなの！
それなのに、わたしだけなんて！」

——体が、浮き上がる。上へと。
声の方へと、引き寄せられる。このままなら、私は多分、救われる。
けれど、私は納得してない。だって！だって！

(この運命の先でお前は、幸せになる)

あの銀髪の少女は、言っていたはず。過酷な運命の末に、「私」は幸せになれると。

その「私」は、私だけじゃない。ねえ様が大好きな私と、殺したいほどにねえ様を憎む「わたし」。

両方で、「私」なんだ！

(繰り返す命は幾度の漂白を超えて、「お前達」のもとに。
その意味を決して、はき違えるな)

「私たち」のもとに、兄さまと姉様はきてくれた！
私じゃなく、「私」のもとに！

だから、これでいいはずがない！だって、このままじゃ、私だけが！

「これで、いいの。それに、これ以上私は、生きていたくない。間違えから始まったわたしは、ここで――（いつからだって、始められる）」

私を見送るわたしの声に重なるように、声が、聞こえた。
その声は銀色の声で、優しい声で。
そして、それは一筋の希望のように感じた。

だからこそ、私は口にしてみる。

「いつからだって、私たちは始められる！
だって、私たちは二人で、私なんだから！私が大丈夫なら、あなただって大丈夫なはずなんだから！
ふたりで！ねえ様が大好きな私と、ねえ様が嫌いな私で、初めて
「私」……！」

受け売りで空っぽな言葉を、ただの感情で口にして、私は、理屈をこねた。
それは結果ありきのお粗末なもので、それがとある道理なんて、世

界のどこにもなかった。
けれど、それは弱々しい祈りで、そして、いつか誰かが心に誓った
強い輝きでもあった。

「……そうだよ。間違ってなんかいない！
あなたが生まれたことが間違ってるなんてこと、絶対に、ない！そ
うだよ！そうだ！
だって、あなたの始まりは、ここにある！今も、ここに！そうだ！
だから、終われないんだ！追われるはずがない！だって、あなたは、
あなたの始まりは――」

Key B - 2 '3 共通：少しだけ先の未来？存在確率0%：あり得ざる世界（後

このエンドポイント目指して、がんばります

KEYB - 2 '3 共通（前書き）

一つを二つに。その意味は、はたして。

Key B - 2 / 3 共通

Tips 幸福にまつわるプロローグ

ある魔法使いが、「幸福」の定義を試みた。

しかし、階層構造を持つ定義ではそもそも、「幸福」を括りきれるはずもない。

どれほど魔法使いが言葉と頭をひねったところで、幸福にまつわる必要十分条件を見いだすことはできなかったのだ。

故に、彼の魔法使いは幸福を定義することを諦め、
「まず、は」「一義的な幸福」を「作り出す」ことに専念した。

ここで彼の魔法使いは、彼の作り出す「幸福」の定義を、「内包世界と固有世界の願望一致」と定めた。

端的に言えば、固有世界（人や意識）により生み出された願望が、各固有世界の投影物である内包世界（社会や広義の世界）に認められるということ――それこそが、両世界にとっての、幸福ということである。

この幸福モデルの作成を果たす上で重要なことは、「それ」が可能である世界（内包世界）を生み出すということである。

これには通常、彼の魔法使いが「神」となり、「その世界」と成ることが最短で最良の方法である。

しかし、この方法は当初の目的に沿うものではない。彼の魔法使いの目的はあくまでも「原初の幸福」を定義することであるからだ。

仮に彼が「神」となれば、「彼」という意識は無限拡散し、事実上、意味を消失する。

代わりに、彼は人の域を超え、他者をその身の内に際限なく内包することが可能と成り、同時に、「それ」という秩序「それ」を肯定する「永遠」として――しかし、それでは意味がない。

彼は、「幸福を定義」することを望んでいるのだから。

今回の幸福モデル作成の先には、「真の幸福」の定義が命題として存在している。

故に、彼はここで、人としての「終焉」を迎え入れる分けには、いかなかった。

彼は人のまま、人の領域を超えることを、彼自身の課したのだ。

その結果生み出されたのが、「繭」であり、これは――――

Key B - 2 , 3 共通：汝の名を問う：解き放つ、可能性：存在確率変動（存在強度概算10%）東利也

俺は今、古びた社のお前にいる。

右を見ても左を見ても、暗闇ばかり。途中で買いに走った懐中電灯がなければ、俺は一步も前に踏み出すことすらできない。

けれど、おれの手には懐中電灯が在る。

なぜなら、俺は買いに走ったからだ。コンビニまで。

だから、俺は一步を踏み出すことができる――そう、俺の意思で。

「……」

由香は、受け入れてくれた。それどころか、今回の一件の結果を、一緒に背負ってくれるとも。

――それが正しい選択かどうかなんてことは、今の俺にはわからない。けれど。

『私たちの決断が間違ってるかどうかなんて、「今の私たち」にはわからないよ。
それは、「未来の私たち」が決めることだから。だから、後悔しないようしなきゃ。
未来の私たちが、歯をくしばれるように。なにがあっても、諦めないようにさ?』

選択の正しさを決めるのは、後まわし。ただただ、後悔をせぬように。

後悔さえしなければ、諦めなければ。

その先にある未来で振り返った自分たちの軌跡を微笑むことができるはず。

そんなふうによ香は、まるで、昨日の占い師みたいなことを、平然と言って退けた。

「……」

俺は、一歩一歩前に進む。

生い茂る雑草が俺を禁めようと、足を取りにかかる。

それでも、俺は前に進んだ。そして、朽ち果てた社の前にたつ。

「おい！だれか、いるのか？」

間拔けな声を上げながら、最後の階段を上る。
ギシギシと音を漏らす社は腐りかけており、いつ床が抜けてもおかしくない状況だ。

「おい！いるのか！？おい！」

声のボリュームを上げながら、俺は扉に手をかけた。
ほんの少し力を込めるだけで、施錠すらついていなかった扉はすう
っと、開いた。

「……おい、こら。
いるなら、返事くらいしろ」

俺は安堵の息を漏らしながら、社に踏み入った。

目指すのは、社の部屋の、四の隅の――
それも、星の光すら届かない、社の一番奥の奥に。

あいつは、一人膝を抱え、丸まっていた。震えながら、一人で
一人で嗚咽を漏らしながら――

Key B - 2 , 3 共通：汝の名を問う：解放たれる、可能性：存
在確率臨界（存在強度概算10%）東利也

カシャンと、何かがくだける音が聞こえた。
続いて、誰かがどこかに入ってくる。でも、だれだろう？
それに、ここはどこ？

「おい、大丈夫か？おい、ちょっと、お前！」

声が、響く。伽藍胴の社と、私の中に。
響いた声は、ひとりぼっちの私を満たしてくれる。

とても暖かくて、懐かしい声。でも、それはきっと、気のせいだ。

心配そうに私覗き込む彼の顔を、私は知らない。凍えた手を包み込んでくれるぬくもりも、私は。

『にい、さま?』

それでも、ついて出る言の葉は、なんなのだろう?
なんだか、言葉においてけぼりにされたような、変な感じがする。

「なんで、返事しないんだよ?どっか、悪いのか?」

必死な、彼の目。なぜ彼は、そんなに私のことを心配するの?
あなたは、いったい誰なの?どうして、あなたはここに?

『いえ、大丈夫です。ただ、びっくりしてしまっただって、わたし、ここから出られるなんて、お、おもわっな!』

感情のしずくが、頬を伝う。それは大気の冷氣にさらされ、すぐに冷たくなってしまった。

でも、それを拭うように、新たなぬくもりが、頬に添えられる。

「もう、大丈夫だ。もう、だいじょう。もう、大丈夫だから……」

大丈夫だと言う彼の声に重なるように、大丈夫だと、もう一つの声が聞こえた。

そこでふと、私は気がついた。彼は――私を抱きしめてくれるこの方は、「私」の兄さまだと。

『「迎えに、きてくださったのですか?」

ほんとうに、『「私の」』にいさまなのですか?』

私は顔を埋めたまま、彼に問うた。

彼は――兄さまは答えてくれはしなかったけれど、でも、強く抱きしめてくれた。

たぶんそれが、答えなんだ。

それが、答え！兄さまは、私を選んだ！この、「私」を！

牢に閉じこもり、運命から逃れようとした『私』ではなく、この、「わたし」を！

「ああ、にいさま。兄さまなのですね？
にいさま！にいさま！」

わたしは喜びを、声にのせた。うれしくてうれしくて、涙があふれた。

わたしは、勝ったのだ。運命に。そして、弱い私に！

「にいさま、もう、大丈夫です。

わたしは、もう、大丈夫です。だから、にいさま――」

私は、そつと顔を上げ、兄さまの目を見つめた。
同時に、力がみなぎってくるのが分かる。これは、兄さまを守る力だ。

ほかのだれでもない、この、「私」が、兄さまを守る。今なら、分かる。

一つを二つに分けた理由は、なすべきことをなすため。

人のみにすぎたる己の力に震えるだけの、そんな弱い『私』を追い出し、兄さまを守るため。

「にいさま、わたしはもう、だいじょうです。
だから、そんな顔をなさらないで。わたしは、ここにいます。だから、にいさま――」

私は、兄さまの頬の自身の小さな手を添え、微笑んだ。
そして、心に誓う。なにがあるうと、もう、離れないと。なにがろうと、今の私なら――

K e y B - 2 ' 3 共通（後書き）

寒い季節ですよね。

こたつが、ヤバいです。

keyB - 2 '3 共通：悪意となる憎悪1：寿小羽（黒）（前書き）

年明けくらいまでにはクライマックスいききたいな

key B - 2 '3 共通：悪意となる憎悪1：寿小羽（黒）

key B - 2 '3 共通：悪意となる憎悪1：寿小羽（黒）

檻を出た私と兄さまは、手をつないで旅館へと歩を進めていた。
空を覆い尽くしていた雲もいつのまにか消え失せ、淡い星の光が
私たちの歩む道を照らしてくれている。

「・・・・・・・・」

見上げる空には、無数の星。肺に吸い込む空気は冷たく、同時に
兄さまの手は暖かい。

流れる風は身を切るようだったけれど、それ以上に私の心は満た
されていた。そして同時に、私という器から溢れ出すのは――
力だ。

「.....」

空いた左の手から、静かに力を解放する。それは黒煙という形をとって、私の瞳には移り込んでいた。とろとろと糸を引くように私の手のひらから溶け出し、地面へと沈着している。そして、ひとたび力を込めれば、ふわりと舞い上がり、世界に霧散し、世界を浸食する。

それは、自分でみても気持ちのいい光景ではなかった。

けれど、兄さまにはそれが見えていないらしい。ご自身の体が得体の知れない黒煙で包まれていることに、まるで気づいていない様子だ。ただ静かに私の手を引いて、旅館へと歩を進めている。

「……」

私は兄さまに手を引かれながら、黒煙の性質を掴もうと、四苦八苦していた。

この力は、先ほど得たばかりのもの。けれど、明日には使いこなせるようにならない。

なぜなら、明日には「あの女」と対面することになる。そう、明日が決着のときなのだ。チャンスは、逃せない。

500年という月日の果てに報われる、民の無念。あるいは、我が一族の悲願のとき。ただの一日も、先延ばしすることはできない。本来なら今からでも――と、想いはするが、あせりは禁物だ。今はまだ、私自身の準備が整っていない。

輪廻という理のもとに許された、断罪のときを、逃すわけには行かないのだ。繰り返す命は、私に復讐の機会を与えてくれた。

――ただ、明日の私が退治することになるのは、あの女の、生まれ変わりだ。今代の女には、罪などない。けれど、その魂には罪が刻み込まれているはず。

兄さまの魂に、私との絆が刻まれていたように。同様に、あの女の生まれ変わりである女にも、同様の傷が刻み込まれているはず。

なればこそ、復讐は正当なものとなる。あの女が犯した罪は、それほどに重いのだ。数度の死により漂白されようと落ちることのない、忌まわしきシミ。そして、それこそが、私の始まり。

私はあの女の裏切りを知ったときから、この世界にとどまり続けた。それは私の意図したことではなかったが、それもやはり、運命だったのだろう。

もし私が兄さまと同じように輪廻の輪に組伏していれば、私はあの女の罪を裁くことができなかつたはず。今の兄さまがそうであるように、敵を敵としてみることもできず、そして、再びあの女を「愛する」という「愚行」を犯していたかもしれない。

「けれど、災厄の目は、ここで摘まれることになる」

口にした言葉は、兄さまには届かなかつた様子。兄さまはすこしこちらを怪訝そうに見下ろすだけで、私が笑顔を向けるとそつぽを向かれてしまった。今の言葉を聞かれていたらと思うと少しだけ、気持ちが暗くなる。でも、それは入らぬ心配。そして、仮に聞かれていたとしても、それは、それでいい。

それで、いいのだ。

明日、私はあの女を殺すけれど、それで兄さまが傷つくことはない。この力が在れば、私は兄さまを守る。この力はそれだけ、常軌を逸している。兄さまの頭の中を改ざんすることくらい、わけはないのだ――感覚的に、それが分かる。

兄さまからあの女に関する記憶を根こそぎ取り払い、あいた穴には――そうだ、あの峰岸とかいう女を当ててやろう。端から見ていても、あの女は兄さまに惚れ込んでいる。それに、兄さまだって、まんざらでもないはず……？

「でも、そうか……」

よくよく考えると、あの女を殺して記憶を改ざんするだけでは駄目だ。この世界には、あの女の残滓が色濃く残ることになる。たとえどれだけ人の記憶をいじったところで、それには限界がある。

きつとどこかで整合性がとれなくなり、いずれ破綻するだろう。

すくなくとも私が生きた時代よりもはるかに、今のこの世界は個人を尊重してるようだし。

――けれど、それはそもそもがおかしな話だ。あの女が尊重される世界など、在ってはならない。それは、根本的に間違っている。なら、それを正すところから、始めなければ。

でも、どうやって？

『世界をかえるのだ』 『あるべき世界に』 『そうだよ、おねえちゃん、世界を変えるんだよ』
『我らには力が在る』 『かえるのだ、世界を』 『ただすのよ、まぢがい』

黒煙よりこぼれ出るのは、誰かの声だ。
私を想ってくれる、誰かの声。 500年という月日を私とともに
過ごしてくれた、家族の声。
500年という孤独を寄り添ってくれた、ともの声。 彼らが、
『世界を変える』という。

でも、どうやって？

『世界に、間違いを指摘するのだ』 『それだけでは足らぬ』 『ここだよって、おしえてあげればいいんだよ！』 『さすれば、正されよう』 『正しき姿を示すのだ』
「世界の修復機構をつかうのよ」

囁くみんなの声に、不可思議なノイズが走った気がした。
でも、それが何なのかを確かめようとする私を置いてけぼりに、
声は木霊する。

『世界の修復とな？』 『不可能だ』 『世界ってなに？』 『どうやって？』 『不可能だ』
「可能よ、彼女を生前に殺せばいいだけ」

ノイズのような、変な感覚は―――気のせいだったみたい。だって、みんなが受け入れているから。

私の家族が、当たり前のように受け入れている。だったらそれはもう、家族なんだろう。

……それにしても、生前に殺すなんて……それは、不可能ではないのか？ いや、そもそもが、矛盾しているのでは？

『生まれていないものを？』 『生まれる前に？』 『ころせるの？』
『不可能だ』
「可能よ、そのためのすべてが、学び舎にはそろっている」

不協和音が響く中、声は高まりを見せる。
同時に、私の鼓動が跳ね上がるのが感じられた。

『いかにして？』 「ゲートをつかうのよ」
『なんのために？』 「過去へとゆくために」
『過去とはなんぞ？』 「彼女が生まれた場所よ」
『時を超えらるゝとな？』 「手伝って上げる」

『そこで女を殺すの？』『それが最善手なの』

敵を生前の世界に拉致し、殺す。そんな幻想的な思考が、今や現実味を帯びて私の中に広がりつつ在る。

『矛盾だらけじゃない？』『そうね、だから辻褄を合わせるの』

『誰が？』『世界よ』

『不可能だ』『可能よ。きっと、歪になるけど』

『歪とな？』『なかったことになる』

『なにが？』『存在が』

『何の？』『敵の、すべて』

切れ切れにかわされる、声の応酬。

それは、「運命である」とささやく。

『死んでいるはずのものが』『生きている』

『そんな矛盾を』『世界は許さない』

『敵という存在を』『世界は認めない』

『であるならば』『無かったことになる』

『結果ありきに』『世界は組み替えられる』

『しかしそれこそが』『正しい世界』

組み替えられる、世界の構造。

頭に響くのは、運命の足音――明日、私は兄さまとともに学園という地を踏む。

そこには異世界へのゲートが存在し、過去へすら往けるといふ。

そして、過去に――そこで、敵が「生前に死んでいる」という既成事実」を作ってしまったら、今のこの世界は、あり得ない。

世界は、きっと矛盾を解きほぐす。そう、正しい形に。

敵が存在しない世界という、「在るべき世界」を、私たちにもた
らしてくれるはず！

「あれー？なんで、つながらないんだよ！」

私の隣で騒ぐ兄さまに、私は再び微笑みかけた。心の中で、必ず
お守りすることを誓いながら。

けれど、そんな私に、兄さまは気づいていない。

さつきから必死に携帯電話をいじっては、首を傾げている。

……兄さまは、本当に愚かになられた。いや、魂の漂白を受けて
いる以上、仕方の無いことかもしれない。

でなければ、「私に敵と話してほしい」などという戯言を、おっ
しゃるはずが無い。

「にいさま、電波が悪いのではありませんか？
旅館につけば、かけられるとは思うのですが……？」

白々しいと自分でも想いながら、私は兄さまに声をかけた。

そもそも、どうあがこうとも、その携帯が敵につながることは無
い。だって、私の黒煙が巻き付いているのだ。

それは何かをムシャムシャと食べているように見えるけれど、そ
の真意は分からない。でも、私の望んだ結果は得られている。

私はまだ、あの女と交わるわけにはいかない。

もし交わればきつと、私は私でいられなくなる。だからこそ、明日の一発勝負なのだ。

明日、私は修羅となりテーーーーアノオンナコロし、兄さまをスクウノダカラ

keyB - 2 '3 共通：悪意となる憎悪1：寿小羽（黒）（後書き）

小羽ちゃんが、バーサーク状態ですね。

key B - 2 ' 3 共通：歪曲する因果 4：迷走する想い 7：竹山尚子&蒼の魔法

個人的な設定で申し訳ないのですが。

この無限想歌は、3 2 番目の物語の一つです。

そのため、ちらほらと意味不明な話が盛り込まれます。

key B - 2 '3 共通：歪曲する因果4：迷走する想い7：竹山尚子&蒼の魔法使い

key B - 2 '3 共通：歪曲する因果4：迷走する想い7：竹山尚子&蒼の魔法使い

未来視の結果、わたしは今回のこと――念と少年を取り巻く一連の物事を見過ごせない、判断した。

本来、未来は不安定であり、私が予知した世界が顕現する保証など、どこにも無い。

しかし、万が一にでもそれがなされた場合、この世界は破滅に向かう。

そんなリスクを手放して放っておくことなど、私にはできなかった。

だからこそ、判断だった。

私は至極当然として、久遠の娘に警告を発そうと受話器を握ったのだが――

「もうすこしだけ、待つてあげて下さい。
あの二人は、私が守り抜きます。だから、あとすこしだけ、彼らにチャンスを」

禁めるように、冷たい何かが私の手に添えられた。
それは、誰かの手のひらだった。けれど、それは触感こそ人肌の
それだったが、しかし、血の気配がまったく感じられない。まるで、
展示されているマネキンを彷彿とさせる、冷えきった無機質なそれ
だ。

「……どなたかしら？」

客人をお招きした覚えは無いのですけれど？」

ゆっくりと霊視を開始する。

策的範囲は――というより対象は、手のひらの主。

会話で気をそらせながら、わたしは第二の眼をひらいた。正体不
明のだれかに、対応するために。

けれど。

「―――なにか分かりましたか、竹山さん？」

私について、何らかの意味をくみ上げることが―――ふふ、ですよ
ね。

できるわけ、ありませんよね」

「できるわけがない」と言った誰かの声を、私は遠くで聞いた。この手のひらの主は、あまりに異質すぎる。この声の主は、ありえない。

「あなたのそれは……どういうこと？
それは、幻術？」

私の目には、無数の絡まった糸と、それに吊るされた人形が見える。

さながら人形劇に使われるような人形が、人形劇にはありえない本数の糸に、雁字搦めに固定され、貼付けにされていた。

……通常、霊視が不可能である場合、私の瞳には何も映らない。それは潜在的に霊視の侵入を拒める者も、異界の技師のように人為的に霊視を拒む者も、同じことだ。わたしのような霊視能力者への対応は、「視せないこと」――その、一点につきる。

けれど、私の目の前には、糸に絡めとられた一体の人形があった。たしかに、私の目は対象の縁をとらえている。けれど、「くみあげる」ことができないでいた。

未来すらくみ上げることのできる私でも、不可能なほどの何か――それが、対象なのだろう。

「幻術ではありません。ただ、「そういうこと」なのでしょう。私はただ単に、そういう存在なんです」

糸に絡みとられた人形は、だらしなく俯いたまま、身動き一つとれないでいた。

それは、あまりにも悲惨な光景。私はたまらず、霊視を切りあげた。

「どういったご用件でしょうか。」

世界を守るとは？彼らにチャンスを与えるとは？

私は何一つ、あなたのおっしゃることを理解できないのですが」

私の問いに声の主はクスリと笑うと、「お茶を入れましょう」と返した。

同時に手を私から離し、数歩はなれる。

そして、勝手知ったる我が家とばかりに戸棚から茶葉を取り出し、急須でお茶を入れ始めた。

「……ふう、もう、なにがなにやら。
でも、まあ、もういいでしょう」

霊視を現在視に切り替え、視覚を獲得する。

再び手のひらの主を見ることが避けたがったが、仕様がなーー
ーと想つてのことだったが、しかし。

私の瞳に映ったのは、ただの女性だった。黒髪長髪の、美しい女性。
性。

……おそらく、気を使ってこの用に視せてくれたのだろう。

あの茶目っ気あふれる。笑顔からしても、そんな気がするのだ。

私は、差し出されたお茶をいただいた。
彼女との手とは違い、お茶は暖かった。そして、彼女の笑顔も

また。

「自己紹介が遅れました。わたくしは、イツキというものです。世界移動の魔法使いであり、隣で日々をせくく生きているシロの、師にあたるものです。いつも弟子に良くしてくださいようですー」

そう、彼女は名乗った。彼女は世界移動の魔法使いであり、そして、お隣のシロさんのお師匠さんであると。

そして「いつもお世話になってます」などと、状況が状況でなければ、なんて普遍的で、微笑ましいやり取りだろうか。

「先ほどの私の問いに、答えてくださらないのでしょうか？
事態は、一刻を争うとーー私は、考えているのですが？」

視線をイツキさんに向け、わたしは再び問いたました。
あなたの真意は、なんなのかと。

すると、彼女はなんでもないことのように、「ハッピーエンドが見ただけです」と言っただけのけた。

……意味が、分からない。

「竹山さんの予知どおりに明日、学園へと渡った小羽ちゃんは瀬戸高校の門を使い、500年前の――今の彼女が生まれるに至った過去の次元に、東君と伊吹さんを連れ去ります。そして、そこで三人の絆が試されることになるはずです。ただ、ご心配なさらずに。ここまで来た以上、東君と伊吹さんの無事は保証されています。どう転ぼうとも、二人は無事に帰還します……問題は、小羽ちゃんです。あの娘が、一緒にかえって来れるかどうか。そこが、問題なんです」

ズズズとお茶をすすると、イツキさんは間を置いた。そして、「おいしいお茶です」と付け加える。

また、「グラム300円くらいの味ですね」と、よけいなことまで。

「加えて、彼らにチャンスを与えるということに関してですが、そのままでの意味です。」

この世界群においてはすでに、東君と伊吹さんの無事は保証されています。けれど、小羽ちゃんだけは別です。もし、あなたがここで

彼らに介入すれば、小羽ちゃんの帰還はなくなります。

久遠の姫が、絶対に許しませんからね。時の精霊でもけしかけて、問答無用で小羽ちゃんの排除に乗り出すはずです。

でも私は、三人がなかよく手をつないでお家に帰れる――そんな結末を、見てみたいんです。

そんな「未来」があること、私は「知っている」ので」

二杯目のお茶を沸かしながら、イツキさんは屈託なく笑った。

……まるで説明になっていないのが、残念だ。説明する気がもとから無いのだろうか。

それに、未来を「知っている」と？彼女も私同様に、霊視能力者なのだろうか……？

「……だったとして、世界を危険にさらしていい理由にはならないでしょう？」

明日、彼の念が過去と現在を結びつければ、世界の改変が起きるのではないのですか？

そのような危機を、一個人の感傷で見過ごせと？」

彼女は、シロさんの師であるという。加えて、霊視能力者であるならば、シロさんが懸念する、世界改変についても知り得ているはずだ。

……まっとうな人間なら、個人と世界の二つを天秤にかけたとき、どちらに傾くかなんて、分かりきった答えであるはずだ。

「あれ？　なぜ、竹山さんがそのことを？
久遠のお姫様に、そこまでの判断能力はなかったはずだけれど……
？」

イツキさんは予想外だとばかりに目を見開いた。
そして、「どうして、そのことを？」と、逆に問いかけてくる始末。

……微妙に、話がかみ合っていない。
久遠の末姫が、なんと？

「世界改変の危険性を指摘したのは他でもない、あなたのお弟子さんである、シロさんでしょう。
彼女が言うには、この世界の重複存在――とかいう、「過去に近似される世界」の影響で、世界の修復機構が働く可能性がある……
…未来視において、事態の収束に乗り出したシロさんがそうおっしゃっていました。
それは、事実なのでしょう？」

私の問いに、それまで目を丸くしていたイツキさんは、「あーねー？」と、間の抜けた声で答えた。

……すこしイラッとしたけれど、ここは我慢どころなんだろうか。

「今回の件に、シロが関与しているんですか？でも、なんであの娘は、この件には全然関係ないはずでしょうに？」

不思議そうに首を傾げる、「未来を知る」魔法使い。

彼女は、どういうことなのかと、私に答えを求めている。

「いえ、関係ないことはないでしょう。彼女は東少年の占いを担当していましたし、接点があります。」

連絡先も交換していたということで、非常事態に対応を迫られる可能性というは、十分に考えられるのではないのですか？」

イツキさんは、「ふむ」とうなずいた。
そして。

「そのようなことになっていたのでですね……どこでどう、組み込ま

れたのか？

けれど、あの娘が絡むとなると――どうなるか分かりませんね。これは直接、私が干渉する必要が出てきた訳か……ううんと、大丈夫です。

だとしても、何の問題もありません。世界改変の問題も、私に任せただけければ、何の問題も、はい」

さきほどまで「まかせとけ」と豪語していた彼女は、このたかが数分で「どうなるかわからない」と言い出した。いつたい、どういうことなのだろうか？

「……イツキさん。端的に問います。答えてください。妙な交わりなどは、不要です。あなたは、この事態の深刻さを理解しているのですか？」

シロさんが言うには、彼女の師は「自由奔放な天才の極地」の一言につきるらしい。

けれど、今回の事態にそれに対応されても困るのだ。

私の視た未来が必ず起きるということはありえないが、それでも、あの未来だけは見過ごせない。

詰める災厄の芽は、摘んでおくのが常套であろう。

「世界改変の危険性というものは、把握しています。ただし、その件にあの娘が絡んでいるとは知りませんでした」

あっけらかんと、彼女は答える。シロさんがこの件に絡んでいたことを知らなかったと。

では、未来を知っているとは？ その発現性の信憑性自体が、危ぶまれることになる。

故に、私は再び問いただした。では、「なぜあなたは「未来」を知っている」などと発言したのかと。

私と違う可能性を、その眼に映していたのかと――？

その問いに、彼女は。

「私はあくまでも魔法使いであり、超能力者ではありません。竹山さんのように、未来視を行う力など、独力では持ち合わせてはいません。

ただし、シロからもお聞きになっているかとは思いますが、私は「世界移動の魔法使い」です。ようは、移動魔法のスペシャリストで、

まあ、平たく言うと、この世界の未来に該当する世界に、往ったことがあるんです。俗にいう、タイムトラベルですね」

……今、なんと？彼女は、いったい何と言った？

「タイムトラベル？それは、あの、タイムトラベルですか？時間旅行という意味での？」

半信半疑の私を前に、彼女は「そうです」と一言で言い切った。そして、こつも続けた。

「信じていただかなくて、結構です。私がタイムトラベラーであるか否かは、ここではたいした問題にはならないでしょう。竹山さんが、問題視しているのは、世界改変の危険性のはず。そうであるならば、私がそれに対応できる力を持ち合わせていると、示

せばいいわけで」

イツキさんは、ポケットから携帯と思しき機械を取り出すと、おもむろにどこかに電話をかけ始めた。

そして、一言二言誰かに何かを告げて、さらに待つこと数分――機械は、私に手渡された。

どうやら、わたしに話せということらしい。

少し釈然としないものも感じたが、そこは黙って従うことにした。ただ静かに、受話器を耳に押し当てる。

そして次の瞬間。わたしは、我が耳を疑った。

なぜなら、無機質な機械の向こうには、明らかに。

圧倒的な存在が――これは、昨日瀬戸の者に仲介を頼んだはずの……

「はじめまして、未来視の魔女どの。私は「成功者」だ。その魔法使いの身元は、私が保証する。

もし、この会話で納得していただければ、直接我が学び舎にて落ち合いましょう。移動は彼女に頼むとよろしい。

現在私はロスにいるが、30分ほど待っていただければ、面会も可能です。どう、されますか？」

key B - 2 '3 共通：歪曲する因果4：迷走する想い7：竹山尚子&蒼の魔法

無限想歌は、東君達の物語です。

けれど、それは他人に関係ないという訳でもない。

今回の竹山さん達は、彼らなりの意思で持つて、東君達に干渉しています。

彼らはそのことを知りませんが、それは他の物語で、意味を持つことになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2180s/>

無限想歌

2011年12月28日20時55分発行